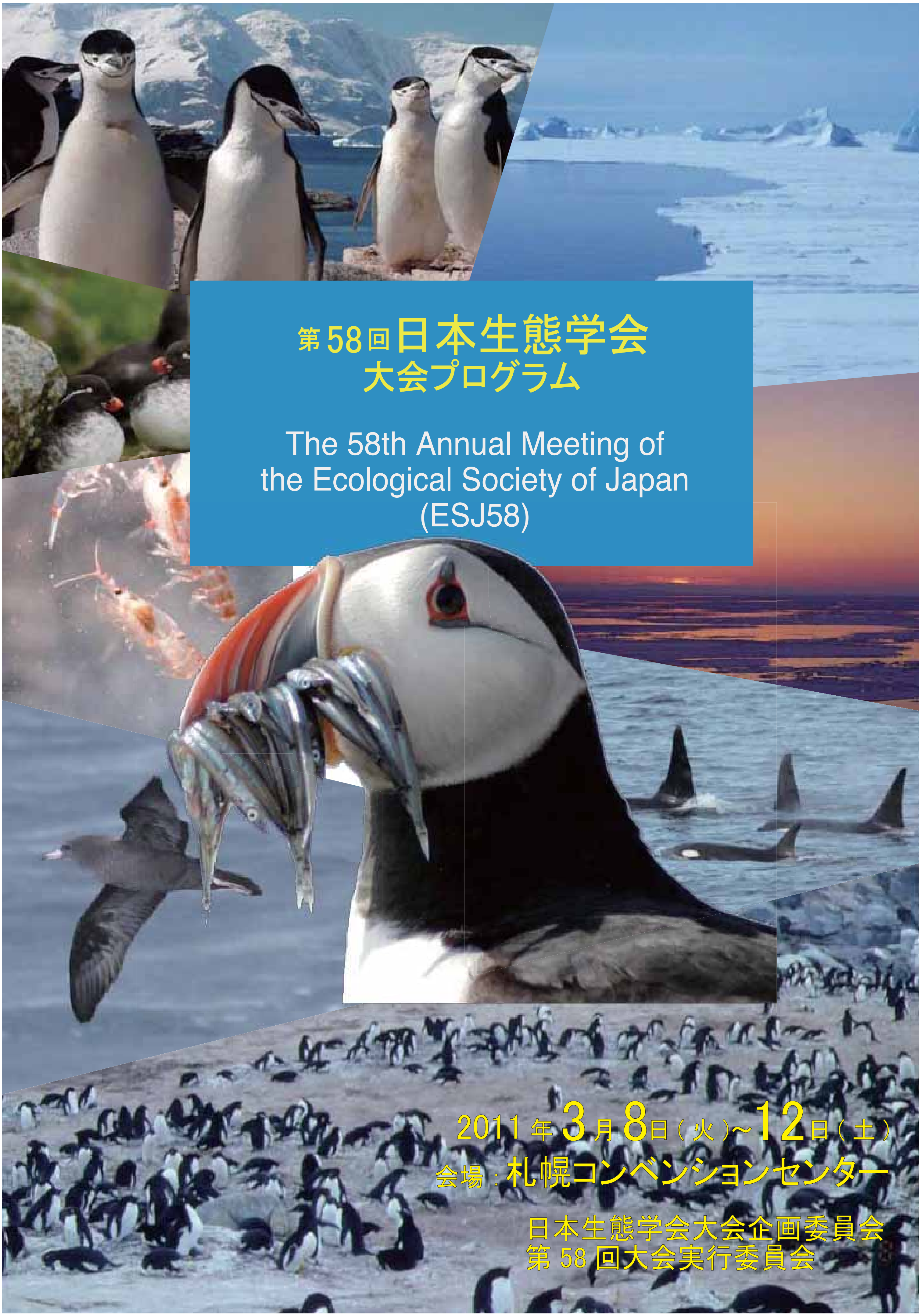


第58回日本生態学会 大会プログラム

The 58th Annual Meeting of the Ecological Society of Japan (ESJ58)

2011年3月8日(火)~12日(土)

会場:札幌コンベンションセンター

日本生態学会大会企画委員会

第58回大会実行委員会

第 58 回
日本生態学会大会プログラム

目　　次

学会長	中静　透
大会会長	原　登志彦
大会企画委員長	大手　信人
実行委員長	齊藤　隆

大 会 日 程 概 略

各 種 委 員 会

3月 8日（火）

将来計画専門委員会	9:00 ～11:00	101 会場
生態系管理専門委員会	9:00 ～11:00	102 会場
外来種検討作業部会	9:00 ～11:00	103 会場
大会企画委員会	9:00 ～11:00	H 会場
自然保護専門委員会	11:30 ～13:30	101 会場
大規模長期生態学専門委員会	11:30 ～13:30	102 会場
保全生態学研究刊行協議会	11:30 ～13:30	103 会場
野外安全管理委員会	11:30 ～13:30	H 会場
日本生態学会誌刊行協議会	14:00 ～16:00	101 会場
Ecological Research刊行協議会	14:00 ～16:00	102 会場
生態学教育専門委員会	14:00 ～16:00	103 会場
全国委員会	17:00 ～20:00	H 会場

3月11日（金）

キャリア支援専門委員会	12:00～13:00	103 会場

総会・授賞式・受賞講演　3月11日（金）　S 会場

総　会　　9:30～10:30

授賞式　　11:00～11:30　（生態学会賞/功労賞/大島賞/宮地賞/ER論文賞）

功労賞受賞挨拶および生態学会賞受賞記念講演　　11:30～12:00

宮地賞および大島賞受賞記念講演　　14:00～17:45

公開講演会　3月12日（土）13:00～17:00　S 会場

第14回日本生態学会公開講演会

「生態系を広く長く調べる：大規模長期研究への招待」

一般講演・シンポジウム・フォーラム・企画集会・自由集会

一般講演（口頭発表）	3月 9日（水），10日（木）
一般講演（ポスター発表）	3月 9日（水），10日（木），11日（金）
高校生ポスター発表	3月11日（金）
シンポジウム	3月 9日（水），10日（木），12日（土）
フォーラム	3月 9日（水），11日（金），12日（土）
企画集会	3月 8日（火）， 9日（水），10日（木），11日（金），12日（土）
自由集会	3月 8日（火）， 9日（水），11日（金）

ランチョンセミナー　3月10日（木）12:15～13:45　A 会場

「生態学会会場から世界に向けて発信する」　シュプリンガー・ジャパン協賛

日本発の学問潮流を作り出すために、シンポジウムの議論を世界に発信するノウハウを紹介する。

参加希望の方は以下のサイトをご覧ください：

http://www.fsc.hokudai.ac.jp/esj58/luncheon/seminar.html

懇 親 会　3月10日（木）18:30～20:30　京王プラザホテル 札幌（電話：011-271-0111）

○「エコカップ2011札幌大会」のご案内

生態学会大会に合わせて開催されてきた親善フットサル大会（5人制のミニサッカー）は、今年度も開催されます。日程は、3月7日（月）9:30～16:00、会場は北海道立総合体育センター（北海きたえーる）です。詳しくは、エコカップ2011のページ（http://stellaria.lowtem.hokudai.ac.jp/ecocup/）をご覧ください。

大会日程一覧表

3/8（火） 札幌コンベンションセンター

部屋名	会場名	09:00-11:00	11:30-13:30	14:00-16:00	17:00-20:00
101		将来計画専門委	自然保護専門委	生態誌刊行協議会	
102		生態系管理専門委	大規模長期生態学専門委	ER刊行協議会	
103		外来種検討作業部会	保全誌刊行協議会	生態学教育専門委	
201+202	H会場	大会企画委	野外安全管理委		全国委員会
				14:15-16:15	17:00-19:00
中ホールA	A会場			T01 森とクマと人	W01 感染症と保護管理
中ホールB	B会場			T02 アジア太平洋地域植生	W02 社会性の分子メカニズム
104＋105	C会場			T20 ファシリテーション	W03 高山モニタリング
107	D会場			T03 Micro-evo-devo	W04 生物分類スキル
108	E会場			T04 意思決定とデータ解析	W05 北海道自然史研究会
小ホール	F会場				W06 森林施業
204	G会場			T05 繁殖干渉と群集構造	W07 化学物質の生態影響
207	I会場			T06 ユネスコMAB計画	W08 湿地研究の学際的展開
206	J会場			T07 藻類の群集構造と進化	W09 COP10の中身

3/9（水） 札幌コンベンションセンター

部屋名	会場名	09:00-12:00	12:00-14:00	14:15-17:30	18:00-20:00
中ホールA	A会場	S01 陸域水域ギャップ		A1 生態系管理	W10 多様な社会寄生の進化
中ホールB	B会場	S02 砂丘植生の現状と課題		B1 保全	W11 多様性保全施策の実現
小ホール	F会場	S03 Links between different approaches		F1 動物生活史　動物群集	W15 エゾシカの影響把握
204	G会場	S04 寄生虫生態学		G1 動物個体群　数理	W16 淡水二枚貝の保全研究
207	I会場	S05 意思決定の生態学		I1 外来種	W18 猪害に強い農村空間
206	J会場	S06 里地の自然再生		J1 遷移・更新　植物繁殖	W19 植物生理生態と同位体
		09:30-11:30			
104＋105	C会場	T08 琵琶湖淀川水系の外来種		C1 景観生態	W12 希少植物の魅力
107	D会場	T09 適応進化と形質間相関		D1 物質循環	W13 季節的環境
108	E会場	T10 博物館の生態学7		E1 行動	W14 勝負のデータ解析
201+202	H会場	U01 安全な野外調査		H1 分子　進化	W17 小笠原研究者の社会的責任
		10:00-12:00	12:00-14:00	14:00-17:15	
大ホール	P会場	P　ポスター	コアタイム	P　ポスター	

3/10（木） 札幌コンベンションセンター／京王プラザホテル札幌

部屋名	会場名	09:00-12:00	12:15-13:45	14:15-17:30
中ホールA	A会場	S07 自然再生と生態学	ランチョンセミナー	A2 生態系管理
中ホールB	B会場	S08 日本列島の生物多様性		B2 保全　都市
小ホール	F会場	S09 plant traits and performance		F2 動物群集　フェノロジー
204	G会場	S10 生理学で生態学を		G2 数理
206	J会場	S11 絶滅危惧植物保全		J2 植物生理生態　植物生活史
		09：30-11：30		
207	I会場	T14 景観変化と生物多様性		I2 外来種　動物と植物の相互関係
104＋105	C会場	T11 ゲノミクスアプローチ		C2 群落
107	D会場	T12 適応ダイナミクス		D2 物質循環　種多様性
108	E会場	T13 海の生物多様性保全		E2 行動　社会生態
201+202	H会場			H2 進化　植物個体群
		10:00-12:00	12:00-14:00	14:00-17:15
大ホール	P会場	P　ポスター	コアタイム	P　ポスター

18:30-20:30
懇親会 会場 京王プラザホテル札幌

大会日程一覧表

3/11（金）札幌コンベンションセンター

部屋名	会場名	09:30–10:30	11:00–12:00	12:00–13:00	14:00–17:45	18:00–20:00
特別会議場	S会場	総会	授賞式・受賞者挨拶		宮地賞・大島賞受賞講演	
103				キャリア支援専門委		
					14:15–16:15	
中ホールA	A会場				T15 生態学者市長になる？	W20 植物と微生物
中ホールB	B会場				T16 外来生物法見直し	W21 アウェイの生態学
小ホール	F会場					W25 泥炭湿原の炭素動態
204	G会場				T21 島嶼生物地理	W26 キノコる
207	I会場				T22 生態系の時間軸	W28 群落談話会;シカ影響
206	J会場				T23 水田普通種の減少	W29 北海道野生サケ研究
104＋105	C会場				T17 迅速な適応性	W22 ツル植物の生長特性
107	D会場				T18 生態学的閾値	W23 里山生態系サービス
108	E会場				T19 メソスケール	W24 情報科学でやる生態学
201+202	H会場				U03 若手キャリアパス	W27 乾燥地の外来植物

		10:00–12:00	12:00–14:00	14:00–17:15
大ホール	P会場	P　ポスター	コアタイム	P　ポスター

3/12（土）札幌コンベンションセンター

部屋名	会場名	09:00–12:00	13:00–17:00
特別会議場	S会場		公開講演会
中ホールA	A会場	S12 代謝スケーリング実証	
中ホールB	B会場	S13 適応進化の制限機構	
小ホール	F会場	S14 mechanism of mast seeding	
204	G会場	S15 微生物の多様性	
206	J会場	S16 生物多様性と地域政策	
		09:30–11:30	
207	I会場	T24 北海道の風発問題	
107	D会場	U04 生態学者よ街に出よ！	

発表略称に付されている
記号と掲載頁は次のとおり：

A～J：　口頭発表　56頁～
S：　シンポジウム　26頁～
T：　企画集会　39頁～
U：　フォーラム　37頁～
W：　自由集会　94頁～
P：　ポスター発表　64頁～

諸 案 内

受付

・受付の時間と場所は次のとおりです。
参加する方はすべて受付で所定の手続き（名札などを受け取る）を済ませてください。

3/8(火)	13:00～	札幌コンベンションセンター　エントランスホール
3/9(水)～12(土)	8:30～	同上

・会場では必ず名札をつけてください。総会・授賞式・受賞講演会への参加は会員に限られます。
・ウェブでの参加申込（学会が運営する大会登録システムを利用）は、3 月 4 日（金）17 時まで受け付けます。
・大会参加費・懇親会費の事前支払いは、3 月 4 日（金）まで受け付けます。「参加申し込み」を終えた後、 JTB の AMARYS システム(https://amarys-jtb.jp/esj58)で手続きをお願いします。
・講演要旨集は別売り（一般会員：3,000 円、学生会員：2,000 円）となります。購入を希望される方は、参加申込の際にあわせてお申込ください。当日販売も行いますが、数に限りがあり、先着順とさせていただきます。なお講演要旨集は、大会公式ページ上で pdf および HTML 版を公開します。
・大会に参加できない方で講演要旨集の購入を希望される方は、2 月 28 日（月）までに大会実行委員会・参加費担当(mayuko@fsc.hokudai.ac.jp)まで申し込んでください。一冊 3,000 円（送料込み）です。代金は銀行振込で、以下の口座に振り込んでください。大会終了後に送付します。

銀行名：北洋銀行北七条支店	口座の種別：普通口座
口座番号：3945732	口座名：ESJ58 会計

駐車場

・有料駐車場をご利用ください。はじめの 2 時間は 200 円､その後 30 分ごとに 100 円ずつ課金されます。ご希望の方は以下のサイトをご覧ください
（http://www.sora-scc.jp/guide/parking.html）。

懇親会

・懇親会は、京王プラザホテル札幌にて、3 月 10 日（木）18 時 30 分（開場 18 時 15 分）から開催します。懇親会会場は、札幌駅から歩いて 5 分のところにあります（18 ページ地図参照）。
・懇親会参加申込の受付は、会場の定員に達し次第終了いたしますので、早めにお申し込みください。大会開始時点で定員に達していない場合のみ、当日参加が可能です。

託児室

・大会会場内に、託児室（3 月 8-12 日）を設けます。ただし、利用は事前に申込をされた方に限ります。
・開設時間・利用料金等の詳細は、実行委員会のページ http://www.fsc.hokudai.ac.jp/esj58/ に掲載します。
・利用を希望する方は、2 月 21 日（月）までに大会実行委員会託児所担当（nursery@mail.esj.ne.jp）へ、お子さんの年齢、性別、人数、託児希望日時をご連絡下さい。折り返し、ご利用案内や申込書類等をお送りします。
・ご不明の点がある場合は、お早めに nursery@mail.esj.ne.jp へお問い合わせ下さい。

宿泊の予約

JTB 北海道に委託し、宿泊プラン・航空プランを作成しました。会場となる札幌コンベンションセンターは札幌中心街から若干離れた場所にあるため、会場へのアクセスが便利なホテルを選定して紹介します。主要空港と新千歳空港間の団体割引を利用した航空プランも計画しました。

会期中の昼食弁当についても事前予約をご案内しています。会場内および周辺には食事場所が少ないため、限られた時間の中で昼食を取れなくなる場合が考えられます。このためお弁当の事前予約をされることをお勧めいたします。

詳しくはウェブサイト（http://www.jtb.co.jp/ripple/esj58/）でご確認ください。

第５８回日本生態学会大会
宿泊プラン・宿泊＆航空セットプラン・昼食プランのご案内

会　期：2011年3月8日（火）～3月１2日（土）
会　場：札幌コンベンションセンター

謹啓　時下ますますご清栄のこととお喜び申し上げます。
この度、「第 58 回日本生態学会大会」が北海道にて開催される運びとなりましたことを心よりお喜び申し上げます。
ご参加の皆様の宿泊・航空券の手配についてご案内申し上げます。
多数の皆様のご利用をお待ち申し上げております。

謹白

ＪＴＢ北海道　法人営業札幌支店

1.宿泊プランのご案内

宿泊設定日：2011 年３月７日（月）・８日（火）・９日（水）・10 日（木）・11 日（金）・12 日（土）

【宿泊プラン料金表】

ホテル名	ホテルへのアクセス	室タイプ	宿泊代金	申込記号
札幌駅周辺				
京王プラザホテル札幌	JR札幌駅・地下鉄さっぽろ駅より徒歩5分 懇親会会場ホテル	シングル	9,500 円	A-1
		ツイン	7,500 円	A-2
ホテル京阪札幌	JR札幌駅より徒歩4分 長期滞在にうれしい大浴場つき！	シングル	7,500 円	B-1
ホテルグレイスリー札幌	JR札幌駅より徒歩2分	シングル	7,000 円	C-1
大通駅周辺				
札幌グランドホテル	地下鉄大通駅より徒歩5分	シングル	11,000 円	D-1
		ツイン	10,000 円	D-2
ホテルリソルトリニティ札幌	地下鉄大通駅より徒歩2分 長期滞在にうれしい大浴場つき！	シングル	6,000 円	E-1
ホテル法華クラブ札幌	地下鉄大通駅より徒歩5分 長期滞在にうれしい大浴場つき！	シングル	5,000 円	F-1
すすきの駅周辺				
ススキノグリーンホテル１	地下鉄豊水すすきの駅より徒歩1分	シングル	6,000 円	G-1
ブルーウェーブイン札幌	地下鉄すすきの駅より徒歩5分	シングル	5,500 円	H-1

【宿泊プランについての注意事項】

１）上表の旅行代金は、１泊朝食付き税金サービス料込みのお一人様あたりの料金です。
２）ツイン料金はツインルームをお二人でご利用いただいた場合のお一人様あたりの料金です。
　　ツインルームご利用の場合は申込書に同室者名をご記入下さい。
３）お申し込みは申込記号でご記入下さい。先着順での受付とさせていただきます。
　　満室の場合は、第２希望のホテルでご案内させていただきます。
４）添乗員は同行いたしません。
５）最少催行人員：１名様

2.宿泊＆航空セットプランのご案内

大会の日程に合わせた宿泊（朝食付）と往復航空券のセットプランを設定いたしました。
代金はお選びいただいたホテル・発着空港によって異なります。下記旅行代金表にてご算出下さい。

～　設定便　～

【羽田空港→新千歳空港】（所要：90 分）

搭乗日	出発時間	記号
3/7（月）	16：00～18：00 頃	A
3/8（火）	08：30～10：30 頃	B

【新千歳空港→羽田空港】（所要：90 分）

搭乗日	出発時間	記号
3/11（金）	18：00～20：00 頃	1
3/12（土）	18：00～20：00 頃	2

【関空 or 伊丹 or 神戸空港→新千歳空港】（所要：110 分）

搭乗日	出発時間	記号
3/7（月）	18：00～20：00 頃	C
3/8（火）	08：30～10：30 頃	D

【新千歳空港→関空 or 伊丹 or 神戸空港】（所要：110 分）

搭乗日	出発時間	記号
3/11（金）	18：00～20：00 頃	3
3/12（土）	18：00～20：00 頃	4

【中部国際空港→新千歳空港】（所要：100 分）

搭乗日	出発時間	記号
3/7（月）	16：00～18：00 頃	E
3/8（火）	08：30～10：30 頃	F

【新千歳空港→中部国際空港】（所要：100 分）

搭乗日	出発時間	記号
3/11（金）	18：00～20：00 頃	5
3/12（土）	18：00～20：00 頃	6

【仙台空港→新千歳空港】（所要：60 分）

搭乗日	出発時間	記号
3/7（月）	16：00～18：00 頃	G
3/8（火）	08：30～10：30 頃	H

【新千歳空港→仙台空港】（所要：60 分）

搭乗日	出発時間	記号
3/11（金）	18：00～20：00 頃	7
3/12（土）	18：00～20：00 頃	8

【福岡空港→新千歳空港】（所要：150 分）

搭乗日	出発時間	記号
3/7（月）	14：00～16：00 頃	J

【新千歳空港→福岡空港】（所要：150 分）

搭乗日	出発時間	記号
3/11（金）	18：00～20：00 頃	9
3/12（土）	18：00～20：00 頃	10

【宿泊＆航空セットプラン料金表】

利用予定ホテル	室タイプ	ホテル申込記号	≪宿泊１泊＋往復航空券セット代金≫				
			羽田発着	大阪発着	中部発着	仙台発着	福岡発着
京王プラザホテル札幌	シングル	A－1	49,000 円	53,500 円	57,500 円	47,500 円	57,500 円
	ツイン	A－2	47,000 円	51,500 円	55,500 円	45,500 円	55,500 円
ホテル京阪札幌	シングル	B－1	47,000 円	51,500 円	55,500 円	45,500 円	55,500 円
ホテルグレイスリー札幌	シングル	C－1	46,500 円	51,000 円	55,000 円	45,000 円	55,000 円
札幌グランドホテル	シングル	D－1	50,500 円	55,000 円	59,000 円	49,000 円	59,000 円
	ツイン	D－2	49,500 円	54,000 円	58,000 円	48,000 円	58,000 円
ホテルリソルトリニティ札幌	シングル	E－1	45,500 円	50,000 円	54,000 円	44,000 円	54,000 円
ホテル法華クラブ札幌	シングル	F－1	44,500 円	49,000 円	53,000 円	43,000 円	53,000 円
ススキノグリーンホテル１	シングル	G－1	45,500 円	50,000 円	54,000 円	44,000 円	54,000 円
ブルーウェーブイン札幌	シングル	H－1	45,000 円	49,500 円	53,500 円	43,500 円	53,500 円

※上記金額には宿泊は１泊分しか含まれません。２泊目以降は宿泊プランの金額を加算して計算します。

【宿泊＋航空セットプランについての注意事項】

１）各便のお申し込みが最少催行人員（各便６名様）に満たない場合は便の変更をお願いするか、
通常の手配（個人普通運賃等）をさせていただきます。

２）記載の出発時間、旅行代金は、2010 年 11 月のものによります。
航空運賃･規則の変更により旅行代金が変更になる場合がございます。

3）この旅行はお客様の依頼を受けて旅行会社が企画し、自己の計算において料金を決める包括旅行代金となります。包括旅行代金の領収証は、航空券代または宿泊代等に分割表示できません。
但書は「旅行代金」の表示となります。
4）お申し込みは表中の申込記号でご記入下さい。
5）お申し込み後の変更はできません。一旦取消の後、再予約となります。
6）上記の旅行代金には、旅客施設使用料（羽田空港 100 円・中部国際空港 200 円）が含まれております。
7）航空スケジュールは、変更になる場合がございます。
最新のスケジュール確定は、2011 年２月上旬の予定です。
8）大阪空港は、伊丹・関西・神戸のいずれかの空港になります（指定不可）
9）添乗員は同行いたしません。
１０）特別運賃を適用しますので座席に限りがございます。
満席後や申込締切後も受け付け致しますが、金額が変わる可能性もございますので予めご了承下さい。

3.宿泊・航空セットプラン以外の個人航空券の手配のご案内

ご案内のセットプラン以外の個人航空券もお手配いたします。
ご希望の方は、申込書の通信欄下記にご希望をご記入下さい。
予約の回答はＦＡＸにて行いますので必ずＦＡＸ番号をご記入下さい。

【手配についての注意事項】
1）お申込についてはご利用希望便・時間帯をご指定下さい。
料金・便名・空席状況等については各社ホームページをご参照下さい。
2）ホームページ上で空席があった場合も申込受領・手配時に満席になっている可能性がございます。
予めご了承下さい。
3）個人航空券の予約開始はご搭乗日の２ヶ月前からとなります。
4）お申込いただいた方へは予約結果（時間や料金）をＦＡＸにてご回答致します。
ＦＡＸ受信の翌日までに利用可否をご連絡下さい。
5）航空券の購入期限は予約日を含めて３日以内となります。
金曜日にお申込いただいた方は翌週の月曜日の手配・回答となりますのでご注意下さい。

4.昼食プランのご案内

会場にて昼食お弁当をご用意致します。
当日販売もございますが数に限りがございますので事前お申込をおすすめ致します。
北海道らしい素材を使った美味しいお弁当を日替わりで取り揃えております。是非ご利用下さい。

【設定日・メニュー・価格】
各 1,000 円（税込み・パックお茶付き）

3/9（水）	鮭イクラ弁当	3/10（木）	いろどり弁当
			
3/11（金）	鮭幕の内弁当	3/12（土）	海鮮チラシ弁当
			

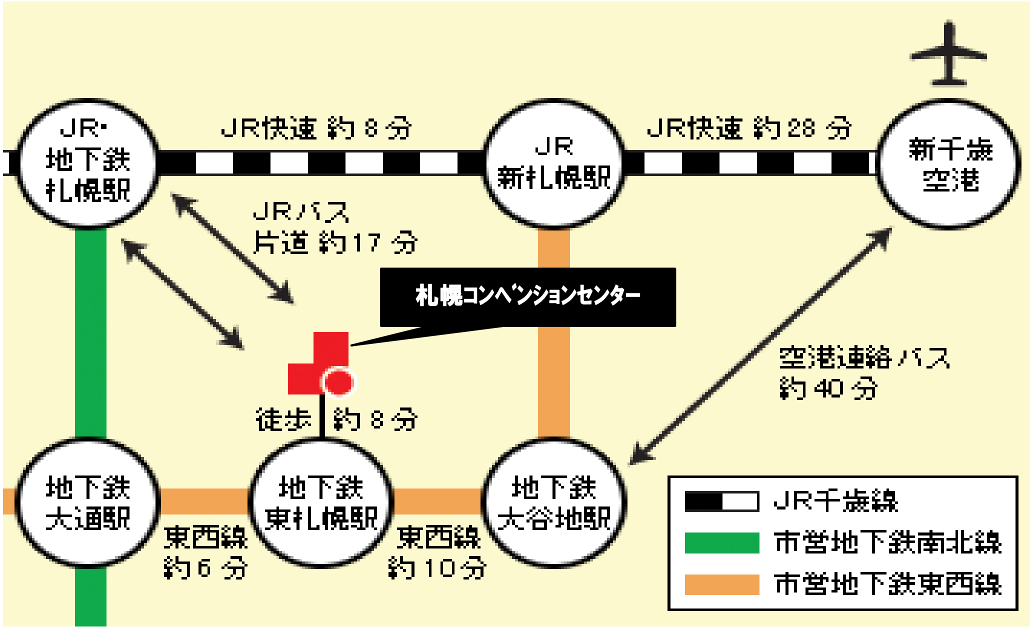
5　.　交　通　ア　ク　セ　ス

■札幌コンベンションセンター

〒003-0006　北海道札幌市白石区東札幌６条１丁目

ホームページ　http://www.sora-scc.jp

［公共交通機関をご利用の場合］



「札幌コンベンションセンター」へは

●地下鉄東西線大通駅より東札幌駅まで約６分
●地下鉄東西線東札幌駅から徒歩約８分
●JR 札幌駅より JR バスにて片道約 17 分
●JR 札幌駅よりタクシーにて約 20 分～30 分、約 1,500 円前後
　※道路状況により時間・料金は変わります。

6.お申込から参加券等の受け取りまで

◆申込・お支払・手続関連

①別紙申込書に必要事項をご記入の上、ＦＡＸか郵送にてお申込下さい。
※ご郵送の場合は必ず原本の控え（コピー）を保管して下さい。
②申込書到着後、ご希望の方には申込書受領確認書を実営業日 10 日以内にお送り致します。
※万が一ＦＡＸが届かない場合は、恐れ入りますがご連絡いただけますようお願い申し上げます。
※申込書受領確認書を希望されない場合は申込書の受領確認書希望欄の不要に○印をお願い致します。
※申込書受領確認書希望欄に記載が無い場合は不要とみなし、受領確認書をお送り致しませんのでご注意下さい。
※変更・取消の場合は変更箇所を明記しＦＡＸまたは郵送にてお知らせ下さい。
③ご出発の 21 日前頃に、確定書面（請求書・ご宿泊券等）と郵便振込取扱票をご郵送致します。
④郵便振込用紙を同封致しますので請求書に記載の期日までにご送金下さい。（振込手数料はお客様にてご負担下さい）
※領収証は金融機関の受領印のある振込票をもってそれにかえさせていただきます。
※確定書面及び当社旅行業約款募集型企画旅行契約を同封いたしますので事前にご確認下さい。

◆申込先

株式会社 JTB 北海道　法人営業札幌支店「第 58 回日本生態学会大会」係
〒060－0001　札幌市中央区北１条西６丁目１－２　アーバンネット札幌ビル８階
TEL　０１１（２２１）４８００　　FAX　０１１（２３２）５３２０
営業時間　平日：9：30～17：30（土・日・祝日は休業日となります）

◆申込締切

申込締切日：2011 年２月 15 日（火）
締め切り後もお申込をお受けいたしますが、ご希望に添えない場合もございます。

◆取消料

お申込後の取消は、下記の通り取消料を申し受けますのでご了承下さい。
（取消日＝旅行開始日の前日から起算してさかのぼって）

	21 日前まで	20 日前～８日前まで	７日前～２日前まで	前日	当日	旅行開始後無連絡
宿泊プラン	無料	無料	20%	40%	50%	100%
宿泊＆航空セットプラン	無料	20%	30%	40%	50%	100%
昼食プラン	無料	無料	無料	100%	100%	100%

◆ご旅行条件（要約）

●募集型企画旅行契約
この旅行は㈱ＪＴＢ北海道（札幌市中央区北１条西６丁目１-２　観光庁長官登録旅行業第 978 号 以下「当社」という）が企画・実施する旅行であり、この旅行に参加されるお客様は当社と募集型企画旅行契約を締結することになります。
また、契約の内容･条件とは、各プランに記載されている条件のほか、下記条件、出発前にお渡しする確定書面および当社旅行業約款募集型企画旅行契約の部によります。
●旅行のお申し込み及び契約成立時期
お申込書に所定の事項を記入し、指定の期日までに旅行代金全額をお支払い下さい。
旅行契約は、当社が契約の締結を承諾し、旅行代金を受領したときに成立するものとします。
●旅行代金に含まれるもの
旅行日程に明示した運送期間の運賃・料金（注釈のないかぎりエコノミークラス）、宿泊費、食事代及び消費税等諸税（コースに含まれない交通費等の諸費用及び個人的費用は含みません）
●個人情報の取扱について
当社及び販売店は、旅行申込の際に提出された申込書等に記載された個人情報について、お客様との間の連絡のために利用させていただくほか、お客様がお申し込みいただいた旅行において運送・宿泊機関等の提供するサービスの手配及びそれらのサービス受領のために手続に必要な範囲内で利用させていただきます。
当社は、旅行先でのお客様のお買い物等の便宜のため、当社の保有するお客様の個人情報を土産物店に提供することがあります。この場合、お客様の氏名及び搭乗される航空便等に係る個人情報を、あらかじめ電子的方法等で送付することによって提供いたします。なおこれらの事業者への個人情報の提供の停止を希望される場合は、旅行出発前までにお申し出下さい。

総合旅行業務取扱管理者　阿部　晃士

総合旅行業務取扱管理者とは、お客様の旅行と取り扱う営業所での取引に関する責任者です。
この旅行契約に関しご不明な点があれば、ご遠慮なく上記の取扱主任者にお尋ねください。

旅行企画・実施 JTB北海道
観光庁長官登録旅行業第 978 号
日本旅行業協会正会員
ボンド保証会員

FAX：011-232-5320　JTB 北海道法人営業札幌支店 行
申込締切日：2011 年２月 15 日（火）

別紙取引条件説明書面に記載の旅行条件及び旅行手配のために必要な範囲内での運送・
宿泊機関等その他への個人情報の提供について同意の上、以下の旅行に申込みします。
また、旅行等の予約回答に際し、申込代表者宛の連絡先にＪＴＢより連絡させて頂くことに同意致します。

第 58 回日本生態学会大会　宿泊・宿泊＆航空セットプラン・昼食プラン　申込書

勤務先名	（書類送付先が勤務先の場合は必ずご記入ください）	代表者氏名（書類送付先）		
クーポン 送付先住所	〒　－　（勤務先・自宅）　〇	TEL　－　－		申込書受領確認書 要 ・ 不要 ※どちらかに〇印を付けて下さい
		FAX　－　－		

No.	（フリガナ） 参加者名	年齢 性別	宿泊プラン 3/7（月）	3/8（火）	3/9（水）	3/10（木）	3/11（金）	3/12（土）	第二希望	同室者名	宿泊＋航空セットプラン 往路	復路	昼食プラン 3/9（水）	3/10（木）	3/11（金）	3/12（土）
記入例	ホッカイドウ　タロウ 北海道　太郎	45 歳 男・女	—	A－2	A－2	A－2	A－2	—	D－2	ホッカイドウ　モモコ 北海道　桃子	B	2	〇	〇	〇	×
1		歳 男・女														
2		歳 男・女														
3		歳 男・女														
4		歳 男・女														

【ご注意】①必ず、控えを保存して下さい。②変更の場合は、変更内容がわかるように訂正の上、ＦＡＸをご送付下さい。③その他の手配をご希望の方は、通信欄にその旨をご記入下さい。

【通信欄】

【セットプラン以外の航空券申込】航空会社の希望：　　　　（航空会社の希望があった場合も希望時間帯に運行がない際は他社便にてご案内いたします）

往路搭乗日：　月　日（　）／区間：　→　／便名：　便（時間帯　～　頃）

復路搭乗日：　月　日（　）／区間：　→　／便名：　便（時間帯　～　頃）

注 意 事 項

●参加者の皆様へ●

大会規則

・本大会は、日本生態学会大会規則（p.15～に掲載）に基づいて実施されます。大会期間中、参加者はこの規則および下記の注意事項を遵守し、大会実行委員、座長、会場係の指示に従ってください。

撮影について

・会場での講演・ポスターの撮影は、発表者の了承を得た場合に限り認められます。また、発表者に了承を得て撮影する場合でも周囲の方に迷惑がかからないようにしてください。

会場での飲食、喫煙等

・休憩室にはお茶などを用意します。会場内には飲料などの自動販売機があります。
・大会会期中、会場内のレストランは営業しておりますが、座席数が限られているので昼食にはお弁当の予約をお勧めします。
・会場から徒歩数分のところに大型商業施設（イーアス札幌）があります。
・会場内は原則として禁煙です。喫煙は決められた場所でお願いします。
・その他、会場の利用規則に従っていただきます。

●発表者・企画者の皆様へ●

キャリアエクスプローラーマーク（CE マーク）の表示

・発表者である学生・ポスドクは、本人が希望する場合、求職中であることを示すキャリアエクスプローラーマークを口頭発表やポスター発表の際に表示することができます。（社）応用物理学会 HP（http://www.jsap.or.jp/activities/annualmeetings/CEmark.html）からダウンロードし、口頭発表のタイトルページやポスターのタイトル付近に表示してください。CE マークの使用許可は取得済みです。

一般講演（口頭発表）

・口頭発表は、会場備え付けのパソコン（OS は Windows XP）と液晶プロジェクターを使用したマイクロソフトパワーポイント（Windows 版 PowerPoint2003）あるいはアドビリーダー（PDF ファイル）による発表に限ります。持ち込んだコンピューターを使用しての発表はできません。
・発表用ファイルの作成方法：上記の使用機器に充分留意してください。また、「事前にお送りいただいた発表用ファイルを各会場のパソコンのハードディスクにあらかじめコピーしておく」ことをふまえ、発表用ファイルを作成してください。特に以下の点にご注意ください。

＊ パワーポイントファイルは、Windows 版 PowerPoint2003 で動作可能なことを確認してください。文字化けを避けるため、標準的なフォントを使用するか、ファイルにフォントを埋め込むことをお勧めします。

＊ Mac OS でファイルを作成した場合には、必ず Windows ファイルに変換し、Windows 機での動作確認を発表者の責任でおこなってください。

＊ PowerPoint2007 あるいは PowerPoint2010 などでファイルを作成する場合は、必ず「PowerPoint97-2003 プレゼンテーション（*.ppt）」を選択し、*.ppt 形式のファイルを準備してください。「PowerPoint プレゼンテーション（*.pptx）」を選択しないでください。

＊ 口頭発表用の *.ppt あるいは *.pdf 形式ファイルのファイルサイズは 20MB 以下まで、かつ 1 ファイルのみにしてください。写真を多用される方は、解像度（あるいは画素数）を落とすなどの工夫をしてこの制限に対処してください。このファイルサイズの範囲内におさまるのであれば、ファイル内うめこみ動画再生など上記ソフトウェアの諸機能の利用は可能ですが、発表者が意図したとおりの動作を必ずしも保証するものではありません。

・**発表用ファイルの提出期限： 2 月 28 日（月）17 時です。**大会公式ページにて登録してください。各自のファイル名は自動で作成されます。

＊ 期限までに発表用ファイルが登録されない場合には、プロジェクターを利用した発表はできません。なお、パソコンと液晶プロジェクターを使用しないで発表される場合は、2 月 28 日（月）17 時までに大会の問い合わせページ（http://www.esj.ne.jp/meeting/forms/inquiry/index.cgi）からその旨をご連絡ください。発表用ファイ

ルの登録がなく、ご連絡をいただけない場合には、発表ができませんので、ご注意ください。
・講演時間は、発表 12 分、質疑応答 3 分の合計 15 分です。一鈴 10 分、二鈴 12 分、三鈴 14 分 30 秒です。時間を厳守してください。
・パソコンの操作は、最初のスライドを表示するところまではオペレーター（会場係）が行います。その後の操作（スライドの進行）は、講演者自身で行うことも、会場のオペレーター（会場係）に指示することも可能です。
・講演の終了した講演者は、次の講演の座長を務めてください。最初の座長は、大会実行委員会が対応します。

一般講演（ポスター発表）

《ポスター会場》

・ポスター発表は 3 月 9 日、3 月 10 日、3 月 11 日とも、P 会場で行います。
・展示場所は「ポスター発表案内デスク」およびポスター会場の「展示案内地図」に掲示されますので確認してください。わからない場合はスタッフにお問い合わせください。

《展示および発表時間》

・展示は、発表前日 17 時 30 分から当日 10 時までに完了してください。
・ポスター展示ボードの大きさは 90cm x 210cm（縦長）です。ポスター貼り付け用のピンや画鋲は各自でご用意下さい。
・ポスター賞に応募している方は、できるだけ前日もしくは当日の 9 時までに掲示を完了してください。展示が遅れた場合、またコアタイムに説明できない場合は審査が受けられません。コアタイムは、12 時 00 分から 14 時 00 分です。発表者はこの時間帯には必ずポスターの前で説明をしてください。
・ポスターの撤去は、当日 17 時 15 分までに完了してください。

《ポスター賞》

・日本生態学会では、若手研究者の奨励のために優秀なポスター発表に賞を贈ります。ポスター賞の運営方法や選考基準については日本生態学会のウェブサイト（http://www.esj.ne.jp/meeting/poster_prize/about.html）に記載されていますので、必ず事前に確認の上、審査に備えてください。
・ポスター賞の対象となる発表には、応募を示す表示がボードに貼り付けてあります。ポスター賞に応募しているにもかかわらず表示がない場合には、すぐに「ポスター発表案内デスク」にご連絡ください。
・受賞ポスターには、16 時前後に受賞を示すリボンが付けられます。また、受賞ポスターのリストは発表日ごとに掲示されます。表彰式は、3 月 11 日（金）16 時 30 分から 3 日間の受賞ポスターをあわせて案内デスクのそばで行います。ポスター賞を受賞された方はこの時間に表彰式においでください。なお、表彰式に出席できない受賞者は、「ポスター発表案内デスク」で 3 月 9 日（水）の 16 時 30 分から 17 時 15 分までの間と 3 月 10 日（木）から 3 月 11 日（金）の 9 時から 17 時 15 分までの間に賞状を受け取ることができます。
・「最優秀賞」受賞ポスターは特設掲示板に当日夕方（16 時 30 分）から翌日夕方（16 時 00 分）まで特別展示されます。受賞者の方は展示の移動にご協力ください。
・特別展示終了時より前にポスターを持ち帰りたい受賞者は、「ポスター発表案内デスク」のスタッフに申し出た上、お持ち帰りください。ポスター発表終了後まで残っていたポスターは処分します。

高校生ポスター発表

・高校生のポスター発表に関する案内は、事前に世話人（大原雅）から引率教員あてに別途送付します。

各種集会（シンポジウム、フォーラム、企画集会、自由集会）

・設定された時間内に終了するよう努めてください。時間延長はできません。
・発表には会場に設置されている液晶プロジェクターが使用できます。ただし、液晶プロジェクターに接続するコンピューターおよび発表用ファイルは、企画者側で準備してください。
・企画集会と自由集会会場には会場係がつきません。問題がありましたら大会本部までご連絡ください。

日本生態学会大会　規則

（2008年12月10日 制定）

（目的）

第１条　この規則は、日本生態学会（以下、本学会）が開催する学術集会である年次大会（以下、大会）について必要な事項を定める。大会は生態学の振興に寄与するためにその研究成果を発表する場とするとともに生態学研究者の交流の場を広く提供することを目的とする。

（名称）

第２条　大会の名称は「日本生態学会大会」とする。1953年に開催された大会を第１回とし、年次ごとに回数を加える。各大会の名称は回数を冠して、「第##回　日本生態学会大会」とし、略称を「ESJ##」とする。

（周期）

第３条　大会は年１回開催する。

（運営）

第４条　大会は本規則第10条で定める大会企画委員会（以下、企画委員会）と第11条で定める大会実行委員会（以下、実行委員会）によって運営される。

（開催地区）

第５条　大会の開催地区は、全国委員会の議を経て総会で決定する。

２　大会会場は実行委員会が企画委員会との協議のもとに定め、常任委員会の承認を得る。

（日程）

第６条　大会日程は実行委員会が企画委員会との協議のもとに定め、常任委員会の承認を得る。

（参加費）

第７条　大会参加費と懇親会費は実行委員会が企画委員会の協議のもとに定め、常任委員会の承認を得る。

（行事）

第８条　年次大会開催期間中に以下の各号に掲げる行事を実施する。

一 本学会会員（以下、会員）による学術論文の一般講演（口頭発表、あるいはポスター発表）
二 シンポジウムをはじめとする研究集会
三 通常総会（以下、総会）
四 全国委員会
五 各種専門委員会
六 本学会が定める各賞の授与式
七 懇親会
八 その他、全国委員会が必要と認めたもの

（参加者、発表者）

第９条　大会には本大会の目的を理解し、所定の手続きを経たすべての者が参加できる。会員資格は問わない。

２　一般講演、研究集会（以下、一般講演と研究集会を合わせて学術セッションという）の論文発表者は、会員に限る。ただし、企画委員会、実行委員会が認めた場合、発表者の会員資格は問わない。

（大会企画委員会）

第10条　大会の準備および運営のため、学会は常設専門委員会である大会企画委員会を設ける。大会企画委員会は、主に一般講演、シンポジウム等の学術セッションの準備、運営を担当する。

（大会実行委員会）

第11条　大会開催の準備および運営のため、開催地となる地区会は大会実行委員会を組織する。大会実行委員会は、会場管理、会計事務等大会運営に必要な事項を担当する。

（会計）

第12条　大会の会計は本学会会計の事業関係経費として処理される。

（参加者の義務）

第13条　大会参加者は大会参加費を支払わなければならない。ただし、企画委員会、実行委員会が認めた場合、大会参加費の支払いは免除される。大会参加者は「大会規則」、「注意事項」等大会運営に関わる諸規定を遵守しなければならない。

（退場）

第14条　実行委員会委員長あるいは企画委員会委員長が大会の運営に支障をきたすと判断した場合は、生態学会会長の了解を得て参加者に大会会場からの退去を求めることができる。また、過去に退去を求められた者の大会への参加を拒否することができる。

（プログラム、要旨集）

第15条　企画委員会はプログラムおよび要旨集を編集する。プログラムおよび要旨集の著作権は本学会に帰属する。投稿された原稿に、公序良俗に反する内容が含まれると判断した場合、企画委員会は著者に内容の修正を求めることができる。著者が修正に応じない場合は掲載を差し止めることができる。

（改正）

第16条　この規則は、全国委員会の議決を経て改正することが出来る。

（別規則）

第17条　この規則の施行に必要な事項については、企画委員会の議決を経て別に定める。

附則

（施行）

第１条　この規則は、制定と同時に施行する。

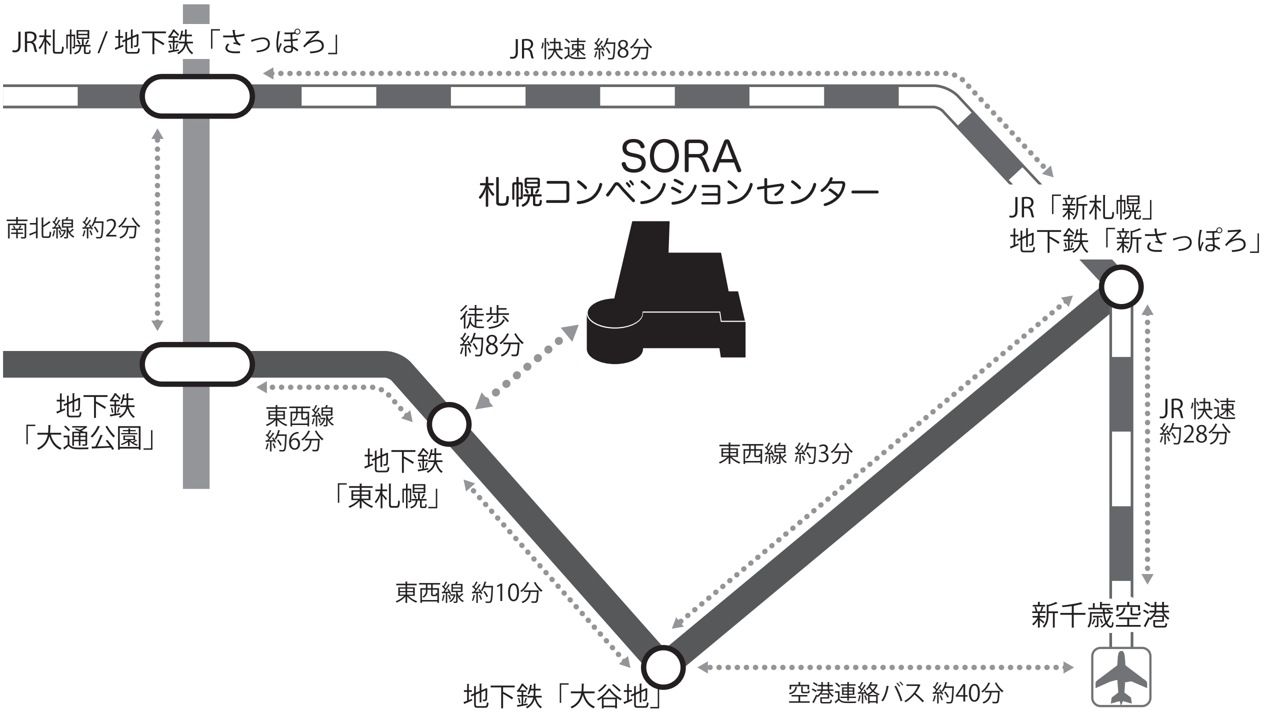
（適用）

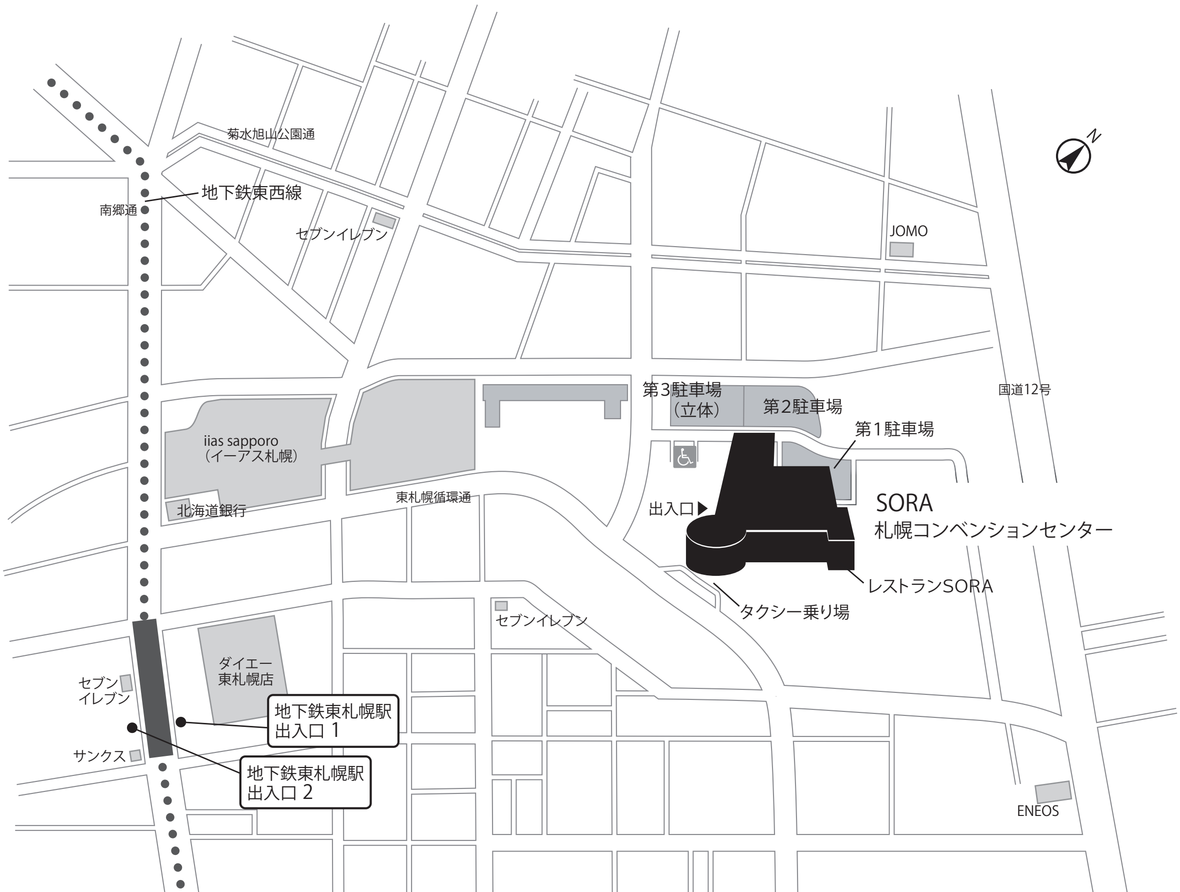
第２条　この規則は、第56回（2009年）大会から適用する。

会場へのアクセス

札幌コンベンションセンター

地下鉄東西線「東札幌」駅下車徒歩約8分

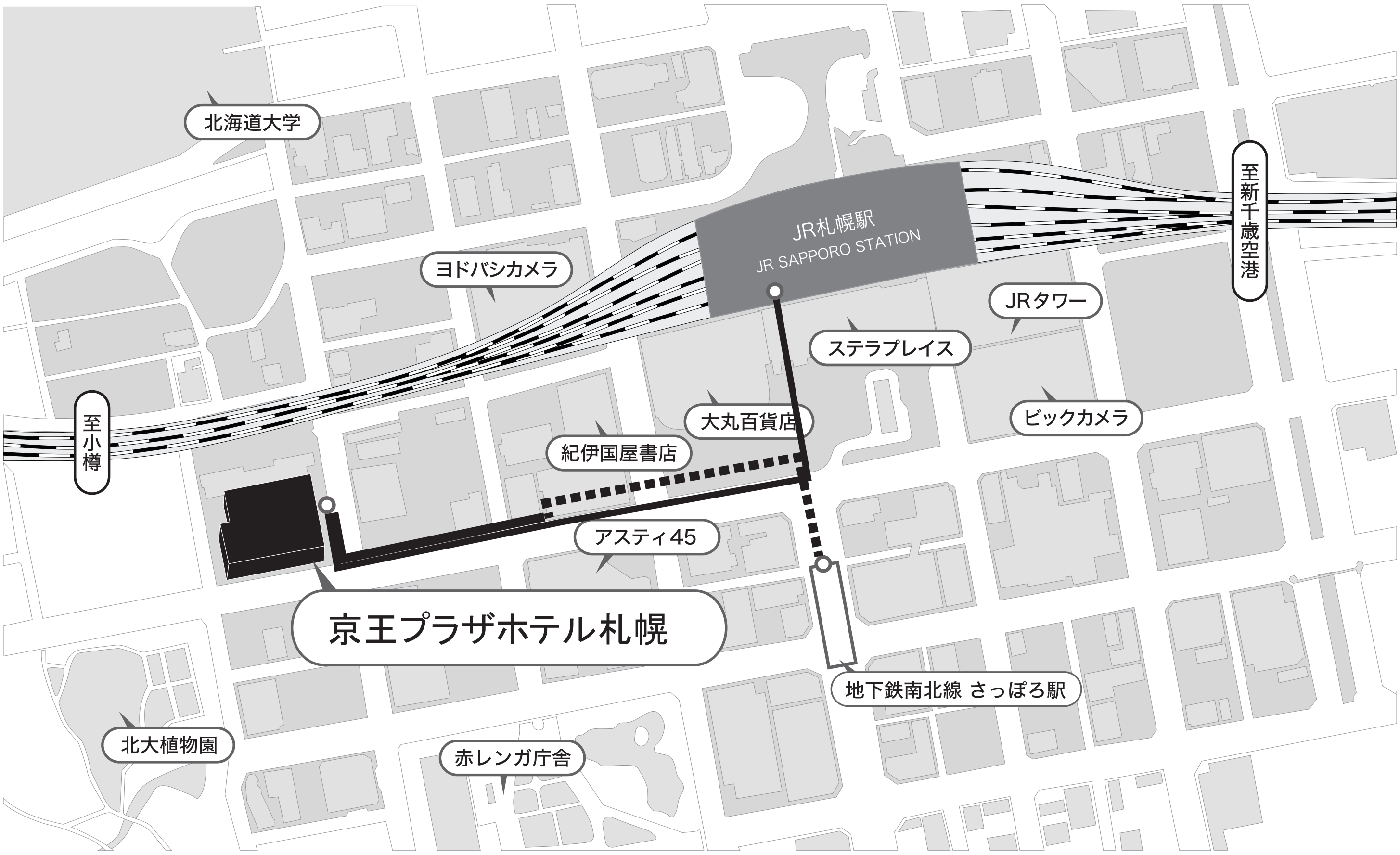




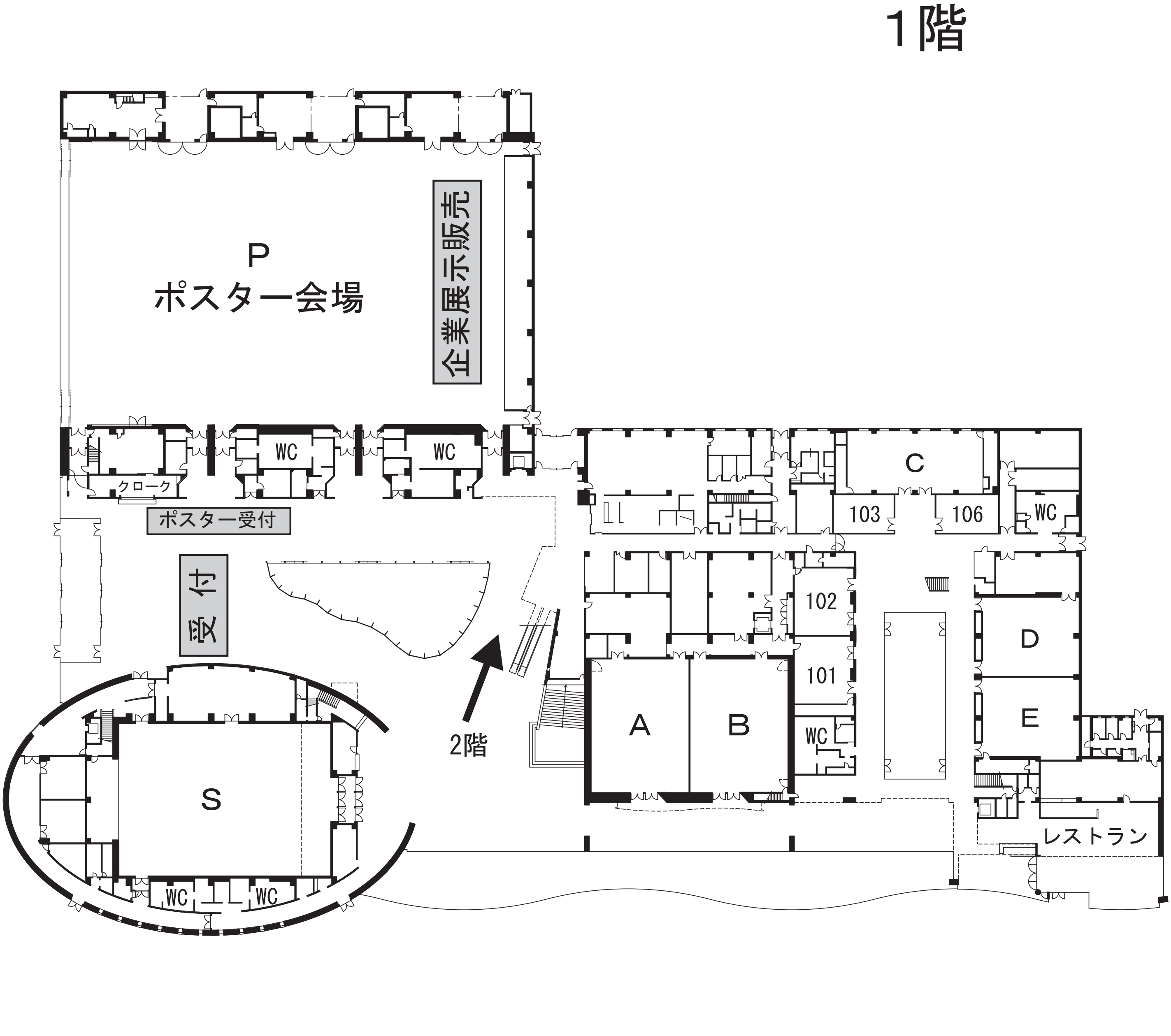
懇親会場へのアクセス

京王プラザホテル札幌 （TEL:011−271−0111）

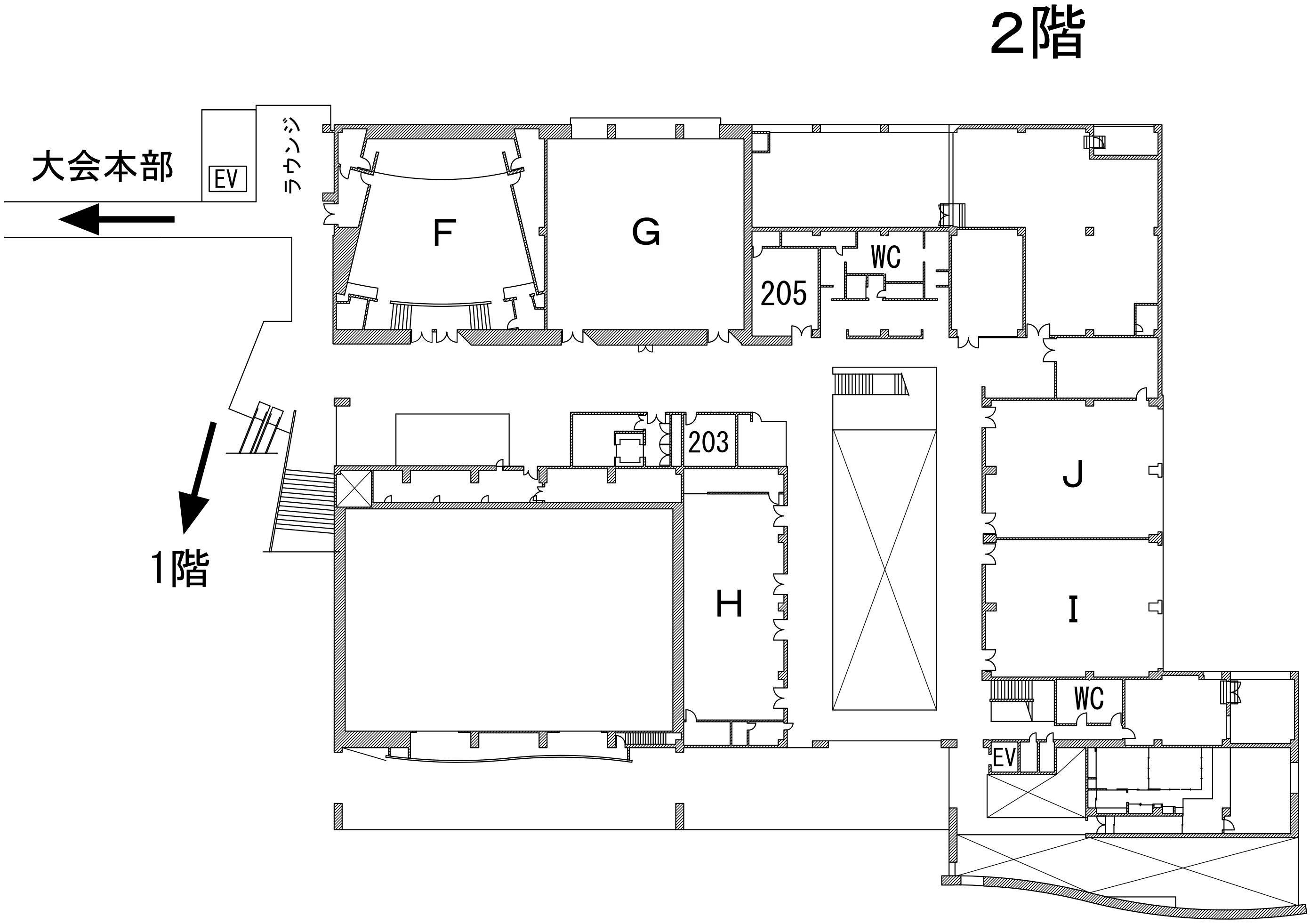
JR「札幌駅」、地下鉄南北線「さっぽろ駅」から徒歩約5分



- 懇親会場までは部分的ですが地下道（破線部分）を利用できます
- 札幌コンベンションセンターから徒歩数分のところにあるイーアス札幌（http://sapporo.iias.jp/） にはレストラン、食料品店があります



・受付（1階エントランスホール）
　3月8日（火）　13時から
　3月9日（水）から12日（土）　午前 8時30分から
・S会場（特別会議場）は総会、受賞講演、公開講演会に使われます
・その他のアルファベット表記会場はシンポジウム、口頭発表、企画集会、フォーラム、自由集会に使われます



各種委員会は以下の会議室にて開催されます

将来計画専門委員会	101会場
生態系管理専門委員会	102会場
外来種検討作業部会	103会場
大会企画委員会	H 会場
自然保護専門委員会	101会場
大規模長期生態学専門委員会	102会場
保全生態学研究刊行協議会	103会場
野外安全管理委員会	H 会場
日本生態学会誌刊行協議会	101会場
Ecological Research刊行協議会	102会場
生態学教育専門委員会	103会場
全国委員会	H 会場
キャリア支援専門委員会	103会場

●学会各賞授賞式・受賞者挨拶・受賞記念講演

3月11日（金）　札幌コンベンションセンター　S 会場

授賞式　11:00～11:30

第９回　日本生態学会功労賞受賞者挨拶　11:30～11:45

第９回　日本生態学会賞受賞記念講演　11:45～12:00

中静　透　（東北大学大学院生命科学研究科）

第15回　日本生態学会宮地賞受賞者・受賞記念講演

天野　達也　（農業環境技術研究所）　14:00～14:30
「階層的な生物動態の理解・予測に挑むモデリング」
瀧本　岳　（東邦大学理学部）　14:30～15:00
「食物連鎖の長さの決定機構：理論と実証から迫る」
三木　健　（國立台湾大學海洋研究所）　15:00～15:30
「生物群集と環境のフィードバックループ：微生物の多様性の役割」

第４回　日本生態学会大島賞受賞者・受賞記念講演

大塚　俊之　（岐阜大学流域圏科学研究センター）　15:45～16:15
「森林生態系の炭素循環：
高山サイトでの10年間で分かったことと、分からなかったこと」
大手　信人　（東京大学大学院農学生命科学研究科）　16:15～16:45
「森林生態系の物質循環における水の役割
－Do you have a monsoon season in your forest?－」
西廣　淳　（東京大学大学院農学生命科学研究科）　16:45～17:15
「湿地植生の保全と再生のための種子生態研究」
野田　隆史　（北海道大学地球環境科学研究院）　17:15～17:45
「岩礁潮間帯における固着生物のメタ群集動態」

●第14回　日本生態学会　公開講演会

「生態系を広く長く調べる：大規模長期研究への招待」

3月12日（土）　13:00　－　17:00　札幌コンベンションセンター　S 会場

豊かな生態系と生物多様性はどのように守っていけば良いのでしょうか？　それには、自然環境を根気よく長く観察しつづけることがなによりも重要です。日本生態学会は大規模長期生態学委員会を立ち上げ、この問題に積極的に取り組んできました。本公開講演会では、森、川、海の生態系のありさまを物質循環、生物の営みの両面からとらえ、今後予測される環境変動に対して生態系を保全し、持続的に利用していくための考え方や方法について知っていただきたいと考えています。地球と生き物の未来に興味のある市民の方々・生態学会員の方々の多数のご参加をお待ちしております。

■■プログラム■■

開会の辞と趣旨説明

日浦　勉（北海道大）

講演

1. 中静　透（東北大）「地球環境と生態系の長期変動を明らかにする」
2. 大手信人（東京大）「森林の水と物質の循環からわかる生態系の変化」
3. 三枝信子（国立環境研究所）「世界の森林の二酸化炭素吸収量を測る」
4. 綿貫　豊（北海道大）「海鳥の目からみた海洋変化」
5. 藤倉克則（海洋研究開発機構）「海洋の生物多様性の全体像に迫る」

パネル討論会

司会　甲山隆司（北海道大）

パネリスト:　講演者5名
藤田道男（環境省生物多様性センター）
綿路昌史（札幌旭丘高等学校）

○参加費：無料

講演者が執筆した図書「地球環境問題に挑む生態学（仮題）」を非会員を優先して、先着400名様に1冊謹呈します。

○参加申込み方法

専用ウェブサイト　http://www.fsc.hokudai.ac.jp/esj58/lectures/lectures.html　から手続きをしてください。生態学会大会参加者の方も、大会参加とは別に申込み手続きが必要です。

主催：日本生態学会

後援：日本長期生態学研究ネットワーク（JaLTER）

※平成22年度科学研究費補助金（研究成果公開促進費）補助事業です。

●シンポジウム・フォーラム・企画集会・自由集会　一覧

Symposium number, title, time and room number

◎3 月 8 日（Tue）

企画集会 （14:15-16:15）

T01	ヒグマ出没の裏を読み解く－森とクマと人と－	A 会場
T02	アジア・太平洋地域の植生の分布と分化 V －熱帯山地への郷愁－	B 会場
T20	Facilitation を理解／応用するための理論基盤の整備にむけて	C 会場
T03	Micro-evo-devo ： 進化発生学と生態学の融合	D 会場
T04	社会的意思決定に必要なデータ収集と解析	E 会場
T05	ニッチはどこへゆくのか：繁殖干渉による群集パターンの統一的説明	G 会場
T06	ユネスコ MAB（人間と生物圏）計画 ー 日本発ユネスコ・エコパーク制度の構築に向けて	I 会場
T07	藻類の群集構造と進化動態～理論と実証～	J 会場

自由集会 （17:00-19:00）

W01	感染症からみた野生動物の保護管理	A 会場
W02	社会性の分子メカニズム ーその進化プロセスの理解に向けてー	B 会場
W03	高山帯における環境変動とその影響評価：長く観ること・たくさん観ること	C 会場
W04	山里海のコモンズ再生に向けての生物分類スキルのあり方とは？ －在地・在野のパラタクソノミスト大集合－	D 会場
W05	北海道の自然史研究の現場はどうなっているか？北海道自然史研究会の取り組みと生態学	E 会場
W06	森林施業の生態学：チェーンソーからモデリングまで	F 会場
W07	化学物質の生態影響パート5 遺伝子から群集まで	G 会場
W08	湿地をめぐる生態学と人文・社会科学の接点を探る	I 会場
W09	COP10 で何が話し合われたのか、我々は何をなすべきか？	J 会場

◎3 月 9 日

(Wed)

シンポジウム （9:00-12:00）

S01	生態学における陸域・水域研究のギャップを考える	A 会場
S02	日本の砂浜海岸における砂丘植生の現状と課題	B 会場
S03	Links between different approaches in community ecology: the possibility and the potential availability	F 会場
S04	寄生虫生態学－寄生虫学と進化生態学の融合を目指して	G 会場
S05	意思決定の生態学	I 会場
S06	トキとコウノトリが出会うとき～里地の自然再生を考える	J 会場

フォーラム （9:30-11:30）

U01	安全な野外調査のために	H 会場

企画集会 （9:30-11:30）

T08	琵琶湖淀川水系における外来種管理：モデルケースの提示と今後の課題	C 会場
T09	適応進化における形質間の機能的・遺伝的つながりの意義	D 会場
T10	博物館の生態学 7 －生物多様性保全のシンクタンクを目指して－	E 会場

自由集会 （18:00-20:00）

W10	多様な社会寄生の進化ー寄生者はホストをどうやって欺いてきたか？ー	A 会場

W11	行政施策として実現可能な生物多様性の保全計画	B 会場
W12	希少植物研究の魅力－希少植物が語る複雑な事情－	C 会場
W13	季節的な環境における生物のレスポンス	D 会場
W14	データ解析で出会う統計的問題　ー　選択や勝負の統計モデル	E 会場
W15	エゾシカの自然植生に及ぼす影響把握と保護管理施策への取り組み	F 会場
W16	淡水二枚貝に関わる保全生態学的研究の最前線	G 会場
W17	世界遺産時代の小笠原　生態学系研究者の社会的責任　part3	H 会場
W18	イノシシ被害に強い農村空間づくりを考える：自然科学と社会科学の融合的アプローチ	I 会場
W19	植物の環境応答　ー　同位体分析が解き明かす生理生態的プロセス	J 会場

◎3 月 10 日
(Thu)

シンポジウム　(9:00-12:00)

S07	湖沼と湿地の自然再生：生態学が果たす役割と他分野との協働	A 会場
S08	なぜ，日本列島の生物多様性は保たれてきたのか？－ダイアモンド「文明崩壊」を越えて－	B 会場
S09	Scaling up plant traits to species performance based on cost-benefit balances: Towards general concepts of trait-based community ecology	F 会場
S10	生理学を武器にして動物生態学をおもしろくできないだろうか？	G 会場
S11	ユビキタスジェノタイピングと数理モデリングによる絶滅危惧植物保全	J 会場

企画集会　(9:30-11:30)

T11	生態学者のためのゲノミクスアプローチ~理論、手法から実証まで~	C 会場
T12	生物相互作用が引き起こす適応ダイナミクス	D 会場
T13	日本の海の生物多様性保全のために学会ができること	E 会場
T14	景観変化と生物多様性の時間的ダイナミクス	I 会場

◎3 月 11 日
(Fri)

フォーラム　(14:15-16:15)

U03	若手研究者のキャリアパスー就職先の多様化と将来性	H 会場

企画集会　(14:15-16:15)

T15	もしも生態学者が市長になったら？　ー経済学から見た生態系サービスと生態学から見た生態系管理ー	A 会場
T16	外来生物法の見直しと将来	B 会場
T17	迅速な適応性（第 3 回）－細胞から群集まで	C 会場
T18	そんなに閾（しきい）は高くない！：生態系管理における生態学的閾値の応用と課題	D 会場
T19	群集生態学と生物地理学をつなぐメソスケールアプローチ	E 会場
T21	種間相互作用の島嶼生物地理	G 会場
T22	生態系を時間軸でとらえる：炭素循環における遅れ現象	I 会場
T23	里地における水田普通種減少の実態と謎解き	J 会場

自由集会　(18:00-20:00)

W20	化学物質で植物と微生物の相互作用を探る ー野外生態研究における事例	A 会場
W21	「アウェイ」で教える生態学	B 会場
W22	フェノロジー研究会「ツル植物の生長特性を考える」	C 会場

W23	里山的利用は森林の生態系サービスと機能の持続性に貢献するか？－供給・文化的サービスの視点から	D 会場
W24	Ecoinformatics: 情報科学でやる生態学	E 会場
W25	泥炭湿原の炭素動態の解明　－サロベツ湿原を例として－	F 会場
W26	キノコる集会	G 会場
W27	耐乾・耐塩性からみた乾燥地の侵入植物問題	H 会場
W28	群落談話会「地理的にみた植生へのシカ影響」	I 会場
W29	北海道産サケ野生集団の評価と流域生態系の動植物に及ぼす影響	J 会場

◎3 月 12 日
(Sat)

シンポジウム (9:00-12:00)

S12	実証データが進展させる代謝べき乗則のWBE理論（メタボリック・スケーリング理論）の現状	A 会場
S13	適応進化を制限する機構：気候変動下での生物多様性研究への示唆	B 会場
S14	A multidisciplinary approach to explore the mechanism of mast seeding: combination of modeling and molecular/field experiments	F 会場
S15	CBD ポスト 2010 年に向けた微生物多様性研究	G 会場
S16	COP10 後に生物多様性地域戦略に込められた期待と課題　－地域の保全活動において必要な生態学と政策のつながり－	J 会場

フォーラム (9:30-11:30)

U04	生態学者よ、街に出よ！　Part 7「企業と生物多様性-COP10 の成果を受けて」	D 会場

企画集会 (9:30-11:30)

T24	増加する風車　－北海道から発信する風力発電問題　－	I 会場

シンポジウム　　　　　３月９日　9:00-12:00　　　　　会場　A

S01　生態学における陸域・水域研究のギャップを考える

企画者：深谷肇一（北大環境），奥田武弘（遠洋水研），熊谷直喜（水工研），堀正和（瀬戸内水研）

陸域生態系と水域生態系では環境条件や生物相が大きく異なっている。これらの系における生態学的パターン・プロセスの統一的な理解や、有効な保全計画の策定のためには、広く適用可能な概念の構築のみならず、ハビタット特有の特徴の特定やそれらの違いを生み出す要因の理解が欠かせない。そのためにはハビタットの垣根を超えた研究者間の議論が必要である。

本シンポジウムでは、陸域・水域生態系のより一般的な理解を目指すことを目的として、陸域研究と水域研究の間に何かギャップはあるのか、あるとすればどのようなものか、ギャップを超えることでどのような展望が得られるのかを考えたい。

前半では、海外での報告例から陸域・水域研究間のギャップを整理するとともに、特に研究者間にみられる”コミュニケーションギャップ”に注目する。後半では、特定の研究テーマについて陸域と水域を対比する形でレビューを行い、両ハビタットの間にある共通点・相違点を浮き彫りにすることで、陸域と水域を統合的に理解するための仮説や問題点を議論する。総合討論では異なる背景を持つ研究者をコメンテーターとして迎え、ハビタットの垣根を超えた生態学的パターン・プロセスの一般的な理解を目指すためのアイデアを議論したい。

総合討論
コメンテーター
中静透（東北大)、松田裕之（横国大)、瀧本岳（東邦大)、鏡味麻衣子（東邦大)

S01-1　陸域・水域研究に見られるギャップの要素と構造
深谷肇一（北大環境）

S01-2　宿主の利用における陸域・水域生態系の対比
熊谷直喜（水工研）

S01-3　陸域と海域の生物多様性のマクロ生態学的なパターン比較
久保田康裕（琉球大）

S01-4　陸域相利系における発見が水域群集に適用されるとき：群集ネスト構造をめぐる発見と迷走
近藤倫生（龍谷大）

シンポジウム　　　　　３月９日　9:00-12:00　　　　　会場　B

S02　日本の砂浜海岸における砂丘植生の現状と課題

企画者：永松 大（鳥取大・地域）

水域と陸域の境界部である海岸には、海から供給される砂や塩分の影響と，そこに定着する植物の耐性のバランスによって独特の海浜植生が成立する。このうち比較的大きな砂浜海岸では，多年生草本を中心とした群落が成立するなど，海浜植生は草原の成立しにくい日本列島においてユニークな生態基盤といえる。しかし護岸工事などの人為改変や砂浜の侵食などにより海浜植生は希少化してきている。加えて，歴史的には比較的近代になり成立したはずの「白砂青松」が自然的な砂浜海岸の原風景として扱われるなど，海浜植生に対する社会の認識は低い。このシンポジウムでは，海浜植生の生態的特徴と危機の現状について特に海岸砂丘の植生を中心に紹介し，砂丘植生の生態的な意義や保全の必要性について考えていく。発表者の方々には海岸の植物群落に対する人為インパクト，海岸性植物の種としての希少性，保全にあたっての問題点，保

全・再生の実践例について報告をいただく。生物多様性の観点も織り込みつつ，海岸の植生について特に砂浜や砂丘植生の保全目標について議論を進めるとともに，今後の研究および保全活動の方向性について議論を進める。

コメンテーター：石川 真一（群馬大・社会情報）

S02-1　趣旨説明：鳥取砂丘における植生保全の歴史的経過
永松 大（鳥取大・地域）

S02-2　砂丘植生を取り巻く危機的状況とその要因
由良 浩（千葉県立中央博物館）

S02-3　海浜植物の分布傾向とレッドリスト記載状況
澤田 佳宏（兵庫県大・院・緑環境，淡路景観園芸学校）

S02-4　都市近郊の利用形態を中心とした海岸植生の危機の現状
松島 肇（北大・院・農）

S02-5　海岸緑化の技術的手法について
吉崎 真司（東京都市大・環境情報）

S02-6　石狩浜における海浜植物保護の道のりと課題
有田 英之（石狩市石狩浜海浜植物保護センター）

シンポジウム　3月9日　9:00-12:00　会場　F

S03 Links between different approaches in community ecology: the possibility and the potential availability

Organizers: Terutaka Mori (Aqua Restoration Research Center), Takashi Noda (Hokkaido University)

Community ecology has been progressed mainly by two major approaches. One is an individual approach based on population ecology. The individual approach has been mainly used in studies focusing on processes and mechanisms acting on a relatively small subset of interactive species. The other is a panoptic approach which calls for macroecological patterns and assembly rules. The panoptic approach has contributed to elucidation of patterns in aggregative properties such as species richness. This symposium aims to discuss possibility and potential availability of the links between the two approaches.

Commentator; Tadashi Miyashita（Tokyo University）

S03-1　Introduction
Takashi Noda（Hokkaido University）

S03-2　Plant-mediated indirect effects on insect communities
Masahiro Nakamura（Hokkaido University）

S03-3　The role of density dependence in community dynamics of coral assemblages
Jason E. Tanner（South Australian Research and Development Institute）

S03-4　Effects of density-dependent competition varying with disturbance on stream invertebrate assemblages
Terutaka Mori（Aqua Restoration Research Center）

S03-5　Effects of dispersal limitation, environmental filtering and interspecific competition on plant population and community
Masahiro Aiba（Hokkaido University）

S03-6　Linking population dynamics with species abundance patterns
Kei Tokita（Osaka University）

シンポジウム　　　　　3 月 9 日　9:00-12:00　　　　　会場　G

S04　寄生虫生態学ー寄生虫学と進化生態学の融合を目指して

企画者：三浦収（京都大・地球環境）

寄生虫学という言葉から連想されるのは、寄生虫病の予防や治療、そしてその撲滅に関する学問である。しかし近年、寄生虫を用いた進化生態学的な研究に大きな注目が集まり始めている。その理由の一つは、宿主に生息環境の大部分を依存する寄生虫の性質が進化生態学の問題を解くための優れた実験系を提供してくれるからである。また最近の研究により、寄生虫の感染が宿主の生態に大きな影響を与えることも明らかになってきた。本シンポジウムでは、生態・食物連鎖・外来種問題・共進化など様々な視点から寄生虫生態学を紹介し、その可能性について広く議論したい。

S04-1　Role of parasites in biological invasions
Mark Torchin（Smithsonian Tropical Research Institute）

S04-2　外来魚・外来寄生虫：今，水界で何が起きているのか？
長澤和也（広島大・生物圏）

S04-3　生態系の中の寄生者：渓畔生態系においてハリガネムシ類が駆動するエネルギー流
佐藤拓哉（京都大・フィールド研）

S04-4　Predation intensity by birds affects parasite prevalence in intertidal crabs
＊古賀庸憲（和歌山大・教育），沖彩矢香（和歌山大・教育），熊谷直喜（水産工学研究所）

S04-5　琵琶湖固有カワニナ類の遺伝的分化と吸虫感染耐性
浦部美佐子（滋賀県立大・環境）

S04-6　パナマ地峡の形成による潮間帯巻貝と寄生虫の多様化
三浦収（京都大・地球環境）

シンポジウム　　　　　3 月 9 日　9:00-12:00　　　　　会場　I

S05　意思決定の生態学

企画者：岡田賢祐（岡大・環境），粕谷英一（九大・理・生物）

生物はいつでも同じふるまいをするのではなく、自分を取り巻く他個体や環境条件によってふるまいを変

える。そのうちの１つである過去の経験などの情報によって行動を変える、‘意思決定’（decision making、意識的にそうしているかどうかを問わない）が、近年注目を浴びている。動物行動学では、この意思決定は現在の条件や過去の経験に依存したふるまいの変化として扱われており、明らかにされた内容は驚くほど複雑で生物に関する単純なイメージを改めてくれる。さらに得られた結果から、個体の意思決定が生態学にとって重要な過程であることもわかる。例えば、メスの産卵行動の意思決定は、競争相手である他のメスだけでなく捕食者の存在にも影響される。これは同種内や異種間の相互作用を介して、意思決定が個体群あるいは群集にまで影響が及ぼすことを意味する。ここでは、意思決定の実態に驚くとともに、意思決定が生態学の発展の起爆剤になりうるか議論したい。

コメンテーター：久保拓弥（北大・地球環境）

S05-1　子の捕食リスクにもとづく親の意思決定
平山寛之（九大・理・生態）

S05-2　歌鳥の繁殖成功に関わる意思決定：求愛・配偶者選択・産卵
相馬雅代（北大・理・生物）

S05-3　競争と経済的意思決定：ただし、ヒヨコの場合
松島俊也（北大・理）

S05-4　敗北経験と意思決定
岡田賢祐（岡大・環境）

シンポジウム　　3月9日　9:00-12:00　　会場　J

S06　トキとコウノトリが出会うとき～里地の自然再生を考える

企画者：西川 潮（新潟大・超域），関島 恒夫（新潟大院・自然科学）

コメンテーター：中村 太士（北海道大・農）、山岸 哲（新潟大・超域）

野生絶滅種の再導入は、これまで海外を中心として、鳥類や大型哺乳類などを対象として進められてきたが、その多くは野生絶滅種を生態系の構成メンバーの一員として復元・定着させることに目標がおかれてきた。わが国では、これまで、野生絶滅種の再導入は二例を数えるのみで、2005 年にはじめてコウノトリが兵庫県豊岡市に、2008 年にはじめてトキが新潟県佐渡市（佐渡島）に再導入されている。日本で実施されている野生復帰事業は、古くから生活に密接な存在である里地が舞台となっているため、鳥類そのものの復元・定着だけでなく、これらを象徴種として里地生態系の復元を行っていく点にも学術的および社会的な重要性がある。本シンポジウムでは、日本の二大自然再生現場（佐渡市、豊岡市）における鳥類の野生復帰の現状、およびこれらを象徴種とした里地の再生の現状を演者らに紹介していただき、両地域における成果や課題を対比させながら“日本流”の自然再生手法について考えたい。

S06-1　野生生物の再導入と自然再生
西川 潮（新潟大・超域）

S06-2　コウノトリの存続可能な野生個体群の確立に向けて
大迫 義人（兵庫県立大・自然・環境科学研）

S06-3　コウノトリを象徴種とした農地の再生
内藤 和明（兵庫県立大・自然・環境科学研）

S06-4　**トキの野生復帰の現状**
永田 尚志（新潟大・超域）

S06-5　**トキを象徴種とした農地の再生**
関島 恒夫（新潟大院・自然科学）

S06-6　**豊岡市と佐渡市における環境関連政策**
南 眞二（新潟大・法）

シンポジウム　　　　3 月 10 日　9:00-12:00　　　　　会場　A

S07　湖沼と湿地の自然再生：生態学が果たす役割と他分野との協働

企画者：吉田丈人（東大・総合文化）

自然再生は、地域において失われつつある生物多様性や自然環境を、地域の多様な主体が科学的データに基づく順応的な方法により取り戻すことだけでなく、生物多様性と密接に関連する地域の人々の営みをも再生するアプローチとして期待される。自然再生に対する科学の貢献は、もはや生態学だけではなく、広く自然科学や人文社会科学に求められている。

本シンポジウムでは、湖沼と湿地を対象とした自然再生について議論する。淡水生態系の生物多様性は、他のどの生態系よりも速い速度で失われつつあると言われる。一方で、富栄養化の問題など、長年にわたって未解決のままの問題も存在する。人間活動に起因する諸々の要因に対して生物多様性や生態系は反応し、改変された生態系サービスが人間社会に影響を与える。国内のさまざまな湖沼や湿地において見られる生物多様性や生態系の変化と、それに対してどのような自然再生が検討・実施されるかについて紹介しながら、生態学の役割と他分野との協働について議論したい。

構成：
　趣旨説明（吉田）
　事例紹介（下記の 5 題）
　コメント
　　三橋弘宗（兵庫県立大・自然研）
　　宮内泰介（北海道大・文学）
　　鷲谷いづみ（東京大・農学生命科学）
　総合討論

S07-1　**琵琶湖の農業濁水問題をときほぐす一文理連携による流域診断**
谷内茂雄（京大・生態研）

S07-2　**宍道湖・中海における自然再生の現状と課題**
國井秀伸（島根大・汽水域研究センター）

S07-3　**地域社会とのかかわりを繋ぐ湖沼の自然再生－釧路湿原湖沼と霞ヶ浦を例に**
高村典子（国立環境研究所）

S07-4　**福井県三方湖の自然再生を支援する総合的環境研究**
吉田丈人（東京大・総合文化）

S07-5　**サロベツ湿原における湿原生態系解明研究の成果と自然再生**
冨士田裕子（北大・FSC・植物園）

シンポジウム　　　　　3 月 10 日　9:00-12:00　　　　　　会場　B

S08　なぜ，日本列島の生物多様性は保たれてきたのか？－ダイアモンド「文明崩壊」を越えて－

企画者：湯本貴和（総合地球環境学研究所）

日本列島は，他の「先進国」に比べ高い森林率や高い生物多様性を保持している。稠密な人口を擁するにもかかわらず，なぜ日本列島の生物多様性は失われなかったのか？縄文時代や江戸時代に「自然と人間の共生」の理想を求める言説は多い。この企画では、1）日本列島の生物多様性が高かった要因を主に地理的，気候的，地史的側面からの仮説を示し，2）列島各地の歴史から見出した生物資源利用とその管理の成功／失敗事例を紹介し，3）列島の生物多様性が維持された要因を整理した上で，4）今後の「自然と人間の関係」をどうしていくのかを展望したい。世界の流れは、生物多様性のみを保全するのではなく，人間との関係性も含めて保全していくという方向に動きつつある。生態学と同じ「関係性」の学問である歴史学の視点に触れ，生物多様性と分かちがたく結びついている文化多様性について考えたい。

S08-1　趣旨説明
湯本貴和（地球研）

S08-2　気候変動と人間活動からみた日本列島の植生変化
高原光（京都府大・生命環境）

S08-3　野生動物と狩猟の歴史
梶光一（東京農工大・農）

S08-4　山村の歴史と生物資源利用
白水智（中央学院大・法）

S08-5　日本列島の生物多様性が維持されてきた要因
辻野亮（地球研）

S08-6　生物文化多様性の視点からの保全生態学
湯本貴和（地球研）

シンポジウム　　　　　3 月 10 日　9:00-12:00　　　　　　会場　F

S09　Scaling up plant traits to species performance based on cost-benefit balances: Towards general concepts of trait-based community ecology

Organizers: Yoshiko Iida (Hokkaido University), Yusuke Onoda (Kyushu University), Hiroko Kurokawa (Tohoku University), Toshihiro Yamada (Hiroshima University)

Trade-offs among plant traits lead to various plant strategies, which play important roles in the plant specialization and coexistence within a range of environment. There is still a large gap in our understanding between physiological/morphological traits and species specialization/coexistence mechanisms. We will present studies which integrate plant traits from a shoot, to whole plant and to their assembling community; thus aiming to understand how plants succeed and coexist in different environments. We will discuss our studies to develop general concepts based on relationships from plant traits and their trade-offs to vegetation structure, functioning and species diversity.

Concept: Yoshiko Iida（Hokkaido University），Yusuke Onoda（Kyushu University）

Comments: Hiroko Kurokawa（Tohoku University）, Toshihiro Yamada（Hiroshima University）

S09-1 Diverse shoot architectures and converged mechanical safety among sympatric woody species
Yusuke Onoda（Kyushu University）

S09-2 Architectural trade-offs among tropical tree species in relation to life-history traits
Yoshiko Iida（Hokkaido University）

S09-3 Functional traits determine trade-offs and niches in a tropical tree community
Frank Sterck（Wageningen University, the Netherlands）

S09-4 Structure, functioning and species composition of vegetation stands: a case of a game?
Niels Anten（Utrecht University, the Netherlands）

シンポジウム　3 月 10 日　9:00-12:00　会場　G

S10　生理学を武器にして動物生態学をおもしろくできないだろうか？

企画者：宮竹貴久（岡山大），岸田 治（北大）

「生理学を武器にして動物生態学をおもしろくできないだろうか？」
企画者：宮竹貴久（岡山大）・岸田治（北大）

概要： 近年、動物生態学は分子遺伝学の技術を取り入れて新しい展開を見せている。しかし、生態学の基本構成をなす生物個体と遺伝子の間には、生理学という大きな学問領域があり、行動生態学ではあえてここに目を向けずに学問発展がなされてきた。そもそも生理学って生態学の役に立つのだろうか？　本シンポジウムでは、生理学から動物の行動や生態を考えている研究者と、生態・行動学から生理学にも興味を持っている研究者の間で興味を共有し合える機会を作りたい。そして生態学と生理学の間に介在するギャップを見つめなおし、逆に、いかにすれば生理学者と手を取り合って動物生態学を今以上におもしろくできるだろうか？　考えてみたい。

講演：
趣旨説明　宮竹貴久（岡大・環境）
コオロギの闘争行動と順位形成：神経生理学から行動学へ　青沼仁志（北大・電子研）
パーソナリティーの生理と生態学的基盤：昆虫の死にまねをモデルとして　宮竹貴久（岡大・環境）
サンショウウオとオタマジャクシ：表現型可塑性と生理学から群集へ　岸田　治（北大・FS センター）
成長のメカニズムからサケ科魚類の生活史多型と資源管理を考える　清水宗敬（北大・水産）

コメンテーター　松島俊也

総合討論

S10-1 コオロギの闘争行動と順位形成：神経生理学から行動学へ
青沼仁志（北大・電子研）

S10-2 パーソナリティーの生理と生態学的基盤：昆虫の死にまねをモデルとして
宮竹貴久（岡山大・環境）

S10-3　サンショウウオとオタマジャクシ：表現型可塑性と生理学から群集へ
岸田 治（北大・FS セ）

S10-4　成長のメカニズムからサケ科魚類の生活史多型と資源管理を考える
清水宗敬（北大・水産）

シンポジウム　　3 月 10 日　9:00-12:00　　会場　J

S11　ユビキタスジェノタイピングと数理モデリングによる絶滅危惧植物保全

企画者：井鷺裕司（京都大）

生物多様性の重要性は広く認識されつつあるが、種の絶滅に関しては依然として深刻な状況にあり、個体数が数十～数百にまで減少した種も少なくない。これらの種に関しては､全個体の遺伝子型をすべて決定（ユビキタスジェノタイピング）し、その情報に基づいて人工交配、移植、生育地外保全などの策を講じることが有効である。本シンポジウムではこのアプローチによる絶滅危惧植物保全の可能性について議論を行う。

ユビキタスジェノタイピングによって得られた興味深い知見として、100 個体以上生存していると思われていた種が遺伝的には 1 個体であった例、個体群ごとに遺伝的特徴が著しく異なり個体群の遺伝的質と保全努力とが一致していない例、野生と思われていた個体群が過去に人為的に増殖・移植されていた例などがある。また、全個体の生育位置特定のための新たなツールの活用や、空間情報、遺伝子型情報を考慮した数理モデルで個体群の持続可能性を評価する事の有用性も議論したい。

S11-1　二次的自然下に生育する絶滅危惧植物保全のためのユビキタスジェノタイピング
井鷺裕司・兼子伸吾・加藤慶子・水谷未耶（京都大）・増本育子・大竹邦暁（中電技術コンサルタント）

S11-2　小笠原諸島における絶滅危惧植物保全のためのユビキタスジェノタイピング
須貝杏子・加藤朗子・常木静河・森啓悟・加藤英寿（首都大・牧野標本館）

S11-3　高山における絶滅危惧植物保全のための全個体ジェノタイピング
陶山佳久・阿部晴恵（東北大）

S11-4　様々な繁殖様式をもつシダ植物におけるユビキタスジェノタイピング
高宮正之（熊本大）

S11-5　地域固有絶滅危惧種シモツケコウホネを守る：ユビキタスジェノタイピングから見えてきたこと
志賀隆（大阪市立自然史博物館）・横川昌史・兼子伸吾・井鷺裕司（京都大）

S11-6　ラジコンヘリ Falcon-PARS による絶滅危惧種生育位置の特定
小熊宏之（国立環境研究所）・渡部靖之（情報科学テクノシステム）

S11-7　絶滅危惧植物における全個体遺伝子情報と個体群存続解析
加藤元海（高知大）

シンポジウム　　　　　3 月 12 日　9:00-12:00　　　　　　会場　A

S12　実証データが進展させる代謝べき乗則のＷＢＥ理論（メタボリック・スケーリング理論）の現状

企画者:小山耕平（石川県立大•生物資源環境），福森香代子（テキサス大オースティン校），八木光晴（九大•院・農／長大・水），森茂太（森林総合研究所・植物生態領域）

WBE 理論（メタボリック・スケーリング理論）は、生物の個体サイズとエネルギー代謝量（呼吸量や光合成量）の関係を「べき関数」（＝３／４乗則）として表し、個体の成長パターン及び個体群の総生産量を、この関係から演繹して統一的に表現しようと試みる。この理論は全ての生物種に対して、また陸上系・水系といった生態系を選ばずに適用可能な理論として提唱されているが、反論も多い。代謝べき乗則の理論は今後、どのような実証データによって発展するのだろうか？本集会では、現在の「生理生態学」や「生態系ストイキオメトリー」の若手研究者らによる実証データが、代謝べき乗則に関する理論を進展させる可能性について議論したい。

司会：福森香代子（テキサス大オースティン校）

コメント：
11:20-11:35　占部城太郎（東北大院・生命科学）

総合討論：
11:35-12:00

S12-1　①個体サイズの代謝べき乗則入門：なぜ３／４になるのか説明　②代謝べき乗則理論の３つの弱点、そこで必要とされる３種類の実証データ
小山耕平（石川県立大・生物資源環境）

S12-2　植物個体呼吸スケーリングを決めるのは何？　－環境 / 系統などから－
森茂太（森林総研・植物生態領域）

S12-3　代謝スケーリングから見えた食う－食われるの関係：代謝量の個体発生を考える
＊八木光晴（九大・院・農／長大・水），及川信（九大・院・農）

S12-4　高次階層システムとしての生態系メタボリズムを駆動するメカニズムは何？　サイズスケーリング vs ストイキオメトリー
＊福森香代子（テキサス大），酒井陽一郎，西松聖乃，陀安一郎，奥田昇（京大・生態研）

シンポジウム　　　　　3 月 12 日　9:00-12:00　　　　　　会場　B

S13　適応進化を制限する機構：気候変動下での生物多様性研究への示唆

企画者：東北大学生命科学

ある生物は多様な環境に適応しているのに対し、ある生物は限定された生息環境に留まっている。また、ある生物は、急速に環境に適応して進化しているのに対し、ある生物では長期間形質を進化させていない。これは、その生物の取り巻く物理的環境や相互作用する生物的環境などの違いによるだけでなく、生物種自体の進化しづらさ（conservatism, constraints）、あるいは進化しやすさ（evolvablity）が関与している。進化を妨げる要因としては、集団内に維持される遺伝的変異に影響する集団サイズや交雑、移動分散などの集団遺伝学的要因とその生物自体のもつ遺伝的システムによるものがある。進化しづらさ・進化しやすさは、生物

多様性や群集構造を決める重要な要因の一つとして考えられる。たとえば、ニッチに関する性質の進化しづらさ（niche conservatism）は、新しい環境への移住の制限をもたらし、種多様性を決める要因の一つとなる。また、今後の気候変動に対して生物は進化的に適応できるのかどうかを予測する上でも、進化しづらさに関わる要因を明らかにすることは重要である。シンポジウムでは、進化しづらさに関係する要因について、また、それが生物多様性研究および地球環境変動への生物の進化的応答研究に与える影響について考察する予定である。

コメンテーター：村上正志（千葉大・理学部）、工藤洋（京都大 生態研センター）

S13-1 適応進化を制限する遺伝的機構と生物多様性
河田雅圭（東北大学院生命科学）

S13-2 多様な生息地への適応を制限するゲノム構造
牧野能士（東北大院 生命科学），河田雅圭（東北大院 生命科学）

S13-3 気候変動下での共進化過程と遺伝子流動
東樹宏和（京都大）

S13-4 生物の時空間動態を理解するために有効なniche conservatismの視点
天野達也（農業環境技術研究所）

シンポジウム　　3月12日　9:00-12:00　　会場　F

S14 A multidisciplinary approach to explore the mechanism of mast seeding: combination of modeling and molecular/field experiments

Organizers: Yuko Miyazaki (Hokkaido Univ.), Akiko Satake (Hokkaido Univ.)

The intermittent and synchronized production of large numbers of seeds or flowers by plant populations is called "masting" or "mast seeding". A variety of factors influence the likelihood of mast seeding. Two major factors are internal resource level (such as carbon, nitrogen, and phosphorus content) and external environmental signals (low temperature and drought). How these internal and external factors interact to induce flowering and fruiting is a central question in plant biology. In this symposium, we will introduce a new multidisciplinary approach to address the question, and will demonstrate that synthesis of molecular biology, ecology, and mathematical modeling is necessary for in-depth understanding of the mechanism of mast seeding.

S14-1 Detecting proximate factors of flower bud differentiation in beech using flowering gene expression analysis
Yuko Miyazaki（Hokkaido Univ.）

S14-2 Regulation of the flowering genes in fruit trees
Nobuhiro Kotoda（National Institute of Fruit Tree Science）

S14-3 Testing mechanisms of masting behavior in California oaks
Walter D. Koenig（Cornell Univ.）

S14-4 Pollination syndromes and the benefits of synchronous mast-seeding
Elizabeth Crone（Harvard Univ.）

S14-5　A computational model of plant life cycle: genetic mechanism of local adaptation in flowering time
Akiko Satake（Hokkaido Univ.）

シンポジウム　　　　　3 月 12 日　9:00-12:00　　　　　会場　G

S15　CBD ポスト 2010 年に向けた微生物多様性研究

企画者：中野伸一（京大生態研），山本啓之（JAMSTEC），浜崎恒二（東大大気海洋研），鎌形洋一（産総研，北大院農学）

生物多様性は国際条約（CBD）のもと複数の国際プログラムが様々な視点から調査研究や普及広報や教育などのプロジェクトを実施してきた（CoML, DIVERSITAS, GBIF, GEO-BON, ILTER, ICoMM etc.)。また 2010 年 10 月の生物多様性条約締結国会議（COP10）ではこれからの短期目標と長期の戦略が議論される。研究の状況では、情報高分子の解析技術は生物多様性の分野にかつてないほど精緻で多量なデータを提供し、分野として新たな進展を後押ししている。一方、生物多様性が国際の場で論議された当初は微生物の重要性が認識されていたにも関わらず、現在の生物多様性プロジェクトへの寄与は大きくない。本企画シンポでは、海洋および陸水生態系と、メタゲノミクスおよびデータベース構築における微生物多様性についての具体的な研究成果やデータベースに関する状況を検証し、今後の生態系研究や種々の環境プロジェクトにおける方向性を示したい。

S15-1　**超並列シーケンスによる海洋微生物の多様性解析**
浜崎恒二（東大大気海洋研）

S15-2　**有害藻類 Microcystis 属のブルーム形成と遺伝的多様性**
大林夏湖，程木義邦，小林由紀，奥田昇，＊中野伸一（京大生態研）

S15-3　**メタゲノムアプローチで見える環境負荷変動による微生物群集の遷移**
鎌形洋一（産総研，北大院農学）

S15-4　**微生物多様性研究における観測とデータベースとは？**
山本啓之（JAMSTEC）

シンポジウム　　　　　3 月 12 日　9:00-12:00　　　　　会場　J

S16　COP10 後に生物多様性地域戦略に込められた期待と課題　－地域の保全活動において必要な生態学と政策のつながり－

企画者：西田貴明（三菱 UFJ リサーチ＆コンサルティング（MURC）），橋本佳延（兵庫県博），及川敬貴（横浜国立大学），日鷹一雅（愛媛大学）

CBD-COP10 の成果を受けた「生物多様性の社会の主流化」の動きとして、自治体の総合的な保全管理計画である生物多様性地域戦略の策定・普及が重要視されている。実際、既に先進的な地方自治体では地域戦略の策定がなされ、また昨今更に多くの自治体が策定の検討を開始している。一方で、真に地域の多様さを把握し、地域特性に合致した地域戦略を策定・運用することは容易ではない。また、策定した戦略においても、実効性を担保するための具体的施策が戦略へ体系的に落とし込めている事例は少ない。これらの現状は、地域戦略の策定・運用に関して、依然として国内に十分な科学的知見が乏しいことを示唆している。本シンポジウムでは、生態学者から、社会学者、行政担当者まで多様な立場から、地域戦略の策定・運用の要諦を炙り出しつつ、生態学と地域政策のつながりを議論したい。

S16-1　生物多様性地域戦略の役割
＊西田貴明，阿部剛志（MURC）

S16-2　地方分権・自立自耕時代における農山漁村の地域戦略－農山漁村地域の事例を中心に－
日鷹一雅（愛媛大学・農学部）

S16-3　地方博物館が地域戦略策定に果たす役割－兵庫県の事例を中心に－
橋本佳延（兵庫県博）

S16-4　地域戦略の策定状況と自治体が抱える課題
＊山本清隆，豊野基（東京市町村自治調査会），阿部剛志（MURC）

S16-5　法学からみた地域戦略の意義
及川敬貴（横浜国立大学・環境情報）

S16-6　林業振興に生物多様性保全はなぜ必要か
相川高信（MURC）

S16-7　生物多様性保全に向けた地域活動の推進手法
＊阿辺一郎，平田弘成（農林水産省農村振興局）

フォーラム　　　3月9日　9:30-11:30　　　会場　H

U01　安全な野外調査のために

主催：野外安全管理委員会　責任者：鈴木準一郎（首都大・理工）

本フォーラムの目的は、生態学の研究において、極めて重要な部分を占める野外調査を安全に行うために、何をすれば良いか・何をしたらいけないか、を今一度、確認することです。
1990年代の後半以降、野外調査中に生態学の研究者が、生命を失う事故が続発しました。事故への反省から、生態学会の野外安全管理委員会が発足し、調査中の事故を回避し、また万が一、事故に見舞われた場合でも被害を軽減する方法の確立を目指して活動を続けてきました。委員会の発足当初の目標からは大分遅れましたが、活動の成果を日本生態学会誌に『フィールド調査における安全管理マニュアル』としてまとめることができました。
そこで、このフォーラムでは、マニュアルの概要を本委員会から紹介したうえで、安全管理方法の教育を含めた今後の課題を共有するために議論をしたいとおもいます。
野外調査をより安全に行いたいと思っておられる意識の高い方はもちろん、野外調査が危険だと思ったことがない方の参加も期待しています。

内容
『フィールド調査における安全管理マニュアル』概要の紹介
マニュアルをどう使うか、マニュアルに足りない物は何かについての総合討論

フォーラム　　　3月11日　14:15-16:15　　　会場　H

U03　若手研究者のキャリアパス－就職先の多様化と将来性

主催：キャリア支援専門委員会　責任者：半場祐子，深谷肇一

キャリア支援専門委員会は、将来計画専門委員会から独立する形で2010年10月1日に承認されました。

本委員会では、生態学分野の若手研究者支援や男女共同参画に生態学会として貢献するために、これまで2年間にわたって生態学会で若手キャリア支援のためのフォーラムを開催してきました。今年度は、キャリアパスとして「民間企業への就職」を積極的に考えるフォーラムを開催します。博士取得者の就職先の間口がなかなか広がらない現状の要因として、博士取得者を積極的に採用する民間企業が少ないことに加え、博士取得者も民間企業を就職先の選択肢に入れていないという、双方のミスマッチがあります。企業側と博士取得者側の両方から学位取得者の就職に関する考え方を提示し、その上での総合討論を行うことによって、学位取得者が多様なキャリアパスの存在に気がつくこと、民間企業と学位取得者の間で就職のイメージをすり合わせることを目指したいと思います。

プログラム（予定）

1）民間企業側の意識
「大学研究室が育成する人材と企業が求める人材とのミスマッチ（仮）」
帯野久美子（和歌山大学理事／株式会社インターアクト社長）

2）学位取得者の意識
「若手の会メーリングリスト（wakateco）を使ったアンケート調査結果」
飯島勇人（山梨県森林総合研究所）、奥田武弘（遠洋水産研究所）、尾崎有紀（奈良女子大学）、黒江美紗子（早大・自然環境調査室）

3）民間企業に就職した若手会員による話題提供
「民間シンクタンクで生物多様性を研究する」
西田貴明（三菱UFJリサーチ＆コンサルティング株式会社）
「企業での博士の多様なキャリア～高い専門性を活かそう～（仮）」
丸幸弘（株式会社リバネス　代表取締役CEO）（予定）

4）総合討論

フォーラム　　　3月12日　9:30-11:30　　　　会場　D

U04　生態学者よ、街に出よ！ Part 7「企業と生物多様性 -COP10の成果を受けて」

主催:常任委員会　責任者:足立直樹（(株) レスポンスアビリティ）,可知直毅（首都大院･理工）,石川真一（群馬大・社会情報）

昨年10月に名古屋で開催された生物多様性条約 第10回締約国会議（COP10）では、ABS（遺伝子資源へのアクセスとその利用から生じる利益の配分）に関する国際ルールである名古屋議定書と、2020年に向けての20の戦略的目標と2050年のビジョンからなる愛知目標などが採択され、生物多様性はたんに生物の問題ではなく、人間の問題、ひいては経済の問題であることが確認され、企業を含めたあらゆる関係者が生物多様性の保全に向けて協働することの重要性が強調された。

企業人はCOP10の成果をどのように受け止めているのか、また、今後どのように活動を発展させることを考えているのだろうか。COP10の成果を踏まえて今後の課題と展望を、企業の生物多様性保全担当者を交えて議論する。これにより、生態学会関係者と企業の生物多様性保全活動担当者の間での、継続的な意見・情報交換を行い、協働の活性化をはかる。

※話題提供者には一部交渉中の方も含みます。話題および演者が交代になることもあります。どうぞ予めご了承ください。

COP10の成果と企業活動への影響
原口真（(株) インターリスク総研）

企業の自然資産を計り、増やすために
三輪隆（(株) 竹中工務店）

原材料を持続可能に獲得するために
杉本信幸（味の素（株））

企画集会　　3月8日　14:15-16:15　　会場　A

T01　ヒグマ出没の裏を読み解くー森とクマと人とー

企画者：間野 勉（道総研環境研セ），長坂晶子（道総研林業試）

ヒグマは北海道の豊かな自然環境を象徴する野生動物だが、本州におけるツキノワグマと同様、近年人間活動とのあつれきが社会問題となっている。特に、農地に出没し農作物を食害するクマは増加の一途をたどっており、効果的な防除法の確立・普及が喫緊の課題である。ヒグマの出没と被害の発生には様々な要因が関与していると予想され、要因解明のためには多角的なアプローチが必要と考えられる。こうした背景から、演者らは、北海道渡島半島を研究フィールドに、ヒグマの個体群動態、景観生態学、堅果類の豊凶といった各々の視点を持ち寄り、共同研究を実施してきた。本企画集会では、共同研究で取り上げた３つの視点：
①近年ヒグマの出没が増えているのは、生息数が増加しているからなのだろうか？②ヒグマの農地への出没にはどのような土地利用パターンが関与しているのか？③クマの出没にはブナ・ミズナラなど堅果類の豊凶が影響すると言われているが、ヒグマに関してはどうなのだろうか？　を軸に、この問題への知見の集積を図ると同時に、コメンテーターとして、佐藤喜和（日本大学）、森本淳子（北海道大学）両氏を予定、浦幌、知床半島といった北海道の他地域での研究例についても紹介してもらい、議論を深めていきたいと考えている。

T01-1　渡島半島地域におけるヒグマ捕獲数の長期データから見た行動の変化
間野 勉（道総研環境研セ）

T01-2　ヒグマの被害を受けやすい農地の立地条件：渡島半島森町の事例から
長坂晶子（道総研林業試）

T01-3　ブナ・ミズナラの豊凶とヒグマ出没との関係
今 博計（道総研林業試）

T01-4　ヒグマによる農作物への食害とその発生要因：富良野市および浦幌町における事例から
佐藤喜和（日大生物）

T01-5　有害駆除が発生するエコトーン：知床地域の事例
森本淳子（北大院農）

企画集会　　3月8日　14:15-16:15　　会場　B

T02　アジア・太平洋地域の植生の分布と分化 V ー熱帯山地への郷愁ー

企画者：村上雄秀（国際生態学セ），中村幸人（東京農大・地域環境科学）

日本の照葉樹林はブナ科とクスノキ科の常緑樹によって特徴づけられる．それに近縁の森林は東南アジアの熱帯山地にみられる。東南アジアの熱帯山地林はブナ科のカクミガシ属 Trigonobalanus のように古型属も産することから，日本などの中緯度地域の照葉樹林のルーツともみられている．また我々が東南アジアの山を登り，一定の標高に達してフタバガキ科の森林から常緑ブナ科森林に入ると，林内植生や林縁植生など日本の照葉樹林と共通性が高い景観に変化し，強い郷愁を感じるものである．

本集会は照葉樹林のような中緯度地域低地の常緑広葉樹林と熱帯山地の常緑広葉樹林の種組成的な類縁性を探り，熱帯林の標高に伴う組成変化をアフリカ熱帯を対照として考察する。熱帯山地の種組成研究を展開されている一線の研究者に講演をお願いし，「郷愁」の内容について認識を深めたい．

コメンテーター：武生雅明（東京農大・地域環境科学）・佐々木 寧（埼玉大学・工）

T02-1 キナバル山における山地林の組成と構造
相場慎一郎（鹿児島大・理）

T02-2 北タイ・雲南の山地林の特性－植生地理学的視点から－
原 正利（千葉県博・生態・環境研究）

T02-3 島嶼状に分布する東アフリカ山地林：垂直方向の種組成変化
古川拓哉（横浜国大・環境情報）

T02-4 マレーシア低地林と丘陵林の組成比較
目黒伸一（国際生態学セ）

企画集会 3月8日 14:15-16:15 会場 D

T03 Micro-evo-devo : 進化発生学と生態学の融合

企画者：石川 麻乃（北海道大・環境），森長 真一（東京大・総合文化）

生物は、彼らを取り巻く環境に適応し、多様な形態、行動、生理的形質を獲得してきた。では、これら適応的形質はどのような進化プロセスを経て獲得されるのか？これまで、発生生物学の観点から、進化の至近的メカニズムについて新たな知見を提供してきたのが進化発生学（Evo-devo）である。さらに近年の進化発生学は、生態学との癒合を果たし、異なる環境に適応した近縁な生物群（姉妹群や近縁集団）を比較することで、新たな適応的形質がどのように生じるのかという問いに答えようとしている。このような領域はマイクロ進化発生学(Micro-evo-devo)とも呼ばれ､多くはモデル生物とその近縁種を対象に行われてきた。しかし、分子生物学的・遺伝学的手法の発展に伴い、その研究対象は非モデル生物にも広がりつつある。また、形態に加えて生理や行動に関わる制御機構が比較され、より多様な適応進化の分子機構について新たな知見が提供されつつある。本集会では、近縁系統・集団間でこれら適応的形質の発生機構や制御ネットワークを比較し、適応進化の分子メカニズムに迫ろうと試みる若手研究者からその研究例を紹介し、今後の展望について議論する。

T03-1 裏しかない葉「単面葉」における平たい葉身の発生と進化
山口 貴大（基生研）

T03-2 ショウジョウバエの暗所環境への適応のメカニズム
布施 直之（京都大・理）

T03-3 アブラムシの繁殖多型とその喪失を担う内分泌基盤
石川 麻乃（北海道大・環境）

T03-4 ハクサンハタザオからイブキハタザオへの標高適応を担う生理機能と分子基盤
永野 聡一郎（東北大・生命）

T03-5 イトヨにおける内分泌シグナルの適応的進化
北野 潤（東北大・生命）

企画集会　　　　3月8日　14:15-16:15　　　　　会場　E

T04　社会的意思決定に必要なデータ収集と解析

企画者：岸本康誉（兵庫県大学），坂田宏志（兵庫県大学）

近年、生態学には実務的な応用科学としての成果を求められるようになってきた。保全や被害対策の実施において、政策や手法、予算の意思決定に寄与する具体的・現実的な成果が必要とされてきたと言うことである。

意思決定に寄与するためには、責任の所在を明確にし、研究結果の成果や限界を正確に評価しなくてはならない。また、研究成果をステークホルダーに、意思決定の課題が明確になるように、わかりやすく示すことも必要である。さらに、研究成果を提供する者の信頼性も、重要なポイントになる。そのためには、長期的かつ大規模なデータ収集を体系的に行う必要がある場合もあれば、迅速に最低限の材料を挙げることを求められる場合もある。

この企画集会では、生態学に対する社会的な期待に応えるために、どのようなデータをいかに収集していくか、どのような解析手法が適切なのか、基本的な考え方についての議論と実例を交えて検討していきたい。

趣旨説明
コメンテーター：五箇公一（国立環境研究所）

T04-1　獣害対策を仮説・妄信から脱却させ，科学的根拠に基づいた意志決定に導くための解析例
＊本田剛（山梨県総合農業技術センター）

T04-2　外来生物防除のための時空間的な意思決定支援ツール～アカギとマングースを例に～
＊深澤圭太（自然環境研究センター），阿部愼太郎（環境省那覇自然環境事務所），小池文人（横浜国立大学），田中信行（森林総合研究所），大津佳代（日本森林技術協会）

T04-3　シカ・イノシシ保護管理のための意思決定支援システムの構築
＊岸本康誉，坂田宏志（兵庫県大学）

T04-4　水産資源管理におけるデータ収集の重要性とモデル解析の役割～マグロ管理の意思決定を例に～
＊黒田啓行，高橋紀夫，境磨・藤岡紘，伊藤智幸（水産総合研究センター 遠洋水産研究所）

企画集会　　　　3月8日　14:15-16:15　　　　　会場　G

T05　ニッチはどこへゆくのか：繁殖干渉による群集パターンの統一的説明

企画者：鈴木紀之（京大・農・昆虫生態），京極大助（京大・農・昆虫生態）

種間競争はニッチや分布を説明するための中心概念とされてきたが、資源をめぐる競争はめったに検出されない。しかし、中立説が主張するように、本当に種間相互作用は群集パターンを説明する上で無力なのだろうか？　繁殖干渉は配偶をめぐる負の種間相互作用を指し、個体数の多いほうの種がますます有利になる正のフィードバックを生み出す。この性質により、資源競争では実現しにくい急速な競争排除も容易にもたらされると予測されている。また、繁殖干渉は機能群や分類群を問わず、近縁種間には普遍的に存在しているはずである。したがって、繁殖干渉の枠組みによって群集パターンを種間相互作用に即しながら統一的に理解できる可能性がある。本集会ではまず、資源競争との個体群生態学的特性の比較、生態的形質置換への影響といった繁殖干渉の理論的な背景を示す。次に、実験動物、被子植物、捕食者など様々な系における生物地理、ニッチ幅、生活史形質の進化を繁殖干渉の観点から示した実証研究を紹介する。以上により、繁殖干渉の枠組みの妥当性と一般性を評価したい。

T05-1　イントロ：群集生態学の歴史と繁殖干渉
鈴木紀之（京大・農・昆虫生態）

T05-2　繁殖干渉によって生じるアリー効果
＊京極大助（京大・農・昆虫生態），西田隆義（滋賀県立大・環境生態）

T05-3　生態的形質置換の理論研究
小沼順二（マンチェスター大・生命）

T05-4　石垣に登ったイヌノフグリ：外来種の繁殖干渉による在来草本の形質分化・置換
高倉耕一（大阪市環科研）

T05-5　捕食性テントウムシにおける寄主特殊化の進化
＊鈴木紀之（京大・農・昆虫生態），大澤直哉（京大・農・森林生態），西田隆義（滋賀県立大・環境生態）501

T05-6　同所的オオオサムシ亜属種間の体サイズ差の意味：資源分割より優先される生殖隔離
＊奥崎穣（京大•理•動物生態），高見泰興（神大•人間発達環境），曽田貞滋（京大•理•動物生態）

T05-7　総括
西田隆義（滋賀県立大・環境生態）

企画集会　　　3月8日　14:15-16:15　　　　会場　I

T06　ユネスコ MAB（人間と生物圏）計画 −日本発ユネスコ・エコパーク制度の構築に向けて

企画者：酒井暁子（横国大・環境情報／ MAB 計画委員会事務局），松田裕之（横国大・環境情報／ MAB 計画委員会委員長）

ユネスコは、人類の存続と持続可能な発展のために、ユネスコ・エコパーク（生物圏保存地域）の指定と活用を通じ、原生的な自然環境の保護と地域社会の福利の向上の両立を図る国際事業、Man and the Biosphere（人間と生物圏）計画を世界規模で進めている。MAB 計画は、生物多様性と生態系サービスの維持・向上、および世界の文化的多様性を維持する上で、極めて優れた枠組みであると国際的に認知されている。

ユネスコ・エコパークの自然保全制度上の意義付けや活用方法については、各国の状況に合わせて柔軟に設定することが認められている。世界の事例に学びつつ、しかし日本には先行する保全制度や関連活動が数多く存在するので、それらを俯瞰した上で、また独自の文化的背景を踏まえ、全体として効果的に機能するような立ち位置を取ることが重要であろう。本企画集会を通じ、MAB 計画が国全体の環境保全戦略の重要な一部となることを目指したい。

下記の講演に加え、パネル討論【日本に適したユネスコ・エコパークのあり方】を行う。

司会：松田裕之、パネリスト：湯本貴和、朱宮丈晴、増沢武弘、松井淳
総合司会　鈴木邦雄（横浜国大／日本 MAB 国内委員会主査）

T06-1　MAB 計画の概要および本集会の趣旨説明
若松伸彦（横国大・環境情報）

T06-2　ユネスコ・エコパークの世界での活用事例
池田史枝（横国大・環境情報），＊比嘉基紀（森林総研）

T06-3　ドイツにおけるエコパークと文化的景観の保護
中越信和（広島大・国際協力）

T06-4　我が国の自然環境保全の取組と MAB/BR（ユネスコ・エコパーク）
岡野隆宏（鹿児島大）

T06-5　ユネスコ・エコパーク新規登録に向けての現状と課題
酒井暁子（横国大・環境情報）

企画集会　　3 月 8 日　14:15-16:15　　会場　J

T07　藻類の群集構造と進化動態～理論と実証～

企画者：水野晃子（総研大），吉山浩平（東大・大気海洋研），田邊優貴子（極地研）

生物間相互作用の中で多様な形質が進化・維持されるメカニズムや、群集動態に対する形質の多様性の影響を明らかにすることは、生物群集の構造・動態におけるパターンとメカニズムの理解を目指す群集生態学の新たな道を拓く上で、重要な役割を果たすと考えられる。藻類には多様な形態・生活史を持つ分類群が含まれており、これらのテーマを深く掘り下げるためには適した対象生物である。また、藻類は地球上の一次生産の約 50% を占め、生態系の物質循環を駆動する重要な構成要素である。そのため、藻類の群集構造やその空間パターン形成のメカニズムを探ることは、水圏生態系を理解する上で欠かせない研究テーマである。このことから、基礎的な群集生態学に加えて、進化動態から群集構造、生態系機能までを包括的に理解しようと試みる際には、藻類は理想的なモデル生物であると言えるだろう。

本集会では、理論的手法と実証的手法を組み合わせて、様々な環境における藻類の群集構造と進化動態に対する資源競争や捕食者、物理的環境などの影響を議論する。まず吉山が、植物プランクトンによる光と栄養塩を巡る競争に関する理論を紹介する。次に田邊が南極の湖底藻類群集の鉛直的な色彩パターンとそれを決定する環境要因についての研究を紹介し、水野がそのパターンに対する光阻害の影響をモデル研究で議論する。最後に山道氏が、藻類の対捕食者防御の可塑性と進化が群集に与える影響について紹介する。以上の発表を受けて、藻類を材料に群集構造の創出と進化動態に対して新しい知見をもたらすことを目指す。

T07-1　植物プランクトン群集における鉛直分布構造
＊吉山浩平（東大・大気海洋研）

T07-2　南極の湖底藻類群集における鉛直分布構造
＊田邊優貴子（極地研）

T07-3　南極の湖底藻類マットにおける鉛直分布パターンモデル
＊水野晃子，佐々木顕（総研大・学融合）

T07-4　捕食者が駆動する藻類群集の可塑性と進化
＊山道真人（総研大・生命共生体進化学）

企画集会　　3 月 9 日　9:30-11:30　　会場　C

T08　琵琶湖淀川水系における外来種管理：モデルケースの提示と今後の課題

企画者：岩崎敬二（奈良大・教養），中井克樹（琵琶湖博物館），村上興正（京都精華大学）

多数の固有水生生物種を育む琵琶湖・淀川水系には、外来生物法で特定外来生物に指定された種を含め数

多くの侵略的外来種が侵入し、在来種や群集への大きな脅威となっている。そのため、琵琶湖･淀川水系では、様々な分類群の特定外来生物に対して、滋賀県をはじめとする行政と研究者、市民団体が参画した管理や駆除が行なわれている。その中には、日本の中では先進的な取り組みや、今後の外来水生生物管理のモデルケースとなりうるものも多い。
そこで、この企画集会では、そういった取り組みを紹介し、今後の課題について議論して、日本での外来水生生物管理の一層望ましいあり方を模索していきたい。なお、この集会は、日本生態学会近畿地区会自然保護専門委員会が主催し、その活動の一環として開催される。

総合討論の司会：岩崎敬二

T08-1　**総論および淀川の外来生物の現状と課題**
村上興正（京都精華大学）

T08-2　**琵琶湖水系における外来魚類の現状と課題**
中井克樹（滋賀県立琵琶湖博物館）

T08-3　**琵琶湖淀川水系における外来水草の現状と課題**
野間直彦（滋賀県立大・環境科学）

T08-4　**滋賀県による外来生物に関する取り組み：条例施行と現状調査**
高倉猛（滋賀県自然環境保全課），＊中井克樹（滋賀県立琵琶湖博物館）

企画集会　　3 月 9 日　9:30-11:30　　会場　D

T09　適応進化における形質間の機能的・遺伝的つながりの意義

企画者：原野智広（九大・理）

生物の形質は、個々に独立して進化するわけではない。複数の形質が組み合わさって機能する場合、これらの形質は相関して進化することによって適応的になる。ある形質の進化が生物の生活条件を変化させる場合、その変化が他形質の適応進化の引き金になる。実際、生物にはシンドロームと呼ばれる相関した形質が見られたり、生態的形質の異なる集団では対応した諸形質の違いが観察されたりする。また、異なる形質が共通の遺伝的基礎を持つ場合、形質間に遺伝相関が存在し、1 つの形質が進化すれば他の形質も進化する。その結果、非適応的な形質が進化することもあるため、遺伝相関は適応進化の障害にもなる。このことは、有用生物の遺伝的改良においても重要である。
本企画集会では、さまざまな生物の形質間の相関について遺伝学および進化生態学の実証研究を紹介する。それらの話題の提供を通して、生物の適応進化を形作る上で形質間の相関がどのような意義を持つのかを議論したい。

T09-1　**遺伝的基盤を有する行動シンドローム： 擬死行動と歩行活動性の遺伝相関**
中山慧（岡山大・進化生態）

T09-2　**天敵昆虫の遺伝的改良に伴う行動および生活史形質の変化**
＊世古智一, 三浦一芸（近中四農研），中山慧，安藤彰太郎，宮竹貴久（岡山大・進化生態）

T09-3　**キスゲ属における送粉シンドロームに関する花形質の遺伝的基礎**
＊新田梢（九大・理），廣田峻（九大・理），安元暁子（京大・生態研センター，チューリッヒ大・理），矢原徹一（九大・理）

T09-4　資源獲得競争とオス繁殖投資との相関関係
香月雅子（岡山大・進化生態）

T09-5　暴かれた遺伝子座内性的対立：雌雄間の遺伝相関が適応進化を妨げる
原野智広（九大・理）

企画集会　　　　　3 月 9 日　9:30-11:30　　　　　　会場　E

T10　博物館の生態学 7　－生物多様性保全のシンクタンクを目指して－

企画者：井上雅仁（島根県立三瓶自然館），橋本佳延（兵庫県立人と自然の博物館）

自然環境や生物多様性の保全に対する民意が成熟しつつある今日，様々な課題や事業に生態学の研究者が携わる場面は増える一方である．研究者に期待される内容は，野生生物の保護や外来種対策，地域の自然環境に関する啓発などの課題解決から，レッドリストの作成や生物多様性地域戦略の策定などの政策提案まで様々である．生物多様性基本法による地域戦略策定の努力義務，COP10 の開催などの後押しもあり，これらシンクタンク事業の展開に生態学研究者の役割は重要度を増すことが予測される．自治体や市民から，大学，研究機関，博物館などに寄せられる要望には，各機関に所属する個々の研究者が対応することになるが，こうしたシンクタンクとしての活動を機関の重要な事業として位置付けたり，あるいは組織化したりする動きが博物館にみられる．本集会では，博物館をはじめとして，生態学の研究者が携わったシンクタンク事業を紹介しながら，研究者や研究機関が社会にもたらすことのできた効果について検証したい．その上で，今後，シンクタンクとして自治体や企業，市民に対峙するときの望ましい関係性や望まれるスキルについて考察したい．

コメンテータ：梶　光一（東京農工大学）

T10-1　趣旨説明－博物館に舞い込む生物多様性保全の相談ごと－
井上雅仁（島根県立三瓶自然館）

T10-2　社会と生態学の接点に身を置く博物館のシンクタンク機能－人と自然の博物館の事例－
橋本佳延（兵庫県立人と自然の博物館）

T10-3　千葉県の生物多様性保全関連施策における千葉県生物多様性センターの役割－とくにイノシシ，シカ，サルなどの保護管理施策を中心に－
浅田正彦（千葉県生物多様性センター／千葉県立中央博物館）

T10-4　生物多様性関連保全施策において地域の小規模博物館・研究者に期待される役割－北海道における現状と可能性－
渡辺 修（さっぽろ自然調査館）

企画集会　　　　　3 月 10 日　9:30-11:30　　　　　　会場　C

T11　生態学者のためのゲノミクスアプローチ～理論、手法から実証まで～

企画者：手塚あゆみ（東北大・院・生命科学），山道真人（総研大・生命共生体進化学）

近年の分子遺伝学的手法の発展と、集団遺伝学的理論・バイオインフォマティクスの発達は、生物学全体に大きな影響を与えている。生態学も例外ではなく、ゲノム情報を活用して生態学的現象に迫る研究が数多く行われ、それらは「エコゲノミクス」と呼ばれている。これらの研究により、遺伝情報を活用することで

進化動態や個体群動態、更には群集構造への理解が深まりうることが示されており、今後ゲノミクスアプローチの重要性は更に増していくだろう。その一方で、一般の生態学者がゲノミクスアプローチをとる際は手法の選択や扱いに戸惑うことも多く、依然として敷居が高いのが現状である。

本集会では、分子生物学のモデル生物だけでなく、非モデル生物も対象としたゲノミクスアプローチを、理論・手法に加え実証例までを通して紹介し、エコゲノミクスがどのような生態学的な問いに応えうるのかを提示することで、ゲノミクスアプローチがより浸透することを目指したい。

はじめに生態学会誌で「始めよう！エコゲノミクス」を連載している山道が集団遺伝学のコアレセント理論について解説を行う。次に、牧野がバイオインフォマティクスにより、非モデル生物でも可能なマーカー作成を説明する。その後、実証例として手塚と奥山がそれぞれ、ゲノミクスアプローチにより明らかにした、適応形質の原因遺伝子やその規定する形質の進化過程などについて紹介する。最後に、会場からの質問・意見も交えて、今後のエコゲノミクスについて議論したい。

T11-1　集団遺伝学と生態学
山道真人（総研大）

T11-2　比較ゲノム解析による網羅的プライマーデザイン
牧野能士（東北大）

T11-3　グッピー色覚遺伝子にかかる選択の検出
＊手塚あゆみ（東北大），笠木聡（東大），河村正二（東大），Cock van Oosterhout（Univ. Hull），河田雅圭（東北大）

T11-4　形質、遺伝子、適応をつなぐ–新しい多様性生物学への挑戦–
奥山雄大（科博・植物）

企画集会　　3 月 10 日　9:30-11:30　　会場　D

T12　生物相互作用が引き起こす適応ダイナミクス

企画者：舞木昭彦（九大・理），立木佑弥（九大・理）

生物間（同種間、異種間）相互作用のなかで生じる表現型の進化を理解する数理的手法として量的遺伝モデルやアダプティブダイナミクスが近年発展してきている。これらのモデルの共通点は、遺伝学的なプロセスは単純化した上で、出生・死亡に影響する競争や被食捕食相互作用などの生態学的プロセスをモデル化し進化を理解しようとする点にある。本企画集会では、これらの理論を用いた最新の研究を紹介するとともに、モデルの適用範囲や今後の展開を議論したい。

T12-1　植物プランクトン細胞サイズの進化適応動態
吉山浩平（東大）

T12-2　樹木のマスティング進化における、進化的ジャンプ、進化的突破
立木佑弥（九大・理）

T12-3　多次元形質空間における進化的分岐
伊藤洋（国環研）

T12-4　敵対相互作用における適応ダイナミクス
舞木昭彦（九大・理）

企画集会　　　　　3月10日　9:30-11:30　　　　　　会場　E

T13　日本の海の生物多様性保全のために学会ができること

企画者：安渓 遊地（山口県大・国際）

日本列島弧周辺の海は、世界で最高レベルの生物多様性を育んでいる。この生物多様性の高さの背景には、寒帯から熱帯までの海域の存在、サンゴ礁生態系の存在、複雑な海岸線とそれが作る多様な海岸環境、海岸から日本海溝に至る大きな深度勾配がある。しかし、海岸近くに集中する人間活動によって、海、特に自然海岸は大きく変貌し、その生物多様性は大きな危機にさらされている。瀬戸内海への上関原子力発電所建設計画や沖縄のジュゴン生息地の海草藻場埋立計画などは、差し迫った緊急の問題である。さらに、生物多様性条約国締約国会議、諫早湾の潮受堤防開門の高裁判決、あらたな危機がせまる四万十川の河口域、国際的な注目が集まるボーダーの海の自然など、次々に新たな事態が進行中である。

日本の海の生態系と生物多様性を保全するための日本生態学会の取組と、それに歩調をあわせて立ち上がった日本ベントス学会・日本鳥学会・軟体動物多様性学会・日本地理学会等の自然保護担当者や気鋭のジャーナリストによる最新報告。

日本鳥学会鳥類保護委員会からのコメントを予定している。

T13-1　学会の要望書とそのききめの検証
安渓遊地（山口県大・国際）

T13-2　日本列島弧の海岸の生物多様性の特徴と現状
加藤 真（京大院・人間 環境）

T13-3　諫早湾干拓と原発―基礎生物学から見えること
佐藤正典（鹿児島大・理）

T13-4　砂州消失問題から見える四万十川と土佐湾の生物多様性の危機
伊谷 行（高知大・教）

T13-5　北方四島―ボーダーの海をどう守るか
本間浩昭（毎日新聞・根室支局）

企画集会　　　　　3月10日　9:30-11:30　　　　　　会場　I

T14　景観変化と生物多様性の時間的ダイナミクス

企画者：小柳知代（農環研），富松裕（東北大・生命科学）

現在見られる生物多様性のパターンは、現在だけでなく、過去の景観構造を反映していることが少なくない。これは、種の絶滅や定着が、景観や環境の変化に対して遅れて生じることで、多様性が一時的に過剰になる、または不足するために生じる。このような種の応答のタイムラグ（″extinction debt″や″colonization credit″などと呼ばれる）を考慮することは、効果的な保全･管理策を講じる上で極めて重要である。例えば、多くの種で絶滅までのタイムラグが大きいとき、今後失われる生物多様性の減少量を過小評価してしまう可能性がある。また、生息地を復元する際、分散能力の低い種が定着し種多様性が回復するまでには、数百年を要する場合もある。本集会では、異なる歴史的背景を持つ地域において、植物、哺乳類、陸生貝類、鳥類の幅広い分類群を対象として行われた研究例を通じて、変動環境下における生物多様性の時間的ダイナミクスを明らかにする重要性について議論したい。

T14-1　生物多様性の時間的ダイナミクスをめぐる概念と保全・管理への示唆
富松裕（東北大・生命科学）・小柳知代（農環研）

T14-2　関東平野における草原生植物の種多様性パターンと景観の履歴
小柳知代・楠本良延・山本勝利（農環研）・大久保悟・武内和彦（東大院農）

T14-3　哺乳類の分布パターンと景観の履歴
斎藤昌幸・小泉恵佑（横浜国大・環境情報）

T14-4　小笠原諸島における陸生貝類の種多様性パターンと景観の履歴
千葉聡（東北大・生命科学）

T14-5　利根川下流域の水田地帯におけるシギ・チドリ類の春季の分布パターンと景観の履歴
西川雄太（東大・生物多様性）・木本祥太（東大・生態環境調査）・天野達也・D.S. スプレイグ（農環研）・加藤和弘（東大・生態環境調査）・藤田剛・樋口広芳（東大・生物多様性）

企画集会　　3 月 11 日　14:15-16:15　　会場　A

T15　もしも生態学者が市長になったら？　ー経済学から見た生態系サービスと生態学から見た生態系管理ー

企画者：大野（鈴木）ゆかり（東北大・生命科学），木村幹子（東北大・生命科学）

生物多様性を保全するためには、生態学の知識はもちろん必要ですが、お金や行政上の権限が必要になります。そこで、もしも生態学者が市長になったら、どうなるでしょうか？はたして、生物多様性の保全ができるでしょうか？

その答えを出すべく、本企画集会では、生態学者が政策で主導権を発揮できるのか、考えていきたいと思います。生物多様性の保全対策を進めるためには、どこまで保全・改善し、どのように実行するか、決定することが重要です。どこまで保全・改善するのかを測る評価方法として有効なのが、経済学を使った生態系サービスの評価です。COP10 でも、TEEB（The Economics of Ecosystems and Biodiversity）報告書の生物多様性の経済価値分析が注目を集めました。そこで経済学者の中嶌さんと野原さんをお招きし、生態学者に馴染みのない、生態系サービスと経済学の関係について、発表をしていただきます。そして、どのように実行するのかについては、外来種の最適管理を扱う横溝さんと自然再生を扱う三橋さんをお招きし、生態系管理についてお話していただきます。三橋さんには、実際に TEEB 報告書での事例から、現在の行政構造のなかで実現可能な施策についても紹介していただきます。これらの講演は、あなたが市長や政策スタッフとなった時、またならなくとも、あなたの親戚や一般の方に生態系管理について説明する時に、きっと役立つはずです。

T15-1　環境経済学から見た生物多様性：マクロ経済学によるアプローチ
中嶌一憲（兵庫県立大・環境人間学）

T15-2　環境経済学から見た生物多様性：ミクロ経済学によるアプローチ
野原克仁（東北大・生命科学）

T15-3　外来植物の最適管理戦略：駆除にどれだけ投資すれば良いのか？
横溝裕行（国立環境研究所）

T15-4　基礎自治体が実現可能な生態系管理のフレームワーク
三橋弘宗（兵庫県立大・自然研）

企画集会　　　　　3 月 11 日　14:15-16:15　　　　　　会場　B

T16　外来生物法の見直しと将来

企画者：五箇公一（国立環境研究所），山田文雄（森林総合研究所），村上興正（京都精華大）

名古屋市で 2010 年 10 月に開催された「生物多様性条約第 10 回締約国会議（COP10）」の議決「愛知ターゲット（2020 年までの目標）」において、外来生物対策では「侵入外来種と進入経路の特定、根絶、侵入防止」が目標になった。早期に外来生物法（2005 年）を施行し取り組みを始めたわが国は高く評価されたが、より効果的な取り組みが求められている。わが国の外来生物法では、生態系に被害を及ぼす海外起源の侵略的外来生物の中から「特定外来生物」を指定し、飼育･栽培、運搬･保管、輸入、野外遺棄や植栽、譲渡を禁止し、必要な場合は防除が実施される。現在「特定外来生物」として 97 種類（うち国内定着種は 48 種類）が指定されている。一般に、外来種対策では、予防的措置、侵入初期対策、防除対策（実行可能性検証、個体数制御、根絶）、防除の効果検証などの取り組みが、外来生物の侵入や定着の状況に応じて実施される。本集会では、外来生物法施行後 5 年を振り返り、防除が実施されている各生物群の実践事例から課題抽出を行い、外来生物法および法律運用上の問題点について議論し、見直すべき点や具体的提案をワークショップ形式でまとめる。

T16-1　外来生物法の見直しの論点
村上興正（京都精華大）

T16-2　外来哺乳類の根絶に向けての問題
山田文雄（森林総合研究所）

T16-3　外来哺乳類対策の展開と地域協働
池田透（北海道大学）

T16-4　外来爬虫類・両生類の防除実態と課題
戸田光彦（自然環境研究センター）

T16-5　外来魚類対策からみるモデル事業と要注意外来生物
中井克樹（琵琶湖博物館）

T16-6　外来淡水二枚貝類の拡大と防除
伊藤健二（農業環境技術研究所）

T16-7　外来昆虫類の防除対策の見直し
井上真紀（国立環境研究所）

T16-8　非意図的外来生物の問題
五箇公一（国立環境研究所）

T16-9　外来生物関連法の見直しと社会的合意のあり方
草刈秀紀（WWF ジャパン）

企画集会　　　　　3 月 11 日　14:15-16:15　　　　　　会場　C

T17　迅速な適応性（第 3 回）ー細胞から群集まで

企画者:嶋田正和（東大･総合文化･広域），三浦 徹（北大･環境），岸田 治（北大･フィールド科学センター）

ここ 2 年ほどで、"rapid adaptation"（迅速な適応性）や "genetic accommodation"（遺伝的同化）等のキーワードをつけた論文や講演が急速に多くなって来た。表現型可塑性をベースとする「適応」の研究は、いまやエピゲノム科学の分子生物学から、形態形成のエピジェネティクス研究、さらには生物間相互作用から生物群集に至る進化生態学まで、幅広く研究者の興味を集めている。

かつては、適応進化を考えるには集団遺伝学に基づく突然変異－自然選択の古典学説（適応度の定式化）が主要な理論的枠組みで、これは数十世代から数百世代の時間スケールのモデルである。しかし、いまや表現系可塑性と遺伝的同化のモデルは、1950 年代の Waddington に遡らなくても、21 世紀の知見で新たな枠組みを提示しつつある（West-Eberhard 2003, Kirschner & Gerhart 2005)。今後は、遺伝子型レベルの適応度地形と表現型レベルの適応度地形のズレを解析する理論が進展するだろう。

今回は、「細胞から群集まで」と副題つけ、生物間相互作用から群集までを網羅して、講演を企画した。最後に、新しい進化生態学である「迅速な適応性」の新展開で総合討論したい。

総合討論
コメンテーター：　岸田 治（北大・フィールド科学センター）

T17-1　はじめに：迅速な適応性と遺伝的同化－細胞から群集まで
嶋田正和（東大・総合文化・広域）

T17-2　社会性アブラムシにおけるコロニー防衛の表現型可塑性：多様な兵隊の進化と起源
＊植松圭吾，柴尾晴信（東大・総合文化）

T17-3　在来寄生蜂群集における侵入種オオモンシロチョウへの迅速な適応
田中晋吾（北大・昆虫体系）

T17-4　ワーカーの隠された攻撃性－カースト組成に依存した可塑的な防衛行動－
＊石川由希，田部 慧，三浦 徹（北大院・環境）

企画集会　　　　　3 月 11 日　14:15-16:15　　　　　　会場　D

T18　そんなに閾（しきい）は高くない！：生態系管理における生態学的閾値の応用と課題

企画者：岩崎雄一，古川拓哉

生態系管理を効果的に実施するには，着目する環境変動や撹乱に対する生物・生態系の応答を把握することが必要である。これらの研究では，しばしば閾値応答が観察されることがある（例：ある撹乱強度まで着目する生態的パラメータがほとんど変化せず，その後急激に変化する）。この閾値は生態学的閾値と呼ばれ，その同定は人にとって望ましくない変化（例：生物多様性や生態系機能の低下）を未然に防ぐ上で，またそのような変化が起こった生態系の修復を実施する上でも非常に有益な情報となりうる。

他方,「そもそも閾値なんてあるんかいな？」という素朴な疑問は常についてまわる。着目する要因以外の影響により，見かけの閾値応答が観察された場合，その閾値を管理に利用することは予防的とはいえないだろう。また，湖沼や森林，草地などにおいて，人為的な影響による生態系の急激かつ不可逆な変化（レジームシフト）が起こることが指摘されており，観測された閾値が可逆あるいは不可逆的な変化をもたらすものかを見極めることも有用である。本集会では,閾値応答が観測された事例研究(理論研究を含む)を紹介し,研究及び実際の管理に用いる上での閾値の解釈及び注意事項について議論したい。

コメンテータ：伊藤洋（国環研），富松裕（東北大）

T18-1　**趣旨説明：閾値って生態系管理に役立つの？**
＊岩崎雄一（東工大・理工），古川拓哉（横浜国大・環境情報），森章（横浜国大・環境情報）

T18-2　**水圏で閾値な話：数理モデルによる生態学的閾値の導出**
瀬戸繭美

T18-3　**森林で閾値な話：強度の薪利用が引き起こす植生の閾値的変化とその管理**
＊古川拓哉（横浜国大・環境情報），藤原一繪（横浜市大・生命ナノ），Samuel K. Kiboi, Patrick B. Chalo Mutiso（University of Nairobi）

T18-4　**草原で閾値な話：生態学的閾値の定義とその応用および今後の展望**
佐々木雄大（東北大・院・生命）

企画集会　3 月 11 日　14:15-16:15　会場　E

T19　群集生態学と生物地理学をつなぐメソスケールアプローチ

企画者：平尾聡秀（東大・秩父演習林），久保田康裕（琉球大・理），村上正志（千葉大・理）

群集生態学と生物地理学はそれぞれ異なるアプローチで群集形成（community assembly）の解明に取り組んできた。群集生態学では、局所スケールで現れる群集構造・動態のパターンをニッチ分化と分散制限で説明するのに対し、生物地理学では、マクロスケールで生じる群集構造・動態のパターンを進化履歴と地理的イベントに着目して説明する。しかし、実際には対象となる群集形成のスケールが、群集生態学と生物地理学が扱うスケールの中間に位置するメソスケールである場合も多い。メソスケールの群集形成を解明するには、群集生態学的プロセスと生物地理学的プロセスの両方を考慮する必要があり、それらのプロセスをつなぐメソスケールアプローチが求められる。
日本列島における種多様性の地理的分布は、過去の地理的イベントの影響を強く受けており、局所スケールのプロセス（ニッチ分化・分散制限）とマクロスケールのプロセス（進化履歴・地理的イベント）の両方が強く作用していると考えられる。そのため、日本列島における群集形成を理解するにはメソスケールアプローチが必要である。本企画集会では、群集生態学と生物地理学をつなぐという視点から、日本列島の群集形成に関する話題を提供する。話題提供者はそれぞれ異なる切り口によって、レビューを交えつつ自らの研究例を紹介する。そして、議論を通じて、この研究領域における問題点や論点を整理し、今後の展望を探りたい。

T19-1　**種多様性の地理的分布に対する歴史効果の影響**
久保田康裕（琉球大・理）

T19-2　**種多様性の地理的パターンとニッチ保守性**
平尾聡秀（東大・秩父演習林）

T19-3　**系統を考慮した生態ニッチモデリングによる群集保全**
村上正志（千葉大・理）

企画集会　　　　3 月 8 日　14:15-16:15　　　　　会場　C

T20　Facilitationを理解／応用するための理論基盤の整備にむけて

企画者：瀧本 岳（東邦大）

競争や捕食といった生物間相互作用と比べ、facilitation（促進、生物間の正の相互作用）への注目はずっと新しい。理論研究より実証研究が先行しており、理論研究の発展が必要とされている。Facilitation の重要性を予測する仮説に SGH（stress gradient hypothesis）がある。これは、ストレスの低い生息環境では競争が重要な相互作用となるが、ストレスの高い環境では facilitation が重要になると予測するものである。しかし、この仮説は十分に理論化されていない。Facilitation はまた保全・修復生態学の重要概念／道具として期待されるが、実際の応用はこれからである。本集会では、先行研究の紹介に加え、facilitation の理解／応用を進めるための理論基盤の整備にむけた議論を行いたい。本集会の話題提供者は、岩礁潮間帯や草原、湿原などのフィールドで、基礎生態学的な立場から、あるいは保全・修復生態学的な応用を見すえて、facilitation 研究を行ってきた。多様なバックグラウンドを持つ実証研究者の意見交流を通じて、有用な facilitation 理論の整備にむけた研究の方向性を見いだしたい。

T20-1　撹乱跡地の植物初期定着におけるfacilitation：泥炭採掘跡地における谷地坊主の例
小山明日香（北大・環境科学院）

T20-2　草原のfacilitation/competitionをswitchする要因を探る
吉原 佑（東北大・農）

T20-3　Stress gradient hypothesis（SGH）の成り立ちと今後の展開：SGHに未来はあるか！？
河井 崇（阿南高専・地域連携テクノセ）

T20-4　保全上重要な湖岸湿原における種・植生レベルの促進効果と伝統的植生管理
＊王喆，西廣淳，鷲谷いづみ（東大・院・農・保全生態）

T20-5　地域種数－局所種数パターンとfacilitation
瀧本 岳（東邦大・理）

企画集会　　　　3 月 11 日　14:15-16:15　　　　　会場　G

T21　種間相互作用の島嶼生物地理

企画者：杉浦真治（森林総研）

本企画集会では、生物間相互作用の視点から島嶼生物地理学に迫ることを目的とする。従来は、種間の相互作用をあまり考慮せず、特定グループの種数ー面積関係や、個々の種の系統地理などが研究されてきた。しかし、他種との相互作用なしに生息する種は存在しない。相互作用する複数種を同時に扱うことで、島嶼生物地理学の新たな展望が開けるだろう。

最近になって、種間相互作用を考慮した種数–面積関係や、共生関係を結ぶ複数種の系統地理に関する研究が発表されつつある。本企画集会では、上記の視点から、島嶼生態系で種間相互作用を扱っている 4 人の研究者による以下の講演を予定している。そのフィールドは、南西諸島、伊豆諸島、小笠原諸島、ニューカレドニア、フレンチポリネシアにまでおよぶ。さらに、捕食・被食系、送粉共生系、防衛共生系といった多様な相互作用系が登場する。

T21-1　企画の趣旨説明
杉浦真治（森林総研）

T21-2　絶対送粉共生系はいかに海を渡ったか−コミカンソウ科−ハナホソガ属共生系の島嶼生物地理−
川北篤（京都大）

T21-3　伊豆諸島における捕食者−被食者系の構築機序と形質進化−分岐年代の較正に基づく系統地理学的考察−
栗山武夫（東邦大）

T21-4　島の生物地理学でカタツムリとカタツムリ食ヘビの共進化過程を読み解く
細将貴（東北大）

T21-5　種間相互作用と島面積の関係−小笠原諸島の花外蜜腺を介したアリと植物の共生系ネットワーク−
杉浦真治（森林総研）

企画集会　3 月 11 日　14:15-16-15　会場　I

T22　生態系を時間軸でとらえる：炭素循環における遅れ現象

企画者：陀安一郎（京大・生態研セ），杉本敦子（北大・地球環境）

陸上生態系の炭素循環は植物による炭素固定に始まる。固定された炭素は植物バイオマスとして蓄積された後、リターとして土壌生態系に入る。巨大なプールである土壌炭素は、呼吸によって大気に戻るほか、分解系生物に利用される。さらに、炭素の一部は河川を通って海域へと運ばれる。炭素循環のそれぞれの過程における時間的遅れ（タイムラグ）を明らかにすることは、地球環境変化に対する生態系の応答の解明に不可欠である。また近年、時間的遅れを持った炭素の利用は生態系の食物網構造にも見られることが明らかになってきた。

本企画集会では、安定同位体比や放射性炭素 14 などの手法を利用して炭素動態をトレースし、生態系が生み出す様々な時間的遅れと、物質循環を支える生物間の相互作用を解明する方法について議論する。

T22-1　時間軸からみる生態系の構造
＊陀安一郎（京大・生態研セ），杉本敦子（北大・地球環境）

T22-2　樹木の種子生産に貯蔵炭素は必要か？−放射性炭素分析法を用いた検証研究−
＊市栄智明，吉田昌平（高知大・農），五十嵐秀一（愛媛大院・連合農），田中憲蔵，正木 隆（森林総研），陀安一郎（京大・生態研セ）

T22-3　年輪炭素同位体比を利用した炭素循環変動解析
鄭 峻介（北大・地球環境）

T22-4　Delay of ecosystem response through nitrogen cycling in Siberian Taiga
*Popova A., Sugimoto A., Tei Sh.（Hokkaido Univ.），Tokuchi, N.（Kyoto Univ.），Maximov, T.C.（IBPC SB RAS）

T22-5　植生遷移過程における食物網炭素起源の変化
原口岳（京大・生態研セ）

T22-6　陸上生態系と河川有機物動態
山下洋平（北大・地球環境）

T22-7　千年滞留した炭素が現在の河川食物網を支える〜 C-14 天然存在比による証明〜
石川尚人（京大・生態研セ）

企画集会　　　　3 月 11 日　14:15-16:15　　　　　会場　J

T23　里地における水田普通種減少の実態と謎解き

企画者：日鷹一雅（愛媛大・農）

近年、里地の生物多様性の保全・再生が推進されてきたが、その保全・再生対象は多くの場合，RDB に掲載された希少種や絶滅が心配される種である。RDB の目的からして、当然の帰結であると言える。しかしながら、RDB 掲載種偏重の裏で、非 RDB の健全であるはずの普通種の個体群が減少する現象を見逃してはならない。「RDB 種を保全・再生すれば、普通種は保全できるはずである」という論理は帰納的・演繹的な検証がいまだ不十分であり，感覚的なものに過ぎないであろう。本集会では、水田周りの里地里山の動植物の現状に焦点をあて、普通種といえども各地で減少しつつある実態を紹介する。普通種個体群の減少は，昨今の農業生態系やそれを取り巻く劇的な環境変化に起因していると考えられる。要因としては、農法の変化、農薬の影響、圃場整備の影響、外来種の影響、維持管理放棄などのいくつかの仮説が挙げられるだろう。本集会では、普通種個体群の激減要因についても，異なる分類群、多様な景観スケールの事例について、最新のトピックスを集約し議論を行う。そして，フィールド調査や実験を通した環境影響評価に基づいて普通種個体群の激減に関する謎解きについて言及する。

T23-1　里の爬虫両生類の受難の時代：整備と放棄と農法と
大澤啓志（日大・生物資源科学部）

T23-2　水田に依存した水生昆虫普通種の激減の主因ー苗箱施用殺虫剤の影響評価
日鷹一雅（愛媛大・農）・本林 隆（農工大・農）

T23-3　有機水稲作農法イノベーションの里地の生物多様性に対する影響評価
嶺田拓也（農研機構・ 農工研）・東 淳樹（岩手大・農）・日鷹一雅（愛媛大・農）

T23-4　整備年代の異なる畦畔における植物種の出現パターン
渡邉 修（信州大・農）

企画集会　　　　3 月 12 日　9:30-11:30　　　　　会場　I

T24　増加する風車 ー北海道から発信する風力発電問題 ー

企画者：早矢仕 有子（札幌大・法），白木 彩子（東京農大・生物産業），長谷川 理（エコ・ネットワーク）

北海道における風力発電設置基数は全国 1 位、設備容量で全国 2 位を占め（NEDO：2010 年 3 月現在）、国が導入を推進している風力発電事業の主翼を担っている。しかし、既存施設においては絶滅危惧種オジロワシ等鳥類の衝突事故を重ねながらも有効な対策が実施されておらず、また、小樽市銭函地区の発電施設建設予定地では、「北海道自然環境保全指針（平成元年）」で「保全を図るべき自然地域」に指定されている石狩海岸植生の損失が懸念されるなど、生態系への悪影響が看過できない状況にある。陸地建設における問題を回避できる洋上風力発電施設は、我が国では初めて北海道瀬棚町に建設され稼働しているが、既に大規模洋上発電施設を持つ欧州からは、繁殖中の海鳥類や渡り途中の鳥類におよぼす影響が報告されており、今後、日本でも同様の問題発生が危惧される。

果たして、生態系損失を回避しつつ再生可能エネルギー供給量を向上させることは可能なのか？あるいは、損失を伴う持続可能なエネルギー導入に対して社会的合意を得ることはできるのだろうか？

本集会では、鳥類・植物・環境エネルギー政策の各分野における専門家が知見を交え、共通認識の形成を目指す。

T24-1　**風力発電施設が鳥類に与える影響（概論）**
浦 達也（日本野鳥の会・自然保護室）

T24-2　**風車衝突事故がオジロワシに与える影響**
白木 彩子（東京農大・生物産業）

T24-3　**洋上風力発電が鳥類にもたらす影響**
風間 健太郎（名城大・農）

T24-4　**銭函海岸の風力発電問題〜海岸植生の視点から**
松島 肇（北大・院・農）

T24-5　**鳥類等生態系保全と風力発電等再生可能エネルギーとの調和に向けて**
飯田 哲也（環境エネルギー政策研究所）

●シンポジウム・フォーラム・企画集会・自由集会　一覧

Symposium number, title, time and room number

◎3 月 8 日（Tue）

企画集会 （14:15-16:15）

T01	ヒグマ出没の裏を読み解く－森とクマと人と－	A 会場
T02	アジア・太平洋地域の植生の分布と分化 V －熱帯山地への郷愁－	B 会場
T20	Facilitation を理解／応用するための理論基盤の整備にむけて	C 会場
T03	Micro-evo-devo ： 進化発生学と生態学の融合	D 会場
T04	社会的意思決定に必要なデータ収集と解析	E 会場
T05	ニッチはどこへゆくのか：繁殖干渉による群集パターンの統一的説明	G 会場
T06	ユネスコ MAB（人間と生物圏）計画 ー 日本発ユネスコ・エコパーク制度の構築に向けて	I 会場
T07	藻類の群集構造と進化動態～理論と実証～	J 会場

自由集会 （17:00-19:00）

W01	感染症からみた野生動物の保護管理	A 会場
W02	社会性の分子メカニズム ーその進化プロセスの理解に向けてー	B 会場
W03	高山帯における環境変動とその影響評価：長く観ること・たくさん観ること	C 会場
W04	山里海のコモンズ再生に向けての生物分類スキルのあり方とは？ －在地・在野のパラタクソノミスト大集合－	D 会場
W05	北海道の自然史研究の現場はどうなっているか？北海道自然史研究会の取り組みと生態学	E 会場
W06	森林施業の生態学：チェーンソーからモデリングまで	F 会場
W07	化学物質の生態影響パート5　遺伝子から群集まで	G 会場
W08	湿地をめぐる生態学と人文・社会科学の接点を探る	I 会場
W09	COP10 で何が話し合われたのか、我々は何をなすべきか？	J 会場

◎3 月 9 日

(Wed)

シンポジウム （9:00-12:00）

S01	生態学における陸域・水域研究のギャップを考える	A 会場
S02	日本の砂浜海岸における砂丘植生の現状と課題	B 会場
S03	Links between different approaches in community ecology: the possibility and the potential availability	F 会場
S04	寄生虫生態学－寄生虫学と進化生態学の融合を目指して	G 会場
S05	意思決定の生態学	I 会場
S06	トキとコウノトリが出会うとき～里地の自然再生を考える	J 会場

フォーラム （9:30-11:30）

U01	安全な野外調査のために	H 会場

企画集会 （9:30-11:30）

T08	琵琶湖淀川水系における外来種管理：モデルケースの提示と今後の課題	C 会場
T09	適応進化における形質間の機能的・遺伝的つながりの意義	D 会場
T10	博物館の生態学 7 －生物多様性保全のシンクタンクを目指して－	E 会場

自由集会 （18:00-20:00）

W10	多様な社会寄生の進化ー寄生者はホストをどうやって欺いてきたか？ー	A 会場

W11　行政施策として実現可能な生物多様性の保全計画　B 会場
W12　希少植物研究の魅力－希少植物が語る複雑な事情－　C 会場
W13　季節的な環境における生物のレスポンス　D 会場
W14　データ解析で出会う統計的問題　ー　選択や勝負の統計モデル　E 会場
W15　エゾシカの自然植生に及ぼす影響把握と保護管理施策への取り組み　F 会場
W16　淡水二枚貝に関わる保全生態学的研究の最前線　G 会場
W17　世界遺産時代の小笠原　生態学系研究者の社会的責任　part3　H 会場
W18　イノシシ被害に強い農村空間づくりを考える：自然科学と社会科学の融合的アプローチ　I 会場
W19　植物の環境応答　ー　同位体分析が解き明かす生理生態的プロセス　J 会場

◎3 月 10 日
(Thu)

シンポジウム (9:00-12:00)

S07　湖沼と湿地の自然再生：生態学が果たす役割と他分野との協働　A 会場
S08　なぜ，日本列島の生物多様性は保たれてきたのか？－ダイアモンド「文明崩壊」を越えて－　B 会場
S09　Scaling up plant traits to species performance based on cost-benefit balances: Towards general concepts of trait-based community ecology　F 会場
S10　生理学を武器にして動物生態学をおもしろくできないだろうか？　G 会場
S11　ユビキタスジェノタイピングと数理モデリングによる絶滅危惧植物保全　J 会場

企画集会 (9:30-11:30)

T11　生態学者のためのゲノミクスアプローチ~理論、手法から実証まで~　C 会場
T12　生物相互作用が引き起こす適応ダイナミクス　D 会場
T13　日本の海の生物多様性保全のために学会ができること　E 会場
T14　景観変化と生物多様性の時間的ダイナミクス　I 会場

◎3 月 11 日
(Fri)

フォーラム (14:15-16:15)

U03　若手研究者のキャリアパスー就職先の多様化と将来性　H 会場

企画集会 (14:15-16:15)

T15　もしも生態学者が市長になったら？　ー経済学から見た生態系サービスと生態学から見た生態系管理ー　A 会場
T16　外来生物法の見直しと将来　B 会場
T17　迅速な適応性（第 3 回）－細胞から群集まで　C 会場
T18　そんなに閾（しきい）は高くない！：生態系管理における生態学的閾値の応用と課題　D 会場
T19　群集生態学と生物地理学をつなぐメソスケールアプローチ　E 会場
T21　種間相互作用の島嶼生物地理　G 会場
T22　生態系を時間軸でとらえる：炭素循環における遅れ現象　I 会場
T23　里地における水田普通種減少の実態と謎解き　J 会場

自由集会 (18:00-20:00)

W20　化学物質で植物と微生物の相互作用を探る ー野外生態研究における事例　A 会場
W21　「アウェイ」で教える生態学　B 会場
W22　フェノロジー研究会「ツル植物の生長特性を考える」　C 会場

W23	里山的利用は森林の生態系サービスと機能の持続性に貢献するか？－供給・文化的サービスの視点から	D 会場
W24	Ecoinformatics: 情報科学でやる生態学	E 会場
W25	泥炭湿原の炭素動態の解明　－サロベツ湿原を例として－	F 会場
W26	キノコる集会	G 会場
W27	耐乾・耐塩性からみた乾燥地の侵入植物問題	H 会場
W28	群落談話会「地理的にみた植生へのシカ影響」	I 会場
W29	北海道産サケ野生集団の評価と流域生態系の動植物に及ぼす影響	J 会場

◎3 月 12 日
(Sat)

シンポジウム (9:00-12:00)

S12	実証データが進展させる代謝べき乗則のWBE理論（メタボリック・スケーリング理論）の現状	A 会場
S13	適応進化を制限する機構：気候変動下での生物多様性研究への示唆	B 会場
S14	A multidisciplinary approach to explore the mechanism of mast seeding: combination of modeling and molecular/field experiments	F 会場
S15	CBD ポスト 2010 年に向けた微生物多様性研究	G 会場
S16	COP10 後に生物多様性地域戦略に込められた期待と課題　－地域の保全活動において必要な生態学と政策のつながり－	J 会場

フォーラム (9:30-11:30)

U04	生態学者よ、街に出よ！　Part 7「企業と生物多様性-COP10 の成果を受けて」	D 会場

企画集会 (9:30-11:30)

T24	増加する風車　－北海道から発信する風力発電問題　－	I 会場

シンポジウム　　　　　3月9日　9:00-12:00　　　　　会場　A

S01　生態学における陸域・水域研究のギャップを考える

企画者：深谷肇一（北大環境），奥田武弘（遠洋水研），熊谷直喜（水工研），堀正和（瀬戸内水研）

陸域生態系と水域生態系では環境条件や生物相が大きく異なっている。これらの系における生態学的パターン・プロセスの統一的な理解や、有効な保全計画の策定のためには、広く適用可能な概念の構築のみならず、ハビタット特有の特徴の特定やそれらの違いを生み出す要因の理解が欠かせない。そのためにはハビタットの垣根を超えた研究者間の議論が必要である。

本シンポジウムでは、陸域・水域生態系のより一般的な理解を目指すことを目的として、陸域研究と水域研究の間に何かギャップはあるのか、あるとすればどのようなものか、ギャップを超えることでどのような展望が得られるのかを考えたい。

前半では、海外での報告例から陸域・水域研究間のギャップを整理するとともに、特に研究者間にみられる”コミュニケーションギャップ”に注目する。後半では、特定の研究テーマについて陸域と水域を対比する形でレビューを行い、両ハビタットの間にある共通点・相違点を浮き彫りにすることで、陸域と水域を統合的に理解するための仮説や問題点を議論する。総合討論では異なる背景を持つ研究者をコメンテーターとして迎え、ハビタットの垣根を超えた生態学的パターン・プロセスの一般的な理解を目指すためのアイデアを議論したい。

総合討論
コメンテーター
中静透（東北大）、松田裕之（横国大）、瀧本岳（東邦大）、鏡味麻衣子（東邦大）

S01-1　陸域・水域研究に見られるギャップの要素と構造
深谷肇一（北大環境）

S01-2　宿主の利用における陸域・水域生態系の対比
熊谷直喜（水工研）

S01-3　陸域と海域の生物多様性のマクロ生態学的なパターン比較
久保田康裕（琉球大）

S01-4　陸域相利系における発見が水域群集に適用されるとき：群集ネスト構造をめぐる発見と迷走
近藤倫生（龍谷大）

シンポジウム　　　　　3月9日　9:00-12:00　　　　　会場　B

S02　日本の砂浜海岸における砂丘植生の現状と課題

企画者：永松 大（鳥取大・地域）

水域と陸域の境界部である海岸には、海から供給される砂や塩分の影響と，そこに定着する植物の耐性のバランスによって独特の海浜植生が成立する。このうち比較的大きな砂浜海岸では，多年生草本を中心とした群落が成立するなど，海浜植生は草原の成立しにくい日本列島においてユニークな生態基盤といえる。しかし護岸工事などの人為改変や砂浜の侵食などにより海浜植生は希少化してきている。加えて，歴史的には比較的近代になり成立したはずの「白砂青松」が自然的な砂浜海岸の原風景として扱われるなど，海浜植生に対する社会の認識は低い。このシンポジウムでは，海浜植生の生態的特徴と危機の現状について特に海岸砂丘の植生を中心に紹介し，砂丘植生の生態的な意義や保全の必要性について考えていく。発表者の方々には海岸の植物群落に対する人為インパクト，海岸性植物の種としての希少性，保全にあたっての問題点，保

全・再生の実践例について報告をいただく。生物多様性の観点も織り込みつつ，海岸の植生について特に砂浜や砂丘植生の保全目標について議論を進めるとともに，今後の研究および保全活動の方向性について議論を進める。

コメンテーター：石川 真一（群馬大・社会情報）

S02-1　趣旨説明：鳥取砂丘における植生保全の歴史的経過
永松 大（鳥取大・地域）

S02-2　砂丘植生を取り巻く危機的状況とその要因
由良 浩（千葉県立中央博物館）

S02-3　海浜植物の分布傾向とレッドリスト記載状況
澤田 佳宏（兵庫県大・院・緑環境，淡路景観園芸学校）

S02-4　都市近郊の利用形態を中心とした海岸植生の危機の現状
松島 肇（北大・院・農）

S02-5　海岸緑化の技術的手法について
吉崎 真司（東京都市大・環境情報）

S02-6　石狩浜における海浜植物保護の道のりと課題
有田 英之（石狩市石狩浜海浜植物保護センター）

シンポジウム　3月9日　9:00-12:00　会場　F

S03 Links between different approaches in community ecology: the possibility and the potential availability

Organizers: Terutaka Mori (Aqua Restoration Research Center), Takashi Noda (Hokkaido University)

Community ecology has been progressed mainly by two major approaches. One is an individual approach based on population ecology. The individual approach has been mainly used in studies focusing on processes and mechanisms acting on a relatively small subset of interactive species. The other is a panoptic approach which calls for macroecological patterns and assembly rules. The panoptic approach has contributed to elucidation of patterns in aggregative properties such as species richness. This symposium aims to discuss possibility and potential availability of the links between the two approaches.

Commentator; Tadashi Miyashita（Tokyo University）

S03-1　Introduction
Takashi Noda（Hokkaido University）

S03-2　Plant-mediated indirect effects on insect communities
Masahiro Nakamura（Hokkaido University）

S03-3　The role of density dependence in community dynamics of coral assemblages
Jason E. Tanner（South Australian Research and Development Institute）

S03-4　Effects of density-dependent competition varying with disturbance on stream invertebrate assemblages
Terutaka Mori（Aqua Restoration Research Center）

S03-5　Effects of dispersal limitation, environmental filtering and interspecific competition on plant population and community
Masahiro Aiba（Hokkaido University）

S03-6　Linking population dynamics with species abundance patterns
Kei Tokita（Osaka University）

シンポジウム　　　　3月9日　9:00-12:00　　　　　会場　G

S04　寄生虫生態学ー寄生虫学と進化生態学の融合を目指して

企画者：三浦収（京都大・地球環境）

寄生虫学という言葉から連想されるのは、寄生虫病の予防や治療、そしてその撲滅に関する学問である。しかし近年、寄生虫を用いた進化生態学的な研究に大きな注目が集まり始めている。その理由の一つは、宿主に生息環境の大部分を依存する寄生虫の性質が進化生態学の問題を解くための優れた実験系を提供してくれるからである。また最近の研究により、寄生虫の感染が宿主の生態に大きな影響を与えることも明らかになってきた。本シンポジウムでは、生態・食物連鎖・外来種問題・共進化など様々な視点から寄生虫生態学を紹介し、その可能性について広く議論したい。

S04-1　Role of parasites in biological invasions
Mark Torchin（Smithsonian Tropical Research Institute）

S04-2　外来魚・外来寄生虫：今，水界で何が起きているのか？
長澤和也（広島大・生物圏）

S04-3　生態系の中の寄生者：渓畔生態系においてハリガネムシ類が駆動するエネルギー流
佐藤拓哉（京都大・フィールド研）

S04-4　Predation intensity by birds affects parasite prevalence in intertidal crabs
＊古賀庸憲（和歌山大・教育），沖彩矢香（和歌山大・教育），熊谷直喜（水産工学研究所）

S04-5　琵琶湖固有カワニナ類の遺伝的分化と吸虫感染耐性
浦部美佐子（滋賀県立大・環境）

S04-6　パナマ地峡の形成による潮間帯巻貝と寄生虫の多様化
三浦収（京都大・地球環境）

シンポジウム　　　　3月9日　9:00-12:00　　　　　会場　I

S05　意思決定の生態学

企画者：岡田賢祐（岡大・環境），粕谷英一（九大・理・生物）

生物はいつでも同じふるまいをするのではなく、自分を取り巻く他個体や環境条件によってふるまいを変

える。そのうちの１つである過去の経験などの情報によって行動を変える、‘意思決定’（decision making、意識的にそうしているかどうかを問わない）が、近年注目を浴びている。動物行動学では、この意思決定は現在の条件や過去の経験に依存したふるまいの変化として扱われており、明らかにされた内容は驚くほど複雑で生物に関する単純なイメージを改めてくれる。さらに得られた結果から、個体の意思決定が生態学にとって重要な過程であることもわかる。例えば、メスの産卵行動の意思決定は、競争相手である他のメスだけでなく捕食者の存在にも影響される。これは同種内や異種間の相互作用を介して、意思決定が個体群あるいは群集にまで影響が及ぼすことを意味する。ここでは、意思決定の実態に驚くとともに、意思決定が生態学の発展の起爆剤になりうるか議論したい。

コメンテーター：久保拓弥（北大・地球環境）

S05-1　子の捕食リスクにもとづく親の意思決定
平山寛之（九大・理・生態）

S05-2　歌鳥の繁殖成功に関わる意思決定：求愛・配偶者選択・産卵
相馬雅代（北大・理・生物）

S05-3　競争と経済的意思決定：ただし、ヒヨコの場合
松島俊也（北大・理）

S05-4　敗北経験と意思決定
岡田賢祐（岡大・環境）

シンポジウム　　　　３月９日　9:00-12:00　　　　　会場　J

S06　トキとコウノトリが出会うとき～里地の自然再生を考える

企画者：西川 潮（新潟大・超域），関島 恒夫（新潟大院・自然科学）

コメンテーター：中村 太士（北海道大・農）、山岸 哲（新潟大・超域）

野生絶滅種の再導入は、これまで海外を中心として、鳥類や大型哺乳類などを対象として進められてきたが、その多くは野生絶滅種を生態系の構成メンバーの一員として復元・定着させることに目標がおかれてきた。わが国では、これまで、野生絶滅種の再導入は二例を数えるのみで、2005 年にはじめてコウノトリが兵庫県豊岡市に、2008 年にはじめてトキが新潟県佐渡市（佐渡島）に再導入されている。日本で実施されている野生復帰事業は、古くから生活に密接な存在である里地が舞台となっているため、鳥類そのものの復元・定着だけでなく、これらを象徴種として里地生態系の復元を行っていく点にも学術的および社会的な重要性がある。本シンポジウムでは、日本の二大自然再生現場（佐渡市、豊岡市）における鳥類の野生復帰の現状、およびこれらを象徴種とした里地の再生の現状を演者らに紹介していただき、両地域における成果や課題を対比させながら“日本流”の自然再生手法について考えたい。

S06-1　野生生物の再導入と自然再生
西川 潮（新潟大・超域）

S06-2　コウノトリの存続可能な野生個体群の確立に向けて
大迫 義人（兵庫県立大・自然・環境科学研）

S06-3　コウノトリを象徴種とした農地の再生
内藤 和明（兵庫県立大・自然・環境科学研）

S06-4　**トキの野生復帰の現状**
永田 尚志（新潟大・超域）

S06-5　**トキを象徴種とした農地の再生**
関島 恒夫（新潟大院・自然科学）

S06-6　**豊岡市と佐渡市における環境関連政策**
南 眞二（新潟大・法）

シンポジウム　　　　3 月 10 日　9:00-12:00　　　　　会場　A

S07　湖沼と湿地の自然再生：生態学が果たす役割と他分野との協働

企画者：吉田丈人（東大・総合文化）

自然再生は、地域において失われつつある生物多様性や自然環境を、地域の多様な主体が科学的データに基づく順応的な方法により取り戻すことだけでなく、生物多様性と密接に関連する地域の人々の営みをも再生するアプローチとして期待される。自然再生に対する科学の貢献は、もはや生態学だけではなく、広く自然科学や人文社会科学に求められている。

本シンポジウムでは、湖沼と湿地を対象とした自然再生について議論する。淡水生態系の生物多様性は、他のどの生態系よりも速い速度で失われつつあると言われる。一方で、富栄養化の問題など、長年にわたって未解決のままの問題も存在する。人間活動に起因する諸々の要因に対して生物多様性や生態系は反応し、改変された生態系サービスが人間社会に影響を与える。国内のさまざまな湖沼や湿地において見られる生物多様性や生態系の変化と、それに対してどのような自然再生が検討・実施されるかについて紹介しながら、生態学の役割と他分野との協働について議論したい。

構成：
趣旨説明（吉田）
事例紹介（下記の 5 題）
コメント
三橋弘宗（兵庫県立大・自然研）
宮内泰介（北海道大・文学）
鷲谷いづみ（東京大・農学生命科学）
総合討論

S07-1　**琵琶湖の農業濁水問題をときほぐす一文理連携による流域診断**
谷内茂雄（京大・生態研）

S07-2　**宍道湖・中海における自然再生の現状と課題**
國井秀伸（島根大・汽水域研究センター）

S07-3　**地域社会とのかかわりを繋ぐ湖沼の自然再生－釧路湿原湖沼と霞ヶ浦を例に**
高村典子（国立環境研究所）

S07-4　**福井県三方湖の自然再生を支援する総合的環境研究**
吉田丈人（東京大・総合文化）

S07-5　**サロベツ湿原における湿原生態系解明研究の成果と自然再生**
冨士田裕子（北大・FSC・植物園）

シンポジウム　　　　　3月10日　9:00-12:00　　　　　会場　B

S08　なぜ，日本列島の生物多様性は保たれてきたのか？－ダイアモンド「文明崩壊」を越えて－

企画者：湯本貴和（総合地球環境学研究所）

日本列島は，他の「先進国」に比べ高い森林率や高い生物多様性を保持している。稠密な人口を擁するにもかかわらず，なぜ日本列島の生物多様性は失われなかったのか？縄文時代や江戸時代に「自然と人間の共生」の理想を求める言説は多い。この企画では、1）日本列島の生物多様性が高かった要因を主に地理的，気候的，地史的側面からの仮説を示し，2）列島各地の歴史から見出した生物資源利用とその管理の成功／失敗事例を紹介し，3）列島の生物多様性が維持された要因を整理した上で，4）今後の「自然と人間の関係」をどうしていくのかを展望したい。世界の流れは、生物多様性のみを保全するのではなく，人間との関係性も含めて保全していくという方向に動きつつある。生態学と同じ「関係性」の学問である歴史学の視点に触れ，生物多様性と分かちがたく結びついている文化多様性について考えたい。

S08-1　趣旨説明
湯本貴和（地球研）

S08-2　気候変動と人間活動からみた日本列島の植生変化
高原光（京都府大・生命環境）

S08-3　野生動物と狩猟の歴史
梶光一（東京農工大・農）

S08-4　山村の歴史と生物資源利用
白水智（中央学院大・法）

S08-5　日本列島の生物多様性が維持されてきた要因
辻野亮（地球研）

S08-6　生物文化多様性の視点からの保全生態学
湯本貴和（地球研）

シンポジウム　　　　　3月10日　9:00-12:00　　　　　会場　F

S09　Scaling up plant traits to species performance based on cost-benefit balances: Towards general concepts of trait-based community ecology

Organizers: Yoshiko Iida (Hokkaido University), Yusuke Onoda (Kyushu University), Hiroko Kurokawa (Tohoku University), Toshihiro Yamada (Hiroshima University)

Trade-offs among plant traits lead to various plant strategies, which play important roles in the plant specialization and coexistence within a range of environment. There is still a large gap in our understanding between physiological/morphological traits and species specialization/coexistence mechanisms. We will present studies which integrate plant traits from a shoot, to whole plant and to their assembling community; thus aiming to understand how plants succeed and coexist in different environments. We will discuss our studies to develop general concepts based on relationships from plant traits and their trade-offs to vegetation structure, functioning and species diversity.

Concept: Yoshiko Iida（Hokkaido University），Yusuke Onoda（Kyushu University）

Comments: Hiroko Kurokawa（Tohoku University）, Toshihiro Yamada（Hiroshima University）

S09-1　Diverse shoot architectures and converged mechanical safety among sympatric woody species
Yusuke Onoda（Kyushu University）

S09-2　Architectural trade-offs among tropical tree species in relation to life-history traits
Yoshiko Iida（Hokkaido University）

S09-3　Functional traits determine trade-offs and niches in a tropical tree community
Frank Sterck（Wageningen University, the Netherlands）

S09-4　Structure, functioning and species composition of vegetation stands: a case of a game?
Niels Anten（Utrecht University, the Netherlands）

シンポジウム　　3 月 10 日　9:00-12:00　　会場　G

S10　生理学を武器にして動物生態学をおもしろくできないだろうか？

企画者：宮竹貴久（岡山大），岸田 治（北大）

「生理学を武器にして動物生態学をおもしろくできないだろうか？」
企画者：宮竹貴久（岡山大）・岸田治（北大）

概要： 近年、動物生態学は分子遺伝学の技術を取り入れて新しい展開を見せている。しかし、生態学の基本構成をなす生物個体と遺伝子の間には、生理学という大きな学問領域があり、行動生態学ではあえてここに目を向けずに学問発展がなされてきた。そもそも生理学って生態学の役に立つのだろうか？　本シンポジウムでは、生理学から動物の行動や生態を考えている研究者と、生態・行動学から生理学にも興味を持っている研究者の間で興味を共有し合える機会を作りたい。そして生態学と生理学の間に介在するギャップを見つめなおし、逆に、いかにすれば生理学者と手を取り合って動物生態学を今以上におもしろくできるだろうか？　考えてみたい。

講演：
趣旨説明　宮竹貴久（岡大・環境）
コオロギの闘争行動と順位形成：神経生理学から行動学へ　青沼仁志（北大・電子研）
パーソナリティーの生理と生態学的基盤：昆虫の死にまねをモデルとして　宮竹貴久（岡大・環境）
サンショウウオとオタマジャクシ：表現型可塑性と生理学から群集へ　岸田　治（北大・FS センター）
成長のメカニズムからサケ科魚類の生活史多型と資源管理を考える　清水宗敬（北大・水産）

コメンテーター　松島俊也

総合討論

S10-1　コオロギの闘争行動と順位形成：神経生理学から行動学へ
青沼仁志（北大・電子研）

S10-2　パーソナリティーの生理と生態学的基盤：昆虫の死にまねをモデルとして
宮竹貴久（岡山大・環境）

S10-3　サンショウウオとオタマジャクシ：表現型可塑性と生理学から群集へ
岸田 治（北大・FS セ）

S10-4　成長のメカニズムからサケ科魚類の生活史多型と資源管理を考える
清水宗敬（北大・水産）

シンポジウム　3 月 10 日　9:00-12:00　会場　J

S11　ユビキタスジェノタイピングと数理モデリングによる絶滅危惧植物保全

企画者：井鷺裕司（京都大）

生物多様性の重要性は広く認識されつつあるが、種の絶滅に関しては依然として深刻な状況にあり、個体数が数十〜数百にまで減少した種も少なくない。これらの種に関しては、全個体の遺伝子型をすべて決定（ユビキタスジェノタイピング）し、その情報に基づいて人工交配、移植、生育地外保全などの策を講じることが有効である。本シンポジウムではこのアプローチによる絶滅危惧植物保全の可能性について議論を行う。

ユビキタスジェノタイピングによって得られた興味深い知見として、100 個体以上生存していると思われていた種が遺伝的には 1 個体であった例、個体群ごとに遺伝的特徴が著しく異なり個体群の遺伝的質と保全努力とが一致していない例、野生と思われていた個体群が過去に人為的に増殖・移植されていた例などがある。また、全個体の生育位置特定のための新たなツールの活用や、空間情報、遺伝子型情報を考慮した数理モデルで個体群の持続可能性を評価する事の有用性も議論したい。

S11-1　二次的自然下に生育する絶滅危惧植物保全のためのユビキタスジェノタイピング
井鷺裕司・兼子伸吾・加藤慶子・水谷未耶（京都大）・増本育子・大竹邦暁（中電技術コンサルタント）

S11-2　小笠原諸島における絶滅危惧植物保全のためのユビキタスジェノタイピング
須貝杏子・加藤朗子・常木静河・森啓悟・加藤英寿（首都大・牧野標本館）

S11-3　高山における絶滅危惧植物保全のための全個体ジェノタイピング
陶山佳久・阿部晴恵（東北大）

S11-4　様々な繁殖様式をもつシダ植物におけるユビキタスジェノタイピング
高宮正之（熊本大）

S11-5　地域固有絶滅危惧種シモツケコウホネを守る：ユビキタスジェノタイピングから見えてきたこと
志賀隆（大阪市立自然史博物館）・横川昌史・兼子伸吾・井鷺裕司（京都大）

S11-6　ラジコンヘリ Falcon-PARS による絶滅危惧種生育位置の特定
小熊宏之（国立環境研究所）・渡部靖之（情報科学テクノシステム）

S11-7　絶滅危惧植物における全個体遺伝子情報と個体群存続解析
加藤元海（高知大）

シンポジウム　　　　　3 月 12 日　9:00-12:00　　　　　　会場　A

S12　実証データが進展させる代謝べき乗則のＷＢＥ理論（メタボリック・スケーリング理論）の現状

企画者:小山耕平（石川県立大・生物資源環境），福森香代子（テキサス大オースティン校），八木光晴（九大・院・農／長大・水），森茂太（森林総合研究所・植物生態領域）

WBE 理論（メタボリック・スケーリング理論）は、生物の個体サイズとエネルギー代謝量（呼吸量や光合成量）の関係を「べき関数」（＝３／４乗則）として表し、個体の成長パターン及び個体群の総生産量を、この関係から演繹して統一的に表現しようと試みる。この理論は全ての生物種に対して、また陸上系・水系といった生態系を選ばずに適用可能な理論として提唱されているが、反論も多い。代謝べき乗則の理論は今後、どのような実証データによって発展するのだろうか？本集会では、現在の「生理生態学」や「生態系ストイキオメトリー」の若手研究者らによる実証データが、代謝べき乗則に関する理論を進展させる可能性について議論したい。

司会：福森香代子（テキサス大オースティン校）

コメント：
11:20-11:35　占部城太郎（東北大院・生命科学）

総合討論：
11:35-12:00

S12-1　①個体サイズの代謝べき乗則入門：なぜ３／４になるのか説明　②代謝べき乗則理論の３つの弱点、そこで必要とされる３種類の実証データ
小山耕平（石川県立大・生物資源環境）

S12-2　植物個体呼吸スケーリングを決めるのは何？　－環境 / 系統などから－
森茂太（森林総研・植物生態領域）

S12-3　代謝スケーリングから見えた食う－食われるの関係：代謝量の個体発生を考える
＊八木光晴（九大・院・農／長大・水），及川信（九大・院・農）

S12-4　高次階層システムとしての生態系メタボリズムを駆動するメカニズムは何？　サイズスケーリング vs ストイキオメトリー
＊福森香代子（テキサス大），酒井陽一郎，西松聖乃，陀安一郎，奥田昇（京大・生態研）

シンポジウム　　　　　3 月 12 日　9:00-12:00　　　　　　会場　B

S13　適応進化を制限する機構：気候変動下での生物多様性研究への示唆

企画者：東北大学生命科学

ある生物は多様な環境に適応しているのに対し、ある生物は限定された生息環境に留まっている。また、ある生物は、急速に環境に適応して進化しているのに対し、ある生物では長期間形質を進化させていない。これは、その生物の取り巻く物理的環境や相互作用する生物的環境などの違いによるだけでなく、生物種自体の進化しづらさ（conservatism, constraints）、あるいは進化しやすさ（evolvablity）が関与している。進化を妨げる要因としては、集団内に維持される遺伝的変異に影響する集団サイズや交雑、移動分散などの集団遺伝学的要因とその生物自体のもつ遺伝的システムによるものがある。進化しづらさ・進化しやすさは、生物

多様性や群集構造を決める重要な要因の一つとして考えられる。たとえば、ニッチに関する性質の進化しづらさ（niche conservatism）は、新しい環境への移住の制限をもたらし、種多様性を決める要因の一つとなる。また、今後の気候変動に対して生物は進化的に適応できるのかどうかを予測する上でも、進化しづらさに関わる要因を明らかにすることは重要である。シンポジウムでは、進化しづらさに関係する要因について、また、それが生物多様性研究および地球環境変動への生物の進化的応答研究に与える影響について考察する予定である。

コメンテーター：村上正志（千葉大・理学部）、工藤洋（京都大 生態研センター）

S13-1 適応進化を制限する遺伝的機構と生物多様性
河田雅圭（東北大学院生命科学）

S13-2 多様な生息地への適応を制限するゲノム構造
牧野能士（東北大院 生命科学），河田雅圭（東北大院 生命科学）

S13-3 気候変動下での共進化過程と遺伝子流動
東樹宏和（京都大）

S13-4 生物の時空間動態を理解するために有効な niche conservatism の視点
天野達也（農業環境技術研究所）

シンポジウム　3 月 12 日　9:00-12:00　会場　F

S14 A multidisciplinary approach to explore the mechanism of mast seeding: combination of modeling and molecular/field experiments

Organizers: Yuko Miyazaki (Hokkaido Univ.), Akiko Satake (Hokkaido Univ.)

The intermittent and synchronized production of large numbers of seeds or flowers by plant populations is called "masting" or "mast seeding". A variety of factors influence the likelihood of mast seeding. Two major factors are internal resource level (such as carbon, nitrogen, and phosphorus content) and external environmental signals (low temperature and drought). How these internal and external factors interact to induce flowering and fruiting is a central question in plant biology. In this symposium, we will introduce a new multidisciplinary approach to address the question, and will demonstrate that synthesis of molecular biology, ecology, and mathematical modeling is necessary for in-depth understanding of the mechanism of mast seeding.

S14-1 Detecting proximate factors of flower bud differentiation in beech using flowering gene expression analysis
Yuko Miyazaki（Hokkaido Univ.）

S14-2 Regulation of the flowering genes in fruit trees
Nobuhiro Kotoda（National Institute of Fruit Tree Science）

S14-3 Testing mechanisms of masting behavior in California oaks
Walter D. Koenig（Cornell Univ.）

S14-4 Pollination syndromes and the benefits of synchronous mast-seeding
Elizabeth Crone（Harvard Univ.）

S14-5　A computational model of plant life cycle: genetic mechanism of local adaptation in flowering time
Akiko Satake（Hokkaido Univ.）

シンポジウム　　　　　3 月 12 日　9:00-12:00　　　　　会場　G

S15　CBD ポスト 2010 年に向けた微生物多様性研究

企画者：中野伸一（京大生態研），山本啓之（JAMSTEC），浜崎恒二（東大大気海洋研），鎌形洋一（産総研，北大院農学）

生物多様性は国際条約（CBD）のもと複数の国際プログラムが様々な視点から調査研究や普及広報や教育などのプロジェクトを実施してきた（CoML, DIVERSITAS, GBIF, GEO-BON, ILTER, ICoMM etc.)。また 2010 年 10 月の生物多様性条約締結国会議（COP10）ではこれからの短期目標と長期の戦略が議論される。研究の状況では、情報高分子の解析技術は生物多様性の分野にかつてないほど精緻で多量なデータを提供し、分野として新たな進展を後押ししている。一方、生物多様性が国際の場で論議された当初は微生物の重要性が認識されていたにも関わらず、現在の生物多様性プロジェクトへの寄与は大きくない。本企画シンポでは、海洋および陸水生態系と、メタゲノミクスおよびデータベース構築における微生物多様性についての具体的な研究成果やデータベースに関する状況を検証し、今後の生態系研究や種々の環境プロジェクトにおける方向性を示したい。

S15-1　超並列シーケンスによる海洋微生物の多様性解析
浜崎恒二（東大大気海洋研）

S15-2　有害藻類 Microcystis 属のブルーム形成と遺伝的多様性
大林夏湖，程木義邦，小林由紀，奥田昇，＊中野伸一（京大生態研）

S15-3　メタゲノムアプローチで見える環境負荷変動による微生物群集の遷移
鎌形洋一（産総研，北大院農学）

S15-4　微生物多様性研究における観測とデータベースとは？
山本啓之（JAMSTEC）

シンポジウム　　　　　3 月 12 日　9:00-12:00　　　　　会場　J

S16　COP10 後に生物多様性地域戦略に込められた期待と課題　ー地域の保全活動において必要な生態学と政策のつながりー

企画者：西田貴明（三菱 UFJ リサーチ＆コンサルティング（MURC)），橋本佳延（兵庫県博），及川敬貴（横浜国立大学），日鷹一雅（愛媛大学）

CBD-COP10 の成果を受けた「生物多様性の社会の主流化」の動きとして、自治体の総合的な保全管理計画である生物多様性地域戦略の策定・普及が重要視されている。実際、既に先進的な地方自治体では地域戦略の策定がなされ、また昨今更に多くの自治体が策定の検討を開始している。一方で、真に地域の多様さを把握し、地域特性に合致した地域戦略を策定・運用することは容易ではない。また、策定した戦略においても、実効性を担保するための具体的施策が戦略へ体系的に落とし込めている事例は少ない。これらの現状は、地域戦略の策定・運用に関して、依然として国内に十分な科学的知見が乏しいことを示唆している。本シンポジウムでは、生態学者から、社会学者、行政担当者まで多様な立場から、地域戦略の策定・運用の要諦を炙り出しつつ、生態学と地域政策のつながりを議論したい。

S16-1　**生物多様性地域戦略の役割**
　＊西田貴明，阿部剛志（MURC）

S16-2　**地方分権・自立自耕時代における農山漁村の地域戦略－農山漁村地域の事例を中心に－**
　日鷹一雅（愛媛大学・農学部）

S16-3　**地方博物館が地域戦略策定に果たす役割－兵庫県の事例を中心に－**
　橋本佳延（兵庫県博）

S16-4　**地域戦略の策定状況と自治体が抱える課題**
　＊山本清隆，豊野基（東京市町村自治調査会），阿部剛志（MURC）

S16-5　**法学からみた地域戦略の意義**
　及川敬貴（横浜国立大学・環境情報）

S16-6　**林業振興に生物多様性保全はなぜ必要か**
　相川高信（MURC）

S16-7　**生物多様性保全に向けた地域活動の推進手法**
　＊阿辺一郎，平田弘成（農林水産省農村振興局）

フォーラム　　　3 月 9 日　9:30-11:30　　　会場　H

U01　安全な野外調査のために

主催：野外安全管理委員会　責任者：鈴木準一郎（首都大・理工）

本フォーラムの目的は、生態学の研究において、極めて重要な部分を占める野外調査を安全に行うために、何をすれば良いか・何をしたらいけないか、を今一度、確認することです。
1990 年代の後半以降、野外調査中に生態学の研究者が、生命を失う事故が続発しました。事故への反省から、生態学会の野外安全管理委員会が発足し、調査中の事故を回避し、また万が一、事故に見舞われた場合でも被害を軽減する方法の確立を目指して活動を続けてきました。委員会の発足当初の目標からは大分遅れましたが、活動の成果を日本生態学会誌に『フィールド調査における安全管理マニュアル』としてまとめることができました。
そこで、このフォーラムでは、マニュアルの概要を本委員会から紹介したうえで、安全管理方法の教育を含めた今後の課題を共有するために議論をしたいとおもいます。
野外調査をより安全に行いたいと思っておられる意識の高い方はもちろん、野外調査が危険だと思ったことがない方の参加も期待しています。

内容
『フィールド調査における安全管理マニュアル』概要の紹介
マニュアルをどう使うか、マニュアルに足りない物は何かについての総合討論

フォーラム　　　3 月 11 日　14:15-16:15　　　会場　H

U03　若手研究者のキャリアパス－就職先の多様化と将来性

主催：キャリア支援専門委員会　責任者：半場祐子，深谷肇一

キャリア支援専門委員会は、将来計画専門委員会から独立する形で 2010 年 10 月 1 日に承認されました。

本委員会では、生態学分野の若手研究者支援や男女共同参画に生態学会として貢献するために、これまで2年間にわたって生態学会で若手キャリア支援のためのフォーラムを開催してきました。今年度は、キャリアパスとして「民間企業への就職」を積極的に考えるフォーラムを開催します。博士取得者の就職先の間口がなかなか広がらない現状の要因として、博士取得者を積極的に採用する民間企業が少ないことに加え、博士取得者も民間企業を就職先の選択肢に入れていないという、双方のミスマッチがあります。企業側と博士取得者側の両方から学位取得者の就職に関する考え方を提示し、その上での総合討論を行うことによって、学位取得者が多様なキャリアパスの存在に気がつくこと、民間企業と学位取得者の間で就職のイメージをすり合わせることを目指したいと思います。

プログラム（予定）

1）民間企業側の意識
「大学研究室が育成する人材と企業が求める人材とのミスマッチ（仮）」
帯野久美子（和歌山大学理事／株式会社インターアクト社長）

2）学位取得者の意識
「若手の会メーリングリスト（wakateco）を使ったアンケート調査結果」
飯島勇人（山梨県森林総合研究所）、奥田武弘（遠洋水産研究所）、尾崎有紀（奈良女子大学）、黒江美紗子（早大・自然環境調査室）

3）民間企業に就職した若手会員による話題提供
「民間シンクタンクで生物多様性を研究する」
西田貴明（三菱 UFJ リサーチ＆コンサルティング株式会社）
「企業での博士の多様なキャリア～高い専門性を活かそう～（仮）」
丸幸弘（株式会社リバネス　代表取締役 CEO）（予定）

4）総合討論

フォーラム　　3月12日　9:30-11:30　　会場　D

U04　生態学者よ、街に出よ！ Part 7「企業と生物多様性 -COP10 の成果を受けて」

主催:常任委員会　責任者:足立直樹（(株) レスポンスアビリティ),可知直毅（首都大院･理工),石川真一（群馬大・社会情報）

昨年10月に名古屋で開催された生物多様性条約 第10回締約国会議（COP10）では、ABS（遺伝子資源へのアクセスとその利用から生じる利益の配分）に関する国際ルールである名古屋議定書と、2020年に向けての20の戦略的目標と2050年のビジョンからなる愛知目標などが採択され、生物多様性はたんに生物の問題ではなく、人間の問題、ひいては経済の問題であることが確認され、企業を含めたあらゆる関係者が生物多様性の保全に向けて協働することの重要性が強調された。

企業人はCOP10の成果をどのように受け止めているのか、また、今後どのように活動を発展させることを考えているのだろうか。COP10の成果を踏まえて今後の課題と展望を、企業の生物多様性保全担当者を交えて議論する。これにより、生態学会関係者と企業の生物多様性保全活動担当者の間での、継続的な意見・情報交換を行い、協働の活性化をはかる。

※話題提供者には一部交渉中の方も含みます。話題および演者が交代になることもあります。どうぞ予めご了承ください。

COP10 の成果と企業活動への影響
原口真（(株) インターリスク総研）

企業の自然資産を計り、増やすために
三輪隆（(株) 竹中工務店）

原材料を持続可能に獲得するために
杉本信幸（味の素（株））

企画集会　　3月8日　14:15-16:15　　会場　A

T01　ヒグマ出没の裏を読み解く－森とクマと人と－

企画者：間野 勉（道総研環境研セ），長坂晶子（道総研林業試）

ヒグマは北海道の豊かな自然環境を象徴する野生動物だが、本州におけるツキノワグマと同様、近年人間活動とのあつれきが社会問題となっている。特に、農地に出没し農作物を食害するクマは増加の一途をたどっており、効果的な防除法の確立・普及が喫緊の課題である。ヒグマの出没と被害の発生には様々な要因が関与していると予想され、要因解明のためには多角的なアプローチが必要と考えられる。こうした背景から、演者らは、北海道渡島半島を研究フィールドに、ヒグマの個体群動態、景観生態学、堅果類の豊凶といった各々の視点を持ち寄り、共同研究を実施してきた。本企画集会では、共同研究で取り上げた３つの視点：
①近年ヒグマの出没が増えているのは、生息数が増加しているからなのだろうか？②ヒグマの農地への出没にはどのような土地利用パターンが関与しているのか？③クマの出没にはブナ・ミズナラなど堅果類の豊凶が影響すると言われているが、ヒグマに関してはどうなのだろうか？　を軸に、この問題への知見の集積を図ると同時に、コメンテーターとして、佐藤喜和（日本大学）、森本淳子（北海道大学）両氏を予定、浦幌、知床半島といった北海道の他地域での研究例についても紹介してもらい、議論を深めていきたいと考えている。

T01-1　渡島半島地域におけるヒグマ捕獲数の長期データから見た行動の変化
間野 勉（道総研環境研セ）

T01-2　ヒグマの被害を受けやすい農地の立地条件：渡島半島森町の事例から
長坂晶子（道総研林業試）

T01-3　ブナ・ミズナラの豊凶とヒグマ出没との関係
今 博計（道総研林業試）

T01-4　ヒグマによる農作物への食害とその発生要因：富良野市および浦幌町における事例から
佐藤喜和（日大生物）

T01-5　有害駆除が発生するエコトーン：知床地域の事例
森本淳子（北大院農）

企画集会　　3月8日　14:15-16:15　　会場　B

T02　アジア・太平洋地域の植生の分布と分化 V －熱帯山地への郷愁－

企画者：村上雄秀（国際生態学セ），中村幸人（東京農大・地域環境科学）

日本の照葉樹林はブナ科とクスノキ科の常緑樹によって特徴づけられる．それに近縁の森林は東南アジアの熱帯山地にみられる。東南アジアの熱帯山地林はブナ科のカクミガシ属 Trigonobalanus のように古型属も産することから，日本などの中緯度地域の照葉樹林のルーツともみられている．また我々が東南アジアの山を登り，一定の標高に達してフタバガキ科の森林から常緑ブナ科森林に入ると，林内植生や林縁植生など日本の照葉樹林と共通性が高い景観に変化し，強い郷愁を感じるものである．

本集会は照葉樹林のような中緯度地域低地の常緑広葉樹林と熱帯山地の常緑広葉樹林の種組成的な類縁性を探り，熱帯林の標高に伴う組成変化をアフリカ熱帯を対照として考察する。熱帯山地の種組成研究を展開されている一線の研究者に講演をお願いし,「郷愁」の内容について認識を深めたい.

コメンテーター：武生雅明（東京農大・地域環境科学)・佐々木 寧（埼玉大学・工）

T02-1 キナバル山における山地林の組成と構造
相場慎一郎（鹿児島大・理）

T02-2 北タイ・雲南の山地林の特性－植生地理学的視点から－
原 正利（千葉県博・生態・環境研究）

T02-3 島嶼状に分布する東アフリカ山地林：垂直方向の種組成変化
古川拓哉（横浜国大・環境情報）

T02-4 マレーシア低地林と丘陵林の組成比較
目黒伸一（国際生態学セ）

企画集会　　3 月 8 日　14:15-16:15　　会場　D

T03 Micro-evo-devo ： 進化発生学と生態学の融合

企画者：石川 麻乃（北海道大・環境)，森長 真一（東京大・総合文化）

生物は、彼らを取り巻く環境に適応し、多様な形態、行動、生理的形質を獲得してきた。では、これら適応的形質はどのような進化プロセスを経て獲得されるのか？これまで、発生生物学の観点から、進化の至近的メカニズムについて新たな知見を提供してきたのが進化発生学（Evo-devo）である。さらに近年の進化発生学は、生態学との癒合を果たし、異なる環境に適応した近縁な生物群（姉妹群や近縁集団）を比較することで、新たな適応的形質がどのように生じるのかという問いに答えようとしている。このような領域はマイクロ進化発生学(Micro-evo-devo)とも呼ばれ､多くはモデル生物とその近縁種を対象に行われてきた。しかし、分子生物学的・遺伝学的手法の発展に伴い、その研究対象は非モデル生物にも広がりつつある。また、形態に加えて生理や行動に関わる制御機構が比較され、より多様な適応進化の分子機構について新たな知見が提供されつつある。本集会では、近縁系統・集団間でこれら適応的形質の発生機構や制御ネットワークを比較し、適応進化の分子メカニズムに迫ろうと試みる若手研究者からその研究例を紹介し、今後の展望について議論する。

T03-1 裏しかない葉「単面葉」における平たい葉身の発生と進化
山口 貴大（基生研）

T03-2 ショウジョウバエの暗所環境への適応のメカニズム
布施 直之（京都大・理）

T03-3 アブラムシの繁殖多型とその喪失を担う内分泌基盤
石川 麻乃（北海道大・環境）

T03-4 ハクサンハタザオからイブキハタザオへの標高適応を担う生理機能と分子基盤
永野 聡一郎（東北大・生命）

T03-5 イトヨにおける内分泌シグナルの適応的進化
北野 潤（東北大・生命）

企画集会　　　　　3 月 8 日　14:15-16:15　　　　　　会場　E

T04　社会的意思決定に必要なデータ収集と解析

企画者：岸本康誉（兵庫県大学），坂田宏志（兵庫県大学）

近年、生態学には実務的な応用科学としての成果を求められるようになってきた。保全や被害対策の実施において、政策や手法、予算の意思決定に寄与する具体的・現実的な成果が必要とされてきたと言うことである。

意思決定に寄与するためには、責任の所在を明確にし、研究結果の成果や限界を正確に評価しなくてはならない。また、研究成果をステークホルダーに、意思決定の課題が明確になるように、わかりやすく示すことも必要である。さらに、研究成果を提供する者の信頼性も、重要なポイントになる。そのためには、長期的かつ大規模なデータ収集を体系的に行う必要がある場合もあれば、迅速に最低限の材料を挙げることを求められる場合もある。

この企画集会では、生態学に対する社会的な期待に応えるために、どのようなデータをいかに収集していくか、どのような解析手法が適切なのか、基本的な考え方についての議論と実例を交えて検討していきたい。

趣旨説明
コメンテーター：五箇公一（国立環境研究所）

T04-1　**獣害対策を仮説・妄信から脱却させ，科学的根拠に基づいた意志決定に導くための解析例**
＊本田剛（山梨県総合農業技術センター）

T04-2　**外来生物防除のための時空間的な意思決定支援ツール～アカギとマングースを例に～**
＊深澤圭太（自然環境研究センター），阿部愼太郎（環境省那覇自然環境事務所），小池文人（横浜国立大学），田中信行（森林総合研究所），大津佳代（日本森林技術協会）

T04-3　**シカ・イノシシ保護管理のための意思決定支援システムの構築**
＊岸本康誉，坂田宏志（兵庫県大学）

T04-4　**水産資源管理におけるデータ収集の重要性とモデル解析の役割～マグロ管理の意思決定を例に～**
＊黒田啓行，高橋紀夫，境磨・藤岡紘，伊藤智幸（水産総合研究センター 遠洋水産研究所）

企画集会　　　　　3 月 8 日　14:15-16:15　　　　　　会場　G

T05　ニッチはどこへゆくのか：繁殖干渉による群集パターンの統一的説明

企画者：鈴木紀之（京大・農・昆虫生態），京極大助（京大・農・昆虫生態）

種間競争はニッチや分布を説明するための中心概念とされてきたが、資源をめぐる競争はめったに検出されない。しかし、中立説が主張するように、本当に種間相互作用は群集パターンを説明する上で無力なのだろうか？　繁殖干渉は配偶をめぐる負の種間相互作用を指し、個体数の多いほうの種がますます有利になる正のフィードバックを生み出す。この性質により、資源競争では実現しにくい急速な競争排除も容易にもたらされると予測されている。また、繁殖干渉は機能群や分類群を問わず、近縁種間には普遍的に存在しているはずである。したがって、繁殖干渉の枠組みによって群集パターンを種間相互作用に即しながら統一的に理解できる可能性がある。本集会ではまず、資源競争との個体群生態学的特性の比較、生態的形質置換への影響といった繁殖干渉の理論的な背景を示す。次に、実験動物、被子植物、捕食者など様々な系における生物地理、ニッチ幅、生活史形質の進化を繁殖干渉の観点から示した実証研究を紹介する。以上により、繁殖干渉の枠組みの妥当性と一般性を評価したい。

T05-1　イントロ：群集生態学の歴史と繁殖干渉
鈴木紀之（京大・農・昆虫生態）

T05-2　繁殖干渉によって生じるアリー効果
＊京極大助（京大・農・昆虫生態），西田隆義（滋賀県立大・環境生態）

T05-3　生態的形質置換の理論研究
小沼順二（マンチェスター大・生命）

T05-4　石垣に登ったイヌノフグリ：外来種の繁殖干渉による在来草本の形質分化・置換
高倉耕一（大阪市環科研）

T05-5　捕食性テントウムシにおける寄主特殊化の進化
＊鈴木紀之（京大・農・昆虫生態），大澤直哉（京大・農・森林生態），西田隆義（滋賀県立大・環境生態）501

T05-6　同所的オオオサムシ亜属種間の体サイズ差の意味：資源分割より優先される生殖隔離
＊奥崎穣（京大･理･動物生態），高見泰興（神大･人間発達環境），曽田貞滋（京大･理･動物生態）

T05-7　総括
西田隆義（滋賀県立大・環境生態）

企画集会　　3月8日　14:15-16:15　　会場　I

T06　ユネスコ MAB（人間と生物圏）計画 –日本発ユネスコ・エコパーク制度の構築に向けて

企画者：酒井暁子（横国大・環境情報／MAB 計画委員会事務局），松田裕之（横国大・環境情報／MAB 計画委員会委員長）

ユネスコは、人類の存続と持続可能な発展のために、ユネスコ・エコパーク（生物圏保存地域）の指定と活用を通じ、原生的な自然環境の保護と地域社会の福利の向上の両立を図る国際事業、Man and the Biosphere（人間と生物圏）計画を世界規模で進めている。MAB 計画は、生物多様性と生態系サービスの維持・向上、および世界の文化的多様性を維持する上で、極めて優れた枠組みであると国際的に認知されている。
ユネスコ・エコパークの自然保全制度上の意義付けや活用方法については、各国の状況に合わせて柔軟に設定することが認められている。世界の事例に学びつつ、しかし日本には先行する保全制度や関連活動が数多く存在するので、それらを俯瞰した上で、また独自の文化的背景を踏まえ、全体として効果的に機能するような立ち位置を取ることが重要であろう。本企画集会を通じ、MAB 計画が国全体の環境保全戦略の重要な一部となることを目指したい。
下記の講演に加え、パネル討論【日本に適したユネスコ・エコパークのあり方】を行う。

司会：松田裕之、パネリスト：湯本貴和、朱宮丈晴、増沢武弘、松井淳
総合司会　鈴木邦雄（横浜国大／日本 MAB 国内委員会主査）

T06-1　MAB 計画の概要および本集会の趣旨説明
若松伸彦（横国大・環境情報）

T06-2　ユネスコ・エコパークの世界での活用事例
池田史枝（横国大・環境情報），＊比嘉基紀（森林総研）

T06-3　ドイツにおけるエコパークと文化的景観の保護
中越信和（広島大・国際協力）

T06-4　我が国の自然環境保全の取組と MAB/BR（ユネスコ・エコパーク）
岡野隆宏（鹿児島大）

T06-5　ユネスコ・エコパーク新規登録に向けての現状と課題
酒井暁子（横国大・環境情報）

企画集会　　　3 月 8 日　14:15-16:15　　　　会場　J

T07　藻類の群集構造と進化動態～理論と実証～

企画者：水野晃子（総研大），吉山浩平（東大・大気海洋研），田邊優貴子（極地研）

生物間相互作用の中で多様な形質が進化・維持されるメカニズムや、群集動態に対する形質の多様性の影響を明らかにすることは、生物群集の構造・動態におけるパターンとメカニズムの理解を目指す群集生態学の新たな道を拓く上で、重要な役割を果たすと考えられる。藻類には多様な形態・生活史を持つ分類群が含まれており、これらのテーマを深く掘り下げるためには適した対象生物である。また、藻類は地球上の一次生産の約 50% を占め、生態系の物質循環を駆動する重要な構成要素である。そのため、藻類の群集構造やその空間パターン形成のメカニズムを探ることは、水圏生態系を理解する上で欠かせない研究テーマである。このことから、基礎的な群集生態学に加えて、進化動態から群集構造、生態系機能までを包括的に理解しようと試みる際には、藻類は理想的なモデル生物であると言えるだろう。

本集会では、理論的手法と実証的手法を組み合わせて、様々な環境における藻類の群集構造と進化動態に対する資源競争や捕食者、物理的環境などの影響を議論する。まず吉山が、植物プランクトンによる光と栄養塩を巡る競争に関する理論を紹介する。次に田邊が南極の湖底藻類群集の鉛直的な色彩パターンとそれを決定する環境要因についての研究を紹介し、水野がそのパターンに対する光阻害の影響をモデル研究で議論する。最後に山道氏が、藻類の対捕食者防御の可塑性と進化が群集に与える影響について紹介する。以上の発表を受けて、藻類を材料に群集構造の創出と進化動態に対して新しい知見をもたらすことを目指す。

T07-1　植物プランクトン群集における鉛直分布構造
＊吉山浩平（東大・大気海洋研）

T07-2　南極の湖底藻類群集における鉛直分布構造
＊田邊優貴子（極地研）

T07-3　南極の湖底藻類マットにおける鉛直分布パターンモデル
＊水野晃子，佐々木顕（総研大・学融合）

T07-4　捕食者が駆動する藻類群集の可塑性と進化
＊山道真人（総研大・生命共生体進化学）

企画集会　　　3 月 9 日　9:30-11:30　　　　会場　C

T08　琵琶湖淀川水系における外来種管理：モデルケースの提示と今後の課題

企画者：岩崎敬二（奈良大・教養），中井克樹（琵琶湖博物館），村上興正（京都精華大学）

多数の固有水生生物種を育む琵琶湖・淀川水系には、外来生物法で特定外来生物に指定された種を含め数

多くの侵略的外来種が侵入し､在来種や群集への大きな脅威となっている。そのため､琵琶湖･淀川水系では、様々な分類群の特定外来生物に対して、滋賀県をはじめとする行政と研究者、市民団体が参画した管理や駆除が行なわれている。その中には、日本の中では先進的な取り組みや、今後の外来水生生物管理のモデルケースとなりうるものも多い。

そこで、この企画集会では、そういった取り組みを紹介し、今後の課題について議論して、日本での外来水生生物管理の一層望ましいあり方を模索していきたい。なお、この集会は、日本生態学会近畿地区会自然保護専門委員会が主催し、その活動の一環として開催される。

総合討論の司会：岩崎敬二

T08-1　総論および淀川の外来生物の現状と課題
村上興正（京都精華大学）

T08-2　琵琶湖水系における外来魚類の現状と課題
中井克樹（滋賀県立琵琶湖博物館）

T08-3　琵琶湖淀川水系における外来水草の現状と課題
野間直彦（滋賀県立大・環境科学）

T08-4　滋賀県による外来生物に関する取り組み：条例施行と現状調査
高倉猛（滋賀県自然環境保全課），＊中井克樹（滋賀県立琵琶湖博物館）

企画集会　　3月9日　9:30-11:30　　会場　D

T09　適応進化における形質間の機能的・遺伝的つながりの意義

企画者：原野智広（九大・理）

生物の形質は、個々に独立して進化するわけではない。複数の形質が組み合わさって機能する場合、これらの形質は相関して進化することによって適応的になる。ある形質の進化が生物の生活条件を変化させる場合、その変化が他形質の適応進化の引き金になる。実際、生物にはシンドロームと呼ばれる相関した形質が見られたり、生態的形質の異なる集団では対応した諸形質の違いが観察されたりする。また、異なる形質が共通の遺伝的基礎を持つ場合、形質間に遺伝相関が存在し、1つの形質が進化すれば他の形質も進化する。その結果、非適応的な形質が進化することもあるため、遺伝相関は適応進化の障害にもなる。このことは、有用生物の遺伝的改良においても重要である。

本企画集会では、さまざまな生物の形質間の相関について遺伝学および進化生態学の実証研究を紹介する。それらの話題の提供を通して、生物の適応進化を形作る上で形質間の相関がどのような意義を持つのかを議論したい。

T09-1　遺伝的基盤を有する行動シンドローム： 擬死行動と歩行活動性の遺伝相関
中山慧（岡山大・進化生態）

T09-2　天敵昆虫の遺伝的改良に伴う行動および生活史形質の変化
＊世古智一, 三浦一芸（近中四農研），中山慧，安藤彰太郎，宮竹貴久（岡山大・進化生態）

T09-3　キスゲ属における送粉シンドロームに関する花形質の遺伝的基礎
＊新田梢（九大・理），廣田峻（九大・理），安元暁子（京大・生態研センター，チューリッヒ大・理），矢原徹一（九大・理）

T09-4　資源獲得競争とオス繁殖投資との相関関係
香月雅子（岡山大・進化生態）

T09-5　暴かれた遺伝子座内性的対立：雌雄間の遺伝相関が適応進化を妨げる
原野智広（九大・理）

企画集会　　　　3月9日　9:30-11:30　　　　　会場　E

T10　博物館の生態学 7　－生物多様性保全のシンクタンクを目指して－

企画者：井上雅仁（島根県立三瓶自然館），橋本佳延（兵庫県立人と自然の博物館）

自然環境や生物多様性の保全に対する民意が成熟しつつある今日，様々な課題や事業に生態学の研究者が携わる場面は増える一方である．研究者に期待される内容は，野生生物の保護や外来種対策，地域の自然環境に関する啓発などの課題解決から，レッドリストの作成や生物多様性地域戦略の策定などの政策提案まで様々である．生物多様性基本法による地域戦略策定の努力義務，COP10 の開催などの後押しもあり，これらシンクタンク事業の展開に生態学研究者の役割は重要度を増すことが予測される．自治体や市民から，大学，研究機関，博物館などに寄せられる要望には，各機関に所属する個々の研究者が対応することになるが，こうしたシンクタンクとしての活動を機関の重要な事業として位置付けたり，あるいは組織化したりする動きが博物館にみられる．本集会では，博物館をはじめとして，生態学の研究者が携わったシンクタンク事業を紹介しながら，研究者や研究機関が社会にもたらすことのできた効果について検証したい．その上で，今後，シンクタンクとして自治体や企業，市民に対峙するときの望ましい関係性や望まれるスキルについて考察したい．

コメンテータ：梶　光一（東京農工大学）

T10-1　趣旨説明－博物館に舞い込む生物多様性保全の相談ごと－
井上雅仁（島根県立三瓶自然館）

T10-2　社会と生態学の接点に身を置く博物館のシンクタンク機能－人と自然の博物館の事例－
橋本佳延（兵庫県立人と自然の博物館）

T10-3　千葉県の生物多様性保全関連施策における千葉県生物多様性センターの役割－とくにイノシシ，シカ，サルなどの保護管理施策を中心に－
浅田正彦（千葉県生物多様性センター／千葉県立中央博物館）

T10-4　生物多様性関連保全施策において地域の小規模博物館・研究者に期待される役割－北海道における現状と可能性－
渡辺 修（さっぽろ自然調査館）

企画集会　　　　3月10日　9:30-11:30　　　　　会場　C

T11　生態学者のためのゲノミクスアプローチ～理論、手法から実証まで～

企画者：手塚あゆみ（東北大・院・生命科学），山道真人（総研大・生命共生体進化学）

近年の分子遺伝学的手法の発展と、集団遺伝学的理論・バイオインフォマティクスの発達は、生物学全体に大きな影響を与えている。生態学も例外ではなく、ゲノム情報を活用して生態学的現象に迫る研究が数多く行われ、それらは「エコゲノミクス」と呼ばれている。これらの研究により、遺伝情報を活用することで

進化動態や個体群動態、更には群集構造への理解が深まりうることが示されており、今後ゲノミクスアプローチの重要性は更に増していくだろう。その一方で、一般の生態学者がゲノミクスアプローチをとる際は手法の選択や扱いに戸惑うことも多く、依然として敷居が高いのが現状である。

本集会では、分子生物学のモデル生物だけでなく、非モデル生物も対象としたゲノミクスアプローチを、理論・手法に加え実証例までを通して紹介し、エコゲノミクスがどのような生態学的な問いに応えうるのかを提示することで、ゲノミクスアプローチがより浸透することを目指したい。

はじめに生態学会誌で「始めよう！エコゲノミクス」を連載している山道が集団遺伝学のコアレセント理論について解説を行う。次に、牧野がバイオインフォマティクスにより、非モデル生物でも可能なマーカー作成を説明する。その後、実証例として手塚と奥山がそれぞれ、ゲノミクスアプローチにより明らかにした、適応形質の原因遺伝子やその規定する形質の進化過程などについて紹介する。最後に、会場からの質問・意見も交えて、今後のエコゲノミクスについて議論したい。

T11-1　集団遺伝学と生態学
山道真人（総研大）

T11-2　比較ゲノム解析による網羅的プライマーデザイン
牧野能士（東北大）

T11-3　グッピー色覚遺伝子にかかる選択の検出
＊手塚あゆみ（東北大），笠木聡（東大），河村正二（東大），Cock van Oosterhout（Univ. Hull），河田雅圭（東北大）

T11-4　形質、遺伝子、適応をつなぐ−新しい多様性生物学への挑戦−
奥山雄大（科博・植物）

企画集会　　3 月 10 日　9:30-11:30　　会場　D

T12　生物相互作用が引き起こす適応ダイナミクス

企画者：舞木昭彦（九大・理），立木佑弥（九大・理）

生物間（同種間、異種間）相互作用のなかで生じる表現型の進化を理解する数理的手法として量的遺伝モデルやアダプティブダイナミクスが近年発展してきている。これらのモデルの共通点は、遺伝学的なプロセスは単純化した上で、出生・死亡に影響する競争や被食捕食相互作用などの生態学的プロセスをモデル化し進化を理解しようとする点にある。本企画集会では、これらの理論を用いた最新の研究を紹介するとともに、モデルの適用範囲や今後の展開を議論したい。

T12-1　植物プランクトン細胞サイズの進化適応動態
吉山浩平（東大）

T12-2　樹木のマスティング進化における、進化的ジャンプ、進化的突破
立木佑弥（九大・理）

T12-3　多次元形質空間における進化的分岐
伊藤洋（国環研）

T12-4　敵対相互作用における適応ダイナミクス
舞木昭彦（九大・理）

企画集会　　　　　3 月 10 日　9:30-11:30　　　　　　会場　E

T13　日本の海の生物多様性保全のために学会ができること

企画者 : 安渓 遊地（山口県大・国際）

日本列島弧周辺の海は、世界で最高レベルの生物多様性を育んでいる。この生物多様性の高さの背景には、寒帯から熱帯までの海域の存在、サンゴ礁生態系の存在、複雑な海岸線とそれが作る多様な海岸環境、海岸から日本海溝に至る大きな深度勾配がある。しかし、海岸近くに集中する人間活動によって、海、特に自然海岸は大きく変貌し、その生物多様性は大きな危機にさらされている。瀬戸内海への上関原子力発電所建設計画や沖縄のジュゴン生息地の海草藻場埋立計画などは、差し迫った緊急の問題である。さらに、生物多様性条約国締約国会議、諫早湾の潮受堤防開門の高裁判決、あらたな危機がせまる四万十川の河口域、国際的な注目が集まるボーダーの海の自然など、次々に新たな事態が進行中である。

日本の海の生態系と生物多様性を保全するための日本生態学会の取組と、それに歩調をあわせて立ち上がった日本ベントス学会・日本鳥学会・軟体動物多様性学会・日本地理学会等の自然保護担当者や気鋭のジャーナリストによる最新報告。

日本鳥学会鳥類保護委員会からのコメントを予定している。

T13-1　学会の要望書とそのききめの検証
安渓遊地（山口県大・国際）

T13-2　日本列島弧の海岸の生物多様性の特徴と現状
加藤 真（京大院・人間 環境）

T13-3　諫早湾干拓と原発—基礎生物学から見えること
佐藤正典（鹿児島大・理）

T13-4　砂州消失問題から見える四万十川と土佐湾の生物多様性の危機
伊谷 行（高知大・教）

T13-5　北方四島—ボーダーの海をどう守るか
本間浩昭（毎日新聞・根室支局）

企画集会　　　　　3 月 10 日　9:30-11:30　　　　　　会場　I

T14　景観変化と生物多様性の時間的ダイナミクス

企画者 : 小柳知代（農環研），富松裕（東北大・生命科学）

現在見られる生物多様性のパターンは、現在だけでなく、過去の景観構造を反映していることが少なくない。これは、種の絶滅や定着が、景観や環境の変化に対して遅れて生じることで、多様性が一時的に過剰になる、または不足するために生じる。このような種の応答のタイムラグ（"extinction debt" や "colonization credit" などと呼ばれる）を考慮することは、効果的な保全･管理策を講じる上で極めて重要である。例えば、多くの種で絶滅までのタイムラグが大きいとき、今後失われる生物多様性の減少量を過小評価してしまう可能性がある。また、生息地を復元する際、分散能力の低い種が定着し種多様性が回復するまでには、数百年を要する場合もある。本集会では、異なる歴史的背景を持つ地域において、植物、哺乳類、陸生貝類、鳥類の幅広い分類群を対象として行われた研究例を通じて、変動環境下における生物多様性の時間的ダイナミクスを明らかにする重要性について議論したい。

T14-1　生物多様性の時間的ダイナミクスをめぐる概念と保全・管理への示唆
富松裕（東北大・生命科学）・小柳知代（農環研）

T14-2　関東平野における草原生植物の種多様性パターンと景観の履歴
小柳知代・楠本良延・山本勝利（農環研）・大久保悟・武内和彦（東大院農）

T14-3　哺乳類の分布パターンと景観の履歴
斎藤昌幸・小泉恵佑（横浜国大・環境情報）

T14-4　小笠原諸島における陸生貝類の種多様性パターンと景観の履歴
千葉聡（東北大・生命科学）

T14-5　利根川下流域の水田地帯におけるシギ・チドリ類の春季の分布パターンと景観の履歴
西川雄太（東大・生物多様性）・木本祥太（東大・生態環境調査）・天野達也・D.S. スプレイグ（農環研）・加藤和弘（東大・生態環境調査）・藤田剛・樋口広芳（東大・生物多様性）

企画集会　　　3 月 11 日　14:15-16:15　　　　会場　A

T15　もしも生態学者が市長になったら？　ー経済学から見た生態系サービスと生態学から見た生態系管理ー

企画者 : 大野（鈴木）ゆかり（東北大・生命科学），木村幹子（東北大・生命科学）

生物多様性を保全するためには、生態学の知識はもちろん必要ですが、お金や行政上の権限が必要になります。そこで、もしも生態学者が市長になったら、どうなるでしょうか？はたして、生物多様性の保全ができるでしょうか？

その答えを出すべく、本企画集会では、生態学者が政策で主導権を発揮できるのか、考えていきたいと思います。生物多様性の保全対策を進めるためには、どこまで保全・改善し、どのように実行するか、決定することが重要です。どこまで保全・改善するのかを測る評価方法として有効なのが、経済学を使った生態系サービスの評価です。COP10 でも、TEEB（The Economics of Ecosystems and Biodiversity）報告書の生物多様性の経済価値分析が注目を集めました。そこで経済学者の中嶌さんと野原さんをお招きし、生態学者に馴染みのない、生態系サービスと経済学の関係について、発表をしていただきます。そして、どのように実行するのかについては、外来種の最適管理を扱う横溝さんと自然再生を扱う三橋さんをお招きし、生態系管理についてお話していただきます。三橋さんには、実際に TEEB 報告書での事例から、現在の行政構造のなかで実現可能な施策についても紹介していただきます。これらの講演は、あなたが市長や政策スタッフとなった時、またならなくとも、あなたの親戚や一般の方に生態系管理について説明する時に、きっと役立つはずです。

T15-1　環境経済学から見た生物多様性： マクロ経済学によるアプローチ
中嶌一憲（兵庫県立大・環境人間学）

T15-2　環境経済学から見た生物多様性： ミクロ経済学によるアプローチ
野原克仁（東北大・生命科学）

T15-3　外来植物の最適管理戦略 : 駆除にどれだけ投資すれば良いのか？
横溝裕行（国立環境研究所）

T15-4　基礎自治体が実現可能な生態系管理のフレームワーク
三橋弘宗（兵庫県立大・自然研）

企画集会　　　　　3月11日　14:15-16:15　　　　　　会場　B

T16　外来生物法の見直しと将来

企画者：五箇公一（国立環境研究所），山田文雄（森林総合研究所），村上興正（京都精華大）

名古屋市で2010年10月に開催された「生物多様性条約第10回締約国会議（COP10）」の議決「愛知ターゲット（2020年までの目標）」において、外来生物対策では「侵入外来種と進入経路の特定、根絶、侵入防止」が目標になった。早期に外来生物法（2005年）を施行し取り組みを始めたわが国は高く評価されたが、より効果的な取り組みが求められている。わが国の外来生物法では、生態系に被害を及ぼす海外起源の侵略的外来生物の中から「特定外来生物」を指定し、飼育･栽培、運搬･保管、輸入、野外遺棄や植栽、譲渡を禁止し、必要な場合は防除が実施される。現在「特定外来生物」として97種類（うち国内定着種は48種類）が指定されている。一般に、外来種対策では、予防的措置、侵入初期対策、防除対策（実行可能性検証、個体数制御、根絶）、防除の効果検証などの取り組みが、外来生物の侵入や定着の状況に応じて実施される。本集会では、外来生物法施行後5年を振り返り、防除が実施されている各生物群の実践事例から課題抽出を行い、外来生物法および法律運用上の問題点について議論し、見直すべき点や具体的提案をワークショップ形式でまとめる。

T16-1　外来生物法の見直しの論点
村上興正（京都精華大）

T16-2　外来哺乳類の根絶に向けての問題
山田文雄（森林総合研究所）

T16-3　外来哺乳類対策の展開と地域協働
池田透（北海道大学）

T16-4　外来爬虫類・両生類の防除実態と課題
戸田光彦（自然環境研究センター）

T16-5　外来魚類対策からみるモデル事業と要注意外来生物
中井克樹（琵琶湖博物館）

T16-6　外来淡水二枚貝類の拡大と防除
伊藤健二（農業環境技術研究所）

T16-7　外来昆虫類の防除対策の見直し
井上真紀（国立環境研究所）

T16-8　非意図的外来生物の問題
五箇公一（国立環境研究所）

T16-9　外来生物関連法の見直しと社会的合意のあり方
草刈秀紀（WWFジャパン）

企画集会　　　　　3 月 11 日　14:15-16:15　　　　　　会場　C

T17　迅速な適応性（第 3 回）ー細胞から群集まで

企画者:嶋田正和（東大･総合文化･広域），三浦 徹（北大･環境），岸田 治（北大･フィールド科学センター）

ここ 2 年ほどで、″rapid adaptation″（迅速な適応性）や″genetic accommodation″（遺伝的同化）等のキーワードをつけた論文や講演が急速に多くなって来た。表現型可塑性をベースとする「適応」の研究は、いまやエピゲノム科学の分子生物学から、形態形成のエピジェネティクス研究、さらには生物間相互作用から生物群集に至る進化生態学まで、幅広く研究者の興味を集めている。

かつては、適応進化を考えるには集団遺伝学に基づく突然変異－自然選択の古典学説（適応度の定式化）が主要な理論的枠組みで、これは数十世代から数百世代の時間スケールのモデルである。しかし、いまや表現系可塑性と遺伝的同化のモデルは、1950 年代の Waddington に遡らなくても、21 世紀の知見で新たな枠組みを提示しつつある（West-Eberhard 2003, Kirschner & Gerhart 2005)。今後は、遺伝子型レベルの適応度地形と表現型レベルの適応度地形のズレを解析する理論が進展するだろう。

今回は、「細胞から群集まで」と副題つけ、生物間相互作用から群集までを網羅して、講演を企画した。最後に、新しい進化生態学である「迅速な適応性」の新展開で総合討論したい。

総合討論
コメンテーター：　岸田 治（北大・フィールド科学センター）

T17-1　はじめに：迅速な適応性と遺伝的同化－細胞から群集まで
嶋田正和（東大・総合文化・広域）

T17-2　社会性アブラムシにおけるコロニー防衛の表現型可塑性：多様な兵隊の進化と起源
＊植松圭吾，柴尾晴信（東大・総合文化）

T17-3　在来寄生蜂群集における侵入種オオモンシロチョウへの迅速な適応
田中晋吾（北大・昆虫体系）

T17-4　ワーカーの隠された攻撃性－カースト組成に依存した可塑的な防衛行動－
＊石川由希，田部 慧，三浦 徹（北大院・環境）

企画集会　　　　　3 月 11 日　14:15-16:15　　　　　　会場　D

T18　そんなに閾（しきい）は高くない！：生態系管理における生態学的閾値の応用と課題

企画者：岩崎雄一，古川拓哉

生態系管理を効果的に実施するには，着目する環境変動や撹乱に対する生物・生態系の応答を把握することが必要である。これらの研究では，しばしば閾値応答が観察されることがある（例：ある撹乱強度まで着目する生態的パラメータがほとんど変化せず，その後急激に変化する)。この閾値は生態学的閾値と呼ばれ，その同定は人にとって望ましくない変化（例：生物多様性や生態系機能の低下）を未然に防ぐ上で，またそのような変化が起こった生態系の修復を実施する上でも非常に有益な情報となりうる。

他方，「そもそも閾値なんてあるんかいな？」という素朴な疑問は常についてまわる。着目する要因以外の影響により，見かけの閾値応答が観察された場合，その閾値を管理に利用することは予防的とはいえないだろう。また，湖沼や森林，草地などにおいて，人為的な影響による生態系の急激かつ不可逆な変化（レジームシフト）が起こることが指摘されており，観測された閾値が可逆あるいは不可逆的な変化をもたらすものかを見極めることも有用である。本集会では，閾値応答が観測された事例研究（理論研究を含む）を紹介し，研究及び実際の管理に用いる上での閾値の解釈及び注意事項について議論したい。

コメンテータ：伊藤洋（国環研），富松裕（東北大）

T18-1　**趣旨説明：閾値って生態系管理に役立つの？**
＊岩崎雄一（東工大・理工），古川拓哉（横浜国大・環境情報），森章（横浜国大・環境情報）

T18-2　**水圏で閾値な話：数理モデルによる生態学的閾値の導出**
瀬戸繭美

T18-3　**森林で閾値な話：強度の薪利用が引き起こす植生の閾値的変化とその管理**
＊古川拓哉（横浜国大・環境情報），藤原一繪（横浜市大・生命ナノ），Samuel K. Kiboi， Patrick B. Chalo Mutiso（University of Nairobi）

T18-4　**草原で閾値な話：生態学的閾値の定義とその応用および今後の展望**
佐々木雄大（東北大・院・生命）

企画集会　　3 月 11 日　14:15-16:15　　会場　E

T19　群集生態学と生物地理学をつなぐメソスケールアプローチ

企画者：平尾聡秀（東大・秩父演習林），久保田康裕（琉球大・理），村上正志（千葉大・理）

群集生態学と生物地理学はそれぞれ異なるアプローチで群集形成（community assembly）の解明に取り組んできた。群集生態学では、局所スケールで現れる群集構造・動態のパターンをニッチ分化と分散制限で説明するのに対し、生物地理学では、マクロスケールで生じる群集構造・動態のパターンを進化履歴と地理的イベントに着目して説明する。しかし、実際には対象となる群集形成のスケールが、群集生態学と生物地理学が扱うスケールの中間に位置するメソスケールである場合も多い。メソスケールの群集形成を解明するには、群集生態学的プロセスと生物地理学的プロセスの両方を考慮する必要があり、それらのプロセスをつなぐメソスケールアプローチが求められる。

日本列島における種多様性の地理的分布は、過去の地理的イベントの影響を強く受けており、局所スケールのプロセス（ニッチ分化・分散制限）とマクロスケールのプロセス（進化履歴・地理的イベント）の両方が強く作用していると考えられる。そのため、日本列島における群集形成を理解するにはメソスケールアプローチが必要である。本企画集会では、群集生態学と生物地理学をつなぐという視点から、日本列島の群集形成に関する話題を提供する。話題提供者はそれぞれ異なる切り口によって、レビューを交えつつ自らの研究例を紹介する。そして、議論を通じて、この研究領域における問題点や論点を整理し、今後の展望を探りたい。

T19-1　**種多様性の地理的分布に対する歴史効果の影響**
久保田康裕（琉球大・理）

T19-2　**種多様性の地理的パターンとニッチ保守性**
平尾聡秀（東大・秩父演習林）

T19-3　**系統を考慮した生態ニッチモデリングによる群集保全**
村上正志（千葉大・理）

企画集会　　　　　3 月 8 日　14:15-16:15　　　　　　会場　C

T20　Facilitation を理解／応用するための理論基盤の整備にむけて

企画者：瀧本 岳（東邦大）

競争や捕食といった生物間相互作用と比べ、facilitation（促進、生物間の正の相互作用）への注目はずっと新しい。理論研究より実証研究が先行しており、理論研究の発展が必要とされている。Facilitation の重要性を予測する仮説に SGH（stress gradient hypothesis）がある。これは、ストレスの低い生息環境では競争が重要な相互作用となるが、ストレスの高い環境では facilitation が重要になると予測するものである。しかし、この仮説は十分に理論化されていない。Facilitation はまた保全・修復生態学の重要概念／道具として期待されるが、実際の応用はこれからである。本集会では、先行研究の紹介に加え、facilitation の理解／応用を進めるための理論基盤の整備にむけた議論を行いたい。本集会の話題提供者は、岩礁潮間帯や草原、湿原などのフィールドで、基礎生態学的な立場から、あるいは保全・修復生態学的な応用を見すえて、facilitation 研究を行ってきた。多様なバックグラウンドを持つ実証研究者の意見交流を通じて、有用な facilitation 理論の整備にむけた研究の方向性を見いだしたい。

T20-1　撹乱跡地の植物初期定着における facilitation：泥炭採掘跡地における谷地坊主の例
小山明日香（北大・環境科学院）

T20-2　草原の facilitation/competition を switch する要因を探る
吉原 佑（東北大・農）

T20-3　Stress gradient hypothesis（SGH）の成り立ちと今後の展開：SGH に未来はあるか！？
河井 崇（阿南高専・地域連携テクノセ）

T20-4　保全上重要な湖岸湿原における種・植生レベルの促進効果と伝統的植生管理
＊王喆，西廣淳，鷲谷いづみ（東大・院・農・保全生態）

T20-5　地域種数－局所種数パターンと facilitation
瀧本 岳（東邦大・理）

企画集会　　　　　3 月 11 日　14:15-16:15　　　　　会場　G

T21　種間相互作用の島嶼生物地理

企画者：杉浦真治（森林総研）

本企画集会では、生物間相互作用の視点から島嶼生物地理学に迫ることを目的とする。従来は、種間の相互作用をあまり考慮せず、特定グループの種数ー面積関係や、個々の種の系統地理などが研究されてきた。しかし、他種との相互作用なしに生息する種は存在しない。相互作用する複数種を同時に扱うことで、島嶼生物地理学の新たな展望が開けるだろう。

最近になって、種間相互作用を考慮した種数−面積関係や、共生関係を結ぶ複数種の系統地理に関する研究が発表されつつある。本企画集会では、上記の視点から、島嶼生態系で種間相互作用を扱っている 4 人の研究者による以下の講演を予定している。そのフィールドは、南西諸島、伊豆諸島、小笠原諸島、ニューカレドニア、フレンチポリネシアにまでおよぶ。さらに、捕食・被食系、送粉共生系、防衛共生系といった多様な相互作用系が登場する。

T21-1　企画の趣旨説明
杉浦真治（森林総研）

T21-2　絶対送粉共生系はいかに海を渡ったか−コミカンソウ科−ハナホソガ属共生系の島嶼生物地理−
川北篤（京都大）

T21-3　伊豆諸島における捕食者−被食者系の構築機序と形質進化−分岐年代の較正に基づく系統地理学的考察−
栗山武夫（東邦大）

T21-4　島の生物地理学でカタツムリとカタツムリ食ヘビの共進化過程を読み解く
細将貴（東北大）

T21-5　種間相互作用と島面積の関係−小笠原諸島の花外蜜腺を介したアリと植物の共生系ネットワーク−
杉浦真治（森林総研）

企画集会　3 月 11 日　14:15-16-15　会場　I

T22　生態系を時間軸でとらえる：炭素循環における遅れ現象

企画者：陀安一郎（京大・生態研セ），杉本敦子（北大・地球環境）

陸上生態系の炭素循環は植物による炭素固定に始まる。固定された炭素は植物バイオマスとして蓄積された後、リターとして土壌生態系に入る。巨大なプールである土壌炭素は、呼吸によって大気に戻るほか、分解系生物に利用される。さらに、炭素の一部は河川を通って海域へと運ばれる。炭素循環のそれぞれの過程における時間的遅れ（タイムラグ）を明らかにすることは、地球環境変化に対する生態系の応答の解明に不可欠である。また近年、時間的遅れを持った炭素の利用は生態系の食物網構造にも見られることが明らかになってきた。

本企画集会では、安定同位体比や放射性炭素 14 などの手法を利用して炭素動態をトレースし、生態系が生み出す様々な時間的遅れと、物質循環を支える生物間の相互作用を解明する方法について議論する。

T22-1　時間軸からみる生態系の構造
＊陀安一郎（京大・生態研セ），杉本敦子（北大・地球環境）

T22-2　樹木の種子生産に貯蔵炭素は必要か？−放射性炭素分析法を用いた検証研究−
＊市栄智明，吉田昌平（高知大・農），五十嵐秀一（愛媛大院・連合農），田中憲蔵，正木 隆（森林総研），陀安一郎（京大・生態研セ）

T22-3　年輪炭素同位体比を利用した炭素循環変動解析
鄭 峻介（北大・地球環境）

T22-4　Delay of ecosystem response through nitrogen cycling in Siberian Taiga
*Popova A., Sugimoto A., Tei Sh.（Hokkaido Univ.）, Tokuchi, N.（Kyoto Univ.）, Maximov, T.C.（IBPC SB RAS）

T22-5　植生遷移過程における食物網炭素起源の変化
原口岳（京大・生態研セ）

T22-6　陸上生態系と河川有機物動態
山下洋平（北大・地球環境）

T22-7　千年滞留した炭素が現在の河川食物網を支える〜 C-14 天然存在比による証明〜
石川尚人（京大・生態研セ）

企画集会　　　　　3 月 11 日　14:15-16:15　　　　　　会場　J

T23　里地における水田普通種減少の実態と謎解き

企画者：日鷹一雅（愛媛大・農）

近年、里地の生物多様性の保全・再生が推進されてきたが、その保全・再生対象は多くの場合，RDB に掲載された希少種や絶滅が心配される種である。RDB の目的からして、当然の帰結であると言える。しかしながら、RDB 掲載種偏重の裏で、非 RDB の健全であるはずの普通種の個体群が減少する現象を見逃してはならない。「RDB 種を保全・再生すれば、普通種は保全できるはずである」という論理は帰納的・演繹的な検証がいまだ不十分であり，感覚的なものに過ぎないであろう。本集会では、水田周りの里地里山の動植物の現状に焦点をあて、普通種といえども各地で減少しつつある実態を紹介する。普通種個体群の減少は，昨今の農業生態系やそれを取り巻く劇的な環境変化に起因していると考えられる。要因としては、農法の変化、農薬の影響、圃場整備の影響、外来種の影響、維持管理放棄などのいくつかの仮説が挙げられるだろう。本集会では、普通種個体群の激減要因についても，異なる分類群、多様な景観スケールの事例について、最新のトピックスを集約し議論を行う。そして，フィールド調査や実験を通した環境影響評価に基づいて普通種個体群の激減に関する謎解きについて言及する。

T23-1　里の爬虫両生類の受難の時代：整備と放棄と農法と
大澤啓志（日大・生物資源科学部）

T23-2　水田に依存した水生昆虫普通種の激減の主因ー苗箱施用殺虫剤の影響評価
日鷹一雅（愛媛大・農）・本林 隆（農工大・農）

T23-3　有機水稲作農法イノベーションの里地の生物多様性に対する影響評価
嶺田拓也（農研機構・ 農工研）・東 淳樹（岩手大・農）・日鷹一雅（愛媛大・農）

T23-4　整備年代の異なる畦畔における植物種の出現パターン
渡邉 修（信州大・農）

企画集会　　　　　3 月 12 日　9:30-11:30　　　　　　会場　I

T24　増加する風車 ー北海道から発信する風力発電問題 ー

企画者：早矢仕 有子（札幌大・法），白木 彩子（東京農大・生物産業），長谷川 理（エコ・ネットワーク）

北海道における風力発電設置基数は全国 1 位、設備容量で全国 2 位を占め（NEDO：2010 年 3 月現在）、国が導入を推進している風力発電事業の主翼を担っている。しかし、既存施設においては絶滅危惧種オジロワシ等鳥類の衝突事故を重ねながらも有効な対策が実施されておらず、また、小樽市銭函地区の発電施設建設予定地では、「北海道自然環境保全指針（平成元年）」で「保全を図るべき自然地域」に指定されている石狩海岸植生の損失が懸念されるなど、生態系への悪影響が看過できない状況にある。陸地建設における問題を回避できる洋上風力発電施設は、我が国では初めて北海道瀬棚町に建設され稼働しているが、既に大規模洋上発電施設を持つ欧州からは、繁殖中の海鳥類や渡り途中の鳥類におよぼす影響が報告されており、今後、日本でも同様の問題発生が危惧される。

果たして、生態系損失を回避しつつ再生可能エネルギー供給量を向上させることは可能なのか？あるいは、損失を伴う持続可能なエネルギー導入に対して社会的合意を得ることはできるのだろうか？

本集会では、鳥類・植物・環境エネルギー政策の各分野における専門家が知見を交え、共通認識の形成を目指す。

T24-1　**風力発電施設が鳥類に与える影響（概論）**
浦 達也（日本野鳥の会・自然保護室）

T24-2　**風車衝突事故がオジロワシに与える影響**
白木 彩子（東京農大・生物産業）

T24-3　**洋上風力発電が鳥類にもたらす影響**
風間 健太郎（名城大・農）

T24-4　**銭函海岸の風力発電問題～海岸植生の視点から**
松島 肇（北大・院・農）

T24-5　**鳥類等生態系保全と風力発電等再生可能エネルギーとの調和に向けて**
飯田 哲也（環境エネルギー政策研究所）

口頭発表　3月9日（水）（Oral Presentation, 9 March, Wednesday Afternoon）

Time	Room A 生態系管理	Room B 保全	Room C 景観生態	Room D 物質循環	Room E 行動
14:15	**A1-01 異なる放牧システムシナリオ下におけるモンゴル草地劣化の定量的予測** 加藤聡史（龍谷大学）	**B1-01 準絶滅危惧種シデコブシの現状と今後** *石田清（弘前大・農），鈴木節子（森林総研），玉木一郎（森林文化アカデミー），肥後睦輝（岐阜大・地域），木佐貫博光（三重大・生資），平山貴美子（京都府大・院・生命環境），戸丸信弘（名大・院・生命農）	**C1-01 北海道大雪山五色ヶ原地区広域における植物の環境応答** *星野仏方（酪農大・環境），金子正美（酪農大・環境），工藤岳（北大，環境科学院）	**D1-01 淡水二枚貝カラスガイの成長に伴う安定同位体比の変化** *菊地永祐，安野翔（東北大・東北アジア研），進東健太郎，嶋田哲郎（伊豆沼財団），高木優也（東北大院・生命），鹿野秀一（東北大・東北アジア研）	**E1-01 可携巣トビケラにおける鉱物組成が及ぼす砂巣材選択の学習への影響** *岡野淳一,菊地永祐,佐々木理,大井修吾
14:30	**A1-02 ブナの「花見」でクマ出没を予測する** 井田秀行（信州大・教・志賀自然教育研）	**B1-02 絶滅危惧種レブンアツモリソウの個体群動態-最近の状況-** *河原孝行（森林総研北海道）、北村系子（森林総研北海道）	**C1-02 十勝農耕地景観に点在する孤立林に生息する鳥類群集と景観構造の関係** *高田まゆら（帯畜大），平井克亥（岩手連大），赤坂卓美（北大），辻　修，柳川久（帯畜大）	**D1-02 ヨシ優占湿地における1年間の総一次生産量、生態系呼吸量、純生態系生産量-閉鎖系施設を用いた評価-** *鈴木静男(環技研)，横沢正幸（農環研），犬伏和之（千葉大・園），原登志彦（北大・低温研），木村康倫（サイエンテック），津賀正一，多胡靖宏，中村裕二(環技研)	**E1-02 傷ついたことを知った親は：保育行動における外傷への補償戦略** *馬場成実（九大院・生防研），弘中満太郎（浜松医大・生物），上野高敏（九大院・生防研）
14:45	A1-03 Application of high resolution satellite imagery to internalize carbon conservation as globally important ecosystem service into sustainable forest management using a case study in Sabah, Malaysian Borneo *LANGNER Andreas, KITAYAMA Kanehiro (Kyoto University)	**B1-03 絶滅危惧植物ハナシノブにおける結実率の個体群間の変異を決める要因** 横川昌史（京都大院・農），安部哲人（森林総研・九州），井鷺裕司（京都大院・農）	**C1-03 異なる景観スケールにおける河川生態系の解析** *三浦佳林(横浜国大・院・環境情報)，大野啓一(横浜国大・院・環境情報研究院),渡邉浩一郎(帝京科学大)	**D1-03 暖温帯におけるミズゴケ湿原の維持機構：物質収支と温暖化の影響** *福田栄二、中坪孝之（広島大・院・生物圏）	**E1-03 コイ科魚類オイカワにおける免疫力ハンディキャップ仮説の検証** *髙橋大輔（長野大・環ツー），大原健一（岐阜県水産課），安房田智司（中央水研），三浦さおり（OIST）
15:00	**A1-04 北海道の生態系一次生産と農林業生産-陸域生態系モデルのHANPP解析への応用-** *庄山紀久子，山形与志樹(国環研・地球C)，甲山隆司(北大・地球環境)	**B1-04 生物多様性評価の試み：希少性及び生態系サービスの視点から** 杉村乾（森林総研・国際）	**C1-04 河川改修と土地被覆の変遷ー河畔林の減少と増加ー** *久保まゆみ，中村太士（北海道大学・農）	**D1-04 森林渓流における栄養塩吸収に関する研究** *江草智弘,大手信人(東大院農),福島慶太郎,徳地直子,佐藤拓哉(京大フィールド研),谷尾陽一(京大院農)	**E1-04 鳥類警戒声情報の信頼性とトカゲ類による他種警戒声の盗聴** *伊藤亮（京大・野生研），森哲（京大・理）
15:15	**A1-05 生物多様性優先保全地域の選定手法開発ー島嶼のスダジイ群落での事例** *郡麻里（首都大院・理工・生命・客員研究員），可知直毅（首都大院・理工・生命）	B1-05 Phylogeographic analysis and population genetics of the threatened, slave-making ant *Myrmoxenus ravouxi* (Formicidae: Myrmicinae) *Suefuji, M. (Univ. Regensburg), Heinze, J. (Univ. Regensburg)	C1-05 Landscape habitat model of Asiatic black bears using resource selection functions *Chihiro Takahata, Shigeyuki Izumiyama. Interdisciplinary Graduate School of Science and Technology. Shinhu University	**D1-05 アジア大陸起源の大気降下物は日本の湖沼へどのような影響を与えているか？** *槻木玲美(愛媛大・SRFC)，占部城太郎（東北大・生命），谷幸則(静岡県立大・環境研)，上田眞吾（日大生物資源），阿草哲郎（島根大・医），小田寛貴(名大・年代測定センター)，王婉琳(東北大・生命)，田辺信介(愛媛大・CMES)	**E1-05 寄生蜂ゾウムシコガネコバチにおけるhost constancy** *石井弓美子（国立環境研),嶋田正和（東大・広域システム）
15:30	**A1-06 流域圏レベルにおける森林生態系サービス生産・消費評価** 大場真*.村上正吾,水落元之,王勤学,木幡邦男	**B1-06 哺乳類の地域絶滅がブナ林に生息する糞虫群集の多様性に及ぼす影響** *江成広斗(宇都宮大・農・里山)，小池伸介(農工大・農)，坂牧はるか(岩手大・連合農学)	**C1-06 天敵昆虫による生態系サービスの定量化: ダイズ圃場と周辺環境における卵寄生蜂の害虫抑制効果** *田渕研(東北農研),滝久智(森林総研),水谷信夫(中央農研),長坂幸吉(中央農研),守屋成一(中央農研)	**D1-06 瀬戸内海の食物網構造における地域特性に関する研究** *柴田淳也,濱岡秀樹,松元一将,南口哲也,赤松泰雅,宮崎寛史,近藤修平,國弘忠生,大西秀次郎,大森浩二　(愛大・CMES)	**E1-06 ギルド内捕食に対するアブラムシ寄生蜂の回避行動** *安東義乃、内海俊介、大串隆之　京都大学生態学研究センター

口頭発表　3月9日（水）（Oral Presentation, 9 March, Wednesday Afternoon）

Time	Room F	Room G	Room H	Room I	Room J
	動物生活史	動物個体群	分子	外来種	遷移・更新
14:15	**F1-01 道東・標津町における携帯電話を活用したリアルタイム通信によるヒグマ行動追跡** *坪田敏男（北大・獣），平野沙衣子（北大・獣），藤本靖（NPO南知床ヒグマ情報センター），上野洋一（NTTドコモ），長田雅裕（標津町），郡山尚紀（北大・獣），下鶴倫人（北大・獣）	**G1-01 アフリカ熱帯林におけるマンドリルの採食生態 -200頭の大集団が何を食べて生きるか-** *本郷峻，京都大・理	**H1-01 ホンシュウハイイロマルハナバチの遺伝的多様性** *田中洋之（京大・霊長研），須賀丈（長野県環境保全研），丑丸敦史（神戸大・発達科学），湯本貴和（総合地球環境研）	**I1-01 在来植物の分布パターンと局所プロセスが外来植物の分布拡大に与える影響：パンパスグラス（*Cortaderia jubata*）を例としたシミュレーションモデルによる解析** 横溝裕行（国環研）	**J1-01 The role of *Melastoma malabathricum* L. during successional process in grassland area, Pangandaran-West Java** Dian Rosleine* and Eizi Suzuki
14:30	**F1-02 釧路湿原のタンチョウ新規営巣地はどのような植生か** *正富宏之(NPO・タン保研)，正富欣之(北大院・農)	**G1-02 岐阜県大野郡白川村周辺に生息するニホンツキノワグマの食性の年次変化と栄養評価** *加藤真・杉浦里奈(名城大院・農)・内山幸紀・鈴木敏章・古賀桃子・日紫喜文(名城大・農)・加藤春喜(トヨタ白川郷自然学校)・橋本啓史・新妻靖章(名城大・農)	**H1-02 免疫関連遺伝子座MHCに基づくニホンテン集団の保全遺伝学的解析** *佐藤淳,御厨昭平,山口泰典(福山大・生物工),細田徹治(和歌山耐久高校)	**I1-02 日本における侵入害虫の分布拡大パターンの侵入順序解析による類型化** 森本信生（中央農研），小池文人（横浜国大）	**J1-02 針広混交林における遷移中期の林分動態** 高橋耕一（信州大・理）
14:45	**F1-03 雄アマゴの成熟サイズの個体群間変異：小さい川では小さい雄がお得？** *森田健太郎（北水研），坪井潤一（山梨水技セ）	**G1-03 北海道で繁殖するオジロワシの遺伝的多様性** 白木彩子*（東農大・生物産業）・杉本太郎（北大院・環境科学院）・斎藤慶輔（猛禽医学研）・大沼 学（国環研）	**H1-03 環境DNAを用いた魚類相把握法の開発** *源利文（地球研），山中裕樹（龍谷大・理工），本庄三恵，川端善一郎（地球研）	**I1-03 外来生物の過去の分布拡大情報をもとにしたヒト新型インフルエンザH1N1の分布拡大予測** *小池文人（横浜国立大学），森本信生（中央農業総合研究センター）	**J1-03 分断化された熱帯多雨林における非先駆性樹種の更新** *杉山杏奈、Chris J. Peterson（University of Georgia）
15:00	**F1-04 魚のにおい物質がミジンコ個体群に与えるコストとは?** *井上美幸，花里孝幸（信州大学山岳科学総合研究所）	**G1-04 ベイズ推定を用いた大型野生動物の個体群動態について** *関香菜子(兵庫県立大・院)，岸本康誉，坂田宏志(兵庫県立大学・兵庫県森林動物研究セ)	**H1-04 湖底に堆積する動物プランクトン遺骸（ミジンコ休眠卵鞘）の遺伝解析手法の開発** 石田聖二 東北大IAREO (*)，大槻朝 東北大生命，陶山佳久 東北大農，占部城太郎 東北大生命	**I1-04 特定外来生物ナルトサワギクの分布の現状および潜在的分布の予測** *堤道生（近中四農研セ）	**J1-04 御岳亜高山帯常緑針葉樹林における主要3樹種の稚樹の出現パターンと更新環境の不均一性** *西村尚之(群馬大・社会情報)，星野大介(森林総研・東北)，清野達之(筑波大・生命環境)，杉田久志(森林総研)，鳥丸　猛(弘前大・農生)
			進化		
15:15	**F1-05 池の堆積物中におけるミジンコ耐久卵の分布と孵化条件** *平野真聡，花里孝幸(信州大学山岳科学総合研究所)	**G1-05 熱帯昆虫の個体数変動における季節性パターン** 岸本圭子（地球研）	**H1-05 The use of morphometrics in the analysis of ecomorphology** *Sievwright, H (University of Tokyo), Higuchi, H (University of Tokyo)	**I1-05 西ジャワ州における国立公園の移入種の分布調査** 工藤芳文*（鹿大,理工学）,Zaenal Mutaqien（チボダス植物園）,鈴木英治（鹿大理工学）	**J1-05 亜高山帯性針葉樹の実生定着阻害に及ぼす積雪下温度環境の影響 —地表面と根張り・マウンド上の冬季温度環境のちがい—** *杉田久志(森林総研)，高橋利彦(木工舎「ゆい」)，市原　優(森林総研・東北)
	動物群集				
15:30	**F1-06 群集における機能形質の動態と生態系機能：霞ケ浦動物プランクトン群集への適用** 田中嘉成（国環研・リスク）	**G1-06 トゲサンゴ個体群の存続可能性解析** *向草世香（JSTさきがけ・長大水産・琉大熱生研），新垣誠司（琉大・熱生研），玉井玲子（琉大院・理工），酒井一彦（琉大・熱生研）	**H1-06 日本産アブラゼミ類の分子系統地理** *長太伸章（京都大・理），戸田守（琉球大・熱生圏），曽田貞滋（京都大・理）	**I1-06 ハワイ諸島のギンネム林における在来植物の更新阻害** *吉田圭一郎（横浜国大・教育人間），Daehler, C.C.（Univ. of Hawaii, Botany Dept.）	**J1-06 函南原生林における小氷期以降のブナ更新動態に与えた 冬期と夏期の気温の影響** *小出大，持田幸良 (横浜国大・環境情報)

口頭発表 3月9日(水)(Oral Presentation, 9 March, Wednesday Afternoon)

Time	Room A 生態系管理	Room B 保全	Room C 景観生態	Room D 物質循環	Room E 行動
15:45	**A1-07 都市近郊の里山林におけるNPOや行政による非伝統的管理と生態系サービスからみた林床の多様性との関係** *島田和則,勝木俊雄(森林総合研究所),岩本宏二郎,伊東宏樹(森林総合研究所多摩森林科学園),齊藤修(早稲田大学高等研究所)	**B1-07 カシノナガキクイムシの行動モデルによるナラ枯れの感染拡大予測** *大野(鈴木)ゆかり, 今廣佐和子, 河田雅圭, 中静透(東北大・生命科学)	**C1-07 気候変動に伴ったアフリカ植生変化におけるmigration過程の影響:シミュレーションによる検討** *佐藤永(名古屋大・環境学),伊勢武史(海洋研究開発機構)	**D1-07 カタクチイワシの栄養段階と食源ーバルク窒素・炭素及びアミノ酸窒素同位体分析に基づく** *宮地俊作, 馬谷原武之(日大院生物資源), 對馬孝治, 笹田勝寛, 河野英一(日大生物資源科学), 小川奈々子, 力石嘉人, 大河内直彦(JAMSTEC)	**E1-07 Social and Environmental Effects on Mating Strategies in Barn Swallows** *Matsuda, A.[1], Kitamura, W.[1], Yamaguchi, N.[2], Higuchi, H.[1] ([1]University of Tokyo, [2]University of Nagasaki)
16:00	**A1-08 里山の生態系サービスのインベントリ整備とダウンスケーリング** 齊藤修(国連大)	**B1-08 富士山亜高山域における標高別のシカ剥皮** *竹内亨(電中研・環境),小林卓也(電中研・環境), 梨本真(電中研・環境)	**C1-08 Designing low carbon society management toward sustainabiity of homegarden practices in Indonesia** *Kaswanto, Nobukazu Nakagoshi (Hiroshima Univ.), Hadi Susilo Arifin (Bogor Agricultural Univ.)	**D1-08 長距離渡りする海鳥の越冬地と汚染物質濃度** 宮崎麻衣,中沢亜里砂,山下麗,高田秀重(東京農工大農),山本誉士(総研大),高橋晃周(極地研),P. Trathan (英南極局),*綿貫豊(北大水産)	**E1-08 ヒゲペンギンの潜水行動:抱卵期と育雛期の比較** *森貴久(帝京科学大), 國分亙彦, 高橋晃周(極地研)
16:15	**A1-09 里山におけるシジュウカラの減少** *大堀聰・黒江美紗子(早稲田大学自然環境調査室)	**B1-09 草原劣化に対するヤギとヒツジの影響は異なるか** 藤田昇(地球研), N.Amartuvshin(モンゴル・植物研).山村則男(地球研)	**C1-09 瀬田地域での320年間の里山景観の変遷と生物多様性** *林珠乃(龍谷大学・里山研), 松田庄司(南大萱資料室), 谷川洋平(龍谷大学・理工学部), 丸山敦, 宮浦富保(龍谷大学・里山研)	**D1-09 カワウがもたらす物質循環が土壌生態系に与える影響** *都築一秀(名城大学院・農)近藤慶一, 新妻靖章, 日野輝明, 富田直樹	**E1-09 カワウにおける最適逃避行動の時空間的変動 -先験情報利用の可能性-** *富永光(筑波大・院・生命環境科学), 藤岡正博(筑波大・農技センター)
16:30	**A1-10 農業環境影響指標の構築と都道府県での影響評価及びその解析** *三島慎一郎, 神山和則(農環研)	**B1-10 マガンの小麦食害に対する代替採食地の効果** *佐藤舞子(酪農学園大院・酪農),熊谷麻梨子(酪農学園大・環境),牛山克己(宮島沼水鳥・湿地センター),山舗直子(酪農学園大院・酪農)	**C1-10 Effect of historical land use on spatial distribution of evergreen broadleaved tree species at their northern limit** *Luis Alberto Vega Isuhuaylas (Graduate School of Environment and Information Sciences, Yokohama National University), Fumito Koike (Graduate School of Environment and Information Sciences, Yokohama National University), Suzuki Makoto (Tokyo University Forest in Chiba)	**D1-10 土壌炭素プールの温暖化応答-微生物分解の温度依存性を規定する因子の解明** *和穎朗太, 岸本(莫)文紅, 米村正一郎, 白戸康人, 平舘俊太郎(農環研)	**E1-10 勝ち癖・負け癖の行動生理学:社会性昆虫と武器甲虫の事例から** *岡田泰和(岡大, 環), 辻和希(琉大・農), 三浦徹(北大・環), 佐々木謙(金工大, バイオ), 岡田賢祐(岡大, 環), 宮竹貴久(岡大, 環)
16:45	**A1-11 イネ害虫アカスジカスミカメ個体群の実験的分断化による抑制効果** *吉岡明良(東大・農),高田まゆら(帯畜大),鷲谷いづみ(東大・農)	**B1-11 森林施業方法の違いがもたらす猛禽類の狩場としての有効性** *松木佐和子, 藤岡惟, 佐藤遼太(岩手大農)	**C1-11 地図情報を用いた植生面積推定法の検討-中国地方の半自然草地抽出の事例-** *太田陽子(緑と水の連絡会議),井上雅仁(島根県立三瓶自然館), 堤 道生,高橋佳孝(近中四農研)	**D1-11 落葉広葉樹林における異なる3手法を用いた土壌呼吸の分離** *友常満利, 吉竹晋平, 渡辺真也, 関根有哉 (早稲田大・院・先進理工), 小泉博 (早稲田大・教育)	**E1-11 鱗食性シクリッドの右利き・左利きにおける捕食行動の運動解析** *竹内勇一(名大・理), 堀道雄(京大・理), 小田洋一(名大・理)
17:00	**A1-12 農業用水路に生息するイシガイ類群集の分布制限要因** *秋山吉寛(名大環境)	**B1-12 北海道にタンチョウの営巣できる場所は残されているか** *正富欣之(北大院・農), 正富宏之(NPO・タン保研)	**C1-12 国指定重要文化的景観の生態系評価** *中越信和(広島大・院・国際協力)	**D1-12 RothCモデルへのベイズ的アプローチによる土壌炭素分解率の温度依存性の推定** 櫻井玄(農環研),上村真由子(日大・生物資源),米村正一郎(農環研),飯泉仁之直(農環研),白戸康人(農環研)、,横沢正幸(農環研)	**E1-12 南アルプス北部におけるニホンジカの季節移動** *瀧井暁子(信州大院・総合工学系), 泉山茂之(信州大・農), 望月敬史(あかつき動物研究所)
17:15	**A1-13 農業水路モニタリングデータを用いた水生植物に対する高リスク除草剤の推定** *池田浩明,石坂眞澄,山中武彦,細木大輔,稲生圭哉,山本勝利(農環研)	**B1-13 新潟県におけるイノシシの好適環境 -Maxentを利用した生息適地の抽出-** *望月翔太(新潟大・院・自然科学), 山本麻希(長岡技科大・生物系), 村上拓彦(新潟大・農)	**C1-13 奥日光の湿原域の消失速度** 千葉幸弘(森林総研)	**D1-13 土壌炭素モデルの垂直構造化と放射性炭素データによる検証** *伊勢武史(海洋研究開発機構・物質循環), 加藤直人(海洋研究開発機構・物質循環)	**E1-13 表面採食性海鳥の海上分布に影響する要因** *倉沢康大, 小埜恒夫(北水研), 板橋豊(北大院水産), 山本麻紀(長岡技大), 綿貫豊(北大院水産)

口頭発表　3月9日（水）（Oral Presentation, 9 March, Wednesday Afternoon）

Time	Room F 動物群集	Room G 動物個体群	Room H 進化	Room I 外来種	Room J 植物繁殖
15:45	**F1-07 文献調査に基づく60年代琵琶湖食物網の構築** *高嶋あやか(龍谷大・理工),近藤倫生(龍谷大・理工)	**G1-07 佐渡および新潟の砂浜海岸におけるナミノリソコエビ（端脚目）個体群の時空間変動** 高田宜武,梶原直人(水研セ・日水研),鈴木雄也(新潟大・院・自然科学),山平寿智(琉球大・熱生研)	**H1-07 系統比較法から明らかになったアリ共生型アブラムシの増大したwing loading** 八尾泉(北大・農)	**I1-07 外来タンポポに対して強い在来タンポポと弱い在来タンポポ：何が違うのか？** *西田隆義(滋賀県立大),西田佐知子(名古屋大),金岡雅浩(名古屋大),高倉耕一(大阪市立環境研)	**J1-07 開花時期に伴い変動する複数訪花者の送粉貢献** *坂本亮太, 森長真一, 伊藤元己(東大院・総合文化), 川窪伸光(岐阜大・応用生物)
16:00	**F1-08 河川横断構造物のない朱太川水系における魚類群集と空間分布** *宮崎佑介, 照井慧, 鷲谷いづみ(東大院・農)	**G1-08 フナ地域個体群の種内系統構成：福井県三方湖水系におけるケーススタディー** *武島弘彦(東大・大気海洋研), 松崎慎一郎(国環研), 児玉晃治(福井県・水試), 前田英章(福井県・海浜自然セ), 西田睦(東大・大気海洋研)	**H1-08 飛翔能力の退化は種多様性の増加をもたらすか―ヒラタシデムシ亜科を例に―** *池田紘士(森林総研), 西川正明(海老名市), 曽田貞滋(京大・理)	**I1-08 港に生育する除草剤抵抗性ライグラスの存続性** *下野綾子(筑波大),下野嘉子(農環研),大澤良(筑波大学)	**J1-08 コバノガマズミに訪花する昆虫のサイズ・行動と結果率の関係** *吉本敦子(石川県白山自然保護センター,金沢大学・院),木下栄一郎(金沢大学環日本海域環境研究センター)
16:15	**F1-09 花崗岩渓流における底生動物の特性：群集構成とトゲマダラカゲロウ属の体斑紋** *山中信彦,加賀谷隆(東大院・農・森林動物)	**G1-09 小河川におけるウナギ漁獲量の変動** 立川賢一*・今村勝範(流域総合研究会)	**H1-09 遺伝変異の隠蔽機構は存在するか？：キイロショウジョウバエを用いたスクリーニング** *高橋一男(岡山大・RCIS)	**I1-09 上海ガニ問題を整理する：特定外来生物モクズガニ類の日本侵入可能性** 小林哲(Independent)	**J1-09 立山ハイマツ帯の果実数年変動** *野間直彦,曽根綾子(滋賀県立大・環),上原佳敏,久米篤(九州大・農)
16:30	**F1-10 サンゴ礁魚類の局所群集とメタ群集の構造：拡大航空写真を用いた生息種数の予測** *服部昭尚(滋賀大・教育・理数情報), 渋野拓郎(水研セ・養殖研)	**G1-10 絶滅危惧種ミヤマシジミのメタ個体群・地域個体群の構造について** 渡辺通人(河口湖ﾌｨｰﾙﾄﾞｾﾝﾀｰ自然共生研究室)	**H1-10 湖沼適応と関連した網羅的遺伝子発現パターンの変化：タモロコ属魚類の場合** *小北智之, 熊田裕喜(福井県大・海洋), 柿岡諒(京大・理), 奥田昇(京大生態研)	**I1-10 利水施設網に侵入した特定外来生物カワヒバリガイの生息状況** 伊藤健二(農環研・生物多様性)	**J1-10 種子生産のポジション効果と遺伝効果** *工藤岳(北大地球環境)、井田崇、L.D. Harder (Univ. Calgary)
		数理			
16:45	**F1-11 高水温によるサンゴ大規模白化の短期的"勝者"は長期的にも"勝者"だったか？** R. van Woesik (Florida Inst Tech), *酒井 一彦(琉球大・熱生研), A. Ganase (Florida Inst Tech), Y. Loya (Tel Aviv Univ)	**G1-11 太平洋クロマグロ0歳魚の漁獲死亡率推定を目的とした標識放流計画の検討** *岩田繁英(水研センター・遠水研), 市野川桃子(水研センター・遠水研), 竹内幸夫(水研センター・遠水研)	**H1-11 平衡選択と局所選択のバランスが形づくる多型比の緯度勾配** *高橋佑磨1, 吉村仁2, 守田智2, 渡辺守1 (1筑波大院・生命環境, 2静岡大・創造院)	**I1-11 プランクトン食魚による特定外来生物カワヒバリガイの幼生への捕食圧** *中野大助, 小林卓也, 坂口勇(電力中央研究所)	**J1-11 一斉開花が樹木の肥大成長と炭素固定に与える影響** *中川弥智子(名大・生命農), 片山歩美(九大・演習林), 中静透(東北大・生命)
17:00		**G1-12 産卵親魚量あたり加入量における密度効果のステューデントt検定** 丹羽洋智(中央水産研究所)	**H1-12 ミジンコにおける防御形態形成リアクションノームの個体群間変異とその分子基盤** 杉本直己, 宮川一志, *三浦徹(北大・院環境)	**I1-12 外来ザリガニの侵入に対する生物的抵抗？在来捕食者が生態系を守る** *千谷久子(東大院・新領域), 西川潮(新大・超域), 高村典子(国環研・リスク), 山室真澄(東大院・新領域)	**J1-12 遺伝子発現解析を用いた多年生ハクサンハタザオの温度依存開花機構の解明** *鹿嶋一孝(北大・環境), 小笠原希実(北大・医), 鈴木悠也(北大・理), 工藤洋(京大・生態研), 千葉由佳子(北大・創成), 佐竹暁子(北大・創成)
17:15		**G1-13 生活史の違いで化学物質の生態毒性はどう変わるか** *加茂将史(産総研・安全科学), 秋田鉄也(総研大・先導研), 林岳彦(国環研・環境リスク)	**H1-13 イトヨにおける新規環境への急速適応** 安達竜也(東北大・生命), 森誠一(岐阜経済大), 牧野渡(東北大・生命), 河田雅圭(東北大・生命), *北野潤(東北大・生命, JSTさきがけ)	**I1-13 アライグマ捕獲用巣箱型わなの開発** *阿部豪, 兵庫県立大学	**J1-13 海産緑藻の配偶システムと有性生殖のコスト** *富樫辰也(千葉大・海)

口頭発表　3月10日（木）（Oral Presentation, 10 March, Thursday Afternoon）

Time	Room A 生態系管理	Room B 保全	Room C 群落	Room D 物質循環	Room E 行動
14:15	A2-01 三方湖（福井県）におけるヒシの繁茂が生態系の季節動態に及ぼす影響 *加藤義和（東京大学・総合文化),西廣淳（東京大学・農学生命科学),吉田丈人（東京大学・総合文化)	B2-01 市民参加型コウモリ類モニタリングプロジェクトiBats-Japanについて *福井大(森林総研北海道), Kate E. Jones（Zoological Society of London)	C2-01 龍谷の森の植生変遷と環境要因 *清水裕輔(龍谷大・理), 倉地奈保子(平岡森林研究所), 宮浦富保(龍谷大・理)	D2-01 植物リターによる土壌分解過程の制御を弱める微生物群集の機能的多様性 *潮雅之（京大・生態研センター)、三木健（台湾大・海洋研)、Teri C. Balser（Univ. of Wisconsin-Madison)	E2-01 潜るか潜らないか、カモたちの選択 -北方で越冬する陸ガモの採食行動- 岡　奈理子
14:30	A2-02 三方湖（福井県）におけるヒシの分布に影響する要因 *西廣淳（東大・農学生命), 加藤義和, 吉田丈人（東大・総合文化), 鷲谷いづみ（東大・農学生命)	B2-02 生息痕からみた韓国南部地域におけるユーラシアカワウソ Lutra lutraの長期推移 *キム・ヒョンジン(東農大)、安藤元一(東農大)、ハン・ソンヨン(韓国カワウソ研究センター)、佐々木浩(筑紫女学園大)、小川 博(東農大)	C2-02 八ヶ岳東麓における森林構造の標高による変化 *清野達之（筑波大・生命環境), 山口翔太(筑波大・生物資源)	D2-02 亜熱帯林の漂白落葉におけるアミノ酸及び無機態窒素動態 *保原達、野呂健太(酪農大・環境)、大園享司(京大・生態研)	E2-02 北海道知床半島でサケ科魚類を捕食するヒグマの生態：個性的な行動の特徴 小宮山英重(野生鮭研)
				種多様性	社会生態
14:45	A2-03 湖沼の生態系構造と水質にウナギが及ぼす影響 －隔離水界を用いた実験的解析－ *小林宏輝, 花里孝幸(信州大学山岳科学総合研究所)	B2-03 コイヘルペスウイルス病が琵琶湖の野生型コイへもたらした影響 *内井喜美子（東大・総合文化), 奥田昇（京大・生態研), 源利文（地球研), 川端善一郎（地球研)	C2-03 高齢スギ林における個体サイズと林分構造 *右田千春, 壁谷大介, 齋藤智之, 千葉幸弘（森林総研)	D2-03 やんばるの外生菌根菌類 *松岡俊将(京大・生態研), 広瀬大(日大・薬), 大園享司(京大・生態研)	E2-03 キビタキの採食方法における性差 *岡久雄二(立教大・院・理), 森本元(立教大・理), 高木憲太郎（バードリサー チ)
15:00	A2-04 氾濫原水域における魚類群集構造を決定する要因 *永山滋也（土木研究所)、根岸淳二郎（北海道大学)、久米学（土木研究所)、佐川志朗（土木研究所)、萱場祐一（土木研究所)	B2-04 モニタリングデータと生態学的特性から探るラムサール条約湿地三方湖の淡水魚類相の変化 松崎慎一郎（国環研),児玉晃治（福井県・水試),照井慧（東大・農)、武島弘彦（東大・大気海洋研),佐藤専寿（福井県大・生資),富永修（福井県大・生資),前田英章,多田雅光（福井県・海浜自然セ),鷲谷いづみ（東大・農),吉田丈人（東大・総合文化)	C2-04 草地における群集および種のバイオマスの空間分布 *塩見正衛(茨城大)・陳俊(西北農林科技大)・佐々木彩(茨城大・理工)	D2-04 印旛沼におけるツボカビの多様性と出現パタン *鏡味麻衣子（東邦大学理学部)、石井伸昌（放射線医学総合研究所)	E2-04 アカオオハシモズにおける手伝い行動の個体差 *江口和洋（九大院・理・生物), 浅井芝樹（山階鳥類研究所), 山岸哲（新潟大・朱鷺・自然再生学研究センター)
15:15	A2-05 メコン川の流域開発と魚類生息地評価 *亀山哲（国環研・アジアＧ）, 野原精一（国環研・アジアG), 佐藤達明（アルファ水工), 藤井良昭（アルファ水工)	B2-05 水俣湾砂泥干潟における底生生物分布状況-水銀汚染を乗り越えて- 森敬介（国立水俣病総合研究センター)	C2-05 本州日本海側山地の亜高山・高山植生史の再検討 沖津　進（千葉大・園芸学研究科)	D2-05 天ヶ瀬ダム放流による冠水が宇治川河川敷の地表性甲虫群集に与える影響 *藤澤貴弘,石井　実(大阪府大院・生環・昆虫)	E2-05 Juvenile hormone guides the worker development in the termite *Nasutitermes takasagoensis* *[1]Bourguignon T.,[1] Gotoh H., [1]Miura T.
15:30	A2-06 意図せず創出された干潟に生息する希少ベントス：生息分布メカニズムの解明 *河井崇(阿南高専・地域連携テクノセ),大田直友(阿南高専・建設システム工)	B2-06 多毛類の海洋底質汚染物質浄化に係わる物質代謝機構の解明 *伊藤克敏, 伊藤真奈, 持田和彦, 隠塚俊満(水研セ・瀬戸内水研), 太田耕平, 三浦　猛(愛媛大・南水研), 藤井一則(水研セ・瀬戸内水研)	C2-06 青森県八甲田山地における有効花粉飛来範囲（RSAP)と相対花粉生産性（PPE)の推定 *中村琢磨（横浜国大院・環境情報), 高原　光（京都府大院・生命環境), 大野啓一（横浜国大院・環境情報)	D2-06 スイセンハナアブ属の遺伝的多様性-外来種と在来種の比較- *須島充昭, 伊藤元己（東大・総合文化)	E2-06 オオシロアリにおける兵隊特異的化学物質とその社会機能 *北條賢（流大・農), 石川由希, 三浦徹（北大・地環研)

口頭発表 3月10日(木)(Oral Presentation, 10 March, Thursday Afternoon)

Time	Room F 動物群集	Room G 数理	Room H 進化	Room I 外来種	Room J 植物生理生態
14:15	**F2-01 同位体が解き明かす熱帯雨林のハチ目とシロアリ目の食性** *兵藤不二夫(岡山大・異分野コア), 竹松葉子(山口大・農), 松本崇(京大院・人環), 乾陽子(大教大・教養), 市岡孝郎(京大院・人環)	**G2-01 著しく異なる遺伝子型を持つ北海道マイマイガの遺伝子浸透シミュレーション** *東浦康友、澤田有莉、五十嵐章裕、宮川 毅(東京薬大・生命科学)、重定南奈子(同志社大・文化情報)	**H2-01 性的対立と「性の維持」問題：生殖様式を巡る軍拡競争の結末** 川津一隆(京大院・農・昆虫生態)	**I2-01 核と葉緑体のSSRマーカーによるニセアカシアの河畔林形成過程の解明** *黒河内寛之,當山啓介,寺本宗正,宝月岱造(東大院・農)	**J2-01 異なる標高におけるハクサンハタザオとイブキハタザオの紫外線によるDNA損傷とその防御メカニズム** *永野聡一郎(東北大・院・生命科学), 齋藤佳奈(宮城大・食産業, 東北大・院・生命科学), Wenhui Zhang(Sch. of Life Sci., Liaocheng Univ.), 矢野歳和(宮城大・食産業), 森長真一(東大・院・総合文化), 日出間 純(東北大・院・生命科学), 彦坂幸毅(東北大・院・生命科学)
14:30	**F2-02 耕作地の放棄に伴うチョウ群集の変化** 大脇淳(新潟大・超域), 小川弘司(白山自然保護セ), 竹谷宏二, 富沢章(石川県・昆虫館)	**G2-02 腹足類の殻口の傾きにおける制約** 野下浩司(九大院・システム生命)	**H2-02 カワトンボ2種の同所的形質分岐：シグナル形質分岐と体サイズ分岐の地理的パターン** 椿宜高*, 奥山永(京大生態研セ)	**I2-02 ニュージーランドに侵入したフタモンアシナガバチの遺伝的多様性** *土田浩治(岐阜大・昆虫生態)	**J2-02 落葉広葉樹の通水機能の維持に対する乾燥時の葉の失水調節および乾燥解消後の通水機能の回復の寄与** *小笠真由美(岡大院・環境), 岡本麻里亜(岡大・農), 三木直子(岡大院・環境), 山中典和(鳥大・乾地研), 吉川 賢(岡大院・環境)
14:45	**F2-03 甲虫多様性に影響を与える環境要因 -カラマツ人工林での調査-** 大澤正嗣(山梨森研)	**G2-03 生態ネットワーク上のキーストーン種を特徴づける様々な指標の比較** 佐藤一憲(静大・工)	**H2-03 真冬の分断による異時的隔離の並行進化** 山本哲史* 曽田貞滋	**I2-03 外来アリは甘露排出者によって増える!?** *田中宏卓, 辻和希(琉球大学・農)	**J2-03 温帯落葉広葉樹の道管配列と開葉型の関係** *高橋さやか(京大・農)、岡田直紀(京大・農)、野渕正(京大・農)
15:00	**F2-04 日本の森林における地表徘徊性甲虫群集の地理的・季節的変異：モニタリングサイト1000森林・草原調査より** *丹羽慈・岸本年郎(自然研)	**G2-04 メタ群集ダイナミクスにおける双安定な同期・非同期状態のスイッチング** *鈴木健大(東大総文), 吉田丈人(東大総文・さきがけ)	**H2-04 被子植物誕生：二親性胚乳の進化に関する理論的解析** 酒井 聡樹(東北大・生命科学)	動物と植物の相互関係 **I2-04 アリ植物オオバギ属の幹内に共生するカイガラムシ類の寄主選好性：核DNA系統樹を用いた検証** *上田昇平(信大), Quek S.-P.(ハーバード大), Gullan S. P.(カリフォルニア大), 近藤拓正(コロンビア大), 市岡孝朗(京大院), 村瀬香(東大院), 市野隆雄(信大)	**J2-04 ブナシュートの伸長過程の追跡** 本坊美穂子(石川県立大)
15:15	**F2-05 間接相互作用網における「種多様性・生態的機能・形質進化」のつながり** *内海俊介(東大広域),安東義乃(京大生態研),Heikki Roininen (Eastern Finland Univ),高橋純一(京産大),大串隆之(京大生態研)	**G2-05 環境撹乱下における拡散戦略の進化の、コロニーのサイズ依存の死亡率と推移率からの影響について** *中丸麻由子(東工大・社理工),鈴木清樹(総研大・生命共生体進化),高田壮則(北大・地環研),辻和希(琉球大・農)	**H2-05 標高30-3000mに生えるミヤマハタザオの局所適応：相互移植実験による検証** *田中健太(1筑波大・菅平セ), 山口正樹(2京大・生態研), 恩田義彦(1), 小林元(信大・AFC), 杉坂次郎(2), 河野真澄(2), 工藤洋(2)	**I2-05 植食性昆虫の植物上3D空間分布と化学元素組成** *津田みどり,山川武夫,中牟田なおみ(九大院・農)	**J2-05 ハンノキ樹冠内の葉の特性の変化** 大川千絵(石川県立大)
15:30	**F2-06 ニホンジカによる林床環境の改変がオサムシ科に与える影響** *岡田拓也(立正大院・地球),須田知樹(立正大・地球)	**G2-06 生息地の形状が決める「有効分散率」：連続分布する生物の群集動態を近似するためのパッチモデル** 若野友一郎, 池田幸太(明治大), *三木健(台湾大), 三村昌泰(明治大)	植物個体群 **H2-06 クローナル植物におけるジェネティック・エピジェネティック変異** *荒木希和子, 工藤洋(京大・生態研)	**I2-06 植物一送粉者ネットワーク構造の地理的パターン** *酒井章子(地球研), 徳永幸彦(筑波大・生命環境), Arndt Telschow (Helmholtz Centre for Infection Research, Germany)	**J2-06 Seasonal N allocation within an oak canopy exposed to experimental warming** *Muller, Onno (Hokkaido Univ.), Hikosaka, Kouki (Tohoku Univ.), Hiura Tsutom (Hokkaido Univ.)

口頭発表 3月10日（木）（Oral Presentation, 10 March, Thursday Afternoon）

Time	Room A	Room B	Room C	Room D	Room E
	生態系管理	保全	群落	種多様性	社会生態
15:45	A2-07 **ナマコの資源管理とナマコ経済の将来予測** 中塚彩人 北海道大学環境科学院	B2-07 Priority Determination on Handling The Critical Land at Cirasea Watershed, Bandung Regency *FIRDAUS, RACHMAD,	C2-07 **越後平野の主要な氾濫原要素における植物の出現特性** *石田真也（新潟大院・自然科学），高野瀬洋一郎（新潟大・超域研），紙谷智彦（新潟大院・自然科学）	D2-07 **小笠原諸島の昆虫相 -各列島の特性比較-** 岸本年郎（自然研）	E2-07 **ヤマトシロアリの攻撃行動における雌雄差** *北出理，権田まり子（茨城大・理）
		都市			
16:00	A2-08 **知床世界遺産の海域管理計画における漁業の評価** *松田裕之（横浜国大）・牧野光琢（中央水研）・桜井泰憲（北大水産）	B2-08 Distribution and Habitat Prefrence of Frogs in Kakuma Area, Kanazawa Karlina Indraswari(Kanazawa Univ.)*, Nakamura Koji (Kanazawa Univ.), and Yoneshima Ryo (Kanazawa Univ)	C2-08 **北海道オホーツク海側の流紋岩地におけるミズナラ林の種組成と立地** *板垣友規子，星野義延（東京農工大・院・農），佐藤謙（北海学園大・工）	D2-08 **DNAと形態からみたヒラタクワガタの進化的重要単位の多様性** 五箇公一 *，所諭史，鈴木一隆（国立環境研），立田春樹（琉球大）	E2-08 **社会性アブラムシの防衛行動：親と子でゴールを守る** *植松圭吾，柴尾晴信，嶋田正和（東大院・総合文化）
16:15	A2-09 **知床国立公園における交通シミュレーション** 蜂谷 菜保子 北海道大学環境科学院	B2-09 **都市沿岸域の森林造成のあり方に関する植生学的研究** 伴武彦（東京農工大・院・連合農）	C2-09 **韓国洛東江河畔ヤナギ林の分布と群落分類体系** *大野啓一（横国大・院・環情），宋 鍾碩（韓国・安東大），比嘉基紀（森林総研）	D2-09 **生息地削減後の種数減少プロセス：中立モデルに基づく新公式と 鳥類相データでの検証** *巌佐庸（九大理生物），Halley, J. M.(Univ. Ioannina, Greece)	E2-09 **シロアリ類における繁殖形質の発達と腸内に共生する原生生物の個体数との関係** *嶋田敬介（富山大・理工），北出理（茨城大・理），前川清人（富山大・理工）
16:30	A2-10 **Tourists and traditional divers in a common fishing ground** *Lee Joung Hun, Iwasa Yoh（九大・理）	B2-10 **都市の生物多様性は企業が守る！ -企業保有地向け土地利用評価ツールの開発-(1)企業の取り組み** *三輪隆（竹中工務店），原口真（インターリスク総研），伊藤俊哉（住友林業緑化），林豊（清水建設），浦島裕子（三井住友海上），竹内恵子（グリーン・ワイズ），飯田慎一（パナソニック），久保達哉（JSR），永戸優子（凸版印刷），高見謙（帝人），西山由美（地球の芽），足立直樹（レスポンスアビリティ），木村幹子，河田雅圭，中静透（東北大学）	C2-10 **冷温帯下部夏緑広葉樹林における樹木分布と微地形の関係** *若松伸彦（東京農大・地域環境），比嘉基紀（森林総研），加藤崇行，竹内英人，石田祐子，武生雅明，中村幸人（東京農大・地域環境）	D2-10 **植物個体間の正の相互作用が群集動態に及ぼす効果：格子モデルによる考察** *池川雄亮，江副日出夫，難波利幸（大阪府大・理）	E2-10 **ヤマトシロアリの単為生殖による女王位継承システムの進化的安定性** *松浦健二，山本結花，矢代敏久，日室千尋，横井智之（岡山大・院環境・昆虫生態）
16:45	A2-11 **生態系から見る人間活動-「生態系サービス利用」の提案** *町村尚，松井孝典，R.N.SHAW，加藤悟，早田至（大阪大・工）	B2-11 **都市の生物多様性は企業が守る！ -企業保有地向け土地利用評価ツールの開発-(2)土地利用評価** *木村幹子（東北大学），三輪隆（竹中工務店），原口真（インターリスク総研），伊藤俊哉（住友林業緑化），林豊（清水建設），浦島裕子（三井住友海上），竹内恵子（グリーン・ワイズ），飯田慎一（パナソニック），久保達哉（JSR），永戸優子（凸版印刷），高見謙（帝人），西山由美（地球の芽），足立直樹（レスポンスアビリティ），河田雅圭，中静透（東北大学）	C2-11 **中国内蒙古砂地における植物群落の類型・立地とその構成種の植物タイプに関する研究** 娜仁高娃 *，持田幸良（横浜国大・環情），藤原一繪（横浜市大・生命ナ）	D2-11 **半自然草原での多様性・生産性関係** *鈴木亮（筑波大・菅平セ），田中健太（筑波大・菅平セ）	E2-11 **草原系と森林系における社会生態ネットワークの動態モデル** *山村則男（地球研）
17:00		B2-12 **都市の生物多様性は企業が守る！ -企業保有地向け土地利用評価ツールの開発-(3)人材育成と波及効果** *久保達哉（JSR），三輪隆（竹中工務店），原口真（インターリスク総研），伊藤俊哉（住友林業緑化），林豊（清水建設），浦島裕子（三井住友海上），竹内恵子（グリーン・ワイズ），飯田慎一（パナソニック），永戸優子（凸版印刷），高見謙（帝人），西山由美（地球の芽），足立直樹（レスポンスアビリティ），木村幹子，河田雅圭，中静透（東北大学）			
17:15		B2-13 **都市の生物多様性は企業が守る！-企業保有地向け土地利用評価ツールの開発-（4）生き物調査** *林豊（清水建設），三輪隆（竹中工務店），原口真（インターリスク総研），伊藤俊哉（住友林業緑化），浦島裕子（三井住友海上），竹内恵子（グリーン・ワイズ），飯田慎一（パナソニック），久保達哉（JSR），永戸優子（凸版印刷），高見謙（帝人），西山由美（地球の芽），足立直樹（レスポンスアビリティ），木村幹子，河田雅圭，中静透（東北大学）			

口頭発表 3月10日(木)(Oral Presentation, 10 March, Thursday Afternoon)

Time	Room F	Room G	Room H	Room I	Room J
	動物群集	数理	植物個体群	動物と植物の相互関係	植物生理生態
15:45	**F2-07 栄養モジュール動態の生息地特性への応答** 梅田隆利(龍谷大・理工), 近藤倫生(龍谷大・理工)	**G2-07 コンタクトプロセスを用いたクローナル植物における病原体伝播モデル** *酒井佑槙(北大・環境), 高田壮則(北大・環境)	**H2-07 間伐にともなうヒノキ個体群の成長反応について** *多胡潤哉(龍谷大・理工), 石井将貴(龍谷大・理工), 宮浦富保(龍谷大・理工)	**I2-07 Sagebrush (*Artemisia tridentata*)における植物間コミュニケーションの季節効果** *塩尻かおり(京大・次世代),石崎智美(北大院・環境科学),室井敦(京大院・理学),Richard Karban(UC Davis, Entomology)	**J2-07 ゴム林のガス交換とその環境変化への応答** 宮沢良行*、立石麻紀子、松本一穂、熊谷朝臣、溝上展也(九大)、K. Khun, L. Tiva (GDR, Cambodia), RG Mudd, TW Giambelluca (ハワイ大)
16:00	**F2-08 繁殖フェノロジーのマッチ・ミスマッチと栄養モジュールのダイナミクス -気候変動下における群集構造の理解に向けて-** *仲澤剛史(京大・生態研センター), 土居秀幸(Univ. Oldenburg)	**G2-08 植物の栄養吸収をめぐる競争と防衛** *福井眞(京大生態研センター), 山内淳(京大生態研センター)	**H2-08 ブナ実生と光環境-生長量とササ稈密度** *西本孝, 岡山県自然保護センター	**I2-08 植物間コミュニケーションがsagebrush (*Artemisia tridentata*) の実生の生存および食害に与える影響** *石崎智美, 大原雅 (北大・院・環境科学), 塩尻かおり (京大・次世代), Richard Karban (UC. Davis, Department of Entomology)	**J2-08 木の葉の生涯パフォーマンス** 菊沢喜八郎 ・小山耕平 (石川県大)
	フェノロジー				植物生活史
16:15	**F2-09 落葉期における樹液流の変化-落葉樹コナラと常緑樹ソヨゴの比較-** *吉村謙一(神戸大自然科学), 小南裕志(森林総研関西), 服部和佐(京大農), 深山貴文(森林総研関西)	**G2-09 植物共存の一般階層理論** *甲山隆司・高田壮則(北大・地球環境)	**H2-09 非対称な密度依存と亜寒帯林の多種共存** *中河嘉明(筑波大院), 横沢正幸(農環研), 原登志彦(北大)	**I2-09 イラクサ2集団におけるシカの有無で生じたと思われる形質の違い** 平田里枝子, 福岡恵子, 大石理子, 加藤禎孝, *佐藤宏明(奈良女大・理)	**J2-09 Vegetative dormancy as a bet-hedging trait** Richard P. Shefferson
16:30	**F2-10 半島マレーシアにおける一斉開花の地理的分布様式** *沼田真也(首都大・都市環境),安田雅俊(森林総研・九州),Nur Supardi Md. Noor (FRIM・R&D) ,Christine Fletcher (FRIM・森林部) ,Mazlan Hashim (UTM・地理情報)	**G2-10 スケーリング則に基づく最適採餌理論** *岡嶌亮子(東北大・生命), 千葉聡(東北大・生命)	**H2-10 湖岸植生群落の発達が栄養塩循環に与える影響** *福山朝子, 中村祐太, 浅枝隆(埼玉大学院理工), 浅見和弘(応用地質株式会社)	**I2-10 種子形質のばらつきの大きさがコナラ母樹の繁殖成功に影響する** *島田卓哉(森林総研・東北), 高橋明子(首都大), 柴田銃江(森林総研・東北)	**J2-10 多年生草本植物エゾエンゴサクにおける葉形態変異の集団間比較** *山岸洋貴(弘前大・白神),藤原久司(ズコーシャ),本多和茂(弘前大・農生)
16:45	**F2-11 マクロスケールから捉える温暖化による展葉期間の長期化：気象庁データセットとメタ解析による検証** *土居秀幸 (Univ. Oldenburg)	**G2-11 確率変動を含む最適戦略と個体群動態** *大泉嶺, 高田壮則 北大環境科学院		**I2-11 小笠原諸島における海鳥による種子散布** *青山夕貴子(東北大院・生命),川上和人(森林総研),	**J2-11 可変性二年草の実生出現時期の変異と開花齢の表現型可塑性** 加賀屋美津子*、谷享(環技研)、可知直毅 (首都大)
17:00	**F2-12 春先の気温の年次変動がミズナラの開葉に及ぼす影響** *生方正俊、那須仁弥、福田陽子(森林総研・林育セ北海道)			**I2-12 多様な宿主に由来する褐虫藻とシャコガイ幼生との共生** 栗原健夫*, 山下洋, 山田秀秋 (水産総合研究セ), 井上顕 (沖縄県水海研セ), 小池一彦(広島大)	**J2-12 ササの部分開花は1ジェネットだけの開花なのか？-秋田県内26ヶ所の調査結果 から-** *蒔田明史, 佐藤綾香, 井上みずき, 佐藤朋華, 品川朋仁(秋田県大・生物資源), 松尾歩, 陶山佳久(東北大・農)
17:15				I2-13 Impact of submerged macrophyte infochemicals on life history parameters of zooplankton (*Daphnia galeata*) 河鎮龍*, 花里孝幸 (信州大学山岳科学総合研究所)	

ポスター発表　3月9日（水）10:00－17:15

（大ホール　会場　P　　#：ポスター賞対象発表）

群　　落

P1-001#　亜高山帯渓畔域に成立する森林群落の樹木組成と微地形との対応　*近藤博史・酒井暁子（横浜国立大学・院・環境情報）

P1-002#　異なる管理形態下に成立した草地植物群集の機能的組成とその指標種：阿蘇牧野における放牧型・採草型半自然草地を事例に　*小柳知代・楠本良延・平舘俊太郎・森田沙綾香（農環研）・横川昌史（京大院農）・高橋佳孝（近中四農研センター）・佐藤千芳（熊本植物研究所）

P1-003#　八甲田山系における湿原の縮小を規定する局所的要因　*山口紘史（東北大・理），佐々木雄大，嶋崎仁哉，中静透（東北大・院・生命科学）

P1-004#　クズ群落における草刈りの影響　*小川高直，櫻谷保之（近畿大・農・環境生態）

P1-005#　シカの採食による群落構造の変化が不嗜好種フッキソウの種特性におよぼす影響　*勝又 昌代（東北大院・生命），日浦 勉（北大･苫小牧研究林），中静 透（東北大院･生命）

P1-006#　放牧と刈り取りの違いによる植物群落と土壌への影響　*李 強（横国大・環），持田 幸良（横国大・環），藤原一絵（横市大・生命）

P1-007#　北関東におけるネコノメソウ属（*Chrysosplenium* L.）５種の生育立地　*深町篤子，星野義延（東京農工大・院・農），中尾勝洋（森林総合研究所）

P1-008#　焼畑がチーク択伐天然林の種組成と森林構造に与える影響　*野草俊哉，神崎護（京大院・農），福島万紀（科学技術振興機構特別研究員），SoeMinTun, HlamaungThein（Forest Department, Myanmar）

P1-009#　大興安嶺におけるモンゴリナラ林の植生生態学的研究　*志栄（横浜国大･院･環境情報），藤原一繪（横浜市大･院・生命），大野啓一（横浜国大・院・環境情報）

P1-010#　佐渡島大倉川流域の垂直分布　*高橋もなみ（新潟大･農），川西基博（鹿児島大･教），本間航介，崎尾均（新潟大･農）

P1-011#　希少種の保全を目的とした長野県上伊那地方における水田雑草群落と立地環境条件との関係に関する研究　*新谷大貴（信州大院･農），大窪久美子，大石善隆（信州大･農）

P1-012#　異なる地質を含んだランドスケープにおける樹木群集の機能的形質の変異　*岡田知也，松下通也，中川弥智子（名大院・生命農）

P1-013#　広島県内の魚つき保安林とその周辺の森林構造（*島田拓也・広島大・総科，中越信和・広島大・院・国際協力）

P1-014#　チベット高山草原における禁牧処理にともなう植物量と種多様性の変遷および放牧の影響評価　*白石拓也（筑波大院･生命環境），下野綾子（筑波大･遺伝子実験センター），杜明遠（農環研），唐艶鴻（国環研），廣田充（筑波大･生命環境）

P1-015#　長期モニタリング法を用いた立山雪田植生の構造と融雪時期との関係　*鈴木智博（富大・理），初鹿宏壮（富山県環境センター），飯田肇（立山カルデラ砂防），川田邦夫（富大・名誉教授），和田直也（富大・極東地研）

P1-016#　千葉県柏市こんぶくろ池周辺の森林構造と利用変遷の関係　*稲岡哲郎，福田健二（東大院・新領域）

植物個体群・生活史

P1-017　遺伝的多様性が生態系機能に与える効果：ヨシによる水質浄化システムを用いた検討　*富松裕（東北大・生命科学）・陶山佳久（東北大・農）・中野和典（東北大・工）

P1-018　ブナ（*Fagus crenata*）葉緑体ハプロタイプの近畿地方における分布分析－混在地域を中心に－　*十塚正治（尼崎小田高校），高橋誠（森林総研），笠原恵（兵教大生物）

P1-019　河川の水位変動に伴う浸水と食害がネコヤナギさし木苗の生残とサイズに及ぼす影響　*中井亜理沙，木佐貫博光（三重大院・生物資源）

P1-020　オオバナノエンレイソウ集団における雌の出現頻度とその決定要因～過去の集団間交雑に注目して～　*久保田渉誠（東北大・院・生命科学），菅野明（東北大・院・生命科学），大原雅（北大・院・環境科学）

P1-021　適応遺伝子の時空間動態：イブキ・ハクサンハタザオにおける分子「古」生態学的解析　*森長真一（東大・総合文化），長谷和子（東大・総合文化），永野惇（生物研），伊藤元己（東大・総合文化），

P1-022　北茨城市小川試験地におけるササ類３種の 20 年間の動態　*新山馨（森総研東北），九島宏道（森総研木曽），齊藤智之（森総研），柴田銑江（森総研東北），堀良通（茨城大･理）

P1-023　半自然草地における植物の分布と土壌特性の関係：広島県雲月山における放牧地と非放牧地の比較　*平舘俊太郎（農環研），白川勝信（高原の自然館），森田沙綾香，小柳知代，中西亮介，楠本良延（農環研），太田陽子（緑と水の連絡会議），大竹邦暁（中電技術コンサルタント），佐久間智子（西中国山地自然史研究会），堤 道生，高橋佳孝（近中四農研）

P1-024　東南アジア沿岸域に生育する海草リュウキュウアマモの集団遺伝構造　*松木悠，中島祐一，練春蘭（東大アジア生セ），Miguel Fortes（University of the Philippines），Wilfredo Uy（Mindanao States University），仲岡雅裕（北大フィールド科学センター），灘岡和夫（東工大院情報理工）

P1-025　都市近郊里山における草原生植物個体群の空間分布と構造　*小泉恵佑（横浜国大院･環境情報），小池文人（横浜国大・環境情報）

P1-026　鳥取県大山ブナ老齢林における主要構成樹種３種の稚樹の個体群構造の比較　*鳥丸猛（弘前大・農生），佐野淳之（鳥大・農），永松大（鳥大・地域），戸丸信弘（名古屋大・生命農学），西村尚之（群馬大･社会情報），山本進一（名古屋大･生命農学）

P1-027　イタドリ個体群を構成する genet が単一か複数かで収量は異なるか？　*鈴木準一郎，角田智詞（首都大･理工･生命）

P1-028　サロベツ湿原における *Drosera* 属個体群の局所的分布パターン　*保要有里，露崎史朗（北大・環境）

P1-029　性比・開花率の集団間変動に影響を与える湿地の栄養塩環境：雌雄異株クローナル植物ヤチヤナギ　*井上みずき（秋田県大・生物資源），久米篤（九大・農院），智和正明（九大・農院），上原佳敏（九大・生物資源環境科学），石田清（弘前大・農学生命科学）

P1-030　日本国内のアカマツ天然集団における球果と種子の形質変異　*岩泉正和，大谷雅人，高橋誠，宮本尚子，平岡宏一，矢野慶介

P1-031　高山風衝地におけるハイマツ実生の消長　森広信子（所属なし）

P1-032　北海道におけるヤラメスゲ地域個体群の遺伝的多様性と生態生理特性　*中村隆俊，鈴木雷太，小泉優人（東農大・生物産業），中村元香（東大・理）

P1-033　フタバガキ科 10 種個体群の遺伝構造と個体空間分布の関係　*原田剛，名波哲，伊東明，山倉拓夫，松山周平（大阪市大・理），Bibian Michael Diway，Slyvester Tan，Lucy Chong（Sarawak Forestry Corporation）

P1-034　標高によって集団存続の規定要因はどう変わるか？－標高 30 ～ 3000m に棲むミヤマハタザオを用いて－　*恩田義彦，田中健太（筑波大・菅平セ）

P1-035　インドネシア，ハリムン・サラック山国立公園における *Argostemma* 属３種の比較生態学　*佐藤友愛，鈴木英治，宮本洵子（鹿児島大・理），Desy Ekawati（ハリムン山国立公園）

ポスター発表　3月9日（水）10:00－17:15

（大ホール　会場　P　　＃：ポスター賞対象発表）

P1-036　着生部位の異なる２種の着生シダの成長に対する光･水分条件の影響　＊平田晶子（森林総研），上條隆（筑波大･生命環境），齋藤哲（森林総研）

P1-037　日本アルプスの山頂におけるハイマツの年枝伸長成長の経年変動　＊和田直也（富山大･極東地研），込山雄一郎，水落将人（富山大・理）

P1-038　フタバガキ科の個体群動態と遺伝的多様性の関係　＊伊東明，原田剛，名波哲，山倉拓夫（大阪市大院・理），Bibian Diway, Sylvester Tan, Lucy Chong（Sarawak Forest Corporation）

P1-039　大山ブナ老齢林におけるブナ当年生実生の生残パターン　＊有馬千弘・永松 大（鳥取大・地域）・稲永路子・戸丸信弘（名大院・生命農）・鳥丸猛（弘前大・農生）・西村尚之（群馬大・社会情報）

P1-040　島から見える雑草の分散過程と種間相互作用　＊高倉耕一（大阪市環科研），藤井伸二（人間環境大）

P1-041　コンブの生育域（日本・韓国・中国）と多元素安定同位体比　＊鈴木彌生子（日本認証サービス，食総研），中下留美子（森林総研），河邉亮（日本認証サービス），清水健志（北海道工技セ），高村巧（北海道工技セ）

P1-042　土壌中の物理的障害物の密度がホソムギに及ぼす影響の実験的検討　山根理紗子・可知直毅・鈴木準一郎（首都大・理工・生命）

P1-043　チシマザサ更新個体群における 20 年目からのクローン競争と成長の過程　＊齋藤智之（森林総研），陶山佳久（東北大・院・農），鈴木準一郎（首都大・理工），西脇亜也（宮崎大・農），蒔田明史（秋田県大・生資）

P1-044　多年草レンゲショウマの地下茎から読み取る過去の開花履歴　鈴木まほろ（岩手県立博物館）

P1-045　タチスズシロソウにおける低温に対する開花応答性の自然変異とその遺伝的基盤　＊杉阪次郎，工藤洋（京大･生態研）

P1-046　カラマツ人工林における広葉樹稚樹の展葉フェノロジー　＊城田徹央（信大・農），田中ゆり子（林野庁），木村誇（北大・農），岡野哲郎（信大・農）

植物繁殖・送粉

P1-047#　白馬八方尾根におけるユキワリソウ（*Primula modesta* Bisset et Moore）の繁殖成功とその制限要因　＊渡邉愛美（東京農大・院・林学），黒沢秀基（尾瀬林業株式会社），高梨斉（株式会社モンベル），亀山慶晃（東京農大・地域環境），武生雅明（東京農大・地域環境），中村幸人（東京農大・地域環境）

P1-048#　不完全雌雄異株低木ヒサカキにおける両性個体と雌個体の雌性繁殖成功度の比較　＊王けい，松下通也，戸丸信弘，中川弥智子（名大院生命農）

P1-049#　自殖の進化を再考する　～遺伝子の連鎖に注目したシミュレーション～　＊中山新一朗（東大・院・総文），嶋田正和（東大・院・総文）

P1-050#　マタタビ（*Actinidia polygama*）における繁殖コストと栄養成長の性差　＊中山晴夏（新潟大・院），崎尾均（新潟大・農）

P1-051#　森林サイズがタブノキ林の遺伝構造に与える影響　渡部俊太郎（滋賀県立大・環境），金子有子（琵琶湖環境科学研究センター），前 迫ゆり（大阪産業大・人間環境），野間直彦（滋賀県立大・環境）

P1-052#　Contribution of photosynthetic products to seed production in Gagea lutea　*Sunmonu A.I, Kudo G　Hokkaido Univ

P1-053#　エゾリンドウにおける花の開閉運動の進化的意義：閉じないと繁殖成功にどう影響するのか　＊冨里祐介（東北大・理），酒井聡樹（東北大・院・生命）

P1-054#　ミドリハコベの胎座２型性による種子生産への影響　＊黒川佑（東北大・理），酒井聡樹（東北大・院・生命）

P1-055#　熱帯高木 *Dipterocarpus tempehes* の 13 年間の実生動態比較と捕食者飽食仮説の検討　＊小早川浩志（名大院･生命農），大島千明（名大），中川弥智子（名大院･生命農），田中健太（筑波大・菅平セ），竹内やよい（総研大），佐藤香織，箕口秀夫（新潟大・自然科学系），中静透（東北大）

P1-056#　花を介した節足動物群集の相互作用の解明　＊池本美都，大串隆之，安東義乃，京都大学生態学研究センター

P1-057#　伊豆諸島におけるクサギ属植物の花形態進化　＊水澤玲子（京大･農），山崎理正（京大･農），長谷川雅美（東邦大･理），井鷺裕司（京大・農）

P1-058#　マルハナバチの花選好性に及ぼす視角度と花間距離の影響：人工花を用いた閉鎖系実験　＊増田光（富山大・理），道野峻介（富山大・理），石井博（富山大・理）

P1-059#　マルハナバチの採餌方法（正当訪花 / 盗蜜訪花）はどのように決まるのか？：競争・学習・個体サイズがアカツメクサを訪花するセイヨウオオマルハナバチの採餌方法に与える影響　＊角屋絵理（富山大・理），柳沢歩（富山大・理），石井博（富山大・理）

P1-060#　花色変化がポリネーションに及ぼす影響：変化型と不変型における種間比較　＊鈴木美季，大橋一晴（筑波大･生命環境）

P1-061#　Bumblebee behaviors in flower visit on *Impatiens textori*: Rejection & Acceptance behaviors　*Jahir Raihan, Kawakubo Nobumitsu（Gifu Univ.），Tohru Manabe（Kitakyushu Mus. Nat. Hist. Hum. Hist.）

P1-062#　アゲハを介した送粉過程：花粉１粒 DNA 解析を用いた各花形質の送粉貢献度の測定　＊廣田峻，新田梢（九州大・生物），陶山佳久（東北大・農），川窪伸光（岐阜大・応用生物），安元暁子（京大・生態研センター，チューリッヒ大・理），矢原徹一（九州大・生物）

P1-063#　訪花昆虫の機能群多様性によって P/O 比は変化するのか？　＊日下石碧，丑丸敦史（神戸大学院 人間発達環境学）

P1-064#　マルハナバチは蜜のないパッチでどのように行動するのか？：トリカブト属植物を用いた花蜜除去実験　＊中村祥子（北大・環境科学院），工藤岳（北大・環境科学院）

P1-065#　報酬のないラン科ナツエビネの送粉生態　＊坂田ゆず 阪口翔太 山崎理正（京大 農）

P1-066#　花弁色と花形態に基づく送粉ネットワークの予測　＊平岩将良（東邦大・理），長谷川雅美（東邦大・理）

P1-067#　Bumble bee foraging in a novel environment　＊宮崎寧子，徳永幸彦（筑波大・生命共存）

P1-068#　ジンリョウユリとササユリの送粉生態：夜と昼の送粉者の異なる利用度への適応　＊横田静香，矢原徹一（九大・理・生態）

P1-069#　ネジレバネよる寄主ハナバチの訪花行動の操作と寄生者の送粉共生系への影響　＊中瀬悠太，加藤真（京大院･人環）

P1-070#　ツリフネソウ　＊徳田奈菜子，市野隆雄（信州大･理･生物）

P1-071#　花サイズと送粉昆虫サイズのマッチングによる送受粉効率への影響　～ホタルブクロを用いて～　＊阿部航大，市野隆雄（信州大・理・生物）

ポスター発表　3月9日（水）10:00－17:15
（大ホール　会場　P　　#：ポスター賞対象発表）

生理生態・フェノロジー

P1-072　Response of leaf gas exchange to warming, precipitation and nitrogen addition in a dominant species, *Stipa krylovii*, semiarid temperate steppe　*BORJIGIDAI, A., XI, Y., LI, Y. (Minzu Univ.), GAO, Q. (IEDA-CAAS), BAI, W., WAN, S., LI, L. (IB-CAS), YU, G. (IGSNRR-CAS), HOSHINO, B. (Rakuno Gakuen Univ.)

P1-073　アメリカ・モハベ砂漠に生育するタマリスクの細根の垂直分布　＊今田省吾，谷口武士（鳥取大・乾燥地研），Acharya, K.（DRI），山中典和（鳥取大・乾燥地研）

P1-074　シイ・カシ類４種における石灰質土壌への順化能力　＊香山雅純（森林総研九州），山中高史（森林総研），青木菜保子（森林総研九州）

P1-075　強度間伐したカラマツ人工林に更新した落葉広葉樹３種の成長および光合成特性　＊田中 格，長池卓男（山梨県森林総研）

P1-076　街路樹を用いた地球温暖化対策　＊籠谷優一，半場祐子（京都工繊大）

P1-077　常緑広葉樹実生の光環境勾配に対する成長反応　＊河原崎里子 12，相川真一 1，石田厚 3，田内裕之 1，可知直毅 2（1 森林総研，2 首都大，3 京都大）

P1-078　カシ類における delayed greening，光合成特性および窒素利用の関係　＊原山尚徳（森林総研），上村章（森林総研北海道），石田厚（京大生態セ）

P1-079　西オーストラリア半乾燥地域におけるユーカリ萌芽更新個体の成長と生理的特性　＊相川真一（森林総研），上村章（森林総研），宇都木玄（森林総研）

P1-080　直接観察法を用いた冷温帯落葉樹の個葉における気孔開度分布様式と光合成速度の日変化との関係　＊鎌倉真依（奈良女大・共生センター），小杉緑子（京大・農），牧田直樹（京大・農），村松加奈子（奈良女大・共生センター）

P1-081　アオモリトドマツにおける樹高成長の年次間変動は気象要因で説明できるか？　関剛（森林総研・北海道）

P1-082　しおれからの回復による小笠原移入樹種の光合成特性変化　＊矢崎健一（森林総研），石田厚（京大・生態研）

P1-083　根の水吸収と蒸散－光合成関係から考える葉と根の物質分配　＊杉浦大輔，舘野正樹（東大・院・理）

P1-084　樹木の幹はどのように成長するか？ - ヒノキ個体群長期データの解析から -　＊隅田明洋（北大低温研），宮浦富保（龍谷大理工）

P1-085　高 CO_2 条件における、落葉広葉樹３樹種の林冠総光合成生産量の推定　＊宇都木玄, 上村章, 北岡哲（森総研北），飛田博順（森総研）

P1-086　見えない光で葉の特性を探る：近赤外分光法を用いた樹木個葉の生理特性の解析　＊北岡哲（森林総研･北海道），松田修（九大・理），上村章，飛田博順（森林総研・北海道），射場厚（九大・理），宇都木玄（森林総研・北海道）

P1-087　ハリケーン・カトリーナの生態的後遺症に関する研究Ⅱ　－被災地の自生種、侵入種の耐塩性比較－　＊山本福壽，山岸陽輔，小林美咲（鳥取大･農），岩永史子（鳥取大･乾燥地研セ）

P1-088　落葉広葉樹林キャノピーの光合成生産力とその季節性　＊村岡裕由（岐阜大），野田響（筑波大），永井信（JAMSTEC），本岡毅（JAXA），奈佐原顕郎（筑波大），三枝信子（国環研）

P1-089　Seasonal changes in nitrate use during leaf expansion in three deciduous tree species in interior Alaska　*KOYAMA Lina（Kyoto Univ.），KIELLAND Knut（Univ. of Alaska, Fairbanks）

P1-090　冬緑性草本ヒガンバナの，初期成長と葉の生理特性に対する施肥時期の効果　＊西谷里美（日本医大・生物），中村敏枝（首都大・生命科学），可知直毅（首都大・生命科学）

P1-091　異なる土壌水分・窒素濃度条件下における窒素固定植物の成長に対する根粒菌接種の効果　＊中田望（首都大院・理工），可知直毅（首都大院・理工）

P1-092　アメリカ西部乾燥地に生育するタマリスクの適合溶質蓄積　＊岩永史子, 今田省吾, 谷口武士（鳥取大乾燥地研），Kumud Acharya（DRI），河村幸雄（近畿大・農），森信寛，田中浄，山本福壽（鳥取大・農），山中典和（鳥取大乾燥地研）

P1-093　葉の発生過程から葉脈における Murray の法則の成立を考える　＊種子田春彦（東京大・理）

P1-094　オゾン濃度勾配に沿ったダイズの葉群光合成速度の変化　＊及川真平（東京農業大学），Elizabeth Ainsworth（University of Illiois）

P1-095　異なる標高に分布する北方針葉樹の耐凍性とその獲得タイミング　～トドマツの種内変異に着目して～　石塚航＊，岡田桃子，後藤晋（東大・農学生命）

P1-096　ケヤマハンノキの高 CO2 に対する光合成・成長反応に及ぼす土壌養分・水分条件の影響　＊飛田博順（森林総研），上村 章，北岡 哲，宇都木 玄（森林総研・北海道），丸山温（林野庁），北尾光俊（森林総研）

P1-097　沈水植物イトモ群落水が微細藻類の増殖に及ぼす影響　＊武田文彦, 中野和典, 野村宗弘, 西村 修（東北大院･工），島多義彦，袋 昭太（(株）フジタ技術センター），田中仁志（埼玉県環境科学国際センター），林 紀男（千葉県立中央博物館），稲森悠平（福島大学）

P1-098　CO_2 噴出地に生育するオオバコにおける気孔の性質の進化　＊上田実希（東北大・生命科学），梶川尚（東北大・生物），彦坂幸毅（東北大・生命科学）

P1-099　短波長赤外ハイパースペクトル画像による根圏有機物組成の推定　＊中路達郎（北大・北方生物圏 FSC），野口享太郎（森林総研），伊ヶ崎知弘（森林総研），小熊宏之（国環研）

P1-100　ブナ実生の更新場所は光環境で説明できるか　＊宮下彩奈（東大・理），舘野正樹（東大・理）

P1-101　マングローブ樹木の湛水及び被陰耐性と生態的地位との関係　＊渡辺信（琉大熱生研西表），Trevor Jones（SCION-New Zealand），江面浩（筑波大学遺伝子実験センター），馬場繁幸（琉大熱生研西表），

P1-102　植物の地上部と地下部の形態の関連：コーナー則は地下部に適用可能か？　＊長田典之（京都大・フィールド研），藤井佐織（京都大･農），徳地直子（京都大･フィールド研）

P1-103　積分球を用いた様々な functional type の植物種における個葉の分光特性の測定法　＊野田響（筑波大・生命環境），本岡毅（JAXA），村上和隆（筑波大・生命環境），奈佐原顕郎（筑波大・生命環境），村岡裕由（岐阜大・流域圏セ）

P1-104　異なる生育環境下でのダケカンバ苗木の葉枚数の変化と個体の成長　小野清美（北大・低温研）

P1-105　地上レーザー計測による樹木パラメータ抽出　加藤 顕（千葉大 園芸），梅木 清（千葉大 園芸），小林 達明（千葉大 園芸）

P1-106　カンボジア・コミュニティフォレストにおける樹木蒸散の樹種間比較　立石麻紀子，宮沢良行，熊谷朝臣（九州大学演習林），Ma Vuthy, Sokh Heng（FA, カンボジア），溝上展也（九州大学農学部）

P1-107　FACE（Free Air CO_2 Enrichment）による高 CO_2 環境に対するカバノキ属３種の光合成応答　＊渡辺誠，毛 巧芝（北大院農），伊藤寛剛（北大農），Eka Novriyanti（北大院農），高木 健太郎，笹 賀一郎（北大 FSC），小池孝良（北大院農）

P1-108　順次開葉を物質生産面で有利にする条件：機能的・

ポスター発表　3月9日（水）10:00－17:15
（大ホール　会場　P　　#：ポスター賞対象発表）

構造的植物モデルを使った解析　梅木清（千葉大園芸）

P1-109　ヒノキ若齢林の斜面上部と下部における光合成の季節変化　*山口大輔（信大農），宮崎政幸（綜合地質コンサルタント），小林元（信大AFC）

P1-110　気孔開閉の不均一性が $H_2O/CO_2/^{13}CO_2$ 交換特性に与える影響　*高梨聡（森林総研・気象），小杉緑子（京都大・濃）

P1-111　Growth responses to soil water stress of some *Artemisia* species grown in desertificated grassland in North-East Asia.　*Ito S. (NIES), Sasakawa H. (NIES), Xu Z.Z. (NIES IBCAS), Chen L.J. (NIES, IAECAS), Tsuji W. (ALRC Tottori-U.), An P. (ALRC Tottori-U.), Shimizu H. (NIES)

P1-112　Applying Functional-Structural Plant Modelling method to a plant in desertificated regions　*Sasakawa H. (NIES), Ito S. (NIES), Tsuji W. (ALRC Tottori-U.), An P. (ALRC Tottori-U.), Shimizu H. (NIES)

P1-113　Characterization of Photosynthesis of Elaeagnus angustifolia Seedling Grown Under Various NaCl Salinity　*AILIJIANG MAIMAITI1，山本福壽1，QiMan YuNuSi3，山中典和2（1鳥大院・農，2鳥大・乾地研，3新疆農大）

P1-114　ダケカンバの光合成機能と資源分配に対する土壌水分の影響　*田畑あずさ，小野清美，隅田明洋，原登志彦（北大・低温研）

P1-115　湿原群集における環境傾度に沿った機能型の分布と葉特性の変化　*神山千穂，片渕正紀，佐々木雄大，嶋崎仁哉，中静透，彦坂幸毅（東北大・院・生命科学）

P1-116　暖温帯落葉広葉樹林における水ストレスに伴う樹液流速の反応について　小南裕志，深山貴文，吉村謙一（森林総研関西），安宅未央子，檀浦正子（京都大学院），上村真由子（日本大学）

P1-117　根の形態が異なるルピナス2種の低リン酸環境に対する応答の比較　*野口（舟山）幸子，寺島一郎（東大・院・理）

P1-118　熱赤外画像による樹木葉と樹冠の温度分布解析～光合成速度の日変化との関係導出のためのアプローチ～　*森千佳（奈良女大・理），村松加奈子（奈良女大），鎌倉真依（奈良女大・共生センター），古海忍（佐保短期大），小平友美（奈良女大・理）

P1-119　密度の異なる竹林の蒸散量比較　市橋 隆自*（九大・理・生物），大槻 恭一（九大・演習林）

P1-120　風洞実験によるオオオナモミの風耐性における力学的性質の解析　*長嶋寿江，彦坂幸毅（東北大・院・生命科学）

P1-121　シロイヌナズナエコタイプ間の成長速度と高二酸化炭素濃度への応答の比較　*尾崎洋史（東北大・生命科学），小口理一（The Australian National University），彦坂幸毅（東北大・生命科学）

P1-122　緯度系列で比較するモウソウチクの葉の形態的可塑性　*福島慶太郎（京大フィールド研），臼井伸章（京大院・農）

P1-123　乾燥地に生育する匍匐性の常緑針葉樹 *Sabina vulgaris* の水利用戦略：不定根と主根間の水の動き　*楊霊麗（岡大院・環境），三木 直子（岡大院・環境），瀬尾 靖（岡大・農），張 国盛（内蒙古農業大），王 林和（内蒙古農業大），山中典和（鳥大・乾地研），吉川 賢（岡大院・環境）

P1-124　高 CO_2 環境が光合成誘導反応に及ぼす影響の評価　*冨松 元，唐 艶鴻（国環研・生物），坂田 剛（北里大・一般）

P1-125　葉の支持効率を高める一方法としてのバイケイソウ偽茎　*紺野康夫，顧令爽（帯畜大畜産生命）

P1-126　光環境に対する葉形質の応答；進化的応答と可塑的応答　*小嶋智巳，彦坂幸毅（東北大・生命）

P1-127　一年生草本の種子生産の高CO2応答における機能型間差　*彦坂幸毅（東北大・院・生命科学），衣笠利彦（鳥取大・農），及川真平（東京農大・国際食料情報），小野田雄介（九州大・院・理），廣瀬忠樹（東京農大・国際食料情報）

P1-128　東シベリアにおける永久凍土活動層の湿潤化とカラマツの水利用変化　*飯島慈裕（海洋研究開発機構），小谷亜由美，太田岳史（名古屋大・農），T.C. Maximov（IBPC, RAS）

P1-129　小川群落保護林に生育する3種のササ（アズマザサ，ミヤコザサ，スズタケ）の光合成の季節変化　*青田崇志，金子悠哉，佐久川結喜，相原浩行，志賀陵典，堀良通（茨城大・理）

P1-130　広葉樹の展葉期における葉組織中のセルロースの酸素安定同位体比の変化　*隠岐健児，大橋達矢，松尾奈緒子（三重大院・生物資源）

P1-131　Temporal changes in stomatal conductance of leaf expanding Cambodian evergreen emergent dipterocarp　*Ito, E. (FFPRI-Hokkaido), Tith B., Chann S. (FA Cambodia), Iida S., Yoneda R., Kenzo T. (FFPRI)

P1-132　長野県北部飯綱高原におけるスゲ属6種の開花・展葉フェノロジーと種子散布時期　*横井力（長野県環保研/信大・院・山岳），佐藤利幸（信大・理・生物）

P1-133　トウヒ属の種内および雑種の開葉フェノロジー　*田村明（森総研林育セ北海道），生方正俊（森総研林育セ北海道），羽原陽子（森総研林育セ北海道）

物質生産・物質循環

P1-134#　地球スケールにおける葉面積指数のメタ解析　*飯尾淳弘（国環研），彦坂幸毅（東北大），Niels Anten（ユトレヒト大），伊藤昭彦（国環研）

P1-135#　根呼吸速度の日変化－光合成パターンとの関係－　*牧田直樹，小杉緑子（京大・農），鎌倉真依（奈良女大・共生センター）

P1-136#　富士山の樹木の葉におけるN・P量の標高にともなう変化　*後藤友紀，山村靖夫（茨城大・理），中野隆志，安田泰輔（山梨県・環境科学研）

P1-137#　隣接する落葉広葉樹林と常緑広葉樹林の現存量はどのように変遷するのか？　―30年間の炭素蓄積変化の比較―　*和田佳子（大阪市大・理），小南裕志（森林総研関西），吉村謙一（森林総研関西），植松千代美（大阪市大・理），吉良竜夫（元大阪市大・理）

P1-138#　Relationships between soil respiration and soluble carbon contents in two contrasting Japanese soils　*Yoshitaka UCHIDA (NIAES), Seiichi NISHIMURA (NARO), Hiroko AKIYAMA (NIAES)

P1-139#　冷温帯落葉広葉樹林での林床ササ群落の有無による生態系純生産量（NEP）や土壌特性の比較　*飯村康夫（岐阜大流圏セ），八代裕一郎（岐阜大流圏セ），大塚俊之（岐阜大流圏セ）

P1-140#　火入れ地における炭素蓄積量の定量化　*米川修平（鳥取大・院・農），佐野淳之（鳥取大・農・FSC）

P1-141#　低温環境下における森林土壌での窒素の無機化・硝化過程の解明　*長谷川由布子（北大院・環），福澤加里部（北大FSC），渡辺恒大（北大院・環），柴田英昭（北大FSC），黒岩恵（農工大院・農），磯部一夫（東大院・農），木庭啓介（農工大院・農）

P1-142#　巨大なバイオマスが炭素循環に与える影響とは？－ボルネオ島熱帯雨林の例－　*片山歩美，小松光，（九大演習林），久米朋宣（台湾大），斎藤琢（岐阜大），大橋瑞枝（兵庫県立大），中川弥智子（名古屋大），大槻恭一（九大演習林）

P1-143#　土壌培養に伴って放出される無機態窒素は、易分

解性有機態窒素か？ － 2:1 型鉱物層間を出入りするアンモニウムイオンの寄与－ ＊松岡かおり（東京農工大・連合農），森塚直樹（京大院・農）

P1-144# ヒノキ若齢林の斜面上部と下部における土壌窒素無機化速度の季節変化　細川奈々枝＊，伊東大介（信大農），小林元（信大 AFC），平井敬三（森林総研東北）

P1-145# 不耕起栽培圃場におけるミミズの土壌改変が土壌の炭素貯留に与える影響　＊荒井見和，金子信博（横浜国大院・環境情報），陀安一郎（京大・生態研），小松崎将一（茨城大・農）

P1-146# Investigation of stable isotopic composition and related characteristics of plant species in taiga-tundra ecosystem region　*Liang Maochang (Hokkaido Univ.), Sugimoto Atsuko (Hokkaido Univ.)

P1-147# 脂肪酸 - 安定同位体比を用いた淡水産貝類の餌源解析　＊藤林恵，慎祐爽，長濱祐美，中野和典，西村修（東北大学大学院）

P1-148# Comparison of groundwater DOC among three different tropical peatlands in Central Kalimantan, Indonesia　*Siti Sundari, Hiroyuki Yamada and Takashi Hirano（Graduate School of Agriculture, Hokkaido Univ）

P1-149# 湿原における遷移初期種のリター分解と微生物群集の関係　＊竹内史子，大瀧みちる，露崎史朗（北大院環境）

P1-150# 放牧シバ草原において牛糞が土壌及び植生に与える影響　＊五月女皓海，吉竹晋平（早稲田大・院・先進理工），小泉博（早稲田大・教育）

P1-151# 落葉広葉樹林及び常緑針葉樹林におけるリター含水率の野外連続測定　＊増田莉菜（早稲田大・人間科），友常満利，関根有哉，吉竹晋平（早稲田大・院・先進理工），小泉博（早稲田大・教育），太田俊二（早稲田大・人間科）

P1-152# カラマツ林風倒壊跡地における炭素交換量および蓄積量　＊佐野 智人（北大院農），平野 高司（北大院農），梁乃申（国環研・CGER），藤沼 康実（鳥取環境大）

P1-153# 自然農法圃場における窒素動態 -15N を用いた窒素の移動と植生による吸収　＊八木岡敦，小松崎将一，浅木直美（茨城大・農），上野秀人（愛媛大・農），金子信博（横国大・環境情報）

P1-154# 地上分光観測と陸域生態系モデルによるポイントスケールでの炭素収支解析　＊村上和隆（筑波大・生命環境），佐々井崇博（名古屋大・環境），野田響（筑波大・生命環境），秋津朋子（筑波大・生命環境），奈佐原顕郎（筑波大・生命環境）

P1-155# 冷温帯放牧草原における土壌呼吸に対する環境要因の影響　＊井上智晴（早稲田大・院・先進理工），小泉博（早稲田大・教育）

P1-156# 貧栄養塩河川において光がコントロールする付着藻類の栄養塩含有率がグレイザーの成長および再生産に与える影響　＊太田民久（北海道大学・環境科学院），三宅洋（愛媛大学・工学部），日浦勉（北海道大学・苫小牧研究林）

P1-157# 新型自動開閉チャンバーを用いた土壌呼吸速度の解析　＊安西理（早稲田大・教育），友常満利，吉竹晋平（早稲田大・院・先進理工），小泉博（早稲田大・教育）

P1-158# ヒノキ林における土壌無機態窒素の制御要因　＊米田聡美（京大院・農），臼井伸章（京大院・農），徳地直子（京大・フィールド研），大手信人（東大院・農），勝山正則（京大院・農），福島慶太郎（京大・フィールド研）

P1-159# モウソウチクの広葉樹二次林への侵入が窒素循環に与える影響　＊臼井伸章・米田聡美（京大院・農）・福島慶太郎・徳地直子（京大・フィールド研）・尾坂兼一（滋賀県大・環境科学）

P1-160# 腐植湖沼赤沼における溶存有機物分解に対する光と微生物の影響　＊千賀有希子，渡辺泰徳（立正大・地球），照井滋晴（NPO・PEG），広木幹也，野原精一（国立環境研）

P1-161# 冷温帯シバ草原における温暖化操作実験 －炭素収支への影響－　＊関根有哉，吉竹晋平（早稲田大・院・先進理工），小泉博（早稲田大・教育）

P1-162# 水生コケ植物の重金属蓄積特性　(*) 鈴木悠介（名大院・生命農），竹中千里（名大院・生命農），坪田博美（広大院・理）

P1-163# 河口干潟における落葉の底生生物による利用：食べてる？棲んでる？　＊伊藤尚子，佐々木晶子，中坪孝之，（広島大・院・生物圏）

P1-164# 熱帯雨林における伐採による土壌呼吸の時空間変動　＊高田モモ（広島大），山田俊弘（広島大），梁乃申（環境研），奥田敏統（広島大）

P1-165# インドネシア早生樹植林地におけるマメ科・非マメ科間での N_2O フラックスの比較　＊桑島 圭（京大院農）太田 誠一（京大院農）石塚 成宏（森林総研）根田 遼太（京大院農）川端ちあき（京大院農）

P1-166# 大気負荷が異なる環境下における樹体での栄養塩の吸収・溶脱の比較　＊今村直広，大手信人（東大・農），田中延亮（東大・演習林），小田智基，長山美由貴，鈴木雅一（東大・農）

P1-167# 階層ベイズモデルを用いた農耕地からの N_2O,NO 排出と環境応答評価　＊仁科一哉，秋山博子，須藤重人（農環研），西村誠一（中央農研）

P1-168# 土壌カラムへのバイオ炭と堆肥の施用による温室効果ガス発生への影響　＊上野貴史，太田誠一，京都大学農学研究科

種多様性・菌類・微生物

P1-169 管理履歴の異なる半自然草原における種組成の比較　佐久間智子（西中国山地自然史研究会）

P1-170 クワガタナカセのホストスイッチ　岡部貴美子＊，升屋勇人，神崎菜摘，滝久智

P1-171 ニッチ構造をもつ群集の中立的な相対種個体数分布パタン　＊竹内やよい，印南秀樹（総研大・先導科学）

P1-172 ニセアカシア人工林における下層植物多様性と在来広葉樹種の侵入状況　＊真坂一彦，山田健四，佐藤創，鳥田宏行，今博計（道総研 林業試験場）

P1-173 ヤミサラグモ類の交尾器形態の多様性と進化　＊馬場友希（農環研），井原 庸（広島県環境保健協会），吉武 啓（農環研），吉松慎一（農環研）

P1-174 ユスリカのミトコンドリア DNA 遺伝子塩基配列収集とその活用による種類相・系統地理調査の試み　＊高村健二，上野隆平，今藤夏子（国立環境研・生物）

P1-175 垂直断崖における無脊椎動物類の多様性　鹿野雄一（九大工）

P1-176 奥能登のため池の水質と生物多様性　＊久米篤（九大・農院），石田幸恵（富山大・理），西原昇吾（東大・農学生命），赤石大輔（NPO おらっちゃ），佐竹洋（富山大・理），張勁（富山 大・理），中村浩二（金沢大・理），鷲谷いづみ（東大・農学生命）

P1-177 三瓶山草原における指標植物抽出の試み　＊井上雅仁（三瓶自然館），高橋佳孝，堤道生（近中四農研センター）

P1-178 開田高原における草原管理と植生の関係　＊永田優子（神戸大・発達），丑丸敦史（神戸大・発達），須賀丈（長野県環境保全研究所），小原亮平（神戸大院・発達）

P1-179 1ha プロット内の樹種多様性とその空間構造の地理パターン：モニタリン グサイト 1000 森林・草原調査より　鈴木智之（自然環境研究センター）

P1-180 日本産ササ類における地理的・形態的・遺伝的変異　＊松尾歩（東北大院・農），蒔田明史（秋田県立大・生資），

陶山佳久（東北大院・農）

P1-181　大津市瀬田丘陵の里山林における環境異質性と地表性昆虫群集　*谷垣岳人（龍谷大・法），奥崎穣（京大・理）

P1-182　成熟した天然林における 192 種 52 科の樹木個体群の変化：森林動態データベースを中心としたモニタリングデータから　*小川みふゆ（森林総研），山浦悠一（北大・農），阿部真（森林総研），星野大介（森林総研東北），星崎和彦（秋田大県立大），飯田滋生（森林総研北海道），勝木俊雄，正木隆（森林総研），新山馨（森林総研東北），齊藤哲，酒井武，杉田久志（森林総研），田内裕之（森林総研四国），天野達也（農環研），滝久智，岡部貴美子（森林総研）

P1-183　日本産ダイコンソウ属 3 種の系統的位置付けと形態分化　藪田泰基（信州大・理）

P1-184　Macalanga bancana 茎内のアリの巣から出現する菌類の多様性　*大園享司（京大・生態研セ），広瀬大（日大・薬）

P1-185　アカマツ倒木上に生育するリョウブ実生の菌根化率　深澤遊（東北大院・農・生物共生）

P1-186　木曽駒ケ岳の標高に応じた樹幹着生地衣類の種組成と被度　矢久保允也（信州大・理）

P1-187　荒原生態系における土壌微生物群集の制限要因：富士山火山荒原の土壌微生物に対する炭素・窒素・リン制限　*吉竹晋平（早稲田大・院・先進理工），藤吉正明（東海大・教養），中坪孝之（広島大・院・生物圏），増沢武弘（静岡大・理），小泉博（早稲田大・教育）

P1-188　光合成細菌の貧栄養環境下での生残：種による違い　菅野菜々子，春田伸，*松浦克美（首都大・生命）

P1-190　Soil remediation by zero-valent iron nanoparticles (nZVI) and its impact on microbial community in soil　Yoon-Seok Chang*, Eun-Ju Kim, Kumarasamy Murugesan

動　物　群　集

P1-191#　タイリクモモンガとヒメネズミの樹上営巣場所の比較　*鈴木 圭，柳川 久（岩大連合農学，帯畜大）

P1-192#　栃木県奥日光地域における防鹿柵設置に伴う植生の回復が鳥類群集に与える影響　*奥田 圭（東京農工大・院・連農），小金澤正昭（宇都宮大・農・演習林）

P1-193#　葉面の毛で隠蔽されたダニ卵に対する捕食者の探索効率低下と探索努力飽和のタイムシーケンス　*須藤正彬，刑部正博（京大・農）

P1-194#　熱帯雨林の択伐が地上性ほ乳類相、およびフン虫相に与える影響　*保坂哲朗，胡友貴，奥田敏統（広島大・総合科学）

P1-195#　植生と環境要因が地上徘徊性昆虫の群集構造と多様性に与える影響　*小粥隆弘（筑波大・生命環境），上條志（筑波大・生命環境），田中健太（筑波大・菅平セ）

P1-196#　森林の生産性が異なる状況におけるエゾシカが造網性クモ類に与える影響の評価　*簑島萌子，高田まゆら（帯畜大），揚妻直樹，日浦勉（北大）

P1-197#　ため池のイトトンボ類の分布を決める要因　*関崎悠一郎，須田真一（東大院・農），角谷 拓（国環研），鷲谷いづみ（東大院・農）

P1-198#　水田の湛水開始時期の違いが水生動物群集にあたえる影響　*中西康介・田和康太・村上大介・蒲原俊・沢田裕一（滋賀県大・環境科学）

P1-199#　ミミズによるニッチ構築がササラダニ群集構造に与える影響　*廿楽法，金子信博（横浜国大・院・環境情報），小松崎将一（茨城大・農）

P1-200#　都市近郊林の地表性甲虫類に林分レベルの要因が及ぼす影響　菅野希（東京農工大・農）

P1-201#　捕食者がカサガイを介して藻類相に及ぼす間接効果　*和田葉子，岩崎敬二，遊佐陽一，奈良女子大学理学部生物科学科

P1-202#　都市緑地におけるテントウムシ群集の年次間比較　*秋山華，吉田智弘（東京農工大・農）

P1-203#　立山ハイマツ群落における中型土壌動物相の標高傾度に沿った変化　*松島綾子（富大院・理工），和田直也（富大・極東地研）

P1-204#　微小陸貝が鳥の捕食によって移住する可能性：追加検証　*和田慎一郎，千葉聡（東北大・生命），川上和人（森林総研）

P1-205#　印旛沼におけるオニビシ繁茂に伴う鳥類相の季節変化　*川津正之（東邦大・理），鏡味麻衣子（東邦大・理）

P1-206#　小河川におけるタナゴ類の生息環境　*滝口晃（農工大院・農），千賀裕太郎（農工大・農）

P1-207#　植物が根を介して土壌中のトビムシ群集に与える影響－根からの炭素供給に着目して－　*藤井佐織，齋藤星耕（京都大・農），武田博清（同志社大・理工）

P1-208#　千葉県における洞窟性コウモリのねぐら選択性　*中村光一朗（筑波大学・生命環境科学），繁田真由美（(株)野生生物管理），安井さち子（つくば市並木），上條隆志（筑波大学・生命環境科学）

P1-209#　森林生態系におけるクモ類の群集構造と餌資源利用様式　*小栗大樹，肘井直樹（名大院生命農）

P1-210#　Trophic cascade が決める在来種－外来種系のメタ個体群構造　*長田穣，武田勇人，黒江美紗子，宮下直（東大・農・生物多様性）

P1-211#　サギコロニー直下の地表性甲虫群集　－営巣時と営巣後の比較－　*籠洋（滋賀県大・環境），藤澤貴弘（大阪府大・生命環境），近雅博（京都市），野間直彦（滋賀県大・環境）

P1-212#　北伊豆諸島における異なるセミ群集間のアブラゼミの鳴き声分析　*遠藤暢（京大院農・森林生態），長谷川雅美（東邦大学），大澤直哉（京大院農・森林生態）

P1-213#　シカが増えるとタヌキが増える？－シカによるタヌキの餌資源への影響がタヌキ個体群に及ぼす影響－　*關義和（農工大・院・連合農学），小金澤正昭（宇大・演習林）

P1-214#　陸域腐食食物網へのアミノ酸窒素同位体比の適用　*長谷川尚志（京大・生態研），力石嘉人，小川奈々子，大河内直彦（JAMSTEC），陀安一郎（京大・生態研）

P1-215#　トキの採餌効率の違いをもたらす要因　*寺島大紀（新潟大・自然），遠藤千尋（新潟大・超域），蛯原香理（新潟大・自然），早川友康（新潟大・農），渡辺竜五（佐渡市役所・生物多様性），関島恒夫（新潟大・自然）

P1-216#　河口域における有鐘繊毛虫類の群集構成　一短期的変動とその要因　*風間健宏，占部城太郎（東北大院・生命）

行　　動

P1-217　白山で発見されたライチョウは何を語るのか　*上馬康生（石川県白山自然），佐川貴久（石川県白山自然）

P1-218　数種の小型シギにおけるバイオフィルムの採食　*桑江朝比呂（港空研），三好英一（港空研），細川真也（港空研），一見和彦（香大・瀬戸内センター），細谷淳（鳥類標識協会），守屋年史（バードリサーチ），石井正春（南港野鳥園）R. C. Ydenberg（SFU），R. W. Elner（CWS）

P1-219　精度か？ スピードか？ — マルハナバチの空間移動におけるトレードオフと学習環境の関係　*大橋一晴（筑波大・生命環境科学），Thomson, J.D.（トロント大学生態進化

生物学科）

P1-220　円網性クモにおける体色変異と餌捕獲　中田兼介（東京経済大）

P1-221　原虫（Farinocystis sp.）感染がイモゾウムシの行動に与える影響　熊野了州，栗和田隆，城本啓子（沖縄病害防技センター，琉球産経（株）），嶋田名利子，原口大（沖縄病害防技センター）

P1-222　アカスジカスミカメ雄由来成分が雌のパフォーマンスに及ぼす影響　＊奥 圭子（中央農研），山根隆史（中央農研・北陸研究センター）

P1-223　アルゼンチンアリ（*Linepithema humile*）における、特異な逃避行動　＊小林（城所）碧（神戸大・理），尾崎 まみこ（神戸大・理）

P1-224　小さいイナゴも自切する？　- コバネイナゴにおける体サイズと自切しやすさの関係 -　＊鶴井香織（弘前大・男女共同参画），本間淳（総研大・先導研），若宮慧（京大院農・昆虫生態），姫野孝彰（京大農・昆虫生態），西田隆義（滋賀県大・環境生態）

P1-225　P_2 値からみたナミアゲハの雌の配偶者選好性　＊佐々木那由太，渡辺 守（筑波大・院・生命環境）

P1-226　ニホンザルにおける採食グループサイズと採食成功の関係　＊風張喜子（京大・野生研），揚妻直樹（北大・フィールド科学センター）

P1-227　水欠乏によるマメゾウムシのメスの再交尾促進とその適応的意義　原野智広（九大院・理・生態科学）

P1-228　ヤドカリのオスの配偶者選択：他個体との遭遇履歴の影響　和田 哲，竹下文雄，安田千晶，鈴木祐太郎（北大院・水産）

P1-229　動物専用周波数帯を利用したニホンザルのリアルタイムモニタリングシステム　＊増間拓也，山本麻希（長岡技大・生物），酒井龍市，藤井芳輔，臼井秀行（（株）イートラスト），竹田謙一（信州大・農），羽山伸一（日獣大・獣医）

P1-230　河川の上位捕食者ナマズ（*Silurus asotus*）はいつエサを追尾するか　今村彰生（京都学園大バイオ環境）

P1-231　イヌビワコバチにおける産卵後の花のうからの脱出　木下智章（佐賀大・農）

P1-232　メコン河淡水魚類の耳石解析による回遊パターン解明　＊福島路生，野原精一（国環研），Tuantong Jutagate, Chaiwut Grudpan, Pisit Phomikong（UBU）

P1-233　ＧＰＳ首輪を用いたニホンツキノワグマの食性解析－休息場所の特性を利用して　後藤優介（立山カルデラ博），有本勲（農工大・農），古林賢恒（元農工大・農）

動物生活史

P1-234#　エンドウヒゲナガアブラムシの表現型多型に見られる翅形成様式の多様化　＊小川浩太，石川麻乃，三浦徹（北大・環境科学）

P1-235#　タメフン由来 VS. 鳥散布由来の実生：海岸砂丘林における土壌養分と局所密度の影響　＊菊地俊匡，佐藤孝，星崎和彦，井上みずき（秋田県大・生物資源）

P1-236#　造巣性端脚類 *Bubocorophium* sp. の同居巣存在比の季節変動　＊阿久津 崇，青木 優和（筑波大・下田臨海）

P1-237#　魚類の生活史はどのように変化するのか？ - 導入先における生活史の変化と多様性 -　鈴木規慈＊（三重大院生資），佐藤拓哉（京大フィールド研），原田泰志（三重大院生資）

P1-238#　メダカ（*Oryzias latipes*）個体群における遊泳速度の緯度クライン　宮下太輔＊，東 信行　弘前大学大学院農学生命科学研究科

P1-239#　シャープマメゾウムシにおける休眠経験の有無に関連した卵サイズ変異　＊川本さつき，石原道博（大阪府大・理）

P1-240#　同所的に棲むイワナとヤマメの成熟開始サイズ～釧路川水系 10 支流間で見られた多様性の謎～　＊佐橋玄記（北大・水産），森田健太郎（北水研），松石隆（北大・水産）

P1-241#　捕食圧と種間競争の違いに対応したシモダマイマイの生息場所、殻形態、生活史の変異　葛西直子（東邦大院・理・生物），長谷川雅美（東邦大・理・生物）

P1-242#　出生前に条件づけられている代替発生軌道　＊桑野真也（北大院・水産），岸田治（北大・北方生物圏 FSC），西村欣也（北大院・水産科学）

P1-243#　コイにとっての岸辺環境の有用性とストレス回避のトレードオフ　＊高原輝彦（地球研），山中裕樹（龍谷大・理工），鈴木新，本庄三恵，源利文（地球研），米倉竜次（岐阜県河川研），板山朋聡，神松幸弘（地球研），伊東尚史（養殖研），川端善一郎（地球研）

P1-244#　ソラマメヒゲナガアブラムシの翅型分化過程における翅原基の発達／退縮の制御　＊阿部 太亮，石川 麻乃，三浦 徹 北大，理，生物科学

P1-245#　北海道に来遊するゴマフアザラシの食性　＊渡辺なつ樹，梶光一（農工大・農），小林万里（東農大・生物産業，NPO 北の海の動物センター）

P1-246#　同所的に生息するスジハゼ３タイプの生活史特性～舞鶴湾において～　＊松井彰子，上野正博，山下洋（京大・フィールド研）

P1-247#　コイ科唯一の遡河回遊魚：ウグイの回遊パタンとその要因　臼井 平＊（北大 環），黒木 真理（東大 総博），高井 孝太郎（北大 環），小泉 逸郎（北大 創成）

P1-248#　生息域の違いがニホンウナギの銀化年齢と体サイズに及ぼす影響　須藤竜介，福田野歩人，青山潤，塚本勝巳（東大・大海研）

動物繁殖・動物社会生態

P1-249　マークオサムシ雄交尾器の刺状片の機能　＊奥崎穣（京大・理），高見泰興（神大・人間発達環境），土屋雄三，曽田貞滋（京大・理）

P1-250　交尾したのに精子移送を拒否するメス　＊栗和田隆，熊野了州，城本啓子，原口大（沖縄防技セ）

P1-251　最適配偶をめぐる雌雄の駆け引き－どう産むか、どう護るか？－　＊曽我部 篤（広島大・院・生物圏）

P1-252　カシノナガキクイムシ穿孔木の枯死確率は空間的に不均一　＊山崎理正，小田崇（京大院・農），伊東康人（兵庫農技総セ），安藤信（京大フィールド科学セ）

P1-253　兵庫県における過去 19 年のナラ枯れ被害拡大様式　＊伊東康人，山瀬敬太郎（兵庫農技総セ），山崎理正（京大院・農）

P1-254　ヨツボシモンシデムシの雄の給餌行動　＊岸田竜，鈴木信彦 佐大農

P1-255　オオアシトガリネズミのＰＣＲ法による性判別　黒田高光（東農大院生物），菊池文一，小川裕子（多摩動物公園），河原淳（霧多布湿原Ｃ），下井岳，橋詰良一，亀山祐一（東農大生物）

P1-256　メスの体サイズが要因の性的サイズ二型（オス＞メス）　高橋鉄美（京大・理）

P1-257　シロアリの女王特異的遺伝子発現と女王フェロモンの抑制効果　＊山本結花，渕側太郎，松浦健二（岡大院・環境）

P1-258　離合集散の生起と発声の文脈―クモザルとニホンザルの比較から　＊下岡ゆき子（帝京科学大・自然環境），杉

浦秀樹（京都大･野生生物）, Andres Link, Anthony DiFiore（ニューヨーク大）

P1-259　単為生殖を伴うウメマツアリにおける雌雄間コンフリクトと性投資戦略について　*岡本美里, 大河原恭祐（金沢大・自然研）

P1-260　真社会性アブラムシ、ササコナフキツノアブラムシにおける警報フェロモンの応答と送信能力の個体間変異　*服部充（信州大・理・生），岸田治（北大・フィールド科学センター・天塩研究林），市野隆雄（信州大・理・生）

P1-261　アリに絶対依存するアブラムシと共生アリの体表炭化水素の類似性　*遠藤真太郎（信州大院・総工），市野隆雄（信州大・理）

P1-262　シロアリのワーカーの攻撃性は状況や経験により強化されるのか？　*田部慧（北大・理），石川由希（北大・環境科学），北條賢（北大･環境科学，琉大･農），三浦徹（北大･環境科学）

P1-263　寄生バチ *Melittobia* における協力的雌偏向性比の可能性：裏切ったら裏切り返すか？　安部淳*（静岡大・連合農），上村佳孝（慶応大・生物）

保　　全

P1-264#　健全なカワシンジュガイ個体群と生息適地の解明　*照井慧（東大院･農），宮崎佑介（東大院･農），松崎慎一郎（国環研），鷲谷いづみ（東大院・農）

P1-265#　AFLP 分析による奈良県産ニッポンバラタナゴの遺伝的多様性の評価　*池田昌史，野口亮太，倉園知広，北川忠生（近大・農），加納義彦（NPO 高安研究会）･高田啓介（信大・理）

P1-266#　おどしの長さは混獲回避効果に影響するか？　～はえ縄漁業における海鳥混獲回避装置の性能比較～　*佐藤成祥，越智大介，南浩史，余川浩太郎（遠水研）

P1-267#　長野県上伊那地域における水田雑草の指標性を利用した環境評価の試み　*松下遼太, 大石善隆, 大窪久美子（信州大・農）

P1-268#　北海道・渡島半島のエゾシカ個体群で発見された特異的な mtDNA ハプロタイプについて　*山田敏也，寺田千里，竹川聡美（北大・環境科学院），宇野裕之（道総研・環境科学研究センター），齊藤隆（北大・FSC）

P1-269#　ツツジ属ミツバツツジ節の普通種と絶滅危惧種における遺伝的多様性と遺伝的構造の比較　*渡辺洋一，戸丸信弘（名大・院・生命農）

P1-270#　都市部の公園におけるセミ類の生息状況　*徳永元（明治大・農），倉本宣（明治大・農）

P1-271#　伊豆大島における二次林の種組成と保全の必要性　*落合はるな（明治大・農），倉本宣（明治大・農）

P1-272#　コウノトリの採食生態　―野外における採食効率と餌生物密度―　武田広子（東邦大・理）

P1-273#　自動撮影カメラを用いた哺乳類の生息調査：餌づけ効果、土地利用、季節の影響について　*近藤万里，椿宜高（京大・生態研セ）

P1-274#　東京都新宿区下落合における人とタヌキの共存の一考察　*李 厚槿，阿部 治（立教大学 大学院 異文化コミュニケーション研究科）

P1-275#　絶滅危惧淡水魚類における積極的保全手法の確立―カワバタモロコのため池への再導入を例として―　*上野篤史，鈴木規慈，原田泰志

P1-276#　北海道東部におけるクマタカの潜在的な生息適地推定　*藪原佑樹，赤坂卓美，三島啓雄，山浦悠一，中村太士

P1-277#　ツシマヤマネコの交通事故地点における空間スケールを考慮した景観要因の解析　*近藤由佳, 高田まゆら（帯畜大），原口塁華，茂木周作（対馬野生生物保護センター），前田 剛（対馬市），柳川 久（帯畜大）

P1-278#　ヒメダカの体色が配偶者選択・捕食に与える影響の検証　*中尾遼平，北川忠生

P1-279#　生育地の不均一性と畦畔の不連続な構造が、棚田畦畔の種多様性に及ぼす影響　*丹野夕輝，山下雅幸，澤田均（静岡大・農）市原実，稲垣栄洋（静岡農林研）

P1-280#　全個体ジェノタイピングによるハリマママムシグサの遺伝的構造　*深田ちひろ（神戸大院･人環），小林禧樹（兵庫県植物誌研究会），兼子伸吾，井鷺祐司（京都大・農），丑丸敦史（神戸大）

P1-281#　樹上カメラトラップによるヤマネの冬眠時期の推定　*大野愛子（熊本県立大），安田雅俊（森林総研九州），井上昭夫（熊本県立大）

P1-282#　ブナ集団における小集団化と隔離が遺伝的多様性に及ぼす影響　*伊藤圭佑（名大農），花岡創（森林総研林育セ），小谷二郎（石川県林試），中島春樹（富山県森林研），斎藤真己（富山県森林研），北村系子（森林総研北海道），戸丸信弘（名大院生命農）

P1-283#　異なる河畔林環境におけるイワナの食性の比較　*西 順平，五十嵐 翼，羽田桃香，渡辺俊晶，北村大海，関川紀子，山口友子，柳 貴洋，笠井 悠，高橋大輔（長野大・環ツー）

P1-284#　稀少猛禽類サシバの消化生理からみた重要給餌動物種の解明　*糸川拓真（岩大院・農），東淳樹，喜多一美（岩大・農），河端有里子（岩大院・農），渡辺祐策（岩手県鳥獣保護センター）

P1-285#　谷津における河畔植生がホトケドジョウに及ぼす影響　*正田惇（農工大院・農），千賀裕太郎（農工大・農）

P1-286#　混生地における下刈りがギフチョウ属 2 種の産卵行動に及ぼす効果　*安齋和樹, 佐藤衣里, 林田光祐（山形大･農）

P1-287#　野辺山高原におけるサクラソウ自生地の湿生および乾生群落の遷移状況の比較　*前田沙織（信州大院・農）大窪久美子，大石　善隆（信州大・農）

P1-288#　野辺山高原における絶滅危惧種アサマフウロの自生地分布と訪花昆虫　*近藤綾希子, 大窪久美子, 大石善隆（信州大・農）

P1-289#　イヌワシの保全を目的とした列状間伐地の植生遷移に草食動物の採食と光環境が及ぼす影響　*齋藤倫実，林田光祐（山形大・農）

P1-290#　夏期環境悪化による谷津干潟マクロベントス群集への影響の定量的評価　藤巻亮，荒巻淑恵，柚原剛，杉原奈央子，風呂田利夫

P1-291#　生息環境の違いが絶滅危惧種ダルマガエルの食性に及ぼす影響　*木田耕一（信大院・農），大窪久美子，大石善隆（信大・農），四方圭一郎（飯田市美博）

P1-292#　越後平野の農業用水路網における植物分布～水湿生植物の出現と水路構造～　*松本さおり（新潟大・農），石田真也（新潟大院・自然科学），高野瀬洋一郎（新潟大・超域研究機構），紙谷智彦（新潟大院・自然科学）

P1-293#　小笠原諸島に生息する絶滅危惧種アカガシラカラスバトの保全遺伝学的研究　安藤温子*（京大院・農），小川裕子（多摩動物公園），兼子伸吾（京大院・農），高野肇（森林総合研究所），鈴木創，堀越和夫（小笠原自然文化研究所），井鷺裕司（京大院・農）

P1-294#　カメラトラップによるツキノワグマ密度推定の可能性　*東出大志（新潟大院・自然科学），三浦慎悟（早大・人間科学），箕口秀夫（新潟大･自然科学系），青井俊樹（岩手大･環境科学系）

P1-295#　阿武隈山地南部とその周辺地域のツキノワグマ生

息環境評価　*新藤茜（東邦大・理），佐藤伸彦（(財）日本生態系協会），瀧本岳（東邦大・理）

P1-296#　環境保全型水田における水生ミミズの種構成とバイオマスの季節変動　谷地俊二*，大高明史，金子信博

P1-297#　里山のカエル類の多様性に影響する要因　酒井すみれ（東大・農・生物多様性）百瀬浩（中央農研・鳥獣害研）樋口広芳（東大・農・生物多様性）

P1-298#　多摩丘陵に分布する絶滅危惧種ホシザクラの生育環境と管理　*生亀正照，沼田真也（首都大・都市環境）

P1-299#　落葉広葉樹林帯におけるイヌワシ *Aquila chrysaetos* の餌利用特性を考慮した生息地の保全　*布野隆之，関島恒夫（新潟大学・院・自然科学），村上拓彦（新潟大学・農），阿部學（日本猛禽類研究機構）

P1-300#　エゾシカの高密度化がヤブサメの繁殖に与える影響の可能性　*上原裕世，吉田剛司（酪農学園大・環境），川路則友（森林総合研究所），梶光一（東京農工大・農）

P1-301#　野幌森林公園における樹洞の分布と利用　*菊地心，赤坂卓美，山浦悠一，中村太士（北大院・農）

P1-302#　絶滅危惧種ヒヌマイトトンボの生息地管理からみたヨシの個体群動態　*寺本悠子，渡辺守（筑波大・院・生命環境）

P1-303#　放鳥されたトキの採餌環境特性　*蛯原香理（新潟大・自然科学），遠藤千尋（新潟大・超域），西川潮（新潟大・超域），渡辺竜五（佐渡市役所・生物多様性），関島恒夫（新潟大・自然科学）

P1-304#　大都市近郊におけるロードキルの分布－異なるスケールによる解析－　*立脇隆文，高槻成紀（麻布大・院・獣医）

P1-305#　有性生殖をする絶滅危惧植物アオグキイヌワラビの遺伝構造―複数生育地にまたがる遺伝的固定―　*伊津野彩子（京大・農），高宮正之（熊大・自然科学），兼子信吾（京大院・農），井鷺裕司（京大院・農）

P1-306#　高山帯に侵入したエゾシカ（*Cervus nippon yezoensis*）から高山植物を守れるか？　- 夕張岳における植生保護柵設置に関する機能効果とその課題 -　*杉浦晃介（酪農学園大学大学院），坂村武（北海道自然環境課），赤坂猛（酪農学園大・環境），吉田剛司（酪農学園大・環境）

P1-307#　絶滅危惧種オオセッカ *Locustella pryeri* の繁殖生態　－特殊な植生環境選択の理由－　*高橋雅雄，上沖正欣（立教大・理・動物生態），蛯名純一，宮彰男（NPO おおせっからんど），上田恵介（立教大・理・動物生態）

P1-308#　小川原湖における沈水植物及びマリモ類の分布の特徴と環境要因　*馬場俊介（東大院・農），赤坂宗光，高村典子（国環研）

P1-309#　スゲ属植物の phytostabilization への利用可能性　*渡辺裕也（名大院生命農），竹中千里（名大院生命農），星野卓二（岡山理科大学総合情報学部）

P1-310#　都市近郊の平地水田におけるトウキョウダルマガエルの分布の決定要因　*山本康仁（東京農工大・院），千賀裕太郎（東京農工大・農）

P1-311#　AFLP とマイクロサテライト多型解析による絶滅危惧種タデスミレの残存個体群評価　*畑中佑紀（京大・院・農），尾関雅章（長野県環境保全研究所），平尾章（筑波大・菅平セ），井鷺裕司（京大・院・農）

P1-312#　トノサマガエルの個体数と遺伝的多様性の減少をもたらす要因　*道本久美子，高見泰興（神戸大・人間発達環境），田中洋之（京都大・霊長研），丑丸敦史（神戸大・人間発達環境）

P1-313#　都市近郊域におけるニホンザルによる被害意識　*中村大輔（岐阜大・連農），吉田洋（山梨環境研），松本康夫（岐阜大・応用生物）

P1-314#　実分布データから導く湿原絶滅危惧種の保全指針　*小幡智子（東大・農），石井潤（東大・農），角谷拓（国環研），鷲谷いづみ（東大・農）

P1-315#　外来侵入アリのヒアリにおける侵入個体群で見られる遺伝的な多様性について　*佐藤一樹（北教大・環境科学），笹千舟，坂本洋典，東正剛（北大・環境科学院），村上貴弘（北教大・環境科学）

P1-316#　生息地破壊と絶滅のモデルによる解析：面積減少よりも分断化が重要？　*林木悠佳里，兵庫県立大学環境人間学部

生態系管理・都市・教育

P1-317　里山の中の湿原群落―愛知県矢並湿地の植生と周辺の里地・里山の利用の変遷　*名古屋大・環境

P1-318　遺伝子組換えセイヨウアブラナの逸出状況に関する経年変化と周年変化について　*西沢 徹，中嶋信美，玉置雅紀，青野光子，久保明弘，佐治 光（国立環境研）

P1-319　農薬曝露実験のためのエビモ（*Potamogeton crispus* L.）のバイオアッセイ系　*細木大輔，池田浩明

P1-320　種子食昆虫による”雑草防除サービス”を高める水田畦畔の創出　*市原実，松野和夫，稲垣栄洋，済木千恵子（静岡農林研），水元駿輔，山口翔，山下雅幸，澤田均（静岡大・農）

P1-321　釧路湿原の長期生態系モニタリング　”モニタリング 1000 事業”　*野原精一（国立環境研），佐藤雅俊（帯広畜産大学），照井滋晴（環境把握推進ネットワーク－ PEG）

P1-322　釧路湿原の土壌理化学性と有機物分解活性　*広木幹也（国立環境研），千賀有希子（立正大），野原精一（国立環境研）

P1-323　北海道石狩地方に生息するアオサギの生息地利用　玉田克巳（道総研）

P1-324　国土スケールでみた里地里山の生物多様性と生態系サービスの変動評価　*大黒俊哉（東大・農），角媛梅（東大・農，雲南師範大），井上雅文・李召羅（東大・アジア生物資源環境センター）

P1-325　自動撮影カメラによる東南アジア熱帯林の地上性哺乳類モニタリング手法の開発　*鮫島弘光（京大東南研），Robert Ong（サバ森林局），北山兼弘（京大農学研究科）

P1-326　海洋島における野生化ヤギの排除が物質循環に与えるインパクト：草本植生の地上部バイオマスと窒素、リンの空間分布　*畑 憲治，郡 麻里（首都大院・理工・生命），森田沙綾香，平舘俊太郎（農環研），可知直毅（首都大院・理工・生命）

P1-327　氷ノ山山系における森林下層植生の衰退とニホンジカの動向　*藤木大介・森光由樹・斎田栄里奈・岸本康誉・坂田宏志（兵庫県大・兵庫県森林動物セ）

P1-328　海洋島における野生化ヤギの排除が物質循環に与えるインパクト：生態系モデルの開発　*吉田勝彦（国立環境研・生物），畑 憲治，郡 麻里，可知直毅（首都大院・理工・生命）

P1-329　北海道の天然林における植物多様性の簡易評価手法　八坂通泰（道総研・林業試）

P1-330　複数の密度指標を用いた状態空間モデルによるニホンジカ個体群密度の推定　*飯島勇人（山梨県森林研），長池卓男（山梨県森林研），本田剛（山梨県総合農業技術セ）

P1-331　木曽川一時水域における希少魚イタセンパラの生息場所の物理環境特性　*佐川志朗（自然共生研究セ），根岸淳二郎（北大院地球環境・自然共生研究セ），萱場祐一（自然共生研究セ），池谷幸樹（アクアトトぎふ），久米 学（自然共生研究セ），北村淳一（三重県新博・自然共生研究セ），白江健造（木曽川上流河川事務所）

ポスター発表　3月9日(水)10:00－17:15
(大ホール　会場　P　　#：ポスター賞対象発表)

P1-332　スギ人工林の間伐が水平根分布に与える影響　*山瀬敬太郎，伊東康人（兵庫農技総セ），栃木大介（ひょうご環境創造協会），藤堂千景（兵庫農技総セ）

P1-333　天然生針広混交林における枯死木の腐朽に及ぼす立地･樹種の影響　*井上太樹（北大･環境科学），南雲未智（北大・環境科学），吉田俊也（北大・北方生物圏 FSC）

P1-334　Assessment on ecosystem services of Satoyama landscape in central Japan and Hani terrace in Southwest China　*Jiao, Y. (The Univ. Tokyo, Yunnan Normal Univ.), Okuro, T., Takeuchi, K. (The Univ. Tokyo)

P1-335　耕起および水位管理が異なる水田間での雑草群落比較－石川県珠洲市の事例　*伊藤浩二（金沢大・地域連携推進セ），中村浩二（金沢大・環日本海域研究セ）

P1-336　低投入型放牧の有用性：野草地と改良草地における生産性と多様性の比較からの検討　*佐々木雄大（東北大･院・生命），吉原佑，陶山佳久（東北大・院・農学），中静透（東北大・院・生命）

P1-337　石灰岩捨石集積場における植生遷移の人為的誘導を目的とした土壌改良試験　*東山優（岩手大共生環境），松木佐和子（岩手大共生環境），河合成直（岩手大応用生物化学）

P1-338　Terrestrial carbon flux in Korea　*Yoo, S.J. (Korea Univ.), Lee, W.K. (Korea Univ.), Kwak, D.A. (Korea Univ.), Ito, A (NIES)

P1-339　Monitoring Desertification Vulnerable Area using MODIS NDVI　*Cui, G.S（Korea Univ），Lee, W.K（Korea Univ）

P1-340　知床半島におけるエゾシカによる森林植生への影響の評価と推移予測　*渡辺修（さっぽろ自然調査館），石川幸男（専修大道短大），荻原 裕（北海道森林管理局），三宅悠介（環境省釧路自然環境事務所）

P1-341　エゾシカ高密度生息域における樹木・林床植生への影響の指標化　*丹羽真一，渡辺修（さっぽろ自然調査館），明石信廣（道総研林試），宇野裕之（道総研環境研），荻原 裕（北海道森林管理局）

P1-342　放射線の生態系影響を考える　-microcosm への連続照射の場合 -　*川口勇生，土居雅広，府馬正一（放医研）

P1-343　薪炭林管理がオサムシ科甲虫群集に与える影響　*近藤慶一（名城大・院・農学），松本和馬（森林総研・多摩森林科学園），日野輝明（名城大）

P1-344　伐採後の回復過程に初期の林分構造が及ぼす影響－択伐施業が行なわれた天然生針広混交林　吉田俊也（北大・北方生物圏 FSC）

P1-345　Growth response model of dbh to climate change using tree ring data　*Byun, J.G. (Korea University), Choi, S. (Korea University), Kwak, H. (Korea University), Lee, W.K. (Korea University)

P1-346　Modeling urban heat and carbon distribution with city development　*Lee, S. (Korea Univ.), Choi, S. (Korea Univ.), Lee, W.K. (Korea Univ.)

P1-347　施業方法・林齢・樹種・シカ密度が異なる人工林におけるツキノワグマの食物資源量の推定　*川村芙友美（帝京科学大），有本勲（東京農工大），山﨑晃司（茨城自然博），小池伸介（東京農工大），森貴久（帝京科学大）

P1-348　東京都心のチョウ相～チョウが棲みよい都市緑地とは～　*今藤夏子，伊藤洋，竹中明夫（国立環境研）

P1-349　都市環境における樹木のストレス耐性　*大曽根陽子（大妻女子大･社会情報）･清水亜香里（大妻女子大･社会情報）･菊地賢（森林総研）

P1-350　Case Study of Environment project, Naga City in Philippines　*Taishin Kameoka (Hiroshima university, IDEC), Nobukazu Nakagoshi (Hiroshima university, IDEC), Victorino E. Aquitania (ICLEI), Mahallah Adalia (ICLEI)

P1-351　文系大学における生態学教育－京都外国語大学の事例 Part2 －　畑田 彩（京都外国語大学）

P1-352　蜘蛛から学ぶ自然環境　岩本二郎（長岡市立科学博物館*），水澤正明（日本蜘蛛学会）

P1-353　行政支援によるため池－里山複合生態系保全のための地域住民へのアプローチ．２　*東敬義（三重県立図書館），阿藤正樹（三重県津農林水産商工環境事務所）

P1-354　行政支援によるため池－里山複合生態系保全のための地域住民へのアプローチ．１　*阿藤正樹（三重県津農林水産商工環境事務所），東敬義（三重県立図書館）

P1-355　市民協働植物相調査を基盤とした地域づくりの実践　*伊藤千恵（十日町市立里山科学館キョロロ），山岸洋貴（弘前大・白神），三上光一（農環研・生物多様性），沢畠拓夫（農研機構・果樹研），永野昌博（十日町市立里山科学館キョロロ）

ポスター発表　3月10日(木)10:00－17:15

（大ホール　会場　P　　＃：ポスター賞対象発表）

動物と植物の相互関係・種子散布

P2-001#　ヒサカキの性特異的な防御とそれに相関する花食者の産卵選好性　辻かおる*，曽田貞滋 京大・院・理

P2-002#　ボルネオ低地熱帯雨林の着生シダと共生するアリが林冠のつる植物に及ぼす影響　*田中洋，市岡孝朗（京大院・地球環境学堂）

P2-003#　種子寄生者と種子サイズ間に生じる相互作用の地理的変異　*定清奨，石原道博（大阪府大・理）

P2-004#　ヤマトシジミ *Zizeeria maha* の産卵刺激物質について　筑波大学 生命環境科学 生物資源学類 動物制御学研究室

P2-005#　異なる可塑的防衛が捕食者 - 被食者系の個体群動態へ与える影響：ケモスタットを用いた実証実験　*櫻澤孝佑，李 恒，吉田丈人

P2-006#　エゾアザミテントウにみられる地域適応とその遺伝的基盤　*川崎淳一，鈴木克樹，藤山直之（北教大・旭川），片倉晴雄（北大・院理）

P2-007#　エゾアザミテントウの副次的食草利用能力：野外での利用状況との関係　*村井 歩，藤山直之（北教大･旭川），片倉晴雄（北大・院理）

P2-008#　ネズミモチのホソガ科リーフマイナー *Phyllocnistis* sp. の生態と寄主植物の防御特性　*箕浦哲明（名大・農），綾部慈子，松下泰幸，肘井直樹（名大院・生命農）

P2-009#　ブナ幼樹の誘導防御の経時変化　*青山千穂，小池孝良（北大院農）

P2-010#　印旛沼におけるオニビシとジュンサイハムシの関係　*齊藤 温，鏡味 麻衣子（東邦大学理学部）西廣 淳（東京大学農学生命科学）

P2-011#　様々な植物上のサビキンに寄生するタマバエの系統関係について　*本田 薫，三宅 崇（岐阜大 教育）

P2-012#　青山高原におけるニホンジカによる造林木剥皮害の発生傾向　*中村あずさ（岐阜大応生），安藤正規（岐阜大応生），福本浩士（三重県林業研），佐野明（三重県四日市農林商工環境事務所）

P2-013#　標高傾度に沿ったヤマホタルブクロの花サイズ変異と遺伝子流動　*長野祐介，北沢知明，市野隆雄（信州大・理・生物）

P2-014#　土壌栄養塩分布が不均質な環境下で同所的に育成されたホソムギとヘラオオバコに対する地下部植食者の影響　*角田智詞，可知直毅，鈴木準一郎（首都大・理工・生命科学）

P2-015#　ヒメシャガ繁殖器官の食害者の採餌戦略　- 花弁・葯・子房の栄養・防御物質の量と、それぞれの食害率の関係 -　*小野寺洋史，小黒芳生，酒井聡樹（東北大・院・生命科学）

P2-016#　ツキノワグマの活動量は temporal に変動する　―堅果結実量が異なる年次間の共通点と相違点―　*小坂井千夏（農工大・連大），山﨑晃司（茨城自然博），根本唯（自然研），中島亜美，小池伸介，梶光一（農工大），阿部真，正木隆（森林総研）

P2-017#　山中峠ミズバショウ群生地への野生動物による被害　*押山友美（岐阜大応生），安藤正規（岐阜大応生）

P2-018#　アリ植物 *Macaranga* の繁殖にアリは役立っているのか？　*山崎 絵理（京大生態研），乾 陽子（大阪教育大），酒井 章子（地球研）

P2-019#　知床羅臼岳における，標高傾度に沿ったササラダニ群集と環境要因の関係　*太田藍乃（横浜国大･環境情報），森章（横浜国大・環境情報），大園享司（京大生態研セ），保原達（酪農大），水町衣里（京都大･iCeMS），萩原佑亮（京大院・農），塩野貴之（横浜国大・環境情報），小出大（横浜国大・環境情報）

P2-020#　スギ人工林の荒廃に伴う鳥類優占種の個体数変動　*渡邉謙二，持田幸良（横国大･院･環境情報），鈴木茂也（大山林道観察グループ）

P2-021#　・モンゴル国の退化草原におけるブラントハタネズミ（*Microtusbrandti*）、タルバガン（*Marmotasibirica*）、ダウリナキウサギ（*Ochotonadaurica*）の生息戦略に関して　澤向麻里絵（酪農大・酪）

P2-022#　ブナ科堅果資源量の年次変化がツキノワグマの生息地選択に与える影響　*梅村佳寛（農工大・農），小坂井千夏，中島亜美（農工大・連大），根本唯（自然研），小池伸介（東京農工大），郡麻里，阿部真，正木隆（森林総研），山﨑晃司（茨城県博），梶光一（東京農工大）

P2-023#　杠葉尾における農地周辺のシカの摂食の影響　*石丸薫（滋賀県大・環境），野間直彦（滋賀県大）

P2-024#　異なる食草におけるルイヨウマダラテントウの発育パフォーマンスの比較　*富樫朱美（北大・院理），松本和馬（森林総研），片倉晴雄（北大・院理）

P2-025#　鳥散布液果ミズキの種子散布パターン　－結実量と散布者の時空間的変化の影響－　*山﨑 良啓（京大院・農），直江 将司（京大・生態研），藤津 亜季子（農工大院），兼子 伸吾（京大院・農），山崎 理正（京大院・農），正木 隆（森林総研），井鷺 裕司（京大院・農）

P2-026#　低木液果への果実食者の訪問　*藤津亜季子（東京農工大・院）

P2-027#　鳥はどこへタネを運ぶのか？－同種・他種の結実木と散布種子の空間分布－　*直江将司（京大・生態研），酒井章子（地球研），正木隆（森林総研）

P2-028#　森林の階層構造が鳥類の種子散布に与える影響　*田中 悠希（鳥取大学大学院・農），佐野 淳之（鳥取大学・農・FSC）

P2-029#　大山ブナ老齢林における母性解析によるブナの種子散布パターンの解明　*稲永路子（名大院生命農），有馬千弘，永松大（鳥大地域），鳥丸猛（弘前大農生），西村尚之（群馬大･社会情報），戸丸信弘（名大院生命農）

P2-030#　アマモの種子はどこへ行くのか？　*細川真也（港空研），仲岡雅裕（北大），三好英一（港空研），桑江朝比呂（港空研）

P2-031#　糞内容物分析から見た鳥類の食性及び種子散布について　*金子尚樹，中田誠（新潟大・自然科学），千葉晃（日歯大・新潟），伊藤泰夫，赤原清枝，市村靖子，沖野森生，小松吉蔵，佐藤弘，太刀川勝喜，南雲照三，藤沢幹子，古川八重子（にいがた野鳥の会）

群　　　落

P2-032　木曽駒ヶ岳高山風衝地におけるオープントップチャンバー内の植生変化　*尾関雅章，浜田崇（長野環境保全研），飯島慈裕（海洋研究開発機構），水野一晴（京都大院・アジア・アフリカ），中新田育子（宮城大）

P2-033　ブナ 2 次林の競合過程を観る　島谷健一郎（統数研）

P2-034　三宅島の火山灰堆積地における植生と中大型ミミズ類の関係　*久保栄子（筑波大･生），上條隆志（筑波大･生），金子信博（横国大・環），東亮太（筑波大・生）

P2-035　佐渡島のナラ枯れによる林分構造の変化と被害要因の検証　金子洋平（新潟大・超域研究機構）

P2-036　地上部刈り取りに対するミヤコザサの応答　*壁谷大介，齋藤智之（森林総研），長谷川元洋，岡本透（森林総研・木曽），清野達之（筑波大・八ヶ岳）

ポスター発表　3月10日（木）10:00－17:15
（大ホール　会場　P　　#：ポスター賞対象発表）

P2-037　チシマザサ節とチマキザサ節の棲み分けを規定する気候要因の解明と温暖化の影響予測　＊津山幾太郎（森林総研），中尾勝洋（森林総研），堀川真弘（トヨタ・バイオ緑化），松井哲哉（森林総研・北海道），小南裕志（森林総研・関西），上條隆志（筑波大・生命環境），田中信行（森林総研）

P2-038　東南アジアの熱帯山地におけるブナ科の垂直分布パターンの比較　＊原正利（千葉中央博），神崎護（京大，農），水野貴司（大阪市大，理），野口英之（大阪市大，理），K. Sri-Ngernyuang（Maejo U.），S. Teejuntuk（Kasetsart U.），C. Sungpalee（Maejo U.），大久保達弘（宇都宮大，農），山倉拓夫（大阪市大，理），P. Sahunalu（Kasetsart U.），P. Dhanmanonda（Kasetsart U.）

P2-039　南極湖沼生態系の多様性と植生構造　伊村智（極地研）

P2-040　北海道中央部の天然生林の種組成－主要樹種の出現パターンに与える立地環境、森林の発達程度、施業の有無の影響－　＊大野泰之（北海道林試）

P2-041　隣接した草原－森林間での多変量回帰木によるエコトーン検出　＊中山智絵（茨城大学），鈴木真理子（茨城大学），齋藤彩（茨城大学），若林遼（茨城大学），安田泰輔（山梨県環境科学研究所），中野隆志（山梨県環境科学研究所），堀良通（茨城大学）

P2-042　仙丈ヶ岳におけるシカ防除柵設置による高山植生の回復　＊渡邉修（信大・農），草野寛子（信大・農）

P2-043　雑草群落および放牧草地群落における種構成のバイオマスからみた空間分布　＊佐々木彩，神田洋之，樋渡達哉，山村靖夫，塩見正衛（茨城大・理）

P2-044　上高地梓川河床におけるパッチ状群落の消長と草本群落の種組成変化　＊川西基博（鹿児島大・教育），石川愼吾（高知大・理）

P2-045　ハリエンジュ林における在来樹木の生育状況　＊畠瀬頼子（自然研）・阿部聖哉（電中研）・長岡総子（横浜植生研究会）・和田美貴代（学芸大）

P2-046　急峻な地形に発達する森林構造　＊北川 涼（横浜国大・環境情報），加藤 顕（千葉大学・園芸），森 章（横浜国大・環境情報），酒井暁子（横浜国大・環境情報）

P2-047　Vegetation Analysis of Evergreen Broadleaved Forests in South-western Insular Areas of S. Korea　*Sung-Je LEE, Keiichi OHNO (Graduate school of Environment and Information Sciences, Yokohama National University), Young-Hee AHN (Department of Applied plant science, Chung-Ang University), Jong-Suk SONG (Department of Biological sciences, Andong National University)

P2-048　アマゾン天然林における林冠ギャップ動態　＊飯田滋生（森林総研北海道），八木橋勉（森林総研東北），田内裕之（森林総研四国），久島宏道（森林総研木曽），N. Higuchi（INPA）

P2-049　暖温帯上部天然林における温帯性針葉樹と常緑広葉樹の分布と地形との関係　＊酒井武，杉田久志（森林総研），日浦勉（北大苫小牧研究林）

P2-050　落葉広葉樹林における各環境要因・及び林冠構成種の違いが複合的に林床の植物相に及ぼす影響　＊大山拓郎，紙谷智彦（新潟大・院・自然科学）

P2-051　落葉広葉樹林におけるギャップ更新の実態　－稚樹群集構造の１９年－　＊阿部真（森林総研），高橋里衣（東農大卒），小山未奈（東農大・農学研究科），佐藤明（東農大・地域環境科学部）

P2-052　Exploring phylogenetic structure of tropical peat swamp forests　*Tetsuya Shimamura, Erna S. Poesie（Ehime Univ.）

P2-053　降水量と放牧圧がモンゴルの植生変化に及ぼす影響　＊程云湘，坪充，伊藤健彦，篠田雅人

P2-054　自然草原域における希少１年草群落の種組成的特徴　＊村上雄秀（国際生態学センター），西川博章（（株）ラーゴ）

P2-055　釧路市春採湖における水生植物の 10 年間の変動　神田房行（北海道教育大・釧路）

P2-056　常緑広葉樹林北限の山域に発生する温度逆転現象と植生の垂直分布　佐野哲也＊（森林総研），大澤雅彦（マラヤ大学）

P2-057　富士北麓野尻草原の遷移過程における空間パターン変化　＊安田泰輔，中野隆志，杉田幹夫（山梨県環境科学研究所），中山智絵，齋藤 彩，若林 遼，堀 良通（茨城大・理）

P2-058　富士山亜高山帯針葉樹林内の開放地における地衣類の分布決定要因　石井史織（千葉大・園），沖津進（千葉大・園）

景観生態・古生態

P2-059#　冷温帯林におけるニホンザル野生群の冬期森林利用に関する空間的評価　＊坂牧はるか（岩手大・院），江成広斗（宇都宮大・里山科学セ），青井俊樹（岩手大・農）

P2-060#　モンゴル草原における非平衡モデルの検証：資源の空間的異質性と放牧圧の関係に着目して　＊柿沼薫，岡安智生（東大・農），佐々木雄大（東北大・理），ジャムスランウンダルマー（モンゴル農大），大黒俊哉，武内和彦（東大･農）

P2-061#　航空写真からみる八甲田山の植生変化：過去 30 年間で何が変わったか　＊嶋崎仁哉，佐々木雄大，神山千穂，片渕正紀，彦坂幸毅，中静透（東北大・院・生命科学）

P2-062#　長野県上伊那地方における水田地域のカエル群集と生息環境条件との関係　＊渡邉晴子，大窪久美子，大石善隆

P2-063#　長野県上伊那地方の水田地域における水生昆虫群集と立地環境条件との関係　＊榊原有里子，大窪久美子，大石善隆（信州大・農）

P2-064#　シカ食害から見た陸域 - 水域相互作用系　シカと水生無脊椎動物との関係　境 優＊・夏原由博・今西亜友美・加藤真

P2-065#　Caught on cameras in Malaysia Borneo!　Hon Jason* (Kyoto Uni), Morimoto Yukihiro (Kyoto Uni)

P2-066#　カメルーン東南部熱帯林における植生景観の多様性と地域住民の伝統的生態学的知識　＊大石高典（京大・こころの未来研究セ），Fongnzossie Evariste（Univ. de Yaounde 1）

P2-067#　両生類の感染症カエルツボカビの生息適地モデリング　＊森口紗千子（環境研），鈴木一隆（環境研），富永篤（琉大・教育），五箇公一（環境研）

P2-068#　広島県北西部におけるニホンザルによる農作物被害の変遷　＊渡辺麻気（広島大･院･国際協力），山崎亙（広島大･院・国際協力），中越信和（広島大・院・国際協力）

P2-069#　地表性昆虫と景観構造の関係　＊山中聡，赤坂卓美，山浦悠一，中村太士（北大・農）

P2-070#　エゾシカ解体処理施設の適正配置に関する研究　＊植月智子（酪農学園大学大学院），吉田剛司，伊吾田宏正（酪農学園大・環境），井田宏之（社団法人エゾシカ協会），宇野裕之（道総研・環境科学研究センター）

P2-071#　長野県上伊那地方の立地条件が異なる水田地域における群落の構造と多様性　＊渡辺太一，大窪久美子，大石善隆（信州大・農）

P2-072#　関東・甲信地方の山地草原・落葉広葉樹二次林における草原生植物の生育状況の変化　＊大津千晶，星野義延（東京農工大・院・農），末崎朗（新潟県庁）

P2-073#　ナラ枯れの拡大に影響を与える植生とは　＊今廣佐和子（東北大･生命），斉藤正一（山形県森林研究研修センター），中静透（東北大・生命）

P2-074#　山梨県上ノ原地区の半自然草地における低木種クロツバラ（*Rhamnus davurica* var. *nipponica*）の分布と管理履歴　＊小林慶子，田中涼子（横浜国大・院・環境情報），林敦子（元山梨県森林研）

P2-075#　空中写真から主要広葉樹種判別を行うための開葉・紅葉期の色特性解析　＊小戸田紋郁（新潟大院・自然科学），村上拓彦（新潟大・農），紙谷智彦（新潟大院・自然科学）

P2-076#　長野県上伊那地方水路網ネットワークにおける水生植物の分布と立地環境条件との関係　＊御池俊輔，（信大院・農），大窪久美子，大石善隆（信大・農）

P2-077#　紅海沿岸地域におけるマングローブの空間・スペクトル特性の解析　米森 舞乃 酪農学園大学 環境リモートセンシング研究室

P2-078#　土地利用形態が河川棲サケ科魚類の生息に及ぼす影響　野本和宏（北大院環境科学），小泉逸郎（北大院環境科学），深谷肇一（北大院環境科学），東正剛（北大院環境科学），

P2-079#　北海道厚岸湖におけるアマモ場の空間分布と生物多様性　＊渡辺健太郎（北大・厚岸），東条斉興（JICA），堀正和（瀬戸内水研），田中義幸（JAMSTEC・むつ），鎌内宏光（北大・厚岸），Napakhwan Whanpetch（千葉大・理），山田勝雅（千葉県水研セ・東京湾漁研），Laura K. Reynolds（Virginia Univ.），百田恭輔（北大・水産），仲岡雅裕（北大・厚岸）

P2-080#　都市緑地とその周辺環境における鳥類利用の季節変化　＊村田麻理恵（鳥取大・院・地域），永松大（鳥取大・地域）

P2-081#　水田生態系の空間異質性がアマガエル個体群の空間構造に与える影響　＊武田智，片山直樹，宮下直（東大・農・生物多様性）

P2-082#　好樹液性昆虫が利用できる樹液場の分布　＊山田啓介，小池文人（横浜国大院 環境情報）

P2-083#　森林施業における保残帯の景観生態学的効果 ～カギ型 habitat 内での生物の分布と移動～　＊星野彰太（東北大・生命科学），松本和馬（森林総研・昆虫生態），中静透（東北大・生命科学）

P2-084#　Sustainable development strategy for coral reef resources, Mindanao　＊Brando Cabigas Razon, Nobukazu Nakagoshi (Hiroshima Univ.)

P2-085#　Identification of Potential Area for Oil Palm Plantation in Landak regency, West Kalimantan　＊Johaerudin, Toshiaki Kondo, Nobukazu Nakagoshi

P2-086#　Implementation of REDD+ in Indonesia　＊Ima Yudin Rayaningtyas (IDEC, Hiroshima University), Toshiaki KONDO (IDEC, Hiroshima University), Nobukazu NAKAGOSHI (IDEC, Hiroshima University)

P2-087#　三重県池の平湿原堆積物の花粉・微粒炭分析からみる過去 1000 年間の火事史と草原の成立・維持過程　＊林 竜馬，高原 光（京都府大・生命環境），西村 亮（林野庁）

植物繁殖・送粉

P2-088　サラワク州ランビルヒルズ国立公園における *Shorea* 属樹種の遺伝構造と遺伝子流　＊名波哲，原田剛，松山周平，伊東明（大阪市立大・理），Sylvester Tan，Bibian Diway，Lucy Chong（Sarawak Forestry Corporation），山倉拓夫（大阪市立大・理）

P2-089　ヒガンバナの稔性と発芽について　＊瀬戸良久，武市早苗，中嶋克行（たけいち醫學研究所）

P2-090　阿蘇地方の草原性絶滅危惧植物マツモトセンノウの繁殖生態　＊安部哲人（森林総研・九州），横川昌史（京都大・農），井鷺裕司（京都大・農）

P2-091　雌雄異株のタチヤナギにおける両性変異家系の性表現と近交弱勢　＊永光輝義（森林総研），二村典宏（森林総研）

P2-092　ハルリンドウの花サイズと結実率の関係　＊増田理子（名工大・社会工学），野口智未（名工大・都市社会），高井美紀（名工大・社会工学）

P2-093　Outcrossing rates of *Sasa cernua* at small scale single-genet flowering sites　＊Keiko Kitamura, Takayuki Kawahara（Hokkaido Res. Cen. FFPRI）

P2-094　コクサギのみかけの性比について　ー石灰岩地でコクサギはなぜ雄ばかり目にするのか？ー　＊松久聖子，柳沢直（岐阜県立森林文化アカデミー）

P2-095　ニホンタンポポとセイヨウタンポポの雑種の進化 ～戻し交配雑種の生殖能力～　＊満行知花（九大・理），保谷彰彦（東大・（院）総合文化），矢原徹一（九大・理）

P2-096　豊凶の年変動パターンの同調性：ブナ科樹木３種における個体レベルの比較　＊水谷瑞希（福井県自然保護センター），多田雅充（福井県海浜自然センター）

P2-097　河岸の岩場に生育するユキヤナギの開花特性の経年変化　＊芦澤和也（明治大・院・農），倉本宣（明治大・農）

P2-098　栃木県日光市の林木遺伝資源モニタリング試験地におけるミズナラ落下堅果の粒数とサイズの季節変化　＊大谷雅人（森林総研林育セ），篠﨑夕子（森林総研林育セ），岩泉正和（森林総研林育セ），矢野慶介（森林総研林育セ），平岡宏一（森林総研林育セ），宮本尚子（森林総研林育セ），高橋誠（森林総研林育セ）

P2-099　シナサワグルミの種子サイズの個体内変異　＊井出純哉，後藤麻美（久留米工大・工）

P2-100　中間的自殖率はどのようにもたらされるか：オオヤマオダマキにおける時間的・空間的変異と花形質による影響　板垣智之・酒井聡樹（東北大・院・生命）

P2-101　一斉開花するバイケイソウの種子繁殖とクローン成長が個体群構造に及ぼす影響　＊草嶋乃美，加藤優希，大原雅（北大・院・環境科学）

P2-102　胚珠親側の交配システム（自殖 or 他殖）が雑種形成の成功を左右する　＊安元暁子（Zurich 大・植物，京大・生態研セ），岩永廣子（京大・農），清水理恵（Zurich 大・植物），工藤洋（京大・生態研セ），清水健太郎（Zurich 大・植物）

P2-103　新潟県の風穴に分布する絶滅危惧種エゾヒョウタンボクの繁殖特性　＊指村奈穂子（埼玉自然博），古本良（林育セ），斎藤久夫（東蒲自然同好会），中沢英正（津南町自然に親しむ会），池田明彦（品川区役所）

P2-104　銅ゴケ（ホンモンジゴケ）を対象としたマイクロサテライトマーカーの開発と遺伝的多様性の解析　＊加藤健吾（総研大・極域科学）・木村恵（森林総研）・練春蘭（東大・ア生セ）・野村俊尚（東大・新領域）・伊村智（極地研）

P2-105　ニセアカシアの非休眠種子の割合の個体差－年別の比較とその役割－　＊千葉 翔，小山浩正，高橋教夫（山形大・農）

P2-106　ブナの開花頻度の個体差に気象とサイズが与える影響　－豊作年以外の開花はなぜ起こるのか－　＊須藤泰典（山形大学農学部），小山浩正（山形大学農学部），高橋教夫（山形大学農学部）

P2-107　ブナの開花頻度の個体差とウエツキブナハムシの被害の程度の関係－防御と繁殖のトレードオフ－　＊清野陽介（山形大学農学部），小山浩正（山形大学農学部），高橋教夫（山形大学農学部），須藤泰典（山形大学農学部），山形大学農学部

P2-108　早咲きは食害者からのエスケープ -開花時期への自然淘汰と地理的変異-　＊川越哲博（北大・創成），工藤洋（京大・生態研センター）

P2-109　北海道北部におけるミズナラ堅果の豊凶と幹の肥大生長　＊來住牧（北大院・環），宮久史（EnVision），石田亘生（北大研究林），吉田俊也（北大 fsc），植村滋（北大 fsc）

P2-110　海浜砂丘草原におけるマルハナバチ類の訪花植物の嗜好性　*西川洋子，島村崇志（道総研・環境研），原田真実（酪農大）

P2-111　訪花昆虫の定花性が植物の繁殖に及ぼす影響　*小沼明弘，下野嘉子，水口亜紀，松尾和人（農環研），田中篤，堀崎敦史，新倉聡（(株) トーホク），木村澄（畜草研），吉岡洋輔（野茶研），大澤良（筑波大）

遷移・更新

P2-112#　海岸クロマツ林に侵入・定着したコナラの個体群動態　*船田涼子（新潟大院・自然科学），箕口秀夫（新潟大・自然科学系）

P2-113#　四国・石鎚山における種子による林分更新—標高が異なる林分の比較—　*植田陽衣，中森千尋，嶋村鉄也，二宮生夫（愛媛大・農）

P2-114#　侵入段階の異なる湿原植物２種の光・水応答特性　*江川知花，露崎史朗（北大・環境科学院）

P2-115#　佐渡島スギ天然林におけるスギの定着制限要因　*大野葵（新潟大・自然科学），金子洋平（新潟大・超域研究機構），本間航介，崎尾均（新潟大・農）

P2-116#　富士山南斜面のブナ群落の構造　- 富士山のブナはレリックなのか -　*伊藤大将，増沢武弘（静岡大・理）

P2-117#　富士山南東斜面森林限界の 30 年間の動態　*大石このみ（静岡大・理），崎尾均（新潟大・農），増沢武弘（静岡大・理）

P2-118#　落葉広葉樹二次林皆伐後４年間での林分構造変化　−低木林が高木林へと変わるとき−　*村尾未奈（東農大・林学専攻），正木隆（森林総研），佐藤明（東農大・地域）

P2-119#　Comparison of forest dynamics between two logging systems in a lowland tropical rain forest in Central Kalimantan　*Inada Tomoya, Kanzaki Mamoru, Ohta Seiiti (Faculty of agriculture, Kyoto Univ.), Ronggo Sadono (Faculty of Forestry, Gadjah Mada Univ.)

P2-120#　佐渡島における異なるナラ枯れ被害林の下層植生が更新に与える影響　白井航来（新大院・自然），金子洋平（新大・超域），本間航介（新大・農）

P2-121#　落葉広葉樹林の火災２年後の高木類更新実生の動態 - 林冠ギャップと下層植生の影響に着目して -　*佐藤香織[1]，小林真[2]，渋谷正人[1]，小池孝良[1]（[1]北大院農，[2]ウメオ大・アビスコ研セ）

P2-122#　熱帯伐採林の更新はすすんでいるか：フタバガキ実生の空間分布と一斉開花後の動態解析　青柳亮太（京大・生態研）*，今井伸夫（京大・農）・北山兼弘（京大・農）

P2-123#　湿地帯に成立するアカエゾマツ林の動態に水分環境が与える影響　*竹内史郎，加藤聡美（北大・院・環境科学），吉田俊也（北大・北方生物圏 FSC），安江恒（信大・農）

P2-124#　大峯山系弥山におけるシカによるシラビソの更新阻害　*山本浩大（奈教大・生物），辻野亮（地球研），松井淳（奈教大・生物），高田研一（森林再生支援センター）

P2-125#　モンゴル草原における埋土種集団の構造と植生回復への寄与　*小田祥三（鳥取大・農），衣笠利彦（鳥取大・農）

物質生産・物質循環

P2-126　ブラジル、ネグロ川上流域およびアマゾン川中流域における熱帯雨林の細根現存量の比較　*野口英之，諏訪錬平，梶本卓也，石塚森吉（森林総研），Cacilda Adelia Sampaio de Souza，Niro Higuchi（ブラジル・国立アマゾン研究所）

P2-127　ブラジル・中央アマゾンの熱帯降雨林における地下部現存量と根系分布　*梶本卓也，諏訪錬平，野口英之，石塚森吉（森林総研），田淵隆一（国際農研センター），Adriano JM Lima，Gabriel HP De Melo，Francisco G. Higuchi，Niro Higuchi（ブラジル国立アマゾン研）

P2-128　Allometry for estimating biomass of an Amazonian forest using a stem diameter at a relative height　*Suwa R., Noguchi H., Kajimoto T., Ishizuka M. (FFPRI, Japan), Tabuchi R. (JIRCAS, Japan), de Melo G.H.P., Lima A.J.M., Higuchi F.G., de Souza C.A.S., Higuchi N. (INPA, Brasil)

P2-129　窒素降下物量増加とモンゴル草原の生産力　*衣笠利彦（鳥取大・農），篠田雅人，恒川篤史（鳥取大・乾燥地研）

P2-130　冷温帯ススキ草原における葉群動成長の季節性と年々変動　*関川清広（玉川大・農），小宮澤奈未子（関東国際高）

P2-131　台風が森林の物質循環に与える影響に関するモデル解析　伊藤昭彦（国環研）

P2-132　汽水湖沿岸域からの CO_2、CH_4 フラックスに与える水位と気圧変化の影響　*山本 昭範（農環研），廣田 充（筑波大・生命環境），鈴木 静男（環境科学技術研），濱 健夫（筑波大・生命環境）

P2-133　乾燥程度の異なるモンゴル草原生態系において放牧が土壌窒素形態変化の空間的不均質性に与える影響　*近藤順治，廣部 宗（岡大院・環境），Enkbaatar Altangerel（モンゴル・地理生態研），Amartuvshin Narantsetseg（モンゴル・植物研），藤田 昇（地球研），前田守弘，坂本圭児，吉川 賢（岡大院・環境）

P2-134　Sub-consumptive effect: 手負いのカタツムリは治癒のために餌の選好性を変える　細 将貴（東北大・生命科学）

P2-135　渦相関法を用いた炭素収支評価における CO_2 貯留変化量の影響　*斎藤琢，玉川一郎，村岡裕由（岐阜大・流域圏）

P2-136　炭素・窒素安定同位体組成と水圏環境指標としてのオオクチバスの利用　*稲村 修（北大院・環科院），張 勁（富大院・理工），南川雅男（北大院・環科院）

P2-138　立木密度の異なるヒノキ林における葉、幹、繁殖器官への窒素分配　*稲垣善之（森林総研），倉本惠生（森林総研北海道），野口享太郎（森林総研四国），深田英久（高知県森技セ）

P2-139　アラカシ若齢植栽林の土壌炭素フラックスに対する温暖化の影響ー Open top chamber 実験　*王 新，中坪 孝之，中根 周歩 広島大・院・生物圏

P2-140　河川中流域におけるリター動態のシミュレーション：出水パターンの影響　*佐々木晶子，中坪孝之（広島大・院・生物圏）

P2-141　ツンドラ生態系において土壌の凍結融解が生み出す植物群集および土壌特性の勾配　小林真，Klaminder, J.（Umea Univ.）

P2-142　タイ北部チーク人工林の個葉の光合成特性の季節変化　吉藤奈津子*，小杉緑子（京大・農），五十嵐康紀（東大・農）

P2-143　ヒノキ林における木質リター分解呼吸速度の環境応答性　*真嶋 光一郎（京大・農），小杉 緑子（京大・農），牧田 直樹（京大・農），安宅 未央子（京大・農）

P2-144　樹種によるリター分解プロセスの違いが落葉リターの分解速度に及ぼす影響：日本の森林５林分におけるリター成分動態の定量的比較　*小野賢二（森林総研東北），平舘俊太郎，森田沙綾香（農環研），平井敬三（森林総研東北）

P2-145　汽水域に生息するゴカイ科多毛類における季節的な安定同位体比変動　*金谷弦，高津文人（国環研），佐藤正典，塔筋弘章（鹿児島大・理），今井章雄（国環研）

P2-146　カバークロップーコムギ輪作圃場における植物残渣とコムギの生育量の相互作用　*平田聡之，永山 毅，荒

木 肇（北大・北方セ）

P2-147　ヒノキ人工林における林齢に伴う土壌呼吸速度の変化　＊八代裕一郎，王連君（岐阜大・流域セ），小林元（信州大・農），大塚俊之（岐阜大・流域セ）

P2-148　異なる熱帯林の土壌呼吸量の推定：モデルと実測の検証　＊安立美奈子，伊藤昭彦（国環研），石田厚（京大生態研），中野隆志（山梨環境研），吉村謙一（森林総研），Wan Rasidah（FRIM），Phanumard Ladpala，Samreong Panuthai（DNP），山形与志樹（国環研）

P2-149　森林流域における降雨流出時の NO_3^- 流出機構　－NO_3^- 安定同位体比を用いた検討－　＊小田智基，大手信人（東大院農），後藤敏之（東農大），鈴木雅一（東大院農）

P2-150　竹林におけるケイ素の循環　＊梅村光俊，竹中千里（名大院・生命農）

P2-151　スギ人工林におけるミミズによる土壌団粒形成量の推定　＊橋本みのり（横浜国大・環境情報），高橋正通（森林総研），長谷川元洋（森林総研・木曽），池田紘士（森林総研），山下多聞（島根大・生物資源），金子信博（横浜国大・環境情報）

P2-152　流速データから見た厚岸湖の生物生産　＊長谷川夏樹，鬼塚年弘（水研セ・北水研），阿部博哉（北大院・環境），鎌内博光，渡辺健太郎，仲岡雅裕（北大・厚岸），岸道郎（北大院・水産）

P2-153　Carbon dynamics of pine wilt desease stands in southen Korea　Choonsig Kim* (Gyeongnam Nat. Univ. of Sci. & Tech.), Jaeyeob Jeong (Gyeongnam Nat. Univ. of Sci. &Tech.), Kwang-Soo Lee (Korea For. Res. Inst.)

P2-154　安定同位体分析による海洋高次捕食者の食性解析　南 浩史＊，清田雅史，仙波靖子，米崎史郎，余川浩太郎

P2-155　生物の生態特性を用いた地域環境モニタリング - 生物安定同位体比による試み -　＊馬谷原武之，笹田勝寛，宮地俊作，河野英一（日本大院・生物資源科学）

P2-156　二枚貝種別による金属蓄積傾向の差異　＊武内章記，柴田康行，田中敦（国環研）

P2-157　Short term effect of experimental warming on soil environment surrounding oak and pine seedlings　Yohwan Son *, Wooyong Jo, Haegeun Chung (Korea Univ.)

P2-158　森林生態系への窒素負荷の影響　＊徳地直子（京大フィールド研），大手信人（東大院），臼井伸章（京大院），福島慶太郎（京大フィールド研）

P2-159　北海道におけるサケマス類の遺骸が河川の魚類と底生動物に与える影響　＊中島美由紀（道さけます内水試／北大・環境），南川雅男（北大・環境），下田和孝（道さけます内水試），伊藤富子（北海道水生研）

P2-160　常緑・落葉樹の葉リター分解呼吸量と環境応答性の評価　＊安宅未央子（京大院・農・森林水文），小南裕志（森林総研），上村真由子（日本大），植松千代美（大阪市大），谷誠・小杉緑子（京大院・農）

P2-161　Hydrological controls on riparian denitrification in a forested headwater catchment: Soil physical properties make difference in reduced environment　Nobuhito Ohte, Yuhya Watanabe, Tomoki Oda (Univ. Tokyo) and Ken'ichi Osaka (Univ. Shiga Prefec.)

P2-162　冷温帯の常緑針葉樹林における生物学的手法による NEP の推定　＊渡辺真也，友常満利（早稲田大・院・先進理工），金澤泰斗（早稲田大・教育），増田莉菜（早稲田大・人間科），小泉博（早稲田大・教育）

P2-163　モンゴル国ステップにおける風食に伴う砂の移動が表層土壌と植生に及ぼす影響　＊浅野眞希（筑波大・生命環境），田村憲司（筑波大・生命環境），篠田雅人（鳥取大・乾地研），星野亜希（筑波大・生命環境），神田隆志（筑波大・生命環境），恒川篤史（鳥取大・乾地研），東 照雄（筑波大・生命環境）

P2-164　安定炭素・放射性同位体を用いた針葉樹人工林設定後の土壌炭素蓄積に寄与する要因　＊新井宏受（京大院農），徳地直子（京大 フィールド研）

P2-165　豊川における硝酸態窒素の窒素安定同位体比と集水域の土地利用　＊赤松史一，小林草平，矢島良紀（土研），天野邦彦（国総研），三輪準二（土研）

動 物 個 体 群

P2-166#　奈良県の光陽鉱山廃坑を利用するコウモリ類の２年にわたる個体数の変化　＊細川 慎太郎（近畿大学大学院，農），中山 知洋（羽曳野市峰塚中学校），前田 喜四雄，桜谷 保之（近畿大学，農）

P2-167#　ブナの豊作がアカネズミ個体群の社会構造と遺伝的多様性に与える影響　＊高野雄太，三田瞬一，増谷優，井上みずき，星崎和彦（秋田県大）

P2-168#　水田におけるカエル幼生の個体群動態プロセス：状態空間モデルによる推定　＊片山直樹（東大・農），天野達也（農環研），伊東圭祐，武田智，宮下直（東大・農）

P2-169#　細菌の表現型可塑性による捕食抵抗が捕食 - 被食系の個体群動態に及ぼす影響　山内悠司＊，吉田丈人（東大院・広域システム）

P2-170#　冬期に繁殖するアカガエル類２種の長期個体群動態　－個体群動態に連動し変化する年齢構成と繁殖開始年齢－　＊庭野裕，中村有，若林恭史，竹澤真人，長谷川雅美（東邦大院・理・生物）

P2-171#　北海道東部における子ジカ（*Cervus nippon*）の生存率の密度依存性　＊上野真由美（北海道環境研），梶光一（農工大・農），宇野裕之（北海道環境研）

P2-172#　共通の寄主植物を利用する際の、２種のチョウの産卵株選好性の違い　＊加藤木愛（東北大・農），昆野安彦（東北大・農）

P2-173#　マイクロサテライト解析を用いたヒグマの北海道東部個体群の遺伝的構造　＊伊藤哲治（日本大学・院・生物），釣賀一二三，間野勉（道総研・環科研センター），小平真佐夫，山中正実，葛西真輔（知床財団），増田隆一（北大院理），小林喬子（東京農工大・院・連合農），佐藤喜和（日大・生物資源・森林動物）

P2-174#　蒼サギの陰謀：近年増加するアオサギがサギ類コロニーの消長に及ぼす影響　＊益子美由希，徳永幸彦（筑波大・生命共存）

P2-175#　エゾヤチネズミの北海道集団における遺伝的多様性と空間的遺伝構造　＊菅家恵未，銭谷純平（北大・環境科学院），石橋靖幸（森林総研・北海道），Anna Pauline de Guia（フィリピン大学），大西尚樹（森林総研・東北），河合久仁子，齊藤隆（北大 FSC）

P2-176#　Temporal change in spatial genetic structure of the sika deer (Cervus nippon) for over 15 years in Hokkaido, Japan　Ou Wei (EES, Hokkaido Univ.), Takekawa, S. (EES, Hokkaido Univ.), Nagata, J. (FFPRI), Masuda, R. (GSS, Hokkaido Univ.), Uno, H. (HIES), Saitoh, T. (FSC, Hokkaido Univ.)

P2-177#　北海道立野幌森林公園内のエゾタヌキにおける疥癬発生状況と個体数変動について　＊佐鹿万里子（岐阜連大），阿部豪（兵庫県立大），森田達志（日獣大）

P2-178#　ジャノメチョウのメタ個体群とパッチ間移動とそれに及ぼす要因の推定　＊明星亜理沙（東大・農），村上正志（千葉大・理），宮下直（東大・農）

P2-179#　栃木県における捕獲データから見たイノシシ分布

の変遷　＊橋本 友里恵（宇都宮大・農・院），堀江 玲子（宇都宮大・農），小金澤 正昭（宇都宮大・農・演習林）

P2-180#　気象条件に基づくモンスーンアジア域における感染症媒介蚊個体数の時間的推移の評価　＊加我拓巳，太田俊二（早稲田大学・人間科学）

P2-181#　アカネズミにおけるタンニンへの馴化成功のプロセスを探る　＊泉佳代子（北大・環境科学），島田卓哉（森林総研東北支所），齊藤隆（北大・FSC）

P2-182#　カクツツトビケラ属２種の呼吸特性　＊渡辺昌造（兵庫県立大院・環境人間），三橋弘宗（兵庫県立大／人と自然の博物館）

P2-183#　タモロコ属魚類の湖沼適応にかかわる遊泳関連形質の遺伝的分化　＊柿岡諒（京都大・院・理），小北智之，熊田裕喜（福井県大・海洋生物資源），渡辺勝敏（京都大・院・理），瀬戸雅文（福井県大・海洋生物資源），奥田昇（京都大・生態研）

P2-184#　三宅島 2000 年噴火がジョロウグモの分布・体サイズ・交尾活動に与えた正の影響と負の影響　＊柊 雅実（東邦大院・理・生物），長谷川 雅美（東邦大・理・生物）

P2-185#　採食海域が異なるオオミズナギドリ個体群での汚染物質濃度の比較　＊伊藤淳郎（北大院・水産），山口まどか，依田憲（名大院・環境），山本麻希（長岡技科大・生物），塩見こずえ，佐藤克文（東大海洋研），山下麗，高田秀重（東京農工大・農），綿貫豊（北大院・水産）

P2-186#　北海道におけるオオセンチコガネ *Phelotrupes auratus* の生息地評価　＊養久侑平（酪農学園大学大学院），堀繁久（北海道開拓記念館），梶光一（東京農工大・農），吉田剛司（酪農学園大・環境）

P2-187#　くう (ねる) ところ (に) がすむところ　＊鍋屋耕平，徳永幸彦（筑波大・生命共存）

P2-188#　遺伝変異から見たウスバシロチョウの集団構造　＊田村英之，土田浩治 岐阜大院・昆虫生態

P2-189#　ダイオキシン受容体（AhR）多型をバイオマーカーとした、アカネズミ個体群におけるダイオキシン汚染の影響評価　＊石庭寛子，関島恒夫（新潟大・自然科学）

P2-191#　洞爺湖中島におけるエゾシカ個体群の植生変化に伴う爆発的増加と崩壊の要因解析　＊今野建志郎（横浜国大・環境情報），梶光一（農工大・農），松田裕之（横浜国大・環境情報）

P2-192#　栃木県高原山におけるクマ剥ぎ被害木周辺の環境特性　＊中山直紀（宇都宮大・院・農），小金澤正昭（宇都宮大・演習林），奥田圭（東京農工大・院・連農）

P2-193#　サンショウウオがミズムシのサイズ構造に与える影響　～オタマジャクシのいるとき、いないとき～　＊高津邦夫（北大・農），服部充（信大・理・生），岸田治（北大・ＦＳＣ）

P2-194#　生態系エンジニアとしてのヤツメウナギ類幼生 - 微小無脊椎動物，落葉，藻類に与える影響 -　＊白川 北斗，後藤 晃

P2-195#　サーモトレーサを用いたニホンジカの発見方法の検討　＊岩本千鶴（宇都宮大・農），小金澤正昭（宇都宮大・農・演習林）

動　物　群　集

P2-196　多雪地冷温帯林の異なる林分における野ネズミ個体群の季節変動　＊松本幸二（新潟大院・自然研），箕口秀夫（新潟大学・自然科学系）

P2-197　葉食性および吸汁性節足動物に対する根粒菌の効果　＊片山昇（京大・生態研セ），張志キ（京大・生態研セ），大串隆之（京大・生態研セ）

P2-198　流域の地質構造の違いによる渓流性底生動物群集の比較　吉村真由美（森林総研・関西）

P2-199　静岡県浜松市における放棄養鰻池の湿性遷移に伴う水質特性と水生甲虫群集　＊田島文忠（千葉シャープゲンゴロウモドキ保全研究会），北野忠，藤吉正明，西山和寿，栗原透（東海大・教養）

P2-200　長野県上伊那地方の水田地域における直翅目昆虫の群集構造と環境要因との関係　＊澄川元晴，大窪久美子，大石善隆（信州大・農）

P2-201　農法の違いが水田節足動物群集に及ぼす影響 5. 環境保全型と慣行型の比較　＊西城洋（農研機構･中央農研），森本信生

P2-202　カラマツ人工林における広葉樹の混交がトビムシの群集構造に与える影響　＊長谷川元洋（森林総研・木曽），太田藍乃（横浜国大），壁谷大介，岡本透，齋藤智之，西山嘉彦（森林総研・木曽）

P2-203　捕食者の摂餌機能多様性は水域生態系の構造を変える！　＊酒井陽一郎（京大生態研），福森香代子（テキサス大），西松聖乃，陀安一郎，奥田昇（京大生態研）

P2-204　南西諸島におけるアリモドキゾウムシの色彩変異の定量的解析　＊城本啓子，熊野了州，栗和田隆（沖縄病害虫防技セ・琉球産経），永山敦士（沖縄農研セ），原口 大（沖縄病害虫防技セ）

P2-205　水田における動物プランクトンおよび底生動物群集動態　＊小関右介（長野水試）

P2-206　都市近郊における蝶類の生活史と入れ子構造の関係　＊曽我昌史，小池伸介

P2-207　地球温暖化が水田の土壌小動物群集に及ぼす影響―FACE 試験による解明―（予報）　＊岡田浩明，浦田悦子，常田岳志，長谷川利拡（農環研）

P2-208　流況指標と魚類種数の関係：世界の主要河川を対象に　＊岩崎雄一（東工大・理工），梁政寛（東工大・工），吉村千洋（東工大・理工）

P2-209　渓畔の人工林伐採に伴う水生昆虫相の変化　＊平田令子，松田祥平，中山真俊（宮大･農），松永慎平（宮大･院農），伊藤哲（宮大・農）

P2-210　食物網構造をベイズ推定する安定同位体混合モデルの 開発と検証　＊角谷拓（国環研），長田穣（東大），瀧本岳（東邦大）

P2-211　トキの採餌生態・ミミズを食べるとき　＊遠藤千尋（新潟大・超域），寺島大紀（新潟大・自然），蛯原香理（新潟大・自然），永田尚志（新潟大・超域）

P2-212　魚類の窒素安定同位体比変化の部位間比較：食物網解析の確度を高めるために　＊丸山敦，下仲洋行，伊藤琢哉（龍谷大・理工）

P2-213　滋賀県の水田における大型水生動物群集と環境要因との関係　＊向井 康夫（京大），大塚泰介（琵琶湖博），森本幸裕（京大），日鷹一雅（愛媛大）

P2-214　環境ストレス要因が、ため池の群集構造と食物網に与える影響：形態情報に基づく食物網推定　＊伊藤洋，赤坂宗光，中川恵，白石寛明，高村典子（国立環境研）

P2-215　ギルド内捕食者の餌選択とギルド内被食者の生息地選択　＊江副日出夫（大阪府大・理）

P2-216　固定堰が上流の水生生物群集の生息場構造に与える影響　＊石田裕子，臺林裕士，津本裕也，松村勇希，三雲唱平（摂南大学理工学部），片野泉（University Oldenburg），石塚正秀（香川大学工学部）

P2-217　化学物質による摂食者群集のかく乱が栄養段階間転換効率に与える影響　＊真野浩行，田中嘉成（環境研）

P2-218　地表性甲虫を用いた森林環境の評価－種組成と優

占種現存量を用いた北海道の低地二次林の評価－　*渡辺展之，渡辺修（さっぽろ自然調査館），堀繁久（北海道開拓記念館），柳澤暁（環境省釧路環境事務所）

P2-219　水系網における水生昆虫のメタ群集構造　*大平充，千賀裕太郎（東京農工大院・連農）

P2-220　河川底生動物の摂食速度－機能群、温度、サイズとの関係－　*小林草平・赤松史一・矢島良紀・中西哲・三輪準二（土研）・天野邦彦（国総研）

P2-221　林床へのリター供給量変化に対する土壌動物群集の反応　*南波興之，丹羽滋，日浦勉

P2-222　水生昆虫の生息場環境としての河床礫の質的特徴　*矢島良紀，小林草平，赤松史一, 三輪準二（土研）

外　来　種

P2-223#　霧ケ峰高原における外来植物ヒメジョオン類およびマツヨイグサ類，ヒメスイバの分布状況と立地環境条件との関係　*渡邊良祐，大窪久美子，大石善隆（信州大・農）

P2-224#　甲府盆地におけるニワウルシ群落の消長　*中馬美咲，齊藤陽子，井出雄二（東大院・農）

P2-225#　霧ケ峰高原における外来植物定着群落への抑制処理に関する研究　*日隈 慶子，大窪 久美子，大石 善隆，玉垣 政博（信州大・農）

P2-226#　異なる環境下でのニワウルシ動態比較　*永井牧子，大貫真孝，本田結実，竹内野衣，桜井尚武（日大生物資源）

P2-227#　札幌市茨戸川支流におけるアメリカザリガニの分布及び越冬要因の推定　*石山ちえみ（酪農学園大・環境），吉田剛司（酪農学園大・環境）

P2-228#　アルゼンチンアリの密度は原産地では低かった！コロニー構造との相関について　*坂本 洋典（北大），砂村栄力（東大），西末 浩司（東大），東 正剛（北大）

P2-229#　鎌倉市神戸川におけるコモチカワツボと在来カワニナの安定同位体比による食性比較　*櫻井 龍太，馬谷原武之，河野 英一（日大・院・生物環境）對馬 考治，（日大・生物環境工）

P2-230#　多摩川堤防におけるギシギシ属の分布特性　*安東聡一郎（明治大・農），倉本宣（明治大・農）

P2-231#　札幌市近郊に定着した国内外来種トノサマガエルの捕食による湿地生態系への影響　*更科美帆（酪農学園大・環境），吉田剛司（酪農学園大・環境）

P2-232#　外来巻貝コモチカワツボがヘイケボタルの生存に及ぼす影響に関する研究　安達翔平*（農工大院・農），千賀裕太郎（農工大）, 綾部斗清, 山岡誠, 阿部宣男（ホタル飼育施設）

P2-233#　オオカナダモとクロモの排他的分布の原因；アメリカザリガニが引き起こす見かけ上の競争の可能性　*久保優，照井慧，西廣淳，鷲谷いづみ（東大院・農）

P2-234#　洪水攪乱によって形成された裸地における外来種ニワウルシの定着　*荒井裕二，鈴木千暁，米林 仲（立正大・地球環境）

P2-235#　淀川水系におけるカワヒバリガイとその寄生虫の現状　*馬場孝・浦部美佐子（滋賀県立大・環境科学）

P2-236#　洞爺湖における特定外来生物ウチダザリガニの効率的防除手法の検討　*戸崎良美（酪農学園大学大学院），室田欣弘（UWクリーンレイク洞爺湖），加藤康大（環境省），吉田剛司（酪農学園大・環境）

P2-237#　特定外来生物オオハンゴンソウが林床植物の種組成と開花に及ぼす影響　青木克将，酪農学園大学大学院，*，吉田剛司，酪農学園大・環境，

P2-238#　安定同位体を用いたコブハクチョウの人工給餌への依存度解明　*土屋結（筑波大･生命環境), 藤岡正博（筑波大･農技セ），富田直樹，新妻靖章（名城大・農）

P2-239#　トノサマガエルの侵入は地表徘徊性昆虫相に影響を与えるか？　*高井孝太郎，坂本洋典，東正剛（北大・環境科学）

P2-240#　IUCN ワースト 100 侵入種ランタナの分布拡大－瀬戸内海沿岸域での野生化はすでにはじまっている－　*山本和司，中坪孝之（広島大・院・生物圏）

P2-241#　水際植物群集における両生外来植物のリスク評価　*柴宮朋和，小池文人（横浜国大院・環境情報）

P2-242#　ニセアカシア林の食物網特性の解明：ニセアカシアと在来種のパッチ間における地表及び土壌動物群集の比較　*津田大輝，加賀谷隆（東大・農・森林動物），宮下直，田中明朗（東大・農・生物多様性），畠瀬頼子（自然環境研究センター）

P2-243#　佐渡島の溜め池生態系における侵略的外来種ウシガエル *Rana catesbeiana* の影響　池上 沙樹（新潟大，自然科学），布野 隆之，関島 恒夫

動 物 生 活 史

P2-244　異なった環境要因で誘導されるよく似た表現型可塑性の進化　道前洋史（北里大)*, 半杭淳一, 若原正巳（天使大）

P2-245　汽水性カニ類アリアケモドキ地域集団間における繁殖期の相違と遺伝的・形態的変異　川本真夕子（奈良女子大学），*和田恵次（奈良女子大学），鎌田磨人（徳島大学）

P2-246　ホソアシナガバチ *Parapolybia indica* の集団越冬　*斎藤歩希，川村緯気，小島純一（茨城大学理学部）

P2-247　リーフマイナーの潜葉場所と適応度との関係；葉裏への潜葉は寄生回避につながる？　*綾部慈子，肘井直樹（名大・生命農・森林保護）

P2-248　性選択的な漁獲下での可塑的な性転換による性比調節　*千葉晋（東農大・生産），吉野健児（佐大・低沿研セ），金岩稔（東農大・生産），五嶋聖治（北大院・水産）

P2-249　木曽川一時水域における希少魚イタセンパラの繁殖生態と生活史　*北村淳一（三重県新博・自然共生研究セ），佐川志朗，永山滋也，真田誠至，宮下哲也，上野公彦，相川隆生，久米 学，萱場祐一（自然共生研究セ），根岸淳二郎（北大院地球環境・自然共生研究セ）

P2-250　カヤネズミの越冬生態～個体群維持に関わる植生構造～　*黒江美紗子，大堀聰（早大・自然環境調査室）

P2-251　水温の変動パタンが魚類の生理コストに与える影響について　*山中裕樹（龍谷大学･理工），源利文，高原輝彦，川端善一郎（地球研）

P2-252　ウミネコにおける年齢と繁殖成功の関係　*新妻靖章，富田直樹，風間健太郎（名城大学農学部）

P2-253　造礁サンゴの生活史～群体形の違いに着目した解析～　*新垣誠司（琉大・熱生研），向草世香（JST さきがけ・長大水産・琉大熱生研），酒井一彦（琉大・熱生研）

P2-254　カワヤツメは本当に寄生者なのか？　寄生虫から推察する摂餌生態　*片平浩孝（広大生物圏），白川北斗（北大水産），長澤和也（広大生物圏）

P2-255　ウミネコにおける餌環境に関連したストレス反応　*富田直樹，新妻靖章（名城大学農学部）

P2-256　東京都町田市の人工池におけるヌカエビ個体群の繁殖時期の年変化　佐々木岳，永田岳郎，春山宏樹，吉川朋子（玉川大・農）

P2-257　フトヘナタリの底質選好性―野外分布パターンと加入･成長実験による検証　*大田直友，河井崇（阿南高専・建設システム工／地域連携テクノセンター）

ポスター発表　3月10日(木)10:00－17:15
（大ホール　会場　P　　#：ポスター賞対象発表）

進化・数理・分子

P2-258#　個体群動態に影響を与える迅速な進化：ケモスタット実験による実証研究　*笠田実（東大院･広域システム），吉田丈人（東大院・広域システム，科学技術振興機構さきがけ）

P2-259#　ニホンジカの形態形質と分子マーカーを用いた局地適応の検出：屋久島個体群に着目して　*寺田千里（北大･環境科学院）・齊藤隆（北大・フィールド科学センター）

P2-260#　葉緑体 DNA 変異に基く *Dryobalanops* 属の系統地理学的研究　*岸本光樹，原田光，上谷浩一，荒木智哉，旗谷章子（愛媛大・農），Lucy Chong, Bibian Diway（BRC, Sarawak），Joseph Jawa Kendawang（Sarawak Planted Forest），John Sugaw, Eyen Khoo（FRC, Sabah）

P2-261#　キイロショウジョウバエにおける自然免疫変異に働く自然選択の検出　*根本頼子（東北大・院・生命），後藤彰（東北大･院･薬），倉田祥一郎（東北大･院･薬），横山潤（山形大・理），河田雅圭（東北大・院・生命）

P2-262#　グッピーにおけるオプシン遺伝子の発現部位の個体間変異　*小口結（東北大・院・生命），笠木聡（東大・院・新領域），河村正二（東大･院･新領域），田村宏治（東北大･院･生命），河田雅圭（東北大・院・生命）

P2-263#　江戸時代の博物画にみるカメフジツボ類の繁殖戦略　林亮太（千葉大自然科学）

P2-264#　ミジンコの表現型可塑性；異なる捕食者に対する形態変化の種間・種内変異　*永野真理子，吉田丈人（東大・総合文化）

P2-265#　防御形態の異なるミジンコ属４種を用いたその発生制御機構の比較　*宮川一志，杉本直己，三浦徹（北大・院環境科学）

P2-266#　幼虫期における摂食経験は、羽化後の寄主選択に影響を与えるか？　*甲山哲生（北大･院環境），片倉晴雄（北大・院理）

P2-267#　ヤマアカガエル集団内における自然免疫遺伝子の多様性　*高柳真世，金成安慶，牟田達史，松島野枝，岩嵜航，河田雅圭（東北大・院・生命）

P2-268#　口吻の退化したスズメガの繁殖戦略　*大里 沙羅（京大・理），曽田 貞滋（京大・理）

P2-269#　シロイヌナズナ属野外集団における花形態の生育地間変異　*山口正樹，工藤洋（京大・生態研）

P2-270#　自然選択がショウジョウバエの転写調節領域進化に与える影響　*佐藤光彦，牧野能士，大野（鈴木）ゆかり，岩嵜航，河田雅圭

P2-271#　ツバメの複数装飾の進化を説明する永続的な性選択圧　*長谷川 克（筑波大･生命環境），新井絵美（上教大･生物），渡辺 守（筑波大・生命環境），中村雅彦（上教大・生物）

P2-272#　シデコブシとタムシバの交雑帯における一方向的な遺伝子浸透　*村西周平（名大院生命農），玉木一郎（岐阜県森文ア），鈴木節子（森林総研），戸丸信弘（名大院生命農）

P2-273#　生態的分化と生殖隔離：標高適域の広いミヤマハタザオについて　*山田歩，瀧本岳（東邦大・理），恩田義彦，田中健太（筑波大・菅平セ）

P2-274#　タムシバ（*Magnolia salicifolia*）集団の遺伝的多様性と遺伝的構造　*川島直通（名大農），村西周平（名大院生命農），鈴木節子（森林総研），玉木一郎（岐阜県森文ア），戸丸信弘（名大院生命農）

P2-275#　カワトンボ２種の同所的形質分岐：種間の体サイズ差が体温調節，飛翔力，生息地選択に及ぼす影響　*奥山永，鮫島由佳，椿宜高（京都大学生態学研究センター）

P2-276#　Baldwin effect on a learning curve　*内堀そよみ（筑波大・生物），徳永幸彦（筑波大・生命共存）

P2-277#　地理的隔離、それとも生態的隔離？ 南西諸島における *Ainsliaea*（キク科）の多様な進化をもたらした要因に迫る　*三井裕樹（京大・院・人環），瀬戸口浩彰（京大・院・人環）

P2-278#　森林性ハマトビムシ（端脚目）はどこから来たのか？　*笹子 由希夫，柿沼 誠，谷村 篤（三重大院・生物資源）

P2-279#　食草利用能力の遺伝構造：現食草への適応が導く新食草への前適応とその限界　*菊田尚吾（北大・院理），藤山直之（北教大・旭川），片倉晴雄（北大・院理）

P2-280#　環境変化で出現する新奇形質：遺伝子制御ネットワークの隠蔽変異が適応進化を促進　*岩嵜航，津田真樹，河田雅圭

P2-281#　日本産チョウ類の分布域拡大と遺伝的変異　*小野寺 遼（東北大・院・生命科学），横山 潤（山形大・理・生物），河田 雅圭（東北大・院・生命科学）

P2-282#　劇的な形態の変化：北海道に産するエゾマイマイ群の例　森井悠太（東北大院・生命）*，横山潤（山形大・理），河田雅圭（東北大院・生命），千葉聡（東北大院・生命）

P2-283#　ツルクモヒトデ目（棘皮動物門：クモヒトデ綱）の分子系統地理　*岡西政典（東大･院･理），Tim O'Hara（MUS VICT），藤田敏彦（国立科博）

P2-284#　シコクオサムシにおける体サイズの高度変異に関与する要因　*土屋雄三（京大理），奥崎穣（京大理），高見泰興（神戸大人間発達環境），曽田貞滋（京大理）

P2-285#　ツツザキヤマジノギクのメタ個体群における花形態変異：パッチ微環境との関係　*中川さやか，伊藤元己（東大・院・総合文化・広域）

P2-286#　表現型可塑性の進化がノイズへの応答に与える影響　*小林哲，嶋田正和（東大院・総合文化）

P2-287#　植物の対被食者防衛レベルにおける種内多型の進化に関する理論的研究　*伊藤公一，山内淳（京大・生態研）

P2-288#　進化的に構築された食物網の崩壊と再生プロセス　*高橋大輔（京大・生態研セ），Ake Brannstrom（IIASA），Rupert Mazzucco（IIASA），山内淳（京大・生態研セ），Ulf Dieckmann（IIASA）

P2-289#　２種の外来種がギルド内捕食の関係をとるときの復元戦略：中間捕食者の代替餌の重要性　*西嶋 翔太（東大・農・生物多様性），瀧本 岳（東邦大・理・生物）宮下 直（東大・農・生物多様性）

P2-290#　格子モデルを用いた森林のマスティングと種子食害昆虫の時空間ダイナミクス　*山崎崇広（農工大・農），酒井憲司（農工大・農）

P2-291#　送粉相互作用を介した同所的種分化の理論的可能性　*香川幸太郎（東邦大・理），瀧本岳（東邦大・理）

P2-292#　攪乱特性と生息地の空間構造が河川植物群集の多様性に与える影響 - 種間競争モデルと洲の植生データを用いた解析 -　*梅村界渡，蛯名邦禎，丑丸敦史（神戸大・人間発達環境）

P2-293#　空間構造を取り入れたササ一斉開花枯死の進化モデル　*立木佑弥（九大・シス生），宮崎祐子（北大・創成），佐竹暁子（北大，JST さきがけ）

P2-294#　３次空間モーメントを通じた曲がったパターンの検出　*皆藤 千穂（総研大・葉山，IIASA），Ulf Dieckmann（IIASA），佐々木 顕（総研大・葉山，IIASA），高須 夫悟（奈良女・理）

P2-295#　イワカガミの分類群をこえたハプロタイプ共有　*東広之（京大･人環），池田啓（東大･理），瀬戸口浩彰（京大･人環）

P2-296#　黄色ブドウ球菌由来 RlmL の構造・機能解析　*喜多俊介（北大・院生命），田中良和（北大・創成研究機構），姚

閔（北大・院生命），田中勲（北大・院生命）

P2-297#　クワガタムシの性差発現における性決定遺伝子 *dsx* の役割　＊後藤寛貴，三浦徹（北大院・環境科学）

P2-298#　北海道西部地域における *Propylea* 属テントウ２種の住み分けと交雑　＊須賀大夢，片倉晴雄（北大院・理）

保　　　全

P2-300　道路に散布された融雪剤（$CaCl_2$）がサンショウウオに与える影響　＊照井滋晴（環境把握推進ネットワーク），太田宏（東北大・生命科学），石川博規（長大）

P2-301　堆肥マクロシードペレットを利用したススキ草原の再生法　＊下田勝久，井出保行（畜草研），小倉振一郎（東北大・農）

P2-302　エゾシカ密度の低下に伴う林床植生の変化～阿寒国立公園での事例～　＊稲富佳洋（道総研・環境研）・宇野裕之（道総研・環境研）・高嶋八千代（道教大・釧路）・鬼丸和幸（美幌博物館）

P2-303　釧路湿原におけるトンボ目群集の構成と生息地の環境条件（水質を中心に）　＊生方秀紀（北教大・釧路），山上佳祐（釧路北中学校），野原精一（国立環境研）

P2-304　住民の視点から見た地域生態系の変容と課題－北広島町生物多様性キャラバンの成果－　白川勝信（高原の自然館）

P2-305　南アルプス北岳亜高山帯の植生に対するニホンジカの影響　長池卓男（山梨県森林研）

P2-306　東マレーシアにおける焼畑拡大過程と，それが森林の減少に与える影響　広島大学大学院総合科学研究科 ＊木村公宣，

P2-307　水田における有機・減農薬栽培が水生昆虫の生息に及ぼす影響　＊浜崎健児，田中幸一（農環研・生物多様性）

P2-308　沖縄島北部やんばる地域の固有鳥類ノグチゲラ・ヤンバルクイナ・ホントウアカヒゲの分布決定要因　＊小高信彦（森林総研・九州），高嶋敦史（琉大・農），城間篤（辺土名高，現沖縄県自然保護課），大城勝吉（やんばる学びの森），比嘉鶴見（東村博物館），福田真（環境省・やんばる），八木橋勉（森林総研・東北）

P2-309　三宅島における地域性系統を用いたバンカー工法緑化施工地の植生変化　＊小林奈保子（筑波大・生），上條隆志（筑波大・生），伊藤祐太郎（筑波大・生）

P2-310　絶滅危惧植物ゴヨウザンヨウラクの遺伝的多様性の評価　＊阿部晴恵（東北大・農），牧雅之（東北大・生命），堀江佐知子（東北大・生命），陶山佳久（東北大・農）

P2-311　流速の増大が、オイカワによる水際の緩流域利用頻度に及ぼす影響　＊小野田幸生，佐川志朗，上野公彦，尾崎正樹，久米学，相川隆生，森照貴，萱場祐一（自然共生研究センター）

P2-312　人為由来の異なる開放地への鳥類、ハナバチ、植物の反応　＊山浦悠一（北大・農），J. Andrew Royle（アメリカ地質調査所），島田直明（岩手県大・総合政策），浅沼晟吾（東北環境研），佐藤保（森林総研・植生），滝久智，牧野俊一（森林総研・昆虫）

P2-313　トキにとっての「食の豊かさ」とは？ －日本と中国の野外集団における採餌パターンの比較　越田智恵子（トキ野生復帰ステーション）

P2-314　樹林面積の減少によりエゾモモンガの行動圏は変化するか？　＊浅利裕伸（（株）長大），山口裕司（（株）FRS コーポレーション），柳川 久（帯畜大）

P2-315　大阪南部における雑種タンポポの遺伝的多様性　松山周平，森本美樹，名波哲，伊東明（大阪市大・理）

P2-316　滋賀県南東部の水田地帯におけるハルリンドウの分布と生育地の環境条件　＊今西亜友美，今西純一（京大・院・地環），河瀬直幹（甲賀市・自然館），夏原由博（名大・院・環境）

P2-317　リュウキュウアユの河川内分布に影響を及ぼす環境要因の探索　＊安房田智司，阿部信一郎，鶴田哲也，井口恵一朗（中央水研）

P2-318　小櫃川河口盤洲干潟のハママツナ群落衰退原因に関する考察　＊湯谷賢太郎（木更津高専・環境都市），藤本孝幸（同）

P2-319　八甲田山田代平のシバ草地に侵入しているブタナの遺伝学的解析　＊十亀彩（北里大院・獣畜），杉浦俊弘（北里大・獣），小島達也，森大祐，横川輝，馬場光久，陶山佳久（東北大学）

P2-320　支川流入がダム下流のベントス種多様性および群集構成に与える影響　＊片野泉（土研・自然共生研セ，Univ. Oldenburg），土居秀幸（Univ. Oldenburg），根岸淳二郎，皆川朋子，萱場祐一（土研・自然共生研セ）

P2-321　ニホンカナヘビを用いた棚田畦畔草地の評価　＊土金慧子，宮下 直（東大・農）

P2-322　兵庫県における野生ニホンザル地域個体群モニタリング体制の確立　＊鈴木克哉（兵庫県立大 / 兵庫県森林動物研究センター），遠藤美香（豊岡市コウノトリ共生課），坂田宏志（兵庫県立大 / 兵庫県森林動物研究センター），森光由樹（兵庫県立大 / 兵庫県森林動物研究センター），室山泰之（兵庫県立大 / 兵庫県森林動物研究センター）

P2-323　長野県の生物多様性の概況―地域戦略策定のための現状と課題の整理―　須賀 丈（長野県環境保全研）

P2-324　河川改修が魚類群集に与える影響　田中哲夫＊（兵庫県立大学），信本励（水棲堂）

P2-325　水辺の生き物の分布に関する指標：福井県の市民参加型調査データを用いた検討　＊今井淳一（東大・農），角谷拓（国環研），水谷瑞希（福井県自然保護センター），平山亜希子（福井県自然保護センター），松村俊幸（福井県自然環境課），鷲谷いづみ（東大・農）

P2-326　河床粗度と流速による水生昆虫への着底効果（Ⅰ）- 水槽実験 -　＊斎藤 裕美，木村 仁美，新谷 彬，谷野 賢二（東海大・生物理工）

P2-327　人里に大量出没したツキノワグマの年齢、栄養および繁殖の特徴から出没要因を探る　＊横山真弓（兵庫県立大学），斎田栄里奈，中村幸子（森林動物研究センター），森光由樹（兵庫県立大学），片山敦司，加藤洋（野生動物管理事務所）

P2-328　絶滅危惧植物はどこにいる？ 1: 分布推定手法の検討　＊石濱史子，赤坂宗光（国環研）

P2-329　絶滅危惧植物はどこにいる？ 2: 現状の保全対象は妥当なのか？　赤坂宗光（国環研），石濱史子（国環研），藤田卓（日本自然保護協会），竹中明夫（国環研）

P2-330　全個体ジェノタイピングによる絶滅危惧植物ガシャモクの遺伝的多様性解析　＊兼子伸吾（京大・農），西川恵子（奈教大・生物），横川昌史（京大・農），真鍋 徹（北九州自・歴博），浜端悦治（滋賀県大・環境），Ariunsuren Purevee（MSUA），井中卓生（市丸小学校），松井淳（奈教大・生物），井鷺裕司（京大・農）

P2-331　広島県太田川流域に生息するキシツツジの保全と河川護岸の自然再生　＊山崎 亙（広島大学大学院），中越信和（広島大学大学院）

P2-332　再導入後のトキ　～　営巣場所の選好性について　＊上野裕介，金子洋平，中津弘，永田尚志，山岸哲（新潟大・朱鷺自然再生学）

P2-333　外国産ヨモギの遺伝的撹乱リスク：葉緑体 DNA による評価　＊下野嘉子（農環研），黒川俊二（中央農研），西田智子（元農環研），池田浩明（農環研），二神紀彦（環境省）

ポスター発表　3月10日(木)10:00－17:15
（大ホール　会場　P　　#：ポスター賞対象発表）

P2-334　日本庭園のコケ植物多様性はなぜ高い？　*大石善隆（信州大・農），大窪久美子（信州大・農）

P2-335　オオタカ雄成鳥の行動圏内の環境選択 - 山地部森林地帯の場合 -　*堀江玲子（オオタカ保護基金・宇大・農），遠藤孝一，野中純（オオタカ保護基金），山浦悠一（北大・農），松浦俊也，尾崎研一（森林総研）

P2-336　多摩川堤防通路利用者のカワラノギク保全活動に対する意識　*倉本宣，明治大学農学部，芦澤和也，明治大学大学院農学研究科，岡田久子，明治大学農学部

P2-337　淀川水系における大型鰓脚類の分布とその要求環境 - 市民参加型調査の結果から　*石田 惣，淀川水系調査グループプロジェクト Y カブトエビ班（大阪市立自然史博）

P2-338　多摩川支流三沢川におけるカワモズクの分布に農場建設に伴う環境変化が与えた影響　*野呂恵子, 岡田久子, 倉本 宣（明大・農）

P2-339　Several Small な人工水路と干潟多様性保全―東京湾岸ベントス群集調査の結果から―　*柚原剛（東邦大院・理），多留聖典（東邦大・東京湾生態系研究セ），風呂田利夫（東邦大・理）

P2-340　草刈りと杭の設置によるサシバの狩場創出実験　*河村詞朗（岩手大院・農），東淳樹（岩手大・農）

P2-341　長良川河口堰の稼動による魚類群集の変化　*向井貴彦（岐阜大・地域），古屋康則（岐阜大・教育）

P2-342　越境汚染物質の影響評価にむけた照葉樹林の長期動態指標の比較解析　*齊藤哲, 新山馨, 野宮治人（森林総研）

P2-343　開設年数の異なる林道での植生へのエッジ効果の比較　*榎木勉（九州大農），五十嵐秀一（愛媛大院農），楠本聞太郎（九州大院生資），辻和希（琉球大農）

P2-344　東シベリアにおける野生トナカイの動態：衛星測位による移動ルートの解明と保全上の課題　*立澤史郎（北大・文），I. M. Okhlopkov，E. V. Kirillin，A. P. Isaev（ロシア科学アカデミー・寒地生物研），A. A. Krivoshapkin（ヤクーツク大・理）

P2-345　四国山地剣山系稜線部におけるニホンジカの影響によるササ草原の衰退とヤマヌカボ群落の拡大　*石川愼吾，中嶋宏心，森本梓紗（高知大・理），坂本彰（三嶺の森をまもるみんなの会）

P2-346　ニホンジカによる被害の現状と認識（イネとダイズを対象にして）　*星屋明孝（岐阜大・応），村瀬豊（岐阜大・農），中村大輔（岐阜大・連農），松本康夫（岐阜大・応），八代田千鶴（森林総研），鈴木正嗣（岐阜大・応）

P2-347　河床粗度と流速による水生昆虫への着底効果（Ⅱ）－野外実験－　*新谷 彬，森田 英夫，宗村 一樹，谷野 賢二，斎藤 裕美（東海大・生物理工）

P2-348　冬季間ノウサギに有効な餌場となりうる森林　～冬季食性からの評価～　*佐藤遼太（岩手大・農），松木佐和子（岩手大・農）

P2-349　人為的環境に依存するアカガエルの集団構造：アカガエル２種の比較　*松島野枝，高柳真世，牧野能士，河田雅圭（東北大・生命科学）

P2-350　Distribution Patterns of Vegetation and Soil Physico-chemical Properties Under Different Grazing Intensities　*Li Min, Kenji Tamura (Grad. Sch. Life. Environ. Sci., Univ. Tsukuba, Japan), Wuyunna (Colg. Life Sci., Dalian Nation. Univ. China) Teruo Higashi (Grad. Sch. Life. Environ. Sci., Univ. Tsukuba, Japan)

P2-351　亀岡市の水田の石組畦と盛土畦における植物群集の季節変化　*岡本奈保子（京都学園大学バイオ環境学部），今村彰生（京都学園大学バイオ環境学部）

ポスター発表　3月11日（金）10:00－17:15
（大ホール　会場　P　　#：ポスター賞対象発表）

植物個体群・生活史

P3-001#　不均質に土壌栄養塩が分布する環境下で、栄養塩パッチの出現時期の違いが個体成長と根の反応に及ぼす影響　＊松井萌恵，可知直毅，鈴木準一郎（首都大・理工・生命）

P3-002#　中国毛烏素沙地における臭柏（*Sabina vulgaris*）群落のクローン構造　＊山口由真（岡大院・環境），廣部 宗（岡大院・環境），兼子伸吾（京大院・農），三木直子（岡大院・環境），井鷺裕司（京大院・農），楊 霊麗（岡大院・環境），張 国盛（内蒙古農業大），王 林和（内蒙古農業大），坂本圭児（岡大院・環境），吉川 賢（岡大院・環境）

P3-003#　水分供給の時間的不均質性に対する植物の反応は、個体間相互作用によって変化し、群集構造の違いをもたらす　＊萩原陽介，可知直毅，鈴木準一郎（首都大・理工・生命）

P3-004#　二葉山におけるシリブカガシ個体群の保全生態学的研究　著者：＊中野陽介（広島大），山田俊弘（広島大）

P3-005#　シロモジとアブラチャンの成長に対する生理的統合の影響は雌雄・種間で異なるか？　＊五十君友宏，松下通也，中川弥智子（名大院・生命農）

P3-006#　落葉樹林の林冠構造がヤドリギの分布に与える影響　＊鍵本忠幸（岐阜大院・応用生物），加藤正吾，小見山章（岐阜大・応用生物）

P3-007#　ナナカマド属２種・アズキナシとウラジロノキにおける生活史及び個体群動態の比較　＊原澤翔太（京都大・農），正木隆（森林総研），直江将司（京都大・生態研），井鷺裕司（京都大）

P3-008#　根の切除と栄養塩濃度がウキクサの人工群集におよぼす影響　＊鈴木乾也・可知直毅・鈴木準一郎（首都大・理工・生命）

P3-009#　一回繁殖型多年生草本オオウバユリにおける集団間の遺伝的および形態的変異　＊早船琢磨，西澤美幸，大原雅（北大・院・環境科学）

P3-010#　シロツメクサ（*Trifolium repens*）とアカツメクサ（*Trifolium pratense*）の成長に地下部の浸水期間が及ぼす影響の検討　＊間島翔，可知直毅，鈴木準一郎（首都大・理工・生命）

P3-011#　佐渡島大佐渡山脈尾根部に天然スギと混交するサワグルミの更新特性　＊中野陽介（新潟大・院・自然科学），金子洋平（新潟大・超域研究機構），本間航介（新潟大・農），崎尾均（新潟大・農）

P3-012#　マイクロサテライトマーカーを用いた北海道のコナラ林における遺伝的多様性と集団分化の解析　＊本間祐希・並川寛司（北教大・札幌・生物），河原孝行・北村系子（森林総研北海道）

P3-013#　琉球列島におけるマングローブ種の分布パターンに影響する要因　＊真栄城亮（横国大・院・環境情報），持田幸良（横国大・院・環境情報）

P3-014#　ハクサンコザクラの生育期間と個体群構造変動　＊尾鼻陽介（信州大・理），佐藤利幸（信州大・理）

P3-015#　珪藻 *Cyclotella meneghiniana* における性比調節と細胞密度の効果　＊城川祐香（東大・理），若本祐一（東大・複雑系），嶋田正和（東大・広域）

P3-016#　林床におけるイワガラミ・ツルアジサイの分布と微環境　＊森戸寛（岐阜大院・応用生物），加藤正吾（岐阜大・応用生物），花岡創（森林総研・林木育種セ），小見山章（岐阜大・応用生物）

動物と植物の相互関係・種子散布

P3-017　モンゴルにおける草原の持続性と遊牧　＊Nachinshonhor G.U.（地球研），Jargalsaikhan L.（モンゴル科学アカデミー・植物研究所），Tadaki HIROSE（東京農大・国際食糧）

P3-018　島の潜葉虫と虫えい：寄主植物の移入履歴による影響　＊杉浦真治（森林総研）

P3-019　タイ国カノム川マングローブ林に多発した *Leptococcus* sp.（コナカイガラムシ科）成虫の空中浮遊による林内拡散　＊皆川礼子，河合省三（東京農大）

P3-020　一斉結実に対する動物の反応：ボルネオ島サバ州のレッドリーフモンキーの場合　半谷吾郎（京都大・霊長研）

P3-021　カモシカおよびシカ生息地における餌資源量の推定　＊八代田千鶴（森林総研），中川恒祐（岐阜大・応生），野中最子（畜草研），淺野玄，鈴木正嗣（岐阜大院・連獣）

P3-022　アカメガシワにおける物理的、化学的および生物的防御形質の地理的変異　山尾 僚（鹿児島連大），鈴木信彦（佐大・農）

P3-023　ツキノワグマによって創出された小規模林冠ギャップのサイズ推定　＊高橋一秋（長野大・環境ツーリズム），高橋香織（信州大・遺伝子），柳貴洋（長野大・環境ツーリズム），美齊津裕太（長野大・環境ツーリズム）

P3-024　ニジュウヤホシテントウのマメ科食草利用能力の遺伝的基盤：F1 雑種の表現型について　＊藤山直之（北教大・旭川），上野秀樹（新潟大・教育人間科学），Sih Kahono（インドネシア科学院），片倉晴雄（北大・院理）

P3-025　トチノキの未熟種子に含まれる二次代謝物質サポニンの濃度とばらつき　＊星崎和彦，守屋拓（秋田県立大・生物資源），柴田銃江（森林総研東北），吉澤結子（秋田県立大・生物資源）

P3-026　葉食性昆虫マイマイガ幼虫の食性は北海道と広島で異なるか　＊亀井幹夫（広島総研林技セ），原秀穂（北海道総研林試）

P3-027　植食性昆虫による選択的摂食が分解系に与える潜在的な影響：マイマイガと落葉樹 15 種の関係から　加賀田秀樹（京大・生態研セ）

P3-028　富士山５合目森林限界上部におけるゴヨウマツ稚樹の分布とその要因　＊別宮（坂田）有紀子（都留大），西教生（都留大）

P3-029　温暖化処理に伴うミズナラ林冠木の被食量の変化とハイパースペクトル画像による葉の防御物質の評価　＊日浦勉，中路達郎，田柳詩織，中村誠宏，Onno Muller（北大苫小牧研究林），小熊宏之（国立環境研）

P3-030　ニホンジカによるスギ・ヒノキ剥皮害と広葉樹低木の食害　福本浩士（三重県林業研究所）

P3-031　哺乳類散布樹種の種子発芽と実生の成長に果肉と光環境が及ぼす影響　＊今田貴裕，林田光祐（山形大学農学部）

P3-032　DNA バーコーディングを用いた植食動物の食性解析 - 広範な植物種で効率的に増幅するプライマーの開発 -　＊鈴木節子，吉村研介，吉丸博志（森林総合研究所）

P3-033　イチジクコバチを専食するクロツヤバエがイチジクに与える影響　岡本朋子＊，蘇智慧（JT 生命誌研究館）

P3-034　落葉広葉樹における葉の成熟過程と植食性昆虫の食害様式の関係　＊渡辺陽子（北大・FSC），松木佐和子（岩手大・農）

P3-035　代替餌としての落葉の評価―エゾシカの行動追跡から　＊竹田千尋（農工大・農），梶光一（農工大・農），宮木雅美（酪大・環境），伊吾田宏正（酪大・環境），吉田剛司（酪大・環境），高橋裕史（森林総研）

ポスター発表　3月11日(金)10:00－17:15

（大ホール　会場　P　　#：ポスター賞対象発表）

P3-036　絶対送粉共生系における植物 - 送粉者間相互作用の地理的変異　* 後藤龍太郎（京大・院・人環），加藤真（京大・院・人環）

P3-037　沖縄・屋久島・大阪の３地点における「種子 - 葉利用型」植食昆虫ヤマモモキバガの季節消長　藤田真梨子，前藤 薫（神戸大・農），松井 淳（奈教大・生物），高嶋敦史（琉球大・農），駒井古実（大芸大・環），湯本貴和（地球研）

P3-038　捕食者の餌資源消化に対する順化が被食者捕食者の個体群動態に与える影響　* 秋田鉄也（総研大・先導研），Peter A. Abrams（University of Toronto）

P3-039　竹生島におけるカワウ地上営巣地の特性　* 中川潤（滋賀県大・環境），亀田佳代子（琵琶湖博），須藤明子（イーグレットオフィス），野間直彦（滋賀県大）

P3-040　尾瀬・大江湿原周辺における植物へのシカ食害の影響　* 木村勝彦，東条聡子，吉田和樹（福島大・理工）

P3-041　大型の果実食鳥類サイチョウ類による種子散布距離の推定　* 北村俊平（人と自然の博物館），Pilai POONSWAD（マヒドン大学・理）

P3-042　果実食鳥の採食戦略とその利用果実多様性との関係を探る：ボランティアデータを利用した解析　* 吉川徹朗，井鷺裕司（京大院・農）

P3-043　種子散布制限が温帯林の種の共存にもたらす効果　* 正木隆（森林総研），中静透（東北大），柴田銃江（森林総研東北），小南陽亮（静岡大），永松大（鳥取大），真鍋徹（北九州自・歴博），星野大介（森林総研東北），星崎和彦（秋田県立大）

P3-044　コナラ種子のタンニン含有率がナラミノチャワンタケ感染に与える影響 －非破壊成分分析法を用いた接種実験－　* 高橋明子（首都大），市原優，島田卓哉（森林総研・東北）

生理生態・フェノロジー

P3-045#　コウボウムギ成熟固体から分離した内生細菌は実生個体の成長を促進する　* 松岡宏明・山路恵子・小林勝一郎（筑波大院・生命環境）・秋山 克（(株）地層科学研究所）

P3-046#　当年生シュートにおける形態と力学的強度の種間比較　* 野村拓真（京大・農），長田典之（京大・フィールド研），北山兼弘（京大・農）

P3-047#　Al 処理が樹木根の伸長・発根におよぼす影響　* 森山生樹，富岡利恵，竹中千里（名大院生命農）

P3-048#　日立鉱山に生育する植物の重金属蓄積能　* 中村隼人（筑波大・生物資源），山路恵子，小林勝一郎（筑波大院・生命環境）

P3-049#　葉の蒸散メカニズム　―葉内の水の流れとガス交換―　* 澤上航一郎，舘野正樹（東大・院・理・日光植物園）

P3-050#　ミヤマタネツケバナ（アブラナ科）における発芽特性の地域変異　* 池田啓，塚谷裕一（東京大・院・理）

P3-051#　ヤナギ属５種における乾燥に対する木部通水機能の抵抗性：木部構造およびガス交換特性との関連　* 村上由貴（岡大院・環境），三木直子（岡大院・環境），賀燕（岡大・農），小笠真由美（岡大院・環境），山中典和（鳥大・乾地研），吉川賢（岡大院・環境）

P3-052#　異なる光環境下での小笠原外来種アカギの病原菌に対する抵抗性　* 加藤綾奈，三浦千裕，多和田良昭（筑波大・生物資源），小林勝一郎（筑波大院・生命環境），石田厚（京都大・生態研），山路恵子（筑波大院・生命環境）

P3-053#　異なる標高に分布する北方針葉樹の耐凍性とその獲得タイミング　～エゾマツ・アカエゾマツの種間変異に着目して～　岡田桃子 *，石塚航，後藤晋（東大・農学生命）

P3-054#　窒素施肥がイネの分げつと葉面積動態に与える影響　* 中村和輝，及川真平，廣瀬忠樹（東京農大）

P3-055#　The self-thinning of overcrowded mangrove *Bruguiera gymnorrhiza* stands　*R. Deshar ',', A.T.M.Rafiqul Hoque ',', W. Min ',', S. Sharma and A. Hagihara

P3-056#　Seasonal litterfall production in mangrove *Kandelia obovata* stands on Okinawa Island over five years　*Sharma, S. (Univ. of the Ryukyus), Hoque, ATMR. (Chittagong Univ., Bangladesh), Analuddin, K. (Haluoleo Univ., Indonesia), Hagihara, A. (Univ. of the Ryukyus)

P3-057#　葉の炭素含量をアグリエキスパートで推定できるかどうか　* 水崎大二郎，梅木清，本條毅（千葉園芸）

P3-058#　樹木横枝の自重に対する力学的安全性の解析　* 南野亮子，舘野正樹（東大・院・理・日光植物園）

P3-059#　中国毛烏素沙地に生育する樹木の浸透調節能　* 岡田憲和（鳥大院・農），積山知幸（鳥大院・農），香口成美（鳥大・農），山本福壽（鳥大・農），山中典和（鳥大・乾地研）

P3-060#　乗鞍岳森林限界におけるオオシラビソの樹型形成の過程　* 前田久美子（東邦大・理），澤田晴夫（東京大学愛知演習林），丸田恵美子（東邦大・理）

P3-061#　南アルプス・キタダケソウ（Callianthemum hondoense）の生理生態的特性　* 青島佑太，安部壮一，望月大輝，増沢武弘（静岡大・理・生物）

P3-062#　野外に植栽された遺伝子組換えポプラの成長と生理特性　舟橋史晃 *（京大農），太田誠一（京大農），谷口亨（森林総研），林隆久（東京農大）

P3-063#　高 CO_2 および高 O_3 がカンバ類３種の成長と光合成に与える影響　* 稲田直輝（北大・農），渡辺誠（学振・北大院・農），澁谷正人，斎藤秀之，小池孝良（北大院・農）

P3-064#　マダケ属２種の地上稈における貯蔵養分の変動の比較　* 遠山千景，中川弥智子（名大院生命農）

P3-065#　根圏細菌のもたらすドクゼリへの Zn 吸収と土壌中の不溶性 Zn の可溶化　長田賢志（筑波大学 生命環境）*，山路恵子（筑波大学 生命環境），野村暢彦（筑波大学 生命環境）

P3-066#　温帯 19 樹種間の当年枝形態、当年枝資源配分、樹冠形の比較　* 齊藤わか，長田典之，北山兼弘

P3-068#　低酸素ストレスに対する水生植物の根の呼吸応答　* 中村元香，野口航，寺島一郎（東大・理）

P3-069#　AM 菌根菌の感染によるヒノキアスナロ実生の個体呼吸・成長のシフト　筑波大学 平嶋善宣 *，山路恵子，森茂太

P3-070#　生育環境の異なるシダ植物の光合成機能と乾燥ストレスへの反応　* 西田圭佑，半場祐子 京都工芸繊維大学

P3-071#　糖類の点滴投与が樹木苗木へ与える影響　* 村田直樹 1，岩永史子 2，田中浄 1，Ailijan Maimaiti1，山中典和 2（1 鳥大院・農，2 鳥大・乾地研）

P3-072#　土壌環境と湿原植物の資源利用様式　* 井上 晃，田中 孝尚，黒川 紘子，彦坂 幸毅，中静 透（東北大 院 生命）

P3-073#　開放系大気 CO_2 増加（FACE）施設に生育するカンバ類３種の葉のフェノロジー　* 伊藤寛剛（北大農），渡辺誠（学振・北大院農），毛巧芝（北大院農），斎藤秀之（北大院農），渋谷正人（北大院農），笹賀一郎（北大 FSC），小池孝良（北大院農）

P3-074#　日立鉱山に自生するリョウブの内生菌が根圏環境に及ぼす化学的影響　* 高樋明希（筑波大院・生命環境），茂渡有紗（筑波大学・生物資源），小林勝一郎（筑波大院・生命環境），山路恵子（筑波大院・生命環境）

P3-075#　水ストレスによるエンボリズムとその解消ー木部張力と通水コンダクタンスの関係ー　* 大條弘貴，種子田春彦，寺島一郎（東京大・理）

ポスター発表　3月11日（金）10:00－17:15
（大ホール　会場　P　　#：ポスター賞対象発表）

P3-076#　葉内水の酸素安定同位体比を用いた乾燥地植物の夜露の利用の評価　*大橋達矢，松尾奈緒子（三重大院・生物資源）楊霊麗，吉川賢（岡山大院･環境），張国盛，王林和（内蒙古農業大学）

P3-077#　安定同位体比を用いたエジプトのマングローブ（Avicennia marina）の枝の伸長形態と葉の生理特性の関係　萬城遼*三重大学生物資源学部，松尾奈緒子 三重大学大学院生物資源学部，寺南智弘 和歌山大学大学院システム工学部，中島敦司 和歌山大学大学院システム工学部，吉川賢 岡山大学大学院環境学研究科

P3-078#　長期塩分ストレス下の Tamarix ramosissima の葉の炭素・酸素同位体比の変動　*今井一輝（三重大学・生物資源学部），松尾奈緒子（三重大学・三重大学生物資源学研究科），今田省吾，山中典和（鳥取大学乾燥地研究センター）

P3-079#　熱帯樹木のガス交換特性の鉛直プロファイルと吸水源･光環境の関係　*春田岳彦，松尾奈緒子（三重大，生資），高梨聡（森林総研，気象），小杉緑子（京大，農）

P3-080#　乾燥地における塩生植物の適合溶質と窒素安定同位体比の関係　*西澤誠，松尾奈緒子（三重大・生物資源），Ailijiang Maimaiti，岩永史子，山中典和（鳥取大・乾燥地研究センター）

P3-081#　緯度・標高の異なる自生地のイタドリを用いた光合成温度応答メカニズムの比較　*町野諭，永野聡一郎，彦坂幸毅（東北大・院・生命科学）

P3-082#　ダム湖の微気候が周辺植生の生育期間に与える影響　*阪口恵理（広島大･総科），山崎亙（広島大･院･国際協力），中越信和（広島大・院・国際協力）

P3-083#　融雪時期がハイマツの当年枝伸長成長に及ぼす影響　*横山将大（富大院・理工），和田直也（富大・極東地研）

P3-084#　融雪環境の違いが稚樹の開葉時期に与える影響　*伊藤公一（鳥取大・院・農），佐野淳之（鳥取大・農・FSC）

P3-085#　衛星リモートセンシングと有効積算温度を用いた将来の展葉時期の予測　*羽田野真由美（筑波大･生物資源），本岡毅（JAXA），奈佐原顕郎（筑波大・生命環境）

景観生態・古生態

P3-086　ソバの送粉者と結実に影響する景観要素　*滝久智，岡部貴美子（森林総研），山浦悠一（北大），松浦俊也，末吉昌宏，牧野俊一（森林総研），前藤薫（神戸大）

P3-087　東北地方の多雪集落における山菜の生育地および採取地の環境条件　*松浦俊也，杉村乾，宮本麻子，田中浩，勝木俊雄，滝久智（森林総研），田中伸彦（東海大・観光）

P3-088　大峰山脈釈迦ヶ岳周辺における樹木枯死・倒伏域の分布と地形条件　阿部聖哉（電中研・生物環境）

P3-089　瀬戸大橋島嶼における景観構造変化に及ぼした架橋工事の影響に関する研究─瀬戸大橋・櫃石島と与島の場合─　*張可，大野啓一（横浜国立大学・院・環境情報）

P3-090　愛知県豊田市における谷津環境の冬期湛水田に飛来する鳥類等　*橋本啓史（名城大・農），大畑孝二（日本野鳥の会・サンクチュアリ室），礒井俊行（名城大・農）

P3-091　知床岬でのエゾシカによる植生改変は鳥類にも影響するか？　*吉田剛司（酪農学園大），小荒井衛（国土地理院），玉田克己（道総研環境科学研究センター），田澤道広（知床財団）

P3-092　Is Mongolian rangeland non-equilibrium or disequilibrium? Co-existence of mobility modes introduces multi-scale density-dependency in key resources　岡安智生，*大黒俊哉，**ウンダルマ・ジャムサラン，*武内和彦*東大・農*モンゴル国立農業大学

P3-093　滋賀県湖東地区の集落における土地利用の変遷　*築山省吾，浜端悦治（滋賀県立大学）

P3-094　集団サイズの異なる里山のブナ林における種子・殻斗形質の多様性　*小林誠，伊藤千恵，永野昌博（十日町市立里山科学館キョロロ）

P3-095　ラオス村落住民における植物利用の知恵とそれに基づくチーク植林の資源ポテンシャル評価　*矢ヶ崎朋樹（IGES- 国際生態学セ），百村帝彦（IGES），ラタナボンゴ ブンチャン（ルアンプラバン県農林事務所）

P3-096　過去撮影の航空写真解析で判明した利尻山におけるハイマツ群落の衰退　*小熊宏之（国環研），佐藤雅彦（利尻町立博物館），廣瀬葉子（国際航業）

P3-097　北海道の水田地帯の生物多様性を測る　長 雄一（道総研・環境研）

P3-098　茶草場における農業活動と生物多様性保全の関係　*楠本良延（農環研），稲垣栄洋（静岡農林セ），平舘俊太朗（農環研），岩崎亘典（農環研），山本勝利（農環研）

P3-099　利根川流域における水田周辺の景観構造と植生構造の変化の関係　*三上光一，楠本良延，天野達也，徳岡良則（農環研・生物多様性），山田晋（東大院・農），山本勝利（農環研・生物多様性）

P3-100　栃木県佐野市下秋山地区におけるイノシシおよびニホンジカの撮影頻度と生息環境の関係　*大橋春香，斉藤正恵（農工大・フロンティア農），堀江玲子（宇都宮大・農），角田裕志（農工大・農），石井遥香，野場啓（農工大院・農），桑原考史，弘重穣（農工大・フロンティア農），小池伸介，星野義延，戸田浩人，梶光一（農工大・農）

P3-101　食用野生植物の分布予測と温暖化影響評価　比嘉基紀*，中尾勝洋，津山幾太郎，田中信行（森林総研･植物生態），松井哲哉（森林総研，北海道）

P3-102　白山のハイマツの年枝伸長量　*野上達也，吉本敦子（石川県白山自然保護センター）

P3-103　ALOS データによるランドスケープレベルの土地被覆分類図作成の可能性　*寺田文子，長坂晶子，菅野正人（道総研林業試験場）

P3-104　Vegetation Dynamics due to Invasion of Acacia nilotica in Bekol Savana Baluran National Park, Indonesia　EFSA CAESARIANTIKA, Toshiaki KONDO, Nobukazu NAKAGOSHI

P3-105　Land use change detecting by remote sensing and GIS in Bodri watershed, Central Java　Lubis, J.P.L,

P3-106　くじゅう黒岳地域における 1500 年前以降の植生景観とヒゴタイの分布　*佐々木尚子（地球研），河野樹一郎（西日本技術開発（株）），高原 光（京都府大）

P3-107　箱根仙石原における植物珪酸体および微粒炭分析　*高岡貞夫（専修大・文），吉田真弥（鉱研工業）

P3-108　埼玉県深谷市周辺の後期中新世初頭の古植生　小林真生子*，沖津 進（千葉大院・園）

種多様性・菌類・微生物

P3-109#　物理化学性状の異なる農薬が水田生態系に及ぼす影響　- 水田メソコズム試験事例　*早坂大亮，是永知子，五箇公一（国立環境研究所・環境リスク研究センター）

P3-110#　不耕起が落葉腐生菌の多様性に与える影響　*三浦季子（横浜国大院・環境情報），金子信博（横浜国大院・環境情報），中森泰三（横浜国大院･環境情報），廿楽法（横浜国大院･環境情報），西澤智康（茨大・農）

P3-111#　閉鎖的空間及びエゾシカ高密度状態が地表性昆虫の多様性に与える影響　*柳原祐一，（酪農学園大学大学院），吉田剛司，（酪農学園大・環境）

ポスター発表　3月11日（金）10:00－17:15
（大ホール　会場　P　　#：ポスター賞対象発表）

P3-112#　メタ群集における捕食ー被食食物網の安定性に与える共進化と移動分散の効果　＊山口和香子（東北大・生命科学），大野（鈴木）ゆかり（東北大・生命科学），近藤倫生（龍谷大・理工），河田雅圭（東北大・生命科学）

P3-113#　カミキリムシ類とゴミムシダマシ類の分布と景観との相関関係の解析　＊今村 航平（東北大・生命），滝 久智（森総研），槇原 寛（森総研），中静 透（東北大・生命）

P3-114#　多様な林縁環境がもたらす植物種の多様性　＊小原亮平，丑丸敦史（神戸大・発達）

P3-115#　日本における魚類寄生虫 *Genarchopsis goppo* の地理的分化と宿主特異性　＊西村龍彦，浦部美佐子（滋県大）

P3-116#　さまざまな付着基盤を利用する表在性二枚貝の多様化パターン　＊椿 玲未（京大・人環），亀田 勇一（京大・地環），加藤 真（京大・人環）

P3-117#　熱帯樹木のデモグラフィー特性における系統的保守性：群集集合に対する新しいアプローチ　＊片渕正紀（東北大・生命），饗庭正寛（北大・苫小牧研究林），Sylvester Tan（SFC, Malaysia），Stuart J. Davies（CTFS, USA），中静透（東北大・生命）

P3-118#　生態的特徴と遺伝子解析からみたサラシナショウマ３タイプの分化　＊楠目晴花，市野隆雄（信州大・理・生物）

P3-119#　シダハバチ亜科近縁２属（トガリシダハバチ，ナガシダハバチ）の属間関係と食性　＊井坂友一，佐藤利幸（信州大・理・生物科学）

P3-120#　岩礁潮間帯を利用する遊泳魚類の多様性とその決定要因　＊大井文貴（龍谷大学），丸山敦（龍谷大学）

P3-121#　胃内容の珪藻組成によるシクリッド魚類のマイクロハビタット推定　＊篠原耕平（龍谷大学），丸山敦（龍谷大学），大塚泰介（琵琶博）

P3-122#　周瀬戸内地域を中心とした西日本における淡水魚類の比較系統地理　＊田畑諒一，富永浩史，柿岡諒，小宮竹史（京大院・理），向井貴彦（岐阜大），高橋洋（水大校），張廖年鴻，渡辺勝敏（京大院・理）

P3-123#　外生菌根菌に依存しない菌従属栄養性獲得の可能性　末次健司＊，加藤真（京都大 院 人間環境）

P3-124#　亜熱帯林における内生菌の種多様性と宿主特異性　＊池田あんず（京大・生態研セ），広瀬大（日大・薬），松岡俊将（京大・生態研セ），大園享司（京大・生態研セ）

P3-125#　Changes in Ectomycorrhizal Community of *Quercus liaotungensis* Forest along Slopes of Loess Plateau in China　Zhang J.＊, Taniguchi T. Tateno R., Du S., Liu G.B., Yamanaka N.（Arid Land Research Center, Tottori University）

P3-126#　ヤブツバキ葉上に定着するリティズマ科菌類のコロニー成長過程　＊松倉君予（東邦大院・理），広瀬大（日大・薬），鏡味麻衣子（東邦大・理）

P3-127#　皆伐とその後の森林遷移に伴う環境の変化が落葉上に現れる漂白に与える影響　＊萩原佑亮（京大院・農），大園享司（京大・生態研センター），保原達（酪農学園大・環），久保田康裕（琉大・理），北山兼弘（京大・農）

P3-128#　シイ・カシ林におけるシラカ外生菌根の土壌深度分布　＊小林弘和，沖津進（千葉大院・園）

P3-129#　岡山県に生息する緩歩動物クマムシの分布特性　＊藤井暁子，三枝誠之（岡山大学・自然科学），宇津木和夫（平岡研），伊藤雅道（駿河大・経済），国枝武和（東京大・理），阿部渉（環境省），小野文久（岡山理科大），西村直樹（岡山理科大・自然植物園），西平直美（一宮高校）

P3-130#　印旛沼における珪藻 oyobi 寄生性ツボカビの季節変動　＊大野智弘（東邦大・理），鏡味麻衣子（東邦大・理），小倉久子（千葉県環境研究センター）

P3-131#　細菌による菌膜形成の適応効果と資源獲得トレードオフ　＊山本京祐，新井博之，石井正治，五十嵐泰夫（東大院・農生科）

遷　移　・　更　新

P3-132　ボルネオ熱帯低地林における択伐施業がフタバガキ科樹木の更新に及ぼす影響　＊今井伸夫，北山兼弘（京大・農）

P3-133　湿原遷移初期における植物２種の紫外線応答　平田亜弓・＊露崎史朗（北大院地球環境）

P3-134　釧路湿原矮生ハンノキ個体群のシュート動態　＊植村 滋（北大・フィールド科学），矢部和夫（札幌市大・デザイン），中村隆俊（東京農大・生物産業），山田浩之（北大・農）

P3-135　放置竹林の伐採方法が樹木の当年生実生の発生消長に及ぼす影響　小谷二郎，石川県林試，小谷二郎

P3-136　富士山大沢右岸の異なる標高に生育するカラマツの樹齢の変動　＊小林卓也，梨本真，竹内亨（電中研），中野隆志（山梨環境科学研）

P3-137　東京大学北海道演習林における天然林施業試験地の 40 年間の推移　＊鈴木牧，尾張敏章，梶幹男（東大演習林）

P3-138　樹木の萌芽特性の種間差は何によって決まるのか？　＊柴田嶺（東北大・生命），柴田銃江（森林総研東北），田中浩，正木隆（森林総研），八田芙美香（東北大・理），黒川紘子，中静透（東北大・生命）

P3-139　土石流跡地における樹木の更新特性　＊川上祐佳（新大・自然研），権田豊（新大・農），崎尾均（新大・農）

P3-140　カラマツ人工林の潜在力を活かした落葉広葉樹林化に関する基礎的研究　＊秋葉行雄（東京農工大・院・農），福嶋司（東京農工大・院・農）

P3-141　照葉樹人工林の植栽初期における主要構成種の個体群動態　＊宮内大策（横浜市立大学），川原照彦（西日本技術開発（株）），藤原一繪（横浜市立大学）

P3-142　下層植生が衰退したヒノキ人工林における間伐後５年間の下層植生の種組成と植被率の変化　＊渡邉仁志（岐阜県森林研），横井秀一（岐阜県森文ア），井川原弘一（岐阜県可茂土木）

P3-143　北海道有珠山火口付近の植生遷移と微生物分解　＊大瀧みちる，竹内史子，露崎史朗（北大院環境）

P3-144　泥炭地湿原における人為撹乱後の植生回復パターンの特定：地下水要因が与えるスケール依存的効果　＊西村愛子（中央農研），露崎史朗（北大・環境科学）

P3-145　多様な植物種から形成されるワンドにおける物理的環境変化と植生動態　＊齊藤瑛璃香（新潟大院・自然科学），高野瀬洋一郎（新潟大・超域研究機構），紙谷智彦（新潟大院・自然科学）

P3-146　富士山亜高山帯針葉樹林内の裸地・パッチ植生下のカラマツ実生動態　＊荻野恭子，沖津進（千葉大院・園）

P3-147　大峯山系弥山におけるシラビソ縞枯れの断絶と森林構造　＊松井淳，山本浩大（奈教大・生物），辻野亮（地球研），高田研一（森林再生支援センター）

P3-148　ミズナラ同齢二次林の遷移中期における 10 年間の動態　佐野哲也（森林総研），＊持田幸良（横国大・教），土畑正和（建設環境研究所），横山一朗（湘南学園）

行　　　　動

P3-149#　武器形質の進化に伴う性配分の変化　＊香月 雅子，宮竹 貴久，岡田 賢祐（岡山大・進化生態）

ポスター発表　3月11日（金）10:00－17:15
（大ホール　会場　P　　＃：ポスター賞対象発表）

P3-150#　CONTACT SWIM BEHAVIORS IN WILD BOTTLENOSE DOLPHINS　Chaturaphatranon Kanang*, Sakai Mai, Kohshima Shiro

P3-151#　衛星追跡によるサシバの渡り経路および経路選択様式の検討　*菅澤承子（東大・農），山口典之（長崎大・環境科学），樋口広芳（東大・農）

P3-152#　防衛による巣への攻撃失敗が以降の攻撃に与える影響：フタモンアシナガバチにおける同種他巣の幼虫捕食　*古市生，粕谷英一（九大・理・生態）

P3-153#　マダガスカル熱帯乾燥林におけるチャイロキツネザルの周日行性：なぜ昼も夜も活動するのか？　佐藤宏樹（京都大・アフリカ研）

P3-154#　乾田に適応したノシメトンボの連結打空産卵　*加藤賢太，渡辺 守（筑波大・院・生命環境）

P3-155#　卵寄生蜂はマーキングによって増加する子の捕食リスクをどう回避するのか？　*北野伸雄，馬場成実，上野高敏（九大院・生防研）

P3-156#　クマゼミ雄の鳴き声～温度・体長・時間・他種の鳴きの効果　*入戸野太朗（九州大・シス生），粕谷英一（九州大・理）

P3-157#　水田の時空間的な異質性がアマサギの採食に与える影響　*伊東圭祐，片山直樹（東大・農），天野達也（農業環境技術研究所），藤田剛，樋口広芳（東大・農）

P3-158#　浮気された夫は子の世話を削減する！？～雌のつがい外交尾追求が雄の給餌に与える影響～　*菅原鮎実，浅井亜耶，松田亜希子，櫻なさ，小島渉，北村亘（東大・農），山口典之（東大・農／長崎大・環境科学），樋口広芳（東大・農）

P3-159#　Social networks in cooperatively breeding chestnut-crowned babblers　*Fumiaki Y. Nomano (Hokkaido Univ), Andrew F. Russell (Univ of Exeter, Macquarie Univ)

P3-160#　ガビチョウにおけるさえずり構造の特性　*宮澤絵里，鈴木惟司（首都大・理工・生命）

P3-161#　ヒナの生存率と親の浮気：　捕食リスクが高いとつがい外父性は増えるか　*油田 照秋（北大・環境科学院），小泉 逸郎（北大・創成）

P3-162#　マガンの日周行動における分布変化と小麦食害問題　*熊谷麻梨子（酪農学園大・環境），佐藤舞子（酪農学園大院・酪農），牛山克己（宮島沼水鳥・湿地センター），赤坂猛（酪農学園大・環境）

P3-163#　シングルプレイローダーおよびマルチプルプレイローダーのウミスズメ科鳥類における餌選択と採餌行動－自身のための餌　vs　雛のための餌－　伊藤 元裕，高橋 晃周，國分 亙彦，Alexander Kitaysky，綿貫 豊

P3-164#　ツキノワグマの１日の探餌行動パターンの区分　*有本勲（農工大院），岡村寛（遠洋水研），小坂井千夏（農工大院），後藤優介（立山カルデラ砂防博物館），小池伸介（農工大），山崎晃司（茨城県博），古林賢恒（元・農工大），梶光一（農工大）

P3-165#　ツキノワグマの採食物と移動距離の関係　中島亜美*（東京農工大・連大），小池伸介（東京農工大），小坂井千夏（東京農工大・連大），山﨑晃司（茨城県博），梶光一（東京農工大）

P3-166#　寄生蜂の性フェロモントラップは可能？：アオムシヒラタヒメバチの性フェロモンと交尾時期　*板谷弘樹，上野高敏（九大院・生防研）

P3-167#　ツチバチの帰還習性：発見困難な地中の寄主に対する地上からの探索開始位置決定戦略　*谷 聡一郎，上野高敏（九大院・生防研）

P3-168#　ツキノワグマの生息地選択に与える要因の検討　*杉浦里奈（名城大院・農），島谷健一郎（統計数理研究所），加藤真（名城大院・農），内山幸紀，古賀桃子，鈴木敏章，日紫喜文（名城大・農），淺野玄（岐阜大・応用生物），加藤春喜（NPO法人白川郷自然フォーラム），橋本啓史，新妻靖章（名城大・農）

P3-169#　寄生蜂 *Heterospilus prosopidis* の宿主探索における学習と意志決定過程　*阿部真人，堀部直人，嶋田正和（東大・総合文化）

P3-170#　森林の視界環境がニホンザルの他個体モニタリング行動に与える影響　*鈴木真理子（京大・野生動物），杉浦秀樹（京大・野生動物）

P3-171#　*Amata* 属の配偶行動の解析　～カノコガとキハダカノコ～　近藤勇介（岐大院・昆虫生態），中秀司（鳥取大・害虫制御），土田浩治（岐大・昆虫生態）

P3-172#　半野生馬における集団移動の意思決定　*坪山佳織（総研大・葉山），秋田優（串間市・教委），長谷川眞理子（総研大・葉山），沓掛展之（総研大・葉山，JST さきがけ）

P3-173#　アカネズミのオニグルミ採食技術における社会的学習　武智玲奈

P3-174#　乗っ取りにより巣を獲得するニュウナイスズメの繁殖生態　椎名佳の美（*），東正剛，北大・環境科学

P3-175#　子への捕食寄生者密度の変化に対するアメンボの産卵場所選択　*野林真麻（九大・システム生命），平山寛之（九大・理），粕谷英一（九大・理）

P3-176#　亀岡の水田に同所的に生息するカエル５種の食性調査　*江口章子，島田知彦，今村彰生（京都学園大 バイオ環境）

動 物 個 体 群

P3-177　コロニーからのカワウ出入りパターンの季節変化と餌変動の関係　*熊田那央，藤岡正博（筑波大・農）

P3-178　北海道屈斜路湖和琴半島におけるエゾリス *Sciurus vulgaris orientis* の生息状況と外来種アメリカミンク *Mustela vison* の分布　*南佳典（玉川大・農），松野美都（玉川大・農），田中優子（知床財団），金井秀明（玉川大・農）

P3-179　森と海のつながり：陸生ガニによる分解者機能の推定　*山北剛久，池田紘士，岡部貴美子（森林総研・昆虫），宮島利宏（東大・大気海洋研）

P3-180　個体識別の必要ないカメラトラップによるシカ生息密度評価法　*姜兆文（WMO），山根正伸（神奈川県自然環境保全センター），今野建志郎（横浜国立大），山田雄作（WMO）

P3-181　ツキノワグマの大量出没によって遺伝構造はどう変わるか？　*大西尚樹（森林総研・東北），湯浅卓（WMO），森光由樹（兵庫県大／森林動物研究セ），大井徹（森林総研）

P3-182　北アルプスに生息するニホンザルの生元素安定同位体比と生息地利用　*中下留美子（森林総研），鈴木彌生子（食総研），楊宗興（農工大・農），高畠千尋，泉山茂之（信大・農）

P3-183　北陸地方におけるニホンイノシシの遺伝的集団構造　*山崎裕治，安達文成，萩原麻美（富山大・院理工）

P3-184　サケ科魚類の密度依存型競争に河川環境が与える影響の解明を目指して　*長谷川功（さけますセンター），山崎千登勢（北大環境科学院），大熊一正（さけますセンター）

P3-185　シミュレーションモデルを用いた太平洋クロマグロ管理の評価手法の検討　*市野川 桃子，竹内 幸夫（遠洋水研）

P3-186　冬季沖縄における亜種ヒヨドリの動態　山口恭弘（中央農研・鳥獣害研）

P3-187　アフリカ熱帯林における哺乳類糞の DNA による種同定　*井上英治（京大・理），Etienne Akomo Okoue（IRET, Gabon），井上 - 村山美穂（京大・野生研）

P3-188　ニホンジカ伊豆地域個体群の遺伝構造と行動の解析 Ⅰ － GPS 首輪によるメスジカの行動と生息環境利用の把握－　*大場孝裕，山田晋也，大竹正剛，大橋正孝（静岡

県・森林研セ）

P3-189　ニホンジカ伊豆地域個体群の遺伝構造と行動の解析 Ⅱ－ミトコンドリア DNA シークエンスによる遺伝構造解析－　*山田晋也（静岡県・森林研セ），湯浅卓（㈱野生動物保護管理事務所），大場孝裕，大竹正剛，大橋正孝（静岡県・森林研セ）

P3-190　屋久島におけるニホンザル行動域の長期的な移動　杉浦秀樹（京都大学 野生動物研究センター）

P3-191　個体のばらつきの進化と個体群の持続性　中道康文（九州大・理）

P3-192　北海道真駒内公園におけるヒラタシデムシとオオヒラタシデムシの種間競争　住友宏幸*，廣田忠雄（山形大理工学研究科）

P3-193　北海道屈斜路湖和琴半島に侵入した外来種アメリカミンク *Mustela vison* の生息状況と在来種に対する生態的インパクト　*谷本 亮（玉川大・農），高橋勇治（玉川大・農），筒井勇介（玉川大・農），金井秀明（玉川大・農）

P3-194　ショウジョウバエ翅形態の安定性に対する人為選抜実験　*辻野昌広，高橋一男（岡山大・RCIS）

P3-195　都市近郊に生息するノウサギの遺伝的多様性　*松木吏弓，小林聡，竹内亨（電中研・生物）

P3-196　絶滅危惧Ⅰ類クロシジミの遺伝構造　*竹内 剛（京大・生態研），清 拓哉（京大・生態研），高橋 純一（京産大・総合生命），椿 宜高（京大・生態研）

動物繁殖・動物社会生態

P3-197#　ブッポウソウの繁殖期における雌雄の役割分担　*水野聖子（岡大院・自然），木村祐一（日本鳥類標識協会），峯光一（(株) 南西環境研究所），松島康（岡大・理），三枝誠行（岡大・理）

P3-198#　サンカクハゼの繁殖生態と砂かけ行動パターン　*坪井美由紀，坂井陽一，橋本博明（広島大・院・生物圏）

P3-199#　陸産貝類における交尾時の粘液注入が交配相手の生殖器構造に与える影響　*木村一貴，千葉聡（東北大・生命科学），Joris M Koene（Vrije Univ.）

P3-200#　東京湾奥部人口湿地におけるクロベンケイガニの放仔生態　*阿部絢香，風呂田利夫（東邦大 理）

P3-201#　抱きつけなくてもかまわない？－日本産ヒキガエルにおける繁殖池 のスニーカー雄－　*長谷和子，嶋田正和（東大院・総合文化）

P3-202#　栄養卵が進化する理由と、普遍的でない理由　*鈴木紀之，川津一隆（京大院・昆虫生態），大澤直哉（京大院・森林生態）

P3-203#　格付けされる夫たち、この夫の子供は産みたくない！？～雄の複数形質と雌のつがい外交尾追求～　*浅井亜耶，菅原鮎実，松田亜希子（東大・農），長谷川克，渡辺守（筑波大・生命環境），中村雅彦（上越教育大・生物），北村亘（東大・農），山口典之（東大・農 / 長崎大・環境科学），樋口広芳（東大・農）

P3-204#　ウミネコの繁殖前の食性が繁殖投資量におよぼす影響　*風間健太郎（名城大・農），鈴木優也（北大・水産），富田直樹（名城大・農），伊藤元裕（北大・水産），新妻靖章（名城大・農），綿貫豊（北大・水産）

P3-205#　堅果類の豊凶はニホンイノシシ（*Sus scrofa leucomystax*）の成長と繁殖に影響を及ぼすか？　*辻知香（岐阜大学大学院連合獣医学研究科），横山真弓（兵庫県立大学 / 兵庫県森林動物研究センター），藤木大介（兵庫県立大学 / 兵庫県森林動物研究センター），淺野玄（岐阜大学応用生物科学部），鈴木正嗣（岐阜大学応用生物科学部）

P3-206#　カシノナガキクイムシの穿孔部位による繁殖成功度のばらつき　*小田崇，山崎理正（京大院・農），伊東康人（兵庫農技総セ）

P3-207#　腐肉食性オオヒラタシデムシの産卵戦術：給餌間隔と産下卵数　*滝 若菜・渡辺 守（筑波大・院・生命環境）

P3-208#　クワヒョウタンゾウムシの倍数性変化 - 低温処理の影響 -　*多田泰紘，西田千鶴子，片倉晴雄（北大院・理）

P3-209#　オオシロアリの腹板腺におけるカースト間差異の解析　*淀井智也，宮川一志，石川由希（北大院・環境科学），北條賢（琉大・農），三浦徹（北大院・環境科学）

P3-210#　大きいことは良いことか－ニホンザルにおける体サイズと消化率の関係－　*澤田晶子（京都大・霊長研），坂口英（岡山大・農），半谷吾郎（京都大・霊長研）

P3-211#　トゲワレカラの子の保護方法は水が動くと変化する　*原田彩知子，安田千晶，竹下文雄（北大・院・水産），田中萌（岡山大・院・環境学），和田哲（北大・院・水産）

P3-212#　日本産トゲオオハリアリにおけるコロニーサイズ依存的な社会的強制力　下地 博之（1 鹿児島大・連合農学，2 琉球大・農）*，菊地 友則，大西 一志，辻 和希（琉球大・農）

P3-213#　ニホンザルの雄はなぜ群れを離れるのか；採食、繁殖戦略の観点から　*大谷洋介，澤田晶子，半谷吾郎

P3-214#　マアジ稚魚における観察学習能力の個体発生　*高橋宏司，益田玲爾，山下洋

P3-215#　ネバダオオシロアリの生殖虫は栄養交換によってソルジャー分化を調節する　*中村早寿，前川清人（富山大院・理工）

P3-216#　ヤエヤマシロアリ野外コロニーの生殖虫組成の違いと、カスト比・性比・遺伝構造　*星 真大（茨城大学・院・理工），北出 理（茨城大学・理）

P3-217#　沖縄産ハダカアリ属の生態～環境に応じた巣づくり～　*吉澤樹理（岐大院・昆虫生態），山内克典（岐阜大学名誉教授），土田浩治（岐大・応用生物）

P3-218#　ヤマトシロアリの 2 雌による創設コロニーでの女王数とカースト分化との関係　*吉村美穂，斉木亮太，前川清人

P3-219#　ヤマトシロアリにおける個体間相互作用による兵隊分化を調節する因子の伝達　*渡邊 大，前川清人（富山大院・理工）

P3-220#　ヤマトシロアリ創設メスの母巣の違いがニンフ生産に与える影響　*滋田友恒，北出理（茨城大・理）

P3-221#　コアシナガバチのコロニー内における巣材の略奪行動　*山崎和久，土田浩治（岐阜大院・昆虫生態）

P3-222#　ワレカラ属における第二咬脚の種間比較：メスは子を守るために武器を手にする？　*竹下 文雄，和田哲（北大院・水産）

P3-223#　トゲオオハリアリ *Diacamma* sp. における触角形態の顕著な性差をもたらす発生学的基盤　*笹千舟（北大・環境），宮崎智史（北大・獣），東正剛，三浦徹（北大・環境）

P3-224#　ヤマトシロアリにおける有翅虫性比の地理的な変異　*諸岡史哉，北出理

外　来　種

P3-225　外来昆虫ブタクサハムシの移入地環境への適応：地域による光周性の違い　*田中幸一（農環研），村田浩平，松浦朝奈（東海大・農）

P3-226　インターネット上の外来生物情報の世界的傾向とその効率的共有への展望　*岡本 卓，五箇公一（国立環境研）

P3-227　外来不快害虫ヤンバルトサカヤスデの生態特性　神谷貴文，飯田奈都子（静岡県環境衛生科学研）

ポスター発表　3月11日（金）10:00－17:15
（大ホール　会場　P　　#：ポスター賞対象発表）

P3-228　外来樹木ハリエンジュが渡良瀬川河川敷の在来植物相に及ぼす諸影響　*石川真一（群馬大・社会情報），ペレンゲル・ハシフー（群馬大・社会情報）

P3-229　火山荒原上の土壌節足動物群集とリター分解過程に対する外来針葉樹の影響　*斎藤達也（北大院・環境），露崎史朗（北大院・地球環境）

P3-230　福島県郡山市内の河川におけるアメリカミンクの生息密度推定　伊原禎雄（奥羽大）

P3-231　新しい輸送システムは外来種を南極に持ち込みやすい？　*辻本惠（総研大・極域），伊村智（極地研）

P3-232　外来種の入った食物連鎖のタイプ分けとそれらの特性　桜谷保之（近畿大・農・環境生態）

P3-233　アルゼンチンアリのスーパーコロニー間における敵対行動の季節変化と遺伝子流動　*井上真紀，五箇公一（環境研），伊藤文紀（香川大・農）

P3-234　カワシンジュガイ幼生のホスト適合性：外来マス類の再検討　*北野聡（長野環保研），小林収（長野西高），山本祥一郎（中央水研）

P3-235　ニセアカシア林の食物網特性の解明：クモ類への間接効果の推定　*宮下直，田中明郎，高木俊（東大・農・生物多様性），津田大輝，加賀谷隆（東大・農・森林動物），畠瀬頼子（自然環境研究センター）

P3-236　特定外来植物オオハンゴンソウの種子散布特性　*西尾 孝佳，永塚未貴（宇都宮大・雑草セ）

P3-237　鎌倉市における外来中型食肉目３種と在来種タヌキの競合　*岩下明生，安藤元一，小川 博

P3-238　外来種？在来種？東京湾に大発生した二枚貝に寄生する小型節足動物：カイヤドリウミグモ　*山田勝雅，小林 豊，深山義文（千葉県水研セ・東京湾漁研），張 成年，山本敏博，柴田玲奈（水総研セ・中央水研），宮崎勝己（京都大・瀬戸臨海），山北剛久（森林総研），鳥羽光晴（千葉県水研セ・東京湾漁研）

P3-239　ハイパースペクトルリモートセンシングを用いた侵略的外来種セイタカアワダチソウの密度推定　*石井潤，鷲谷いづみ（東京大・農）

P3-240　北米に移入したエビヤドリムシ *Orthione griffenis* における日米個体群の比較　伊谷行*，三好由佳莉（高知大・教），久米洋（愛媛・水セ），John Chapman（HMSC, Oregon State Univ.）

P3-241　砂浜生態系に侵入したセアカゴケグモによるオオヒョウタンゴミムシの捕食　*高木俊，土岐和多瑠，吉岡明良（東大・農）

P3-242　外来植物の出現抑制のための休耕田の湛水管理　*高野瀬洋一郎（新潟大・超域研究機構），石田真也（新潟大院・自然科学），紙谷智彦（新潟大院・自然科学）

P3-243　琵琶湖における外来貝類の分布の現状　*木村妙子，谷口千恵，木村昭一（三重大院・生物資源）

P3-244　手賀沼水系大堀川における特定外来生物 カワヒバリガイの分布拡大要因について　*高橋 佑太朗（江戸川大学）・吉田正人（筑波大学）

P3-245　植物群集の開花フェノロジーとハナバチ相の関係に対する外来植物の影響　*笠木哲也，宇都宮大輔，木村一也（金沢大），湯本貴和（地球研），中村浩二（金沢大）

P3-246　外来植物ミチタネツケバナにおける繁殖形質の地理的変異と国内遺伝構造の関係　*松橋彩衣子（東北大・生命），工藤洋（京大・生態研），Miltos Tsiantis（オクスフォード大），牧雅之，酒井聡樹（東北大・生命）

P3-247　小笠原諸島の外来種アカギ除去後の再加入リスク評価　*山下直子（森林総研・関西），河原孝行（森林総研・北海道）

P3-248　生物多様性の高いため池群の水生生物に対する侵略的外来種ウシガエルの影響　*西原昇吾（東大・農学生命科学），須田真一（東大・農学生命科学），鷲谷いづみ（東大・農学生命科学）

生態系管理・都市・教育

P3-249#　モンゴル国オルホン河（Orkhon River）流域の植生遷移と土地利用　*松原奈央（酪農学園大院・環境），星野仏方（酪農学園大・環境），ガンゾリグ・スミヤ（酪農学園大・環境）

P3-250#　時空間 NDVI データを用いたモンゴル草原植生の降水応答　*プレブスレン・ツェデンダンバ（酪農学園大院・環境），星野仏方（酪農学園大・環境），ガンゾリグ・スミヤ（酪農学園大・環境）

P3-251#　灰塚ウェットランドにおける人工湿地の生態系サービスに関する研究　*小川真莉子（広島大・総科），中越信和（広島大・院・国際協力），田中一彦（広島大・院・国際協力），浜田健一（国土交通省中国地方整備局三次河川国道事務所灰塚ダム管理支所）

P3-252#　採草地を対象とした航空機リモートセンシング　*中坪 あゆみ，田中 勝千，杉浦 俊弘，皆川秀夫

P3-253#　ゾーニングと管理者の交互作用が里山の林床植生を変える　*土屋一彬，大黒俊哉，武内和彦（東大院・農）

P3-254#　樹皮剥ぎを用いた樹液食甲虫の誘引～昆虫採集に向けた森づくりの手法開発～　*美齊津裕太，山本貴紀，上野徹，島田尚樹，小林紀博，天田圭助，高橋一秋（長野大，環境ツーリズム）

P3-255#　イノシシによる水稲被害のレベルに影響を与える景観要因及び被害レベルが決まる空間スケールの特定　*久保達也，高田まゆら（帯畜大），鈴木 牧（東大演習林），落合啓二（千葉県博），浅田正彦（生物多様性センター），宮下 直（東大院農）

P3-256#　絶滅危惧維管束植物を指標とした里地里山ホットスポット解析　*渡邉絵里子（横浜国立大学・環），林直樹（横浜国立大学），松田裕之（横浜国立大学）

P3-257#　Potential Influence of Aquatic Earthworm *Branchiura sowerbyi* on Mitigation of Methane Emission From Paddy Soil　*Mitra, P (YNU), Kaneko, N (YNU), Yachi, S (YNU)

P3-258#　都市近郊里山におけるイノシシの耕作放棄田利用状況　*平井茉美（東邦大学・理），浅田正彦（千葉県生物多様性センター）

P3-259#　自然公園利用者のヒグマ遭遇に対するリスク認識の違い　*久保雄広（北大・農），庄子康（北大・農）

P3-260#　土壌環境制御による植生管理法の開発 第２報：土壌酸性化処理後１年間の植生モニタリング　森田沙綾香1・小柳知代1・藤間 充2・太田陽子3・楠本良延1・平舘俊太郎1　1 農環研，2 山口大学農学部附属農場，3 緑と水の連絡会議

P3-261#　水田の土着天敵コモリグモはレンゲによって増加する　*山口 翔，水元駿輔，山下雅幸，澤田 均（静岡大・農），松野和夫，稲垣栄洋，市原 実，済木千恵子（静岡農林研）

P3-262#　景観スケールにおける希少樹木種の生活史特性と森林管理シナリオとの関連性　*石田敏（東北大・生命），正木隆，田中浩（森林総研），中静透（東北大）

P3-263#　除去法を用いたニホンジカの個体数推定　*田中幹展，瀧本岳（東邦大・理）

P3-264#　カヤネズミ *Micromys minutus* の生息する半自然草原の管理　*岩本 菜々子（明治大・農），荘司 たか志（全国カヤネズミ・ネットワーク），倉本 宣（明治大・農）

P3-265#　シカ密度増加と人による森林利用は林床植生にど

のように影響するのか～屋久島全島広域比較による解明～　*幸田良介（京大・生態研），辻野亮（地球研），揚妻直樹（北大･FSC），揚妻 - 柳原芳美（フリー研究員），藤田昇（地球研）

P3-266#　天然生針広混交林の択伐施業地における炭素貯留量の長期変化　*南雲未智，井上太樹（北大・環境科学），吉田俊也，柴田英昭（北大・北方生物圏 FSC）

P3-267#　30 年生アカエゾマツ人工林に混交した広葉樹の成長過程　*加藤聡美，竹内史郎（北大・環境科学院），吉田俊也（北大・北方生物圏 FSC）

P3-268#　群馬県赤谷地域における治山ダムの設置・撤去が渓畔植生に与える影響　*林雄太，吉川正人（東京農工大･院･農），藤田卓（日本自然保護協会）

P3-269#　シカ過採食圧の放置と排除は埋土種子相にどのように影響するのか - 土の中から探る植生回復可能性の評価 -　*本田美里（京大･農），阪口翔太，山崎理正，高柳敦（京大院・農）

P3-270#　佐渡島の水田における両生類の個体数決定要因：農法と景観構造からの評価　*宇留間悠香，小林頼太，宮下直（東大・農）

P3-271#　分散パターン解明を目的としたスカシバガ類の生体内微量元素分析　*工藤誠也（弘前大院･農生），渡邉泉（東京農工大・農），東信行（弘前大・農生）

P3-272#　風倒木処理がエゾシカの採食選択に与える影響　*森谷佳晃，森本淳子，中村太士（北大院農）

P3-273#　移動している野生動物検出のための隣接画像間の対応点取得アルゴリズム　*大石優（筑波大），松永恒雄（国環研）

P3-274#　蒙古草原における農薬の生態リスク管理　*ソリゴガ，松田裕之

P3-275#　様々な管理手法による竹林の環境経済的評価～兵庫県淡路地域のケーススタディ～　*池野優子（阪大・工），松井孝典（阪大・工），町村尚（阪大・工），加藤悟（阪大・工）

P3-276#　微量元素分析を用いたオオクチバスの生息地推定　*井上博元（弘前大･農），野田香織（弘前大･理工），渡邉泉（農工大・農），東信行（弘前大・農）

P3-277#　市街地の法面における植物群落の遷移と外来種・園芸種の侵入に関する研究　前川恵美子，武田義明（神戸大･人間発達）

P3-278#　都市域のランドスケープ構造がチョウ類の分布に与える影響　*前角達彦，須田真一（東大院・農），角谷拓（国環研），鷲谷いづみ（東大院・農）

P3-279#　都会で暮らせる人、暮らせない人：都市化傾度と哺乳類の生態的特性　*斎藤昌幸，小池文人（横浜国大・環境情報）

P3-280#　ヨコエビに研究者の”アイ”を　～同定ガイドブックの作成事例～　*小川洋，風呂田利夫（東邦大・理）

P3-281#　ヘイケボタルを対象とした市民参加型手法の検討　*柿本恵里那（東邦大院・理・生物），長谷川雅美（東邦大・理・生物）

P3-282#　アイスブレイキング型環境教育プログラム～楽しみながら森の生態系サービスを学ぶ～　*柳貴洋（長野大・環境ツーリズム），三上光一（農環研･生物多様），高橋一秋（長野大・環境ツーリズム），佐藤哲（長野大・環境ツーリズム）

進化・数理・分子

P3-283　５本目の指の謎－オットンガエルの拇指の意義とは？－　*岩井紀子（森林総研・鳥獣）

P3-284　インフルエンザウイルスの抗原タイプの流行予測　*水野晃子（総研大），中林潤（総研大），佐々木顕（総研大）

P3-285　オーストラリア全土に分布拡大したヒノキ科樹木 *Callitris columellaris* の遺伝的分化　*阪口翔太（京大院・農），津村義彦，伊原徳子，内山憲太郎（森林総研），D. Bowman, L. Prior（タスマニア大），M. Crisp（オーストラリア国立大学），井鷺裕司（京大院・農）

P3-286　養菌性キクイムシの性決定 / 交配様式がボルバキア感染を決める　*河崎祐樹，梶村 恒（名古屋大院・生命農）

P3-287　捕食者は弱い？　*細田一史（阪大･情），末吉眞人（阪大・情），熊野いつか（阪大・工），松本佑介（阪大・情），冨田憲司（阪大･情），森光太郎（阪大･生），柏木明子（弘大･農），四方哲也（阪大・情）

P3-288　ホタル発光パターンと *nos* 遺伝子との関係　*大槻朝（東北大・生命科学），横山潤（山形大・理），大場信義（大場蛍研究所），近江谷克裕（北大・医），河田雅圭（東北大・生命科学）

P3-289　アジアイトトンボにおける交尾器の形態と神経刺激による精子置換　*田島裕介，渡辺 守（筑波大･院･生命環境）

P3-290　最尤系統樹の信頼性指標に対するバイアスの定量化　*田辺晶史，稲垣祐司，橋本哲男（筑波大・院・生命環境科学），辻美和子（筑波大・計算科学），佐藤三久（筑波大・院・システム情報工学）

P3-291　Evolution of Reproductive Isolation with Adaptive Radiation in a Phytophagous Ladybird Beetle　*松林圭（北大・院環境），Sih Kahono（LIPI），片倉晴雄（北大・院理）

P3-292　周伊勢湾地域における湿地性希少植物の地理的変異パターンのメタ解析　*佐伯いく代（横浜国大・環境），小池文人，村上哲明（首都大・理）

P3-293　ヤスデ類の交尾器進化における構造的イノベーション・体サイズ効果・性差　*田辺 力（熊本大・教），曽田貞滋（京大院・理）

P3-294　交雑による体表模様パターンの変化と種分化　*宮澤清太，近藤滋（阪大･生命機能），岡本康寿（豊平川さけ科学館）

P3-295　ブタクサハムシの侵入はブタクサの開花フェノロジーを進化させるのか？　*深野 祐也 九大理，田中 幸一 農環研，矢原 徹一 九大理

P3-296　カタツムリに寄生するダニの宿主特異性　*佐川文夏（信州大･理），奥村直之（信州大･理），浅見崇比呂（信州大･理）

P3-297　歴史は繰り返す？：アミメアリにおける裏切り表現型の系統解析　*土畑重人（琉球大・農）・森英章（自然環境研究センター）・長谷川英祐（北大・農）・佐々木智基（フマキラー）・嶋田正和（東大・総合文化）・辻和希（琉大・農）

P3-298　キンポウゲ科における花粉異形性の有無　古川桂子（信州大・理）

P3-299　チャネルの異なる雑食とギルド内捕食を含む群集の構造と安定性　*森田由香里（大阪府立大院・理），難波利幸（大阪府立大院・理）

P3-300　年推移変化行列導出法の性質　*長谷川成明（北大・低温研），高田壮則（北大・院・地球環境）

P3-301　種子流通網を考慮したイネいもち病菌のメタ個体群モデル　*鈴木清樹，佐々木顕

P3-302　いじめのゲームで考える魚のサイズ成長　上原隆司（総研大・先導研）

P3-303　大都市圏における通勤・通学ネットワーク上の感染症流行過程の解析　*八島健太（総研大 先導研），佐々木顕（総研大 先導研，JST さきがけ）

P3-304　個体ベースモデルを用いた空間個体群動態　*織田奈津季，高須夫悟（奈良女子大・理）

P3-305　個体間競争から考察する種間競争の動態　穴澤正宏

（東北工大・工）

P3-306　環境変動下における TSD 生物の自然選択　* 山田翔一，高田壮則（北大・環境）

P3-307　最小存続可能個体数と絶滅：格子モデルによる解析　中桐斉之（兵庫県立大・環境人間）

P3-308　連続空間におけるタカハトゲームの個体群動態と進化動態モデル　宮西あずさ，* 高須夫悟（奈良女子大学理学部）

P3-309　遺伝的コミュニケーションと文化的コミュニケーション　* 田村光平（東大・院理），井原泰雄（東大・院理）

P3-310　日本列島に隔離分布する周北極植物チョウノスケソウの遺伝的多様性　* 平尾章（筑波大･菅セ），渡邊幹男（愛知教育大･生物），内田雅己，神田啓史（極地研），下野綾子（筑波大・遺伝子実験セ），増沢武弘（静岡大・理），大原雅（北大・院･環境科学），劉琪璟（北京林業大），李雪峰，韩士杰（中科院･応生研），和田直也（富山大・極東地域研）

P3-311　宿主－媒介昆虫間の移動に伴うトリパノソーマ原虫 *Trypanosoma brucei* の表現型分化における分子制御機構　宮崎智史 *，櫻井達也，片倉賢（北大・獣）

P3-312　岩手を中心としたニホンイヌワシの遺伝的多様性　* 村山美穂, 早野あづさ, 阿部秀明, 坂井寛子（京大･野生動物），前田琢（岩手県環保研センター）

P3-313　日本に生育するカバノキ属 2 樹種，シラカンバとダケカンバの比較系統地理学的研究　* 平岡宏一, 大谷雅人，宮本尚子，岩泉正和（森林総研林育セ），那須仁弥（森林総研林育セ北海道），高橋誠（森林総研林育セ）

P3-314　込み合い環境下のオオミジンコにおける再生産およびストレス応答遺伝子の発現解析　* 伴 修平，市井涼子，更井紀一（滋賀県大），細井公富（福井県大），田辺（細井）祥子（神戸大），森司（日本大）

P3-315　オーストラリア大陸中央部のオアシスに局所分布するヤシ科植物 *Livistona mariae* の起源　* 近藤俊明（広大･国際），兼子伸吾（京大･農），Crisp D（オーストラリア大），Bowman D.M.J.S（タスマニア大），Cook L.G（クイーンズランド大），井鷺裕司（京大・農）

P3-316　オオヤマレンゲ（Magnolia sieboldii）の系統地理～亜種間で浸透性交雑はあったのか？　* 菊地賢（森林総研）

P3-317　ヨーロッパナラの冬芽における遺伝子発現の変化　* 上野真義（森林総研），Gregoire Le Provost, Christophe Klopp, Celine Noirot, Antoine Kremer, Christophe Plomion（INRA）

P3-318　分子からみた河川性魚類の分布域形成とデモグラフィ　* 横山良太（北大･FSC）, 西城学, 白川北斗, 浦西茉耶（北大・院水），後藤晃（北大・FSC）

高校生ポスター発表　3月11日（金）10:00－17:15
（大ホール　会場　P　　#：ポスター賞対象発表）

P3-HS01#　カワニナの研究　山口博志，小瀬本孟，伏屋孝祐，白木伶奈，奥村芽依（岐阜県立岐山高等学校）

P3-HS02#　富良野地方のコウモリ類について　山内美代，中村一輝，山崎果菜子，高橋優斗，高橋康憲，杉山晶基，江川祥平，水間渉五，阿曽萌里（北海道富良野高等学校）

P3-HS03#　富良野地方のプラナリア類　南川勇大，吉田基紀，鈴木健二，久米隆広，青木拓也，中野渡進，山田航平（北海道富良野高等学校）

P3-HS04#　富良野地方における珪藻の分布について　朴田瑞季，稲葉允建，谷本賢耶，大友星矢，菅未紗音（北海道富良野高等学校）

P3-HS05#　オオクワガタの幼虫発育と温度との関係　阿部敏明（東北学院中学校・高等学校）

P3-HS06#　トンボ相の多様性から水辺の自然環境を診断　内田葉子，岩田夏実（北海道札幌旭丘高等学校）

P3-HS07#　町のダニたち　～都市で生き抜くしぶとい奴ら～　山川芳樹，北井優也，伏見英雄，堀裕貴（北海道旭川農業高等学校）

P3-HS08#　札幌白石高校理科愛好会の活動について　奥山彩夏，柿沼由莉（北海道札幌白石高等学校）

P3-HS09#　地球温暖化防止における森林の役割（さまざまな森林による二酸化炭素吸収量の推定）　石田紗樹，光畑美希，松本愛，小原らな，高木成美，脇坂芽依，渡辺真奈，池上裕莉香，大橋慶子（ノートルダム清心学園 清心女子高等学校）

P3-HS10#　コンクリート化された水田地域のクサガメとミシシッピアカミミガメの行動　原悠歌，井上智香子（ノートルダム清心学園 清心女子高等学校）

P3-HS11#　希少種ヒナイシドジョウとイシドジョウが好む生息環境　山田裕貴，道内真輝，川中寅生，石丸真也，近藤昌弘，日野直人，西原佑亮，弓立湧也（愛媛大学付属高等学校）

P3-HS12#　DNA によるシロサケの近縁関係の調査　松村茉莉子，島田侑果（富山県立砺波高等学校）

P3-HS13#　篠路福移湿原における埋め立ての影響による環境の変化　澤田森生，田崎由梨，高山京，中村拓（北海道札幌拓北高等学校）

P3-HS14#　森を測る　－森林構造と光合成－　池田智代子，星野萌絵（早稲田実業学校高等部）

P3-HS15#　浅間山麓のコナラ林とアカマツ林における土壌呼吸の空間分布　高橋佳歩（晃華学園），小島瑠璃（公文国際学園高等部），岩上匠（区立九段中等教育学校）

P3-HS16#　尾瀬のニホンジカとミツガシワの調査　～ライトセンサス・フィールドサイン調査と採食植物の継続観察～　谷島由季乃，都丸祐樹（群馬県立尾瀬高等学校）

P3-HS17#　尾瀬ヶ原龍宮付近における植生調査　～湿原にできる縞模様を探る～　都丸美保，星野祐太（群馬県立尾瀬高等学校）

P3-HS18#　積雪深とササの背丈の関係を探る　～ブナ林における調査～　永山陽子，佐藤奈央（群馬県立尾瀬高等学校）

P3-HS19#　円山川の水質と動物園の森再生への協力活動について　佐藤彩香，宍戸峻太，森下浩充，山形健二，坂爪悟（市立札幌大通高校）

P3-HS20#　オジギソウの生育における密度効果について　大西美緒，半田早記（北海道恵庭北高等学校）

自由集会　　　　　　3 月 8 日 17:00-19:00　　　　　　　会場　A

W01　感染症からみた野生動物の保護管理

企画責任者：長 雄一（道総研・環境研）

感染症は、生態系内でおこる一つの現象ではあるが、生態学研究者にはブラックボックスな面が大きい。また、一方で人獣共通感染症を扱う医学・獣医学研究者にとって、野生動物の生態学的側面を知ることの重要性が高くなってきている。

海外においては、医学・獣医学・生態学・社会学等の研究者は、一つのチームを形成して、生態系・野生動物・家畜・家禽・人間の健康を一元的に捉えつつ、共同調査・研究することがトレンドである。この意味において、野生動物の保護管理を研究・業務対象とする人に「感染症」という新しい「思考軸」を提示するのが、本自由集会の目的である。

野鳥由来感染症の分子診断法の開発および疫学調査
　大橋和彦，村田史郎，伊勢崎政美，今内覚（北大・獣医）

シカ類の資源管理と感染症
　伊吾田宏正（酪農大・環境システム）

爬虫類の感染症と保全医学－天然記念物岩国のシロヘビ死因解析を事例に－
　＊上手健太郎，浅川満彦（酪農大・獣医）

座礁あるいは混獲クジラ類の寄生虫学的研究の動向と課題（概説紹介）
　村瀬真弓，＊浅川満彦

生態学研究者の方からのコメント
　未定

自由集会　　　　　　3 月 8 日 17:00-19:00　　　　　　　会場　B

W02　社会性の分子メカニズム　―その進化プロセスの理解に向けて―

企画責任者：石川由希（北大院・環境），嶋田敬介（富山大院・理工），前川清人（富山大院・理工）

「社会性」とは、同種個体が集まり協調的なコミュニケーションを行うような性質を指し、古くから動物や人間に見いだされてきたものである。なかでも社会性昆虫は、高度に発達した真社会性を獲得し、生態系において大きな成功を収めている。彼らは、子育て、分業、タスクに特化した形態、栄養交換、発達したコミュニケーションなど特有な性質を持つ。これらの性質は､社会性の成立に重要な役割を果たしており､その機能や起源に関して多くの研究がなされてきた。近年、社会性の成立に貢献する分子・生理機構が徐々に明らかになっており、またこれらを単独性／亜社会性昆虫と比較し、社会性の進化プロセスを理解しようというアプローチも、新たな潮流になりつつある。

本集会では、昆虫の様々な社会形態（亜社会性～真社会性）に関するメカニズムについて議論し、社会性の進化プロセスの共通理解を目指したい。

シロアリ類とゴキブリ類における栄養交換行動の発達と社会性の進化
　＊嶋田敬介，前川清人（富山大院・理工）

コオイムシ科昆虫における父育 paternal care 行動、および仔（胚）が高める父親の繁殖適応度
　＊鈴木 智也，谷澤 崇（信州大・工），東城 幸治（信州大・理）

兵隊シロアリに高い攻撃性をもたらす神経機構
　＊石川由希，三浦徹（北大院・環境）

社会性膜翅目昆虫の繁殖制御に関わるドーパミン系の調節機構
　佐々木謙（金工大）

社会性アブラムシにおける兵隊特異的な攻撃毒プロテアーゼ　―分子レベルから見た兵隊アブラムシの進化・行動・生態―
　沓掛磨也子（産総研・生物プロセス）

自由集会　　　　　3 月 8 日 17:00-19:00　　　　　会場　C

W03　高山帯における環境変動とその影響評価：長く観ること・たくさん観ること

企画責任者：廣田 充（筑波大・生命環境），下野 綾子（筑波大・遺伝子実験センター）

高山帯は、海洋島に似て空間的に隔離されている。そこの生物群集は、高山帯特有の固有性の高い生物で特徴づけられる。このような高山帯は、温暖化にともなう環境変動の影響を受けて大きく変化するとされており、特に温暖化による生物間相互作用の変化、低地種の侵入により固有な種の減少や絶滅が危惧されている。このような注目すべき生態系である高山帯では、これまでも国内外を問わず多くの研究が行われてきており、世界レベルでの観測網（例：GLORIA など）も確立されてきた。しかし、高山帯の多くが遠隔地にあって調査が困難なこともあり、温暖化にともなう環境変動とその影響に関する知見が不足している。特に、時間的･空間的変動が大きい環境変動の影響を明らかにするには、様々なサイトで長期間にわたってモニタリングするだけでなく、それらのデータから何を？どのように導くのか？といった戦略も必要である。この自由集会では、高山帯に魅せられた異なる分野の 3 名の研究者にお話をいただく。水野さんには、約 20 年間のケニア山氷河後退域における氷河と植生に関する研究を、小熊さんには、航空写真解析や定点撮影による日本各地の高山帯における温暖化モニタリング研究を、唐さんには、過去 10 年近くの青海・チベットの草原で行われた一連の温暖化関連の観測および実験研究を紹介していただく。これらの話題を中心に高山帯での環境変動とその影響評価の実態と今後の方向性を模索していきたい。

コメンテータ：工藤　岳（北海道大学・地球環境科学）

ケニア山氷河後退域における温暖化等の近年の環境変動と植生遷移
水野 一晴（京都大・アジア・アフリカ地域研究研究科）

日本高山帯における航空写真と定点撮影による多点同時観測
小熊 宏之（国立環境研究所・地球環境研究センター）

青海・チベット草原生態系の炭素収支及び温暖化影響に関する研究（総説）
唐 艶鴻（国立環境研究所・生物圏環境研究領域）

自由集会　　　　　3 月 8 日 17:00-19:00　　　　　会場　D

W04　山里海のコモンズ再生に向けての生物分類スキルのあり方とは？ －在地・在野のパラタクソノミスト大集合－

企画責任者：嶺田拓也（農研機構・農工研），日鷹一雅（愛媛大・農）

昨今，身近な山里海で各種の「生きもの調査」など市民参加型の生物相調査やモニタリングが増えている。これらの活動が，担い手不足が顕在化している「山里海」で新たなコモンズとして期待される側面は大きい。しかし，市民が「身近な環境」調査の一環として期待する分類精度と分類学者が求める精度にはかなり隔たりがある。山里海を研究対象としている生態学徒にもそれなりの生物分類能力が求められるが，研究者が生物分類スキルを向上させることよりも，現場の農山漁村でこのスキルを支援するのは容易ではない。COP10 で決議された SATOYAMA イニシャティブを実現する上でも，「山里海」で必要な「分類スキル」は，各人の得手不得手にあわせた磨き方が求められるのではないだろうか。また，「分類スキル」習得の前提として，身近にいる生きものの存在を五感で感じ，気づき，彼らの生活や私たちとの関係性について考えをめぐらすことも必要かも知れない。

そこで，農山漁村の生態系，生物多様性の保全や再生の担い手に対し，各地でボトムアップ型の生物分類スキルを伝えるべく試行錯誤している多様なパラタクソノミスト（Parataxonomist）が集まり，それぞれの試行を紹介しあいながら，新たなコモンズの再生に向けての生物分類スキルのあり方やそれに対する支援事業の方向性を探る。

話題提供者は以下に加え，中井克樹（琵琶湖博物館），浜本麦（重富干潟小さな博物館），稲垣栄洋（静岡県農林技術研究所），GTI 推進部門からなどの報告，コメントを予定している。

大原昌宏（北大・総合博物館）：北大におけるパラタクソノミスト養成講座の成果と課題
赤石大輔（能登半島里山里海自然学校）：里山再生とキノコの食育パラタク

自由集会　　　　　3 月 8 日 17:00-19:00　　　　　会場　E

W05　北海道の自然史研究の現場はどうなっているか？北海道自然史研究会の取り組みと生態学

企画責任者：持田誠（北海道自然史研究会），渡辺修（北海道自然史研究会）

北海道は本州とは異なる生物地理区に属し、特徴的な生物相や自然景観を呈する、興味深い自然史研究のフィールドとして、古くから多くの研究者の研究対象とされてきた。一方、こうした自然史研究により収集された標本の集積拠点

として、また生態学研究の拠点として、道内の博物館は永年、研究活動を支援し続けてきた。
北海道自然史研究会は、こうした自然史博物館の活動を支えてきた学芸員を中心に、北海道内の自然史に関するネットワークづくりのため、1993 年に立ち上げられた。現在、学芸員だけでなく、大学関係者、環境調査事業者、一般市民など、広く北海道の自然に関心のある者が集い、講演会や情報ネットワーク、普及事業などを実施している。北海道自然史研究会は、個々の地域博物館では現実的に困難な事業を支援するため、1）道内博物館紀要の電子化・データベース化による、地域自然史研究の情報発信／2）教材用冊子（パンフ）やペーパークラフトなどの作成による、自然史研究の普及／3）研究誌の創刊や講演会による、市民研究者などの発表の場の確保と地域への研究成果の還元と蓄積、に取り組んでいる。今回の自由集会では、北海道の自然史研究の「現場」の実状を振り返り、北海道自然史研究会が目指す新たなネットワーク事業を提言して広く参画を呼び掛けるとともに、地域自然史研究と生態学との関わりについて考える。また、北海道の「外」から見た、北海道の自然史研究の姿について、率直な批判や提言を集めることを目的に企画したものである。多くの自然史研究者が集い、活発な意見交換が進むことを期待したい。

自由集会　　　　　3 月 8 日 17:00-19:00　　　　　会場　F

W06　森林施業の生態学：チェーンソーからモデリングまで

企画責任者：島谷健一郎（統数研）

林業斜陽の時代とは裏腹に、森林生態の研究は盛んに進められ、森林再生や里山管理に従事したいと思う若手も多い。しかし、大学院で学んでいて、なにかしら消化不良な感を抱いていませんか。
チェーンソーによる伐倒は見学と「体験」だけだった。根気よくデータを取ったが、ソフトが返した数値を盲目的に論文に記して終わった。社会への提言をしたくても、多様な需要に応える最適な案を探す術を知らなかった。等々。
現状への不満は萌芽的研究の源です。本集会では、若手会員を対象に、生態学会では聞く機会がないに等しく、かつ林学系教室から絶滅の危機にある山造りと森林経理学について、その入門的お話し並びに学習の場の紹介や提供を行ないます。

土地利用など、応用生態学では最適化を要する問題は多い。そこでは、森林経理学で培われたアルゴリズムが有効である。かつて世界を牽引していた日本の森林経理学だが、現在は絶滅の危機にある。でもまだその灯は消えておらず、本演者ら周辺でしぶとく世界の第一線を担っている。
人工林の現状と将来に警鐘は鳴らされ続けているが、山を造る実践力に乏しい。そんな中、零細民有林に対応できる簡易な密度管理、その実践のための森林塾の開講など、大学にいてもできる事、大学にいないとできない事、山造りについて島崎氏の実践から学ぶものは多い。

コメンテーター：内田健一（森づくり実践者、森と木の技術と文化研究所）、久保田康裕（琉球大）、長池卓男（山梨県森林総研）

絶対に絶滅させてはならない林学がそこにはある
島谷健一郎（統数研）

絶滅させたくない森林経理学
＊吉本敦（統数研）・＊木島真志（琉球大）

山造り承ります
島崎洋路（元信州大教授，元 KOA 森林塾顧問）

自由集会　　　　　3 月 8 日 17:00-19:00　　　　　会場　G

W07　化学物質の生態影響パート 5　遺伝子から群集まで

企画責任者：加茂将史（産総研・安全科学），岩崎雄一（東工大・理工）

化学物質は人類に利益をもたらす一方、生態系に負荷を与える。人と生態系が調和的に共存するには、負荷の程度を把握し、許容レベルを適切に設定することが必要となる。生態リスク評価は、負荷の程度を把握するツールとして発展してきた。
生命現象は遺伝子から個体，個体群，群集など複数の階層からとらえることが可能である。化学物質の生態影響についても生態系の各階層における影響を調べる手法が発達している。最も発達している手法として、個体の生存や繁殖への影響に注目した個体レベルの評価手法があげられる。さらに、分子生物学の興隆にともない、遺伝子レベルでの影響を調べることも可能となってきた。これら生物学的にはミクロな階層での評価手法は、試験が比較的容易であるため、迅速かつ再現性の高い結果を出すことが可能である。一方で、我々が本来守りたいと思う環境は、個体群の存続や生物多様性など、マクロな階層である。このようなニーズに応えるため、汚染地域の生物相調査などを行う場合もある。い

ずれの手法も化学物質の影響を知る上では重要であるが、各階層での影響が独立に調査されているため、階層間の影響が互いにどのように関連しているかは明らかではない。本集会では、各階層での影響評価の事例に触れ、階層間のギャップを埋めるために必要な情報は何かを議論したい。

イントロー全体を見るー
岩崎雄一（東工大・理工）

遺伝子を見る
中森泰三（横国大）

群集を見る
坂本正樹（富山県立大）

遺伝子から野外集団を見る
立田晴記（琉球大）

毒物で集団を見る
柏田祥策（東洋大・生命）

階層破壊革命してみる
加茂将史（産総研）

自由集会　　3 月 8 日 17:00-19:00　　会場　I

W08　湿地をめぐる生態学と人文・社会科学の接点を探る

企画責任者：牛山克巳，矢部和夫，辻井達一

湿地は、生産性や多様性に富む水陸境界域として、多くの生態学的研究の対象となってきた。一方、湿地は生活・文化・経済・レクリエーション等の場として人文・社会科学的な研究対象にもなってきたが、それらは統合的に捉えられることがなかった。学際的かつ包括的なアプローチは、湿地の損失や劣化に対する保全再生やワイズユースを進めるためだけでなく、社会活動と自然プロセスの相互作用によってもたらされる系の理解のためにも重要と考えられる。

本集会では、様々な分野から湿地に関わっている研究者を招き、湿地をめぐる生態学と人文・社会科学の接点を探り、湿地研究における学際的展開について議論を深めたい。

総合討論
コーディネータ　辻井達一（北海道環境財団）

湿地の保全再生と市民参加
矢部和夫（札幌市立大学）

ラムサール条約とワイズユース～湿地をめぐる国際的な取組
小林聡史（釧路公立大学）

湿地をめぐる環境教育・ESD
生方秀紀（北海道教育大学）

湿地をめぐる環境社会学的視点
宮内泰介（北海道大学）

湿地におけるエコツーリズムと地域経営
敷田麻実（北海道大学）

自由集会　　3 月 8 日 17:00-19:00　　会場　J

W09　COP10 で何が話し合われたのか、我々は何をなすべきか？

企画責任者：五箇公一（国立環境研），長野義春（越前市エコビレッジ交流センター），草刈秀紀（WWF ジャパン）

2010 年 10 月に名古屋で生物多様性条約に係る国際会議 COP10 が開催されたことは、本学会員の皆様もご存知のことと思う。しかし、この会議で、いったい何が話し合われ、何が決まったのか、将又、COP10 自体がいったいどんな会議で、どんな人たちが出席していたのか、その実態については、ほとんど知らない人も少なくないと思われる。そこで、本集会では、実際にこれまで生物多様性条約に関わってきたり、COP に参加してきた経験のある有識者や政府担当者、生態学者の立場から、COP10 の実態と、その場で議決された愛知ターゲット（新戦略計画）や名古屋議定書を巡る問題、周

辺で開催されたサイドイベントの模様など、経験談を交えて解説し、これから生態学者たちが、何をなすべきなのか議論したいと考える。当日は、聴衆の中からもCOP10に実際に参加した方がいれば、飛び込みで発表なり意見表明なりして頂いて、様々な角度からのCOP10検証が出来ればと思います。

生物研究者の立場から垣間みたCOP10
五箇公一（国立環境研）

NGOの立場から見たCOP10
草刈秀紀（WWFジャパン）

地方自治体・ローカルコミュニティーの立場から見たCOP10
長野義春（越前市エコビレッジ交流センター）

ホスト国政府の若手職員の立場から見たCOP10
岸田宗範（環境省／元外務省COP10日本準備事務局）

自由集会　　3月9日 18:00-20:00　　会場　A

W10　多様な社会寄生の進化ー寄生者はホストをどうやって欺いてきたか？ー

企画責任者：大河原恭祐（金沢大・自然システム・生物），上田恵介（立教大・理・動物）

社会寄生（労働寄生）は動物の最も特異な生活史戦略である。寄生種はホスト（宿主）となる同種あるいは他種の労働力を一方的に搾取、利用して繁殖を行なう。自身で繁殖活動を行なう特徴は退化、欠失している場合が多く、代わりに寄生生活に特殊化した様々な特徴が発達している。社会寄生は節足動物類から脊椎動物類まで広い分類群に渡ってみられる現象であるが、その進化の問題の１つとして、ホスト側に発達しやすい寄生への抵抗的性質に寄生者がどのように適応するかという点が挙げられる。寄生者側にはホストを欺き、より効率的に操作しようとする性質が、ホスト側にはそれを見破り対抗する性質がそれぞれ発達しやすいと考えられる。この“騙し合い“に近い軍拡競争のうえで、なぜ社会寄生は維持、進化できたのだろうか？　本集会では代表的な社会寄生行動である鳥類の托卵行動に関する研究例に加え、アリ類の永続的社会寄生に関する研究例を紹介する。寄生種のホストに対する欺瞞的な操作やホストの対抗戦略について生物群間で比較し、根本的な社会寄生の進化機構について議論を持つことを目的としている。

騙しを見破るテクニック：卵の基準，雛の基準—托卵鳥・宿主の軍拡競争の果てに—
田中啓太（理化学研・脳化学研）

カッコウ研究の限界：温帯ドグマからの脱却
上田恵介（立教大・理・動物）

ヤドリウメマツアリ女王の化学寄生と繁殖行動：ホストの化学防衛線を突破せよ
＊岡本美里，一言真人（金沢大・自然科学・生物）

ヤドリ vs ウメマツアリ：社会寄生アリに対するホストの抵抗的性質について
大河原恭祐（金沢大・自然システム・生物）

自由集会　　3月9日 18:00-20:00　　会場　B

W11　行政施策として実現可能な生物多様性の保全計画

企画責任者：白川勝信（北広島町立 高原の自然館），三橋弘宗（兵庫県立 人と自然の博物館）

名古屋でのCOP10開催など，生物多様性の保全に関する国家的・国際的取組が進められる中，地方自治体でも地域戦略の整備が進められています．多様な環境と土地の制約を持つ日本において生物多様性の保全を実現する上で，自治体における取組は，個々の問題に対して直接働きかけるという点で重要な意味を持ちます．言い換えれば，自治体の支援がなければ，国内の生物多様性の保全は実現できないのです．生態学が蓄積してきた様々な知識や技術を社会に還元するには，どのような枠組みが必要になるのでしょうか．近年の保全生物学の分野においても，机上の空論でなく，ホリスティックアプローチやグランドワークへの展開が志向されています．この自由集会では，目標や行動計画の設定といった戦略立案段階から，ゴールや課題の設定，自然再生事業の実施や資源活用など戦略に基づいて施策を展開する段階まで，一連のプロセスを全体フレームワークとして捉え，各地の事例をもとに，生態学が持っている知識を現実の社会に反映させるための関わり方について考えます．

施策展開を見越した生物多様性地域戦略の策定プロセス
白川勝信（北広島町立 高原の自然館）

生物多様性保全と地域振興～阿蘇草原再生を事例として～

岡野隆宏（鹿児島大学）

河川生態系における生態系管理と数値目標
三橋弘宗（兵庫県立 人と自然の博物館）

自由集会　　　　3 月 9 日 18:00-20:00　　　　会場　C

W12　希少植物研究の魅力－希少植物が語る複雑な事情－

企画責任者：横川昌史（京大院・農），指村奈穂子（埼玉自然博）

希少植物は特殊な生態・形態などを持つものが多く、保全生態学や進化生態学の分野で良い材料となることが多い。そして何より、野外で出会ったときの喜びは非常に魅力的である。希少植物が希少と呼ばれるようになった背景は様々であり、その生態・生理・系統・歴史性などを明らかにすることで希少植物のもつ興味深い物語が見えてくる。希少植物を研究する上で、対象とするスケールを変えると希少性の位置づけも変わってくる可能性があるため、希少植物の複雑な事情を明らかにするためには様々なスケールでのアプローチが必要である。本集会では取り扱っているスケールが異なる研究者をお招きし、話題提供をしていただく。プロットスケールから景観スケールまで、個体レベルから系統地理まで、種レベルから群集レベルまで・・・様々な希少植物の特性を時空間スケールごとに編み上げることで、希少植物の魅力を描き出す。その上で、希少植物研究の現状を整理し、今後の展望や保全の方向性について議論するとともに、希少種研究者のネットワークを広げたい。

絶滅危惧植物カッコソウの保全遺伝生態学：9 年間に渡るモニタリングから見えてきたこと
＊大谷雅人（森林総研林育セ），西廣淳（東大院・農），寺内浩（桐生自然観察の森），寺内優美（桐生自然観察の森），鷲谷いづみ（東大院・農）

里地地域間の土地利用履歴の違いが草地生植物種の多様性に及ぼす影響
＊河野円樹（自然研），河野耕三（綾町企画財政課），大澤雅彦（自然保護協会）

氷期の生き残り希少トウヒ属 - 崩れと氾濫が作る森林群落 -
明石浩二（飯田市美術博物館），逢沢峰昭（宇大農），勝木俊雄（森林総研）

湿地性希少植物を対象とした遺伝的多様性のホットスポット解析
＊佐伯いく代（横浜国大・環境情報），小池文人（横浜国大・環境情報），村上哲明（首都大・牧野）

自由集会　　　　3 月 9 日 18:00-20:00　　　　会場　D

W13　季節的な環境における生物のレスポンス

企画責任者：別所和博，深谷肇一，川尻舞子

一年の中の季節変化は、生物が経験する環境要因の中でも、一般性の高いもので、かつ生息地域の緯度勾配などによる地域差が観察されやすい。

本集会では、「季節的な環境に対する生物のレスポンスとその地理的変異」を副題として、季節的な環境における生物のレスポンス研究の中でも、その地理的変異に着目して、適応と個体群動態のそれぞれの側面から研究を行っている方々から、知見を提供していただき、その生物学的意義を考えてみたい。

具体的には、九州大学の別所が季節的な環境における最適な休眠生活史についてを、北海道大学の深谷氏に岩礁潮間帯に生息するフジツボ類の季節的な個体群動態とその地域変異を、新潟大学の川尻氏にはアレンの法則（高緯度の動物ほど体の突出部が短くなる現象）の至近要因と究極要因を考える上で’個体発生’の概念が如何に重要かをメダカの鰭を例にお話して頂く予定となっている。

また、集会の最後に、コメンテーターをお呼びして、コメントをお願いすることを予定している。

季節的な環境における一年生生物の最適な休眠生活史について
別所和博（九州大学）

日本太平洋沿岸のイワフジツボ属における個体群動態の季節性の地域間比較
深谷肇一（北海道大学）

メダカにおけるアレンの法則とその進化発生学的検討
川尻舞子（新潟大学）

自由集会　　　　　3 月 9 日 18:00-20:00　　　　　会場　E

W14　データ解析で出会う統計的問題 ― 選択や勝負の統計モデル

企画責任者：粕谷英一（九州大・理），久保拓弥（北海道大・環境）

動物の闘争や植物の花粉間競争など，「何かが選ばれている」かのように見える現象のデータ解析について検討する．生態学では，「勝負」の統計モデルによるデータ解析の歴史があり，たとえば動物個体間のあらそいを解析するために，昔から Bradley-Terry（BT）モデルが利用されてきた．しかしながら，このモデルをデータにあてはめる方法があまり知られていないので，それほど普及していない．また，植物の生態学で利用されている，花粉親としての成功要因の特定する Burczyk モデルは BT モデルの拡張とみなせる，といったつながりもある．あるいは，「以前の敗北をひきずっている」といった個体の内部状態を反映した勝敗・選択のモデルなども使われるようになってきた．

この自由集会では，このような勝敗・選択のデータ解析に利用できるモデルを紹介し，R の package やベイズモデルの手法を使って，データからパラメーターを推定する方法を紹介する．参加者の皆さんとこれらの統計モデルの考えかたや使いかたについて議論したい．

・自由集会の web page: http://goo.gl/eDZLE

「選ぶ、対戦する」データの解析ー Bradley-Terry モデルとその親戚たち
粕谷英一（九州大・理）

鳥と虫におけるけんかの解析：2 個体による闘争の勝敗
森本元（立教大・理 / 東邦大・理・東京湾生態セ）・山口典之（長崎大・環境科学）

選択・勝敗の階層ベイズモデル
久保拓弥（北海道大・環境）

自由集会　　　　　3 月 9 日 18:00-20:00　　　　　会場　F

W15　エゾシカの自然植生に及ぼす影響把握と保護管理施策への取り組み

企画責任者：冨士田裕子（北大・FSC・植物園），宇野 裕之（北海道立総合研究機構・環境科学研究センター）

近年、ニホンジカ（北海道はエゾシカ）の個体数の爆発的な増加により、農林業被害に加え自然植生の退行、天然林の更新阻害、自然公園の景観悪化等が深刻化している。北海道は「エゾシカ保護管理計画」を策定し、個体数管理等の対策をとっているが増加に歯止めはかかっていない。実態が不明な天然林、湿原や高山植生など自然植生への影響を明らかにし、個体数管理さらには生態系管理にむけて、関係行政機関も含めた合意形成と施策の具体化が喫緊の課題となっている。

本自由集会では、「研究成果をどのように管理に反映させるか」との視点で、北海道における森林及び湿原植生への影響把握の取り組みを研究者、行政の立場から事例報告した上で、情報共有を図る機会とする。

趣旨説明

＜森林における取り組み＞

1）植生指標を用いた国有林でのエゾシカ影響評価　明石 信廣（北海道立総合研究機構・林業試験場）

2）簡便法による広域評価と施策への活用　荻原 裕（北海道森林管理局）

＜湿原における取り組み＞

3）湿原での影響評価手法の開発　冨士田裕子（北海道大学・FSC・植物園）・高田 雅之（北海道立総合研究機構・環境科学研究センター）

4）釧路湿原における生態系維持回復事業導入の可能性　則久 雅司（環境省釧路自然環境事務所）

5）まとめ　エゾシカ個体数管理、保護管理、生態系管理に向けての課題整理

自由集会　　　　　3 月 9 日 18:00-20:00　　　　　会場　G

W16　淡水二枚貝に関わる保全生態学的研究の最前線

企画責任者：秋山吉寛（名大・環境），近藤高貴（大教大・教育），根岸淳二郎（北大・地球環境）

淡水二枚貝は物質循環や生物間相互作用を通じて陸水生態系を中心に影響を及ぼしており，淡水二枚貝に依存して暮らす生物は数多く存在する。一部の淡水二枚貝では，生物群集全体を保全する観点から，重要な種として位置づけられつつある。しかし，淡水二枚貝の主な分布域は人口の集中する平野部や扇状地の水辺であり，人間活動に起因する環境改変の影響を受けやすい。また，生活史が特異であることも相まって，絶滅の危機に瀕している種は国内外を問わず数多い。カワヒバリガイなどの外来淡水二枚貝は，人為的な移入によって近年分布を拡大してきている。こうした淡水二枚貝の減少や移入は，本来の生物群集組成や物質循環に変化をもたらすだろう。

こうした状況の中，地域の生態系の健全性を保つために、淡水二枚貝の研究が各地で精力的に行なわれている。本集会では，淡水二枚貝のグループの中で最も絶滅の危機にあるイシガイ類と，生態系のみならず，人の暮らしにも影響を及ぼすカワヒバリガイを対象とした，さまざまな保全生態学的アプローチの最新研究を紹介する。そして，今後研究を進めてゆく上で解決すべき問題点や，将来の展望について議論する。

趣旨説明
＊秋山吉寛（名大・環境）

物質循環からみた氾濫原水域の成り立ち：二枚貝と安定同位体比によるアプローチ
＊根岸淳二郎（北大・地球環境，（独）自然共生研究センター），香月弘太郎（北大・環境），永山滋也，久米学，佐川志朗，萱場祐一（（独）自然共生研究センター）

カワシンジュガイ類の生態と保全について
＊粟倉輝彦（（株）北開水工コンサルタント）

外来種が在来イシガイ類に及ぼす脅威
＊近藤高貴（大教大・教育）

特定外来生物カワヒバリガイの分布拡大と在来生態系への影響
＊中野大助，小林卓也，坂口勇（（財）電力中央研究所）

自由集会　　　　3月9日 18:00-20:00　　　　会場　H

W17　世界遺産時代の小笠原　生態学系研究者の社会的責任　part3

企画責任者：可知直毅（首都大院・理工），鈴木 創（小笠原自然文化研）

2010年7月、ユネスコ視察団の査察をへて、小笠原諸島は世界自然遺産登録へ最終段階に入った。小笠原は世界に誇る自然を持ちながら、同時に多くの外来種問題をかかえ、世界遺産登録への最大の課題ともなっている。これまで多くの外来種対策や重要地域の保存等の担保措置が進んできた。今や、生態系コア地域に立ち入りを許されるのは、許可を得た研究者や外来種対策の事業者のみとなった。

世界自然遺産登録のための保全施策において、地域でとるべき方向性を助言してきたのは、他ならぬ研究者であった。自らの助言に対して、研究者自身もその責任を問われることになるという状況を、2009年盛岡自由集会（研究者の社会的責任 part1）において専門的助言の「ブーメラン」現象と呼び､研究者自らの社会的責任について問題提起した。さらに、2010年東京自由集会では、保全事業が急激に進む中でおこった予想外の課題について議論した。

予想外の課題に対処するには､そうした事態も想定した包括的なモニタリングによって､リアルタイムに現状を把握し、その結果を迅速にしかも適切に保全の現場にフィードバックすることが不可欠である。この自由集会では、研究者自身の外来種拡散防止を目的とする､MLを使った｢アップデート型のリスクカルテ･プラットフォーム」の取り組みを紹介し、人類共通の財産となる世界遺産コア地域に入り続ける研究者に求められる社会的責任の「見える化」について議論する。小笠原にかぎらず、野外研究活動が自然の価値を損なう可能性について関心をもつ研究者・関係者の参加を期待する。

自由集会　　　　3月9日 18:00-20:00　　　　会場　I

W18　イノシシ被害に強い農村空間づくりを考える：自然科学と社会科学の融合的アプローチ

企画責任者：大橋春香，齊藤正恵，堀江玲子，梶 光一

里地里山は農林業を中心とした人間の生産活動の影響により高い生物多様性が維持されてきた地域である。しかし、急激な社会経済的な変化の影響を受け、経営耕地面積は縮小傾向にある。近年では野生動物による農林業被害が増加し、耕作放棄地増加の原因の一つとなっている。耕作放棄地の増加は、野生動物の生息地を増やし、鳥獣害を拡大させるという負のスパイラルを引き起こしている。

この自由集会では、栃木県佐野市におけるイノシシによる農業被害問題に注目し、生態学と社会科学との融合的アプローチによる研究を紹介し､｢イノシシ被害に強い農村空間づくり」に向けた現状と課題の整理を行うことを目的とする。鳥獣害問題を解決するには、「鳥獣害対策」にとどまらず地域資源の活用や農村の活性化といった問題を考える必要があり、多くの分野の方と議論を行っていく必要がある。野生動物管理の専門家に限らず、様々な立場の方たちと意見が交わせるような自由集会にしたい。

野生動物管理システムの構築に向けた課題
梶 光一（東京農工大学・農）

イノシシ捕獲データと農林業センサスからみた栃木県の現状
堀江玲子（宇都宮大学・農）

痕跡調査と行動追跡調査からみたイノシシの生息地利用
齊藤正恵（東京農工大学・フロンティア農）

航空写真からみた栃木県佐野市周辺の景観構造の変遷と社会経済的環境との関係
大橋春香（東京農工大学・フロンティア農）

農家からみたイノシシ被害の実態
桑原考史（東京農工大学・フロンティア農）

鳥獣害対策からみた農村空間の管理における村落と行政の取り組み
弘重 穣（東京農工大学・フロンティア農）

自由集会　　　　3月9日 18:00-20:00　　　　会場　J

W19　植物の環境応答　ー 同位体分析が解き明かす生理生態的プロセス

企画責任者：野田響（筑波大・生命環境），宮沢良行（九大東ア環研），宮崎祐子（北大・地球環境），鍋嶋絵里（東京農工大学）

植物の環境応答に関する生理生態学的な研究は，広範な空間的スケール（細胞から生態系まで）と時間的スケール（秒から年まで）を網羅しながら，様々な生態学的現象の解明や気候変動影響予測など，多岐にわたるテーマへのアプローチを可能にしてきた。中でも，近年の炭素・窒素・酸素の同位体分析手法の導入は，物質の由来の特定などにより，過去にさかのぼったプロセス解明も含む，より広範な時間・空間スケールで，より詳細な生理生態的プロセスの解明を可能にしている。現在では，同位体分析と従来の生理生態学的手法とを組み合わせた研究により，植物の環境応答のダイナミックなメカニズムの理解が飛躍的に進歩しつつある。本集会では，同位体分析をツールとした植物の環境応答研究において精力的な研究を展開している研究者3名による，（1）炭素安定同位体法による葉内の CO_2 拡散の物理的抵抗の推定，（2）樹木の年輪炭素同位体分析による古環境の復元，（3）安定同位体比による乾燥地に生育する樹木個体の水利用戦略の解明のそれぞれのテーマについての最新の研究手法および成果の紹介を中心とした講演を予定している。これらの講演を通して，同位体をツールとした研究が持つ可能性について理解を深め，今後の展望について議論を行う。

コメンテーター：半場祐子（京都工芸繊維大学）

炭素安定同位体法を用いた，葉内 CO_2 拡散モデルの解析
田副雄士（京都大学大学院 生命科学研究科）

樹木年輪炭素同位体比を用いた東シベリアタイガ林の過去の土壌水分量復元
鄭 峻介（北海道大学大学院環境科学学院）

安定同位体比から見る乾燥地植物の水利用：蒸散抑制，吸水における不定根の役割，夜露の利用，葉からの吸水の解明に挑む
＊松尾奈緒子（三重大生物資源），大橋達矢（三重大生物資源），楊霊麗（岡山大環境），吉川賢（岡山大環境），張国盛（内蒙古農業大），王林和（内蒙古農業大）

自由集会　　　　3月11日 18:00-20:00　　　　会場　A

W20　化学物質で植物と微生物の相互作用を探る －野外生態研究における事例

企画責任者：山路 恵子（筑波大院・生命環境），市原 優（森林総研・東北）

1960年代前半から1970年代にかけて、化学生態学という学究分野が盛んになってから久しい。その間、植物と動物、植物と植物、植物と微生物の相互作用に関する研究の進展はめざましく、化学分析技術の発展とともに様々な相互作用が解明されつつある。しかし、野外生態系において、植物と微生物の相互作用を化学的に解明した事例は決して多いとは言えない。化学的相互作用の解明は、相互作用に影響を与えるような化学物質を分離し明らかにすること（単離･同定）で初めて可能となるが、単離・同定には技術を必要とするため困難であることが多い。そこで、本集会では、野外生態系において植物と微生物の相互作用を化学的に解明した事例を報告することで、1）化学的相互作用の研究では何がどこまで明らかになるのか、2）研究の推進、化学物質の評価及び分析はどのように行うのか、について参加者の方々に理解して頂き、その上で本分野における課題などを自由に議論したいと考える。提案者は、植物と微生物の化学的相互作用の解明を希望する若手研究者らにとって、本集会が有益な情報交換の場になると確信する。

植物と微生物の化学的相互作用の調査方法と問題点
　山路 恵子（筑波大院・生命環境）

ドクゼリの亜鉛吸収に関与する根圏細菌－根圏細菌の産生する亜鉛可溶化物質
　長田 賢志（筑波大院・生命環境）

茨城県波崎海岸に自生するコウボウムギと内生細菌の相互作用の解明－植物由来の誘因物質の探索
　松岡 宏明（筑波大院・生命環境）

ブナ林の異なる光環境下におけるブナ当年生実生の立ち枯れによる消失過程－病原菌に対する抗菌物質の同定とその変動
　市原 優（森林総研・東北）

自由集会　3月11日 18:00-20:00　会場　B

W21 「アウェイ」で教える生態学

企画責任者：畑田 彩（京都外国語大学），中田 兼介（東京経済大学）

大学の授業科目としての「生態学」は、理学部や農学部だけに置かれているのではありません。文系学部・工学部などの一般教養科目や、教育学部における理科教育の枠の中で生態学教育に携わっている人も数多くおり、生態学と社会の繋がりを深めていく上で、その重要性はますます大きくなっています。

しかし専門の外で生態学を教えるには、多くの問題があります。学生たちは、これまで生態学をほとんど学んでいないこと、専門科目とのつながりが見えにくいためモチベーションがあがらないこと、実習設備がなく大人数対象の座学が中心になってしまうこと。。。。これらの問題に悩んでいる方は多いでしょう。

本自由集会では、教育学部・法学部で生態学を教えている二人の演者に、それぞれどのような教育を展開しているかをまずお話いただきます。パネルディスカッションでは、教育上の問題点や解決策などを取り上げ、会場のみなさんからも意見を募ります。なお、本自由集会は企画集会「博物館の生態学」のスピンオフ企画です。

趣旨説明
　中田兼介（東京経済大）

保育職・小学校教員養成課程における河川調査実習の実践－教材開発力を育む 実習内容の検討
　野崎健太郎（椙山女学園大・教育）

私立文系学生を対象とした生態学教育～暮らしにつなげる試みと苦労
　谷垣岳人（龍谷大・法）

パネルディスカッション「アウェイで教える生態学とは」
コーディネーター:畑田 彩（京都外大）パネラー:野崎健太郎，谷垣岳人，平山大輔（三重大･教育），鈴木まほろ（岩手県立博），神松幸弘（地球研）

自由集会　3月11日 18:00-20:00　会場　C

W22　フェノロジー研究会「ツル植物の生長特性を考える」

企画責任者：大野啓一（千葉県立中央博物館）

ツル植物は、自重支持のコストを節約できる分、葉や茎の生長により多くを投資できるという有利な側面をもつ。その一方、支持ホストを必要とするため、その探索に余分なコストを必要とする生長様式でもある。種数・アバンダンス共に熱帯域に多いといわれるが、日本でも多くの分類群が森林や林縁の主要構成種となっており、木本性のものに限ると巻き付き型と付着根型の二つの登攀型が大部分を占めている。ツルであることでシュートの伸長パターンやその機能分化などに分類群を越えた共通性が認められる一方、登攀型や種ごとの違いもあると考えられる。近年、亜熱帯から冷温帯にかけての多くの木本性ツル植物について、種ごとの生長特性やミクロな環境分布について定量的なデータが蓄積されている。本集会では、とくに巻き付き型と付着根型の対比を意識しながら、ツル植物の生長特性についての最新の研究成果を御紹介いただくとともに、それらとそれぞれの種・登攀型の分布態様との関係についても考えてみたい。

自立樹木と比較した木本性つる植物の成長特性
　市橋隆自（九州大・理・生物）

付着根型つる植物の負の光屈性と林床における生育適地
　加藤正吾（岐阜大・応用生物科学）

巻き付き型ツル植物の生長特性と宿主植生構造の関係
西尾孝佳（宇都宮大・雑草科学研究センター）

ツル植物の種特性から分布パターンを考える－環境傾度との関係－
楠本聞太郎（九州大・院・生物資源）

自由集会　　　　3 月 11 日 18:00-20:00　　　　会場　D
W23　里山的利用は森林の生態系サービスと機能の持続性に貢献するか？－供給・文化的サービスの視点から
企画責任者：杉村乾（森林総研），松浦俊也（森林総研）

伝統的な里山利用は森林生態系の供給及び文化的サービスの両面を担い、生態系機能の持続性を保ちつつ維持されていたと考えられるが、近年は利用されなくなったことによる生物多様性や生態系機能の低下が指摘されている。このような状況を生態学的に解析し、適切な管理を模索していくためには、供給・文化的サービスのポテンシャルとしての生態系や生物多様性の持続性、生態系サービスの定量評価という、生態学と社会科学の両面からアプローチしていく必要がある。また、日本の森林は自然条件や社会的背景が地域によって大きく異なることから、それらの特徴も考慮した解析を行わなければならない。さらに、現在でも里山的な利用がさかんな海外の事例からも有用な示唆が得られるであろう。本集会ではいくつかの地域事例を紹介しつつ、以下の点を考察していきたい。(1) どのような自然条件がサービスの高いポテンシャルを維持するための必要条件として機能しているか、(2) 里山管理はサービスのポテンシャルを高めるような働きかけをしているか、(3) 人工林化や管理低下などの人的影響は生態系のポテンシャルに影響を与えてきたか、(4) 生態系が人為あるいは草食者のインパクトに対して自律的な制御系を持っていない場合、どのようなコントロールが可能か。

コメンテータ：市川昌広（高知大学）里山管理及び生態系サービスにおける過疎高齢化の問題

東北地方の多雪地域における山菜・キノコ採りの生態系サービス評価
松浦俊也（森林総研）

里山的利用によって多様性を維持する：管理及び放棄された林の植生比較
伊東宏樹（森林総研）

シカ肉の利用と生態系管理
井田宏之・伊佐田宏正（エゾシカ協会）

粗放な樹木栽培型農業が生みだす人と生きものの相互関係―インドネシア東部セラム島の事例
笹岡正俊（国際林業研究センター）

自由集会　　　　3 月 11 日 18:00-20:00　　　　会場　E
W24　Ecoinformatics: 情報科学でやる生態学
企画責任者：大場真（国環研），小川安紀子（国環研），真板英一（国環研），大澤剛士（農環研）

情報科学の発展は，様々な面で生態学の発展に貢献している。生態学への貢献という観点からすると，情報科学の発展は 1）対象データの巨大化，2）解析手法の高度化に大別できる。しかし，近年の生態学分野における情報科学の発展は, 2）の方向に偏っていないだろうか？本集会では Ecoinformatics という分野の紹介を通じ, 1）対象データの巨大化, 2）解析手法の高度化を複合させることによって，初めて新たな研究が可能となることを示す。
ケーススタディでは，これまで膨大に蓄積されてきたにも関わらず，あまり積極的に生態学研究で利用されてこなかった資料―個人が収集した標本類や，行政機関などが整備した地図や統計資料等の自然史資料―をデータベース化し，解析を行った研究例を紹介する。
総合討論では，情報科学を取り入れた生態学研究の紹介を通し，全国で行われているモニタリングデータの公開や共有化，様々な活用に向けた展望を議論したい。

◇エコインフォマティクスのアウトルック
・生物環境情報学の概観　真板英一（国環研）
・生態系観測のエコインフォマティクス　小川安紀子（国環研）

◇ケーススタディ
・生物多様性情報学　大澤剛士（農環研）

「生物多様性情報の整備と活用-標本情報を例に-」
・生態系情報学　大場真（国環研）
「河川流域圏レベルにおける行政資料・地図を活用した森林生態系サービスのモデリング・評価」

◇総合討論
コメンテーター・三橋弘宗（兵庫県立人と自然の博物館）

自由集会　　3 月 11 日 18:00-20:00　　会場　F
W25　泥炭湿原の炭素動態の解明　－サロベツ湿原を例として－
企画責任者：平野高司（北大・農）

湿原は，希少生物の生育場所として生物多様性の観点から重要視されることが多かったが，泥炭として莫大な量の土壌有機物を貯蔵していることから，最近では地球温暖化の文脈から注目されるようになった。開発行為にともなう水文環境の悪化や温暖化は，泥炭中の土壌有機物の分解を加速するため，近い将来，湿原が大気に対する大規模な CO2 ソース（放出源）となることが懸念されている。しかし，湿原（泥炭地）の炭素動態に関する知見は不足しており，炭素フローに関するフィールド研究は発展途上である。そこで本集会では，植生変化（ササの侵入）が問題となっているサロベツ湿原（高層湿原）で研究を行っている多分野（植物生態学，水文学，空間情報学，土壌学，微気象学など）の研究者が集まり，湿原生態系の炭素動態に関する様々なアプローチによる研究成果を紹介する。

ササ群落の拡大と湿原植生の地上部バイオマス
＊藤村善安，冨士田裕子（北大・植物園）

サロベツ湿原の水文環境
井上京（北大・農）

泥炭中の炭素蓄積量の空間解析
高田雅之（北海道環境科学研究センター）

泥炭土壌における温室効果ガス放出
波多野隆介（北大・農）

人為的攪乱を受けたボッグの水文過程と炭素流出
＊山田浩之，平岡亮太郎，田中祥人，平野高司（北大・農）

サロベツ湿原の炭素収支
平野高司（北大・農）

自由集会　　3 月 11 日 18:00-20:00　　会場　G
W26　キノコる集会
企画責任者：都野展子（金沢大学自然科学研究科）

植物界、動物界、菌界の、前 2 界の相互作用系の研究の発展に比べ、菌類と動物の相互作用に関する研究は著しく立ち遅れています。
キノコは菌類の形成する花とも果実ともいえるステージにあたり、それまで栄養基質のなかで生活していた菌類が、生活空間を変えて、他の生物、機動性の高い動物とも遭遇する機会が圧倒的に高まるときであり、正にも負にも相互作用が生まれないはずはないと予想されます。この分野の研究の発展を促し、キノコる人々を増やすため、キノコに焦点を当て、キノコ、キノコ食節足動物、キノコ食哺乳動物の 3 つの領域から話題を提供していただきます。

キノコ（菌類）にとっての動物
都野展子（金沢大学自然科学研究科）

キノコの進化と共生関係の多様性
保坂健太郎（国立科学博物館 植物研究部）

Diversity in the north - Nordic fungus gnats（Diptera: Sciaroidea）in a Holarctic perspective
Jostein Kjaerandsen（Lund University, Museum of Zoology）

屋久島のサルのキノコ食
澤田晶子（京都大学 霊長類研究所）

キノコ－ショウジョウバエ－寄生性センチュウの相互関係
萬屋 宏（農研機構 野菜茶業研究所）

東南アジア熱帯林における菌食性甲虫の資源利用様式
山下 聡（京都大学 地球環境学堂）

自由集会　　3 月 11 日 18:00-20:00　　会場　H

W27　耐乾・耐塩性からみた乾燥地の侵入植物問題

企画責任者：岩永史子（鳥取大・乾燥地研），松尾奈緒子

現在、乾燥地・半乾燥地における生態系の劣化は世界各地で進行している。その要因は過放牧や地球規模の気候変動など人為的・非人為的に様々であるが、外来種による在来植生のかく乱も重要な要因のひとつである。乾燥地での外来種の利用に関して、とりわけ懸念されるのは、それらが持つ水利用特性や成長の持続性である。乾燥や高塩分条件など植物の成長にとって厳しい環境で、植物がどのような生理的・生態的特性を有するかという情報は、外来種の管理だけでなく、在来生態系の保護にも必要不可欠である。本自由集会においては、乾燥地に生育する植物の水利用特性を中心として、植物の分布、生育特性、生理的機能について話題提供を行い、外来種と在来生態系の変遷について考えたい。

コメンテータ：山本福壽（鳥取大・農）

未定
山中典和（鳥取大・乾燥地研）

スーダン東部で急激に分布拡大するマメ科外来種メスキート（Prosopis Juliflora（Swartz）DC）の現状と問題点
依田清胤（石巻専修大・理）

アメリカ西部乾燥地に生育するタマリスクの浸透調整
岩永史子

日本におけるニセアカシアの分布拡大－生活史特性に着目して－
崎尾均（新潟大・農）

自由集会　　3 月 11 日 18:00-20:00　　会場　I

W28　群落談話会「地理的にみた植生へのシカ影響」

企画責任者：若松伸彦

ニホンジカによる植生の食害は各地で深刻化しており，近年は従来被害のなかった日本海側地域や高山帯でも植物群落の構造変化が顕著になっている．被害地での個別の研究例は今や枚挙にいとまがないほどであるが，シカ影響の程度・内容や地理的広がりについて全国レベルでの統一的な把握はまだ不十分と言わざるをえない．そこで，その把握を目的として，2009 ～ 2010 年に生態学会員を含む数多くの方々に協力を求め，シカ影響の実態を全国統一的な基準で評価するアンケート調査を実施した．この自由集会では，アンケート調査の趣旨や結果の概略を紹介するとともに，結果に基づいて植生へのシカ影響の地理的な比較を行い，その地理的違いを読み解く視点などについて討論してみたい．特に以下の点に着目するつもりである．
－今後被害が広がりそうな地域はどこか
－嗜好種と不嗜好種に地理的傾向はあるのか
－樹皮剥ぎ，ササ枯れ，不嗜好種増加などの順序に決まったパターンはあるのか
－食害激化の初期の兆候として利用できる現象はないのか

《プログラム》
● 本集会の趣旨説明　　若松伸彦（東京農大 / 横浜国大）
● 植生学会シカアンケートの趣旨説明　　村上雄秀（国際生態学センター）
● 植生学会シカアンケートの結果　　吉川正人（東京農工大）
● シカ食害の地理的，植生への影響　　高槻成紀（麻布大）
● パネルディスカッション
パネラー： 高槻成紀（麻布大）・冨士田裕子（北大）・前迫ゆり（大阪産業大）・村上雄秀（国際生態学センター）・吉川正人（東京農工大）

自由集会　　　　　　3 月 11 日 18:00-20:00　　　　　　会場　J

W29　北海道産サケ野生集団の評価と流域生態系の動植物に及ぼす影響

企画責任者 : 中島美由紀（道総研さけ内水試，北大・環境），長坂晶子（道総研林業試），下田和孝（道総研さけ内水試），間野 勉（道総研環境研セ）

北海道では、雄大な自然の中で 550 万人が生活し経済活動が営まれている。その北海道に回帰するサケは、豊かな自然環境を代表し、一方、多い年では 5 千万尾が沿岸と河川で漁獲される道内で最も重要な漁業対象種である。河川に遡上し産卵した後のサケの親魚はホッチャレと呼ばれ、かってはその価値が認識されていなかった。しかし、ホッチャレが渓流の生物や陸生動物の食物になり、河畔林の養分となって流域生態系に寄与していることが、近年、河川や森林環境の分野から報告されつつある。この集会では、現在実施しているホッチャレに関する統合的研究を話題提供する。その内容は、野生魚と孵化場由来魚の集団評価、および、実証試験や同位体・微量元素分析による河川・河畔域の生物と水質・土壌環境への影響解析であり、ホッチャレの価値を様々な分野で解明するものである。集会では、サケを北海道における生物多様性の保全と水産業の振興との共生の象徴種として位置付けて討議を深めていきたい。

司会　石川　靖（道総研環境研セ）
趣旨説明　中島美由紀（道総研さけ内水試，北大・環境）
総括　杉若圭一（道総研さけ内水試）

非放流河川に遡上するサケの集団評価
安藤大成（道総研さけ内水試，東北大・農）

ホッチャレによる河川・河岸の水質への影響
安富亮平（道総研さけ内水試）

ホッチャレ中の微量元素の動態
仁科健二（道総研地質研）

ホッチャレによる河川生物への影響
下田和孝（道総研さけ内水試）

ヒグマによるサケマスの利用
間野 勉（道総研環境研セ）

キタキツネの餌資源利用の推定
中島美由紀（道総研さけ内水試，北大・環境）

ホッチャレ由来の栄養が河畔林生態系に及ぼす影響
長坂 有（道総研林業試）

参加登録者一覧

講演	懇	名前	所属
P1-079		相川 真一	森林総合研究所
S16-6		相川 高信	三菱UFJリサーチ&コンサルティング
S03-5		饗庭 正寛	北大・苫小牧研究林
T02-1	○	相場 慎一郎	鹿児島大学
		青井 俊樹	岩手大学農学部
P2-237		青木 克将	酪農学園大・院
P3-061		青島 佑太	静岡大学理学部生物科学科
P1-129		青田 崇志	茨城大学
S10-1		青沼 仁志	北海道大学・電子研
P2-122		青柳 亮太	京都大学生態学研究センター
P2-009		青山 千穂	北大院農
I2-11		青山 夕貴子	東北大院・生命科学
		赤石大輔	NPOおらっちゃ
P2-329	○	赤坂 宗光	国環研
	○	明石 信廣	北海道林試
P2-165		赤松 史一	土木研究所
P3-038	○	秋田 鉄也	総研大・先導研
P3-140		秋葉 行雄	東京農工大学農学府
P1-202		秋山 華	東京農工大・農
A1-12	○	秋山 吉寛	名大環境
P1-236	○	阿久津 崇	筑波大学 生命環境科学
P2-178	○	明星 亜理沙	東大・農
P3-203	○	浅井 亜耶	東大・農・生物多様性
		浅井 元朗	中央農業総合研究センター
T10-3	○	浅田 正彦	千葉県生物多様性センター
P2-163	○	浅野 眞希	筑波大生命環境
P2-314		浅利 裕伸	(株) 長大
P2-097		芦澤 和也	明治大・院・農
		東 信行	弘前大学農学生命
P2-160		安宅 未央子	京大院・農・森林水文
P2-232		安達 翔平	東京農工大・院・農学府
		足立 直樹	株式会社レスポンスアビリティ
P2-148		安立 美奈子	国環研
P1-354	○	阿藤 正樹	三重県津農林水産商工環境
P3-305		穴澤 正宏	東北工大・工
P3-200		阿部 絢香	東邦大学　理
I1-13	○	阿部 豪	兵庫県立大学
P1-071		阿部 航大	信州大　生物
P1-263	○	安部 淳	静岡大・連合農
P2-051	○	阿部 真	森林総合研究所
P3-088		阿部 聖哉	(財) 電力中央研究所
P1-244		阿部 太亮	北大・理・生物科学
	○	阿部 剛志	MURC
P2-090		安部 哲人	森林総研九州
P3-HS05		阿部 敏明	東北学院中学校・高等学校
		阿部 俊夫	森林総研北海道
P2-310		阿部 晴恵	東北大(農)
	○	阿部 秀明	京大野生動物研究センター
P3-169	○	阿部 真人	東大・総合文化
S16-7		阿辺 一郎	農林水産省
S13-4	○	天野 達也	農業環境技術研究所
P2-247		綾部 慈子	名古屋大・生命農・森林保護
P2-164		新井 宏受	京大院農
P1-145		荒井 見和	横浜国立大・院・環境情報学府
P2-234		荒井 裕二	立正大・院
P2-253	○	新垣誠司	琉大・熱生研
H2-06	○	荒木 希和子	京大・生態研
S02-6	○	有田 英之	石狩市役所
P1-039		有馬 千弘	鳥取大・地域
P3-164	○	有本 勲	東京農工大学連合農学
	○	粟倉 輝彦	(株) 北開水工コンサルタント
P2-317		安房田 智司	中央水産研究所
	○	安渓 貴子	山大・医 (非常勤)
T13-1	○	安渓 遊地	山口県大・国際
P1-286		安齋 和樹	山形大学農学部
P1-157	○	安西 理	早稲田大・教育
P2-230		安東 聡一郎	明治大学農学部
		安藤 大成	さけます・内水面水産試験場
P1-293	○	安藤 温子	京大・院・農学
E1-06	○	安東 義乃	京大生態研
P1-274		李 厚槿	立教大・院・異文化コミュニケーション
P1-134		飯尾 淳弘	国立環境研究所
P1-330		飯島 勇人	山梨県森林研
P1-128	○	飯島 慈裕	海洋研究開発機構
P2-048		飯田 滋生	森林総研北海道
T24-5		飯田 哲也	環境エネルギー政策研究所
S09-2	○	飯田 佳子	北大・環境科学
P1-139		飯村 康夫	岐阜大流域圏科学研究センター
P1-298	○	生亀 正照	首都大・院・都市環境科学
P2-243	○	池上 沙樹	新潟大(自然科学)
D2-10	○	池川 雄亮	大阪府立大・院
P3-124		池田 あんず	京都大学生態学研究センター
P3-HS14		池田 智代子	早稲田実業学校高等部
T16-3	○	池田 透	北大・文
P3-050	○	池田 啓	東京大・院・理
A1-13	○	池田 浩明	農環研
H1-08	○	池田 紘士	森林総研
		池田 史枝	横国大

発表	懇	名前	所属
P1-265	○	池田 昌史	近大・農
P3-275	○	池野 優子	大阪大・院
P1-056	○	池本 美都	京都大学生態学研究センター
P3-119	○	井坂 友一	信州大・理・生物科学
S11-1	○	井鷺 裕司	京大・院・農・森林科学
P2-058	○	石井 史織	千葉大学園芸学
P3-239		石井 潤	東京大学農学生命科学
		石井 博	富山大学理工学研究部
E1-05		石井 弓美子	国立環境研究所
T03-3	○	石川 麻乃	北大・環境科学
P2-345	○	石川 愼吾	高知大・理
T22-7	○	石川 尚人	京都大学生態学研究センター
T17-4	○	石川 由希	北海道大学環境科学院
P3-228	○	石川 真一	群馬大学社会情報学部
		石川 靖	道総研環境科学研究センター
I2-08	○	石崎 智美	北大・院・環境科学
B1-01	○	石田 清	弘前大・農
P3-HS09		石田 紗樹	ノートルダム清心学園 清心女子高
P3-262		石田 敏	東北大・院
C2-07	○	石田 真也	新潟大院・自然科学
P2-337	○	石田 惣	大阪市立自然史博物館
P2-216	○	石田 裕子	摂南大学理工学部
H1-04	○	石田聖二	東北大 IAREO
P1-095	○	石塚 航	東大・農学生命
P2-189		石庭 寛子	新潟大学 自然科学
P2-328	○	石濱 史子	国立環境研
	○	石原 道博	大阪府大院・理
P2-023	○	石丸 薫	滋賀県大
P2-227		石山ちえみ	酪農学園大学
		石山信雄	北海道大学農学院
P2-181	○	泉 佳代子	北大・環境科学院
D1-13		伊勢 武史	海洋研究開発機構
P3-005		五十君 友宏	名大院・生命農
A1-02	○	井田 秀行	信州大・教・志賀自然教育研
C2-08		板垣 友規子	東京農工大学農学府
P2-100		板垣智之	東北大・院・生命
P3-166	○	板谷 弘樹	九州大学生物資源環境科学府
T13-4 P3-240		伊谷 行	高知大・教育
T22-2	○	市栄 智明	高知大学
P3-185	○	市野川 桃子	遠洋水研
P1-119	○	市橋 隆自	九大・理・生物
P1-320		市原 実	静岡農林研
		市原 優	森林総研東北
P1-305		伊津野 彩子	京大・農
P2-099		井出 純哉	久留米工大・工
P2-131	○	伊藤 昭彦	国環研
P1-038	○	伊東 明	大阪市大院・理
P2-185		伊藤 淳郎	北海道大・院・水産科学院
P1-131		伊藤 江利子	森林総研北海道
B2-06		伊藤 克敏	水研セ瀬戸内水研
P3-157	○	伊東 圭祐	東大・農・生物多様性
P1-282		伊藤 圭佑	名古屋大学
T16-6 I1-10	○	伊藤 健二	農業環境技術研究所
P2-287	○	伊藤 公一	京都大学 生態学研究センター
P3-084	○	伊藤 公一	森林生態系管理学研究室
P1-335		伊藤 浩二	金沢大学地域連携推進センター
P2-116		伊藤 大将	静岡大学理学部
P2-173	○	伊藤 哲治	日本大学・院・生物
P1-163		伊藤 尚子	広島大・院・生物圏
		伊東 宏樹	森林総研多摩
T12-3 P2-214	○	伊藤 洋	国立環境研
P3-073		伊藤 寛剛	北大農
P3-163	○	伊藤 元裕	北大 水産
E1-04	○	伊藤 亮	京大・野生研
P1-355		伊藤千恵	十日町市立里山科学館キョロロ
P1-253	○	伊東 康人	兵庫農技総セ
P1-284	○	糸川 拓真	岩手大学院
P1-016		稲岡 哲郎	東・大・院・新領域創成科学
P2-138	○	稲垣 善之	森林総研
P2-119		稲田 友弥	京都大学農学院熱帯林環境学
P3-063		稲田 直輝	北海道大学農学部
P2-302	○	稲富 佳洋	道総研環境科学研究センター
P2-029		稲永 路子	名大院生命農
P2-136	○	稲村 修	北大・環境科学院
P3-072		井上 晃	東北大・生命科学
P3-187		井上 英治	京大・理
P1-333	○	井上 太樹	北海道大学環境科学院
P1-155		井上 智晴	早稲田大・院・先進理工
P3-276		井上 博元	弘前大・院・農学生命
T16-7 P3-233		井上 真紀	国立環境研究所
P1-029	○	井上 みずき	秋田県大・生物資源
F1-04	○	井上 美幸	信州大学工学系
T10-1 P1-177	○	井上雅仁	三瓶自然館
P3-230	○	伊原 禎雄	奥羽大学
P3-078		今井 一輝	三重大学生物資源学部
P2-325	○	今井 淳一	東大・院・農学生命科学
P2-022		今井 伸夫	京都大学 農学
P1-073		今田 省吾	鳥取大・乾燥地研
P2-316		今西 亜友美	京大・院・地球環境
P2-073		今廣 佐和子	東北大・院・生命科学
P1-230		今村 彰生	京都学園大学

発表	懇	名 前	所 属
P3-113		今村 航平	東北大・生命
P1-166		今村 直広	東京大学
P2-039	○	伊村 智	極地研
P3-283		岩井 紀子	森林総研・鳥獣
P1-030		岩泉 正和	森林総研林育セ
D2-09	○	巌佐 庸	九大理生物
		岩崎 敬二	奈良大学教養部
T18-1 P2-208		岩崎 雄一	東工大
P2-280	○	岩嵜 航	東北大学生命科学
P3-237	○	岩下 明生	東京農業大学
G1-11	○	岩田 繁英	水研センター・遠洋水産研究所
P1-092		岩永 史子	鳥取大乾燥地研
P1-352		岩本 二郎	長岡市立科学博物館
P3-264		岩本 菜々子	明治大・農
P2-195		岩本千鶴	宇都宮大学農学部
P1-217		上馬 康生	石川県白山自然保護センター
P2-113		植田 陽衣	愛媛大・農
	○	上田 恵介	立教大学・理・動物生態
I2-04	○	上田 昇平	信大・理
P1-098		上田 実希	東北大生命科学
P2-070		植月 智子	酪農学園大・院
P1-275	○	上野 篤史	三重大・院
P3-317	○	上野 真義	森林総研
P2-171	○	上野 真由美	道総研•環境科学研究センター
P2-332		上野 裕介	新潟大学・朱鷺自然再生学
P1-168	○	上野貴史	京都大・院
P3-302	○	上原 隆司	総研大・先導研
P1-300	○	上原 裕世	酪農学園大学・環境
T17-2 E2-08	○	植松 圭吾	東大院・総合文化
P3-134		植村 滋	北大•フィールド科学センター
D2-01	○	潮 雅之	京大・生態研センター
		牛山 克巳	宮島沼水鳥・湿地センター
P1-247	○	臼井 平	北海道大学　環境科学院
P1-159		臼井 伸章	京大院・農
B2-03	○	内井 喜美子	東大・総合文化
P3-HS06		内田 葉子	北海道札幌旭丘高等学校
P1-138		内田 義崇	農業環境技術研究所
P2-276		内堀 そよみ	筑波大・生物
P1-085		宇都木 玄	森林総合研究所北海道支所
F2-05	○	内海 俊介	東大広域
	○	宇野 裕之	道総研•環境科学研究センター
P2-303	○	生方 秀紀	北海道教育大・釧路校
F2-12		生方 正俊	森林総研林育セ北海道
P1-108	○	梅木 清	千葉大園芸
F2-07	○	梅田 隆利	龍谷大学理工学部

発表	懇	名 前	所 属
P2-292	○	梅村 界渡	神戸大・人間発達環境
P2-150		梅村 光俊	名大院・生命農
P2-022	○	梅村 佳寛	東京農工大・院
T24-1		浦 達也	(財) 日本野鳥の会
S04-5	○	浦部 美佐子	滋賀県立大・環境科学
	○	占部城太郎	東北大学生命科学
P3-270	○	宇留間 悠香	東大・農
P2-114		江川 知花	北大・環境科学院
D1-04		江草 智弘	東大院農
E2-04	○	江口 和洋	九大院・理・生物
P3-176		江口 章子	京都学園大　バイオ環境
P2-215		江副 日出夫	大阪府大・理
B1-06		江成 広斗	宇都宮大・農・里山
P2-343		榎木 勉	九州大農
P1-303	○	蛯原 香理	新潟大院・自然科学
P1-261	○	遠藤 真太郎	信州大院・総工・山岳
P2-211		遠藤 千尋	新潟大学・超域
P1-212		遠藤 暢	京大院農・森林生態
P1-094		及川 真平	東京農業大学
S16-5		及川 敬貴	横浜国立大学
P2-076		御池 俊輔	信州大・院・農学
P2-176	○	欧 巍	北海道大学環境科学院
P1-048		王 けい	名古屋大・院
P2-139	○	王 新	広島大・院・生物圏
P3-120		大井 文貴	龍谷大学
P2-117		大石 このみ	静岡大学理学部
P2-066	○	大石 高典	京大こころの未来研究センター
P3-273		大石 優	筑波大
P2-334		大石 善隆	信州大・農
		大石哲也	(独) 土木研究所
G2-11	○	大泉 嶺	北大・環境科学院
P3-075		大條 弘貴	東京大・理
J2-05	○	大川 千絵	植物生態学
		大河原 恭祐	金沢大学・自然システム学類
	○	大串 隆之	京大生態研
		大窪 久美子	信大・農
P1-324		大黒 俊哉	東京大・農
S06-2		大迫 義人	兵庫県立大学
P2-268		大里 沙羅	京大・理
T23-1		大澤啓志	日本大学生物資源科学部
	○	大澤 剛士	農環研
F2-03		大澤 正嗣	山梨県森林総合研究所
P1-349	○	大曽根 陽子	大妻女子大学社会情報学部
P1-184		大園 享司	京大・生態研セ
P2-019		太田 藍乃	横浜国大・環境情報
P1-156		太田 民久	北海道大学　苫小牧研究林

発表	懇	名 前	所 属
C1-11	○	太田 陽子	緑と水の連絡会議
P3-143		大瀧 みちる	北海道大学
P2-257	○	大田 直友	阿南高専・建設システム工
P2-098		大谷 雅人	森林総研林木育種センター
P3-213	○	大谷 洋介	京都大学霊長類研究所
P2-072		大津 千晶	東京農工大・院・農
		大塚 俊之	岐阜大学流域圏科学研究センター
P3-288		大槻 朝	東北大・生命科学
P2-161	○	Ohte, Nobuhito	Univ. Tokyo
P3-181	○	大西 尚樹	森林総研・東北
P3-HS20		大西 美緒	北海道恵庭北高等学校
C2-09		大野啓一	横浜国立大・院・環境情報
P1-281		大野 愛子	熊本県立大・院
		大野 啓一	千葉県立中央博物館
P3-130		大野 智弘	東邦大学理学部
P2-115		大野 葵	新潟大学・院・自然科学
B1-07	○	大野（鈴木）ゆかり	東北大（生命科学）
P2-040		大野 泰之	道総研 林業試験場
P3-188		大場 孝裕	静岡県森林･林業研究センター
A1-06	○	大場 真	国立環境研・アジア自然共生G
P3-076		大橋 達矢	三重大院 生物資源
P3-100	○	大橋 春香	農工大・フロンティア農
P1-219	○	大橋一晴	筑波大・生命環境科学
	○	大原 雅	北大・院・地球環境
P2-219		大平 充	東京農工大院 連農
A1-09		大堀 聰	早稲田大学自然環境調査室
P2-050		大山 拓郎	新潟大・院・自然科学
F2-02		大脇 淳	新潟大・超域
E2-01	○	岡 奈理子	財）山階鳥類研究所
P1-195	○	小粥 隆弘	筑波大学生命環境科学
J2-02		小笠 真由美	岡大院・環境
G2-10	○	岡嶌 亮子	東北大学生命科学
S05-4		岡田 賢祐	岡大・環境
P1-012		岡田 知也	名古屋大・院・生命農学
P3-053		岡田 桃子	東大・農学生命
E1-10	○	岡田 泰和	岡大・環境学 進化生態学
P3-059	○	岡田 憲和	鳥大院・農
F2-06		岡田 拓也	立正大院・地球
P2-207		岡田浩明	農業環境技術研究所
P2-283	○	岡西 政典	東大・院・理
E1-01		岡野 淳一	東北大・東北アジア研
T06-4	○	岡野 隆宏	鹿児島大学
E2-03	○	岡久 雄二	立教大・院・理学
P1-170		岡部貴美子	森林総合研究所
P3-226		岡本 卓	国立環境研
P3-033		岡本 朋子	JT 生命誌研究館

発表	懇	名 前	所 属
P2-351		岡本 奈保子	京都学園大学
P1-259	○	岡本美里	金沢大学自然科学
P3-092	○	岡安智生	東京大学
	○	小川 安紀子	国立環境研究所
P1-234	○	小川 浩太	北海道大学 環境科学院
P1-004	○	小川 高直	近畿大・農・環境生態
P3-280		小川 洋	東邦大学理学部
P3-251	○	小川 真莉子	広島大・総科
P1-182		小川 みふゆ	森林総研
P1-130		隠岐 健児	三重大院・生物資源
C2-05	○	沖津 進	千葉大・院・園芸学
P3-146		荻野 恭子	千葉大学園芸学
P1-222	○	奥 圭子	中央農研
T05-6 P1-249	○	奥崎 穣	京大・理・動物生態
P1-192		奥田 圭	東京農工大・院・連農
	○	奥田 武弘	遠洋水産研究所
	○	奥田 昇	京大生態研
P2-262		小口 結	東北大・院・生命
P3-096	○	小熊宏之	国立環境研究所
P3-HS08		奥山 彩夏	北海道札幌白石高等学校
P2-275		奥山 永	京都大学生態学研究センター
T11-4	○	奥山 雄大	科博・植物
P1-209	○	小栗 大樹	名古屋大・院
P3-097	○	長 雄一	道総研 環境研
P1-121		尾崎 洋史	東北大学・生命科学
	○	尾崎 有紀	奈良女子大・院・人間文化
P1-102	○	長田 典之	京大フィールド科教研センター
P1-210	○	長田 穣	東大・農・生物多様性
	○	小澤 有司	千葉大・院
P2-017		押山 友美	岐阜大学
P2-032		尾関 雅章	長野県環境保全研究所
P2-125		小田 祥三	鳥取大学農学
P3-206		小田 崇	京大院・農
P2-149		小田 智基	東大院農
P1-271		落合 はるな	明治大学 農学部
P1-104	○	小野 清美	北大・低温研
P2-144		小野 賢二	森林総研東北
P2-311	○	小野田 幸生	自然共生研究センター
S09-1	○	小野田雄介	九大・理
P2-281		小野寺 遼	東北大・院・生命科学
P2-015	○	小野寺 洋史	東北大・院・生命科学
P1-314		小幡 智子	東大・農
P3-014		尾鼻 陽介	信州大・理・生物
P3-114		小原 亮平	神戸大 発達
P3-304		織田 奈津季	奈良女子大学理学部
P1-034	○	恩田 義彦	筑波大・菅平セ

発表	懇	名　前	所　属
P2-294		皆藤 千穂	総研大・葉山
P2-180	○	加我 拓巳	早稲田大学人間科学部
P3-027		加賀田 秀樹	京大・生態研セ
D2-04	○	鏡味 麻衣子	東邦大学理学部
J2-11		加賀屋 美津子	なし
P2-291	○	香川 幸太郎	東邦大学理学部生物学科
P2-183	○	柿岡 諒	京都大・院・理
P2-060	○	柿沼 薫	東大・院・農学生命
P3-281	○	柿本 恵里那	東邦大院・理・生物
P3-006	○	鍵本 忠幸	岐阜大・院・応用生物
P1-211	○	籠 洋	滋賀県大（環境）
P1-076		籠谷 優一	京都工繊大
P1-241	○	葛西 直子	東邦大院・理・生物
P3-245		笠木 哲也	金沢大学
P2-258	○	笠田 実	東大院 広域システム
P1-226	○	風張 喜子	京大野生動物研センター
T24-3 P3-204	○	風間 健太郎	名城大・農
P1-216		風間 健宏	東北大学
S08-3	○	梶 光一	東京農工大学農学部
J1-12		鹿嶋 一孝	環境
P2-127		梶本 卓也	森林総研
	○	粕谷 英一	九大・理・生物
	○	片岡 博行	重井薬用植物園
P2-320		片野 泉	University Oldenburg
P2-254	○	片平 浩孝	広大生物圏
P3-117		片渕 正紀	東北大・生命
P1-142		片山 歩美	九大演習林
P2-168		片山 直樹	東大・農
P2-197		片山 昇	京大・生態研センター
	○	可知 直毅	首都大院・理工・生命
T09-4 P3-149		香月 雅子	岡山大学・進化生態
P1-005	○	勝又 昌代	東北大・院・生命科学
P1-105		加藤 顕	千葉大学　園芸学
P3-052		加藤 綾奈	筑波大　生物資源
P2-104		加藤 健吾	総研大・極域科学
P3-154	○	加藤 賢太	筑波大・院・生命環境
A1-01		加藤 聡史	龍谷大・科学技術共同研センター
P3-267	○	加藤 聡美	北海道大学環境科学院
G1-02	○	加藤 真	名城大院・農
S11-7		加藤 元海	高知大黒潮圏
A2-01	○	加藤 義和	東京大学・総合文化
P2-172		加藤木 愛	東北大・農・生物制御機能学
	○	加藤 正吾	岐阜大、応用生物
T13-2	○	加藤真	京大・地球環境
P1-059		角屋 絵理	富山大学理学部

発表	懇	名　前	所　属
P2-210		角谷 拓	国立環境研究所
P3-193		金井 秀明	玉川大・農
P2-145	○	金谷 弦	(独) 国立環境研究所
P2-330	○	兼子 伸吾	京大・院・農
P2-031		金子 尚樹	新潟大・院・自然科学
P2-035		金子 洋平	新潟大学　超域研究機構
P1-175	○	鹿野 雄一	九大（工）
P2-036		壁谷 大介	森林総研
S15-3	○	鎌形 洋一	産業技術総合研究所
P1-080		鎌倉 真依	奈良女大・共生センター
P3-227		神谷 貴文	静岡県環境衛生科学研
P1-115		神山 千穂	東北大・院・生命科学
P3-026		亀井 幹夫	広島県立総合技術研究所
P1-350	○	亀岡 大真	都市景観生態学ゼミ
	○	亀山慶晃	東京農大・地域環境
A2-05	○	亀山哲	国立環境研究所
G1-13	○	加茂 将史	産総研・安全科学
P1-074		香山 雅純	森林総合研究所九州支所
T20-3 A2-06	○	河井 崇	阿南高専・地域連携テクノセ
P3-139	○	川上 祐佳	新潟大・院・自然科学
T21-2	○	川北 篤	京大生態研
P1-342	○	川口 勇生	(独)　放射線医学総合研究所
P2-108		川越 哲博	北大・創成
P2-006	○	川崎 淳一	北海道教育大学旭川校
P3-286		河崎 祐樹	名古屋大院 生命農
P2-274		川島 直通	名古屋大学農学部
		川尻 舞子	新潟大・院・自然科学
S13-1	○	河田 雅圭	東北大学生命科学
H2-01	○	川津 一隆	京大院・農・昆虫生態
P1-205		川津 正之	東邦大・理・生命圏環境科学
	○	川那部 浩哉	なし
P2-044	○	川西 基博	鹿児島大・教育
		河野 円樹	自然環境研究センター
B1-02		河原 孝行	森林総研北海道
P2-340	○	河村 詞朗	岩手大院・農
P1-347		川村 芙友美	帝京科学大学
P1-239	○	川本 さつき	大阪府大・理
		川本 真夕子	奈良女子大・院・生物科学専攻
P1-077		河原崎 里子	森林総合研究所
P2-175	○	菅家 恵未	北海道大学環境科学院
P2-055		神田 房行	北海道教育大・釧路
P1-200		菅野 希	東京農工大・森林生物保全学
J2-08	○	菊沢 喜八郎	石川県大
P2-279	○	菊田 尚吾	北大・院・理
D1-01		菊地 永祐	東北大・東北アジア研センター
P1-301		菊地 心	北海道大学院農学院

発表	翌	名 前	所 属
P3-316		菊地 賢	森林総合研究所
	○	菊池 多賀夫	(元) 横国大環境情報
P1-235	○	菊地 俊匡	秋田県立大学
P2-109		來住 牧	北大院・環
S10-3	○	岸田 治	北大・北方生物圏 FSC
	○	岸田 宗範	環境省
P1-254	○	岸田 竜	佐賀大農学部
P2-260		岸本 光樹	愛媛大・農
D2-07		岸本 年郎	自然環境研究センター
T04-3	○	岸本 康誉	兵庫県立大
G1-05		岸本圭子	総合地球環境学研究所
P2-296		喜多 俊介	北大・院生命
P1-086	○	北岡 哲	森林総研北海道
P2-046		北川 涼	横浜国立大学
P1-291		木田耕一	信州大・院・農学
E2-07	○	北出 理	茨城大学理学部
T03-5 H1-13	○	北野 潤	東北大・生命
P3-155	○	北野 伸雄	九州大学生物資源環境科学府
P3-234		北野 聡	長野環保研
P2-249	○	北村 淳一	三重県新博
P3-041	○	北村 俊平	人と自然の博物館
P2-093		北村 系子	森林総研・北支
P2-129		衣笠 利彦	鳥取大・農
P1-231	○	木下 智章	佐賀大・農
B2-02	○	キム ヒョンジン	東京農業大学 野生動物学
P3-199	○	木村 一貴	東北大・生命科学
P2-306	○	木村 公宣	広島大・院
P3-243	○	木村 妙子	三重大院・生物資源
B2-11	○	木村 幹子	東北大・院・生命科学
P3-040	○	木村 勝彦	福島大・理工
T05-2	○	京極 大助	京大院・農・昆虫生態
T16-9		草刈 秀紀	WWF ジャパン
P2-101	○	草嶋 乃美	北大・院・環境科学
P3-077		萬城遼	三重大学生物資源学部
P3-118	○	楠目 晴花	信州大・理・生物
P3-098	○	楠本 良延	農環研
		沓掛 磨也子	産総研
J1-10	○	工藤 岳	北大地球環境
P3-271		工藤 誠也	弘前大・院・農学生命科学
I1-05		工藤 芳文	鹿児島大学 大学院
S07-2	○	國井 秀伸	島根大学汽水域研究センター
P2-034		久保 栄子	筑波大学
P2-233		久保 優	東大院・農
P3-259	○	久保 雄広	北大農
		久保 拓弥	北大・地球環境
B2-12	○	久保 達哉	JSR 株式会社
P3-255	○	久保 達也	帯広畜産大学
C1-04		久保 まゆみ	北海道大学農学院
P1-020	○	久保田 渉誠	東北大生命科学
S01-3 T19-1		久保田 康裕	琉球大学理学部
S01-2	○	熊谷 直喜	水産総合セ・水産工学研究所
P3-162		熊谷 麻梨子	酪農学園大学
P3-177		熊田 那央	筑波大・農
P1-221	○	熊野 了州	沖縄県病害虫防除技術センター
P1-176	○	久米 篤	九大・農院
E1-13		倉沢 康大	北大院水産
P2-336		倉本 宣	明治大学農学部
I2-12		栗原 健夫	水産総合研究センター
T21-3		栗山 武夫	東邦大学理学部
P1-250	○	栗和田 隆	沖縄県病害虫防除技術センター
P2-250		黒江 美紗子	早大・自然環境調査室
P1-054		黒川 佑	東北大・理
	○	黒川 紘子	東北大・生命科学
I2-01		黒河内 寛之	東大院農
P1-255		黒田 高光	東農大院生物
T04-4	○	黒田 啓行	水研セ・遠水研
P1-218		桑江 朝比呂	港湾空港技術研究所
P1-165		桑島 圭	京都大学院農学
P1-242	○	桑野 真也	北大院・水産
		桑原 考史	東京農工大学
I1-03	○	小池 文人	横浜国立大学
P1-025		小泉 恵佑	横浜国立大・院・環境情報学府
		小泉 沙奈恵	日大・生物資源・森林動物
J1-06	○	小出 大	横浜国大・環境情報
P3-265	○	幸田 良介	京大・生態研
G2-09	○	甲山 隆司	北大・地球環境
P2-266	○	甲山 哲生	北大・環境・生態遺伝
A1-05	○	郡 麻里	首都大院・理工・生命
S04-4	○	古賀 庸憲	和歌山大・教育・生物
T16-8 D2-08		五箇公一	国立環境研究所
H1-10	○	小北 智之	福井県立大
P2-016		小坂井 千夏	東京農工・院・連合農学
P2-313	○	越田 智恵子	トキ野生復帰ステーション
P1-126		小嶋 智巳	東北大・院・生命
P2-205	○	小関 右介	長野水試
P2-308	○	小高 信彦	森林総研・九州
P3-135		小谷 二郎	石川県林業試験場
P2-297	○	後藤 寛貴	北大院・環境科学
P1-233		後藤 優介	立山カルデラ砂防博物館
P1-136		後藤 友紀	茨城大・院
P3-036	○	後藤 龍太郎	京都大・院・ 人間・環境学
S14-2		古藤田 信博	農研機構果樹研

発表	懇	名前	所属
P2-075		小戸田 紋郁	自然科学
T05-3	○	小沼 順二	マンチェスター大学生命科学
P2-111		小沼明弘	農業環境技術研究所
P2-309		小林 奈保子	筑波大学
P1-055		小早川 浩志	名大院・生命農
I1-09	○	小林哲	Independent
		小林 聡史	釧路公立大学
P2-286	○	小林 哲	東京大・院
P2-220		小林 草平	土木研究所
P3-128		小林 弘和	千葉大・院・園芸学
A2-03	○	小林 宏輝	信州大学　理学部
P3-108		小林 真生子	千葉大学　園芸学
P2-141	○	小林 真	Umeå University
P3-094		小林 誠	十日町市立里山科学館キョロロ
	○	小林 まや	慶應義塾大学医学部
P2-074	○	小林 慶子	横浜国大・院・環境情報
P1-111		小林（伊藤）祥子	国立環境研
P1-223		小林（城所）碧	神戸大・理
P3-136		小林 卓也	（財）電力中央研究所
P1-116		小南裕志	森林総合研究所関西支所
E2-02		小宮山 英重	野生鮭研
T14-2 P1-002	○	小柳知代	農環研
T20-1		小山 明日香	北大・環境科学院
S12-1		小山 耕平	石川県立大
P1-089		小山 里奈	京大・院・情報
T01-3	○	今 博計	道総研・林試
P3-031		今田 貴裕	山形大・院・農学
P1-288		近藤 綾希子	信州大学農学部
		近藤 高貴	大阪教育大学
P3-315	○	近藤 俊明	広島大・院・国際協力
P1-348	○	今藤 夏子	国立環境研
P1-273	○	近藤 万里	京大・生態研セ
S01-4	○	近藤 倫生	龍谷大，JST
P3-171	○	近藤 勇介	岐阜大・院・昆虫生態学
P1-277	○	近藤 由佳	帯畜大
P1-343		近藤 慶一	名城大学・院・農学
P2-133		近藤 順治	岡山大　院　環境
P1-001	○	近藤博史	横浜国立大・院・環境情報
P2-191	○	今野 建志郎	横浜国大・環境情報
P1-125		紺野 康夫	帯広畜産大
P2-201	○	西城 洋	農研機構・中央農研
P3-145	○	齊藤 瑛璃香	新潟大院・自然科学
P2-010		齊藤 温	東邦大学理学部
P2-342		齊藤 哲	森林総合研究所
	○	齊藤 隆	北大フィールド科学センター
P2-135		斎藤 琢	岐阜大・流域圏

発表	懇	名前	所属
P3-229		斎藤 達也	北大院・環境
P1-289		齋藤 倫実	山形大学農学
P2-326		斎藤 裕美	東海大　生物理工
P2-246	○	斎藤 歩希	茨城大学理学部
		齊藤 正恵	東京農工大学
T14-3 P3-279	○	斎藤 昌幸	横浜国大・環境情報
P3-066	○	齊藤 わか	京大農・森林生態
A1-08		齊藤 修	国連大学
P1-043		齋藤 智之	森林総研
P3-292	○	佐伯 いく代	横浜国立大学環境情報
T06-5	○	酒井 暁子	横浜国大・環境情報
F1-11	○	酒井 一彦	琉球大・熱生研
H2-04	○	酒井 聡樹	東北大・院・生命科学
I2-06	○	酒井 章子	総合地球環境学研究所
P1-297	○	酒井 すみれ	東大・農・生物多様
P2-049		酒井 武	（独）森林総合研究所
G2-07	○	酒井 佑槙	北大環境
P2-203	○	酒井 陽一郎	京大生態研
P2-064		境 優	京都大学地球環境学堂・学舎
P2-063		榊原 有里子	信州大
P3-082	○	阪口 恵理	広島大学 総合科学部
P3-285	○	阪口 翔太	京大院・農
		坂田 宏志	兵庫県立大学
P1-065	○	坂田 ゆず	京都大学農学部
P2-059		坂牧 はるか	岩手大・院・連合農学
P2-228		坂本 洋典	北大・地球環境
	○	坂本 正樹	富山県立大工学部
J1-07	○	坂本 亮太	東大院・総合文化・広域システム
P3-296	○	佐川 文夏	信州大学理学部
P1-331	○	佐川志朗	（独）土木研究所
	○	崎尾 均	新潟大（農）
P1-169	○	佐久間 智子	西中国山地自然史研究会
D1-12		櫻井 玄	農業環境技術研究所
P2-229		櫻井 龍太	日大・院・生物環境
P2-005		櫻澤 孝佑	東京大・院・
P3-232		桜谷 保之	近畿大・農・環境生態
P3-223		笹 千舟	北大　環境
	○	笹岡 正俊	国際林業研究センター
P1-112		笹川 裕史	国環研
P2-140	○	佐々木 晶子	広島大・院・生物圏
P2-043		佐々木 彩	茨城大・院・理工学
		佐々木 謙	金沢工業大学応用バイオ
P3-106	○	佐々木 尚子	総合地球環境学研究所
P1-225	○	佐々木 那由太	筑波大・院・生命環境
T18-4 P1-336		佐々木 雄大	東北大・院・生命
P2-278	○	笹子 由希夫	三重大院・生物資源

発表	翌	名前	所属
P2-177	○	佐鹿 万里子	岐阜大・院・連合獣医学
P2-103		指村 奈穂子	埼玉自然博
P2-003	○	定清 奨	大阪府大・理
S14-5	○	佐竹 暁子	北大・創成
P3-HS19		佐藤 彩香	市立札幌大通高校
P2-121		佐藤 香織	北大院農
G2-03		佐藤 一憲	静大・工
H1-02	○	佐藤 淳	福山大 生物工
S04-3	○	佐藤 拓哉	京大・フィールド研
P1-035		佐藤 友愛	鹿児島大・理
P1-266		佐藤 成祥	遠洋水産研究所
C1-07		佐藤 永	名古屋大学環境学
I2-09		佐藤 宏明	奈良女理
P3-153		佐藤 宏樹	京都大・アフリカ研
B1-10	○	佐藤 舞子	酪農学園大・院
P2-270	○	佐藤 光彦	東北大・院・生命
T01-4	○	佐藤 喜和	日大・生物資源
P2-348		佐藤 遼太	岩手大学農学部
T13-3		佐藤 正典	鹿児島大・理
	○	佐野 淳之	鳥取大・農・FSC
P2-056		佐野 哲也	森林総合研究所
P1-152	○	佐野 智人	北海道大・院・農学院
		佐野 真琴	森林総合研究所
P1-240		佐橋 玄記	北海道大学水産学部
P1-325		鮫島弘光	京大東南研
P2-231		更科 美帆	酪農学園大学
P3-049	○	澤上 航一郎	東大・院・理・日光植物園
P3-HS13		澤田 森生	北海道札幌拓北高等学校
S02-3	○	澤田 佳宏	兵庫県大緑環境／淡路景観
P3-210	○	澤田 晶子	京都大・霊長研
P2-021		澤向 麻里絵	酪農学園大学（院）・酪農学
P3-174		椎名 佳の美	北海道大学環境科学院
P1-009		志 荣	横浜国大・院・環境情報
I2-07	○	塩尻 かおり	京大次世代研究者育成センター
C2-04		塩見 正衛	茨城大学
		塩見浩二	市立函館高校
S11-5		志賀 隆	大阪市立自然史博物館
P3-220	○	滋田 友恒	茨城大院　理工学
P3-121		篠原 耕平	龍谷大学
		柴尾 晴信	東大院・総合文化
D1-06	○	柴田 淳也	愛大 CMES
P3-138		柴田 嶺	東北大学生命科学植物生態
P2-241		柴宮 朋和	横浜国立大・院・環境情報学府
P2-061		嶋崎 仁哉	東北大・院・生命科学
A1-07	○	島田 和則	森林総合研究所
E2-09	○	嶋田 敬介	富山大・理工

発表	翌	名前	所属
P1-013	○	島田 拓也	広島大学
I2-10	○	島田 卓哉	森林総研東北
T17-1	○	嶋田 正和	東大・総合文化・広域
P2-033	○	島谷 健一郎	統計数理研究所
P2-052		嶋村 鉄也	愛媛大学農学部
S10-4		清水 宗敬	北海道大学水産科学研究院
C2-01	○	清水 裕輔	龍谷大学
P1-258		下岡 ゆき子	帝京科学大学
P3-212	○	下地 博之	鹿大・連合農学
P2-301		下田 勝久	畜産草地研究所
		下田 和孝	さけます・内水面水産試験場
I1-08	○	下野 綾子	筑波大学遺伝子実験センター
P2-333	○	下野 嘉子	農環研
P1-334		角 媛梅	東京大・農
P3-180	○	姜 兆文	WMO
P1-285		正田 惇	東京農工大・院・農
A1-04	○	庄山 紀久子	国立環境研究所
P2-120	○	白井 航来	新大院・自然
P1-014		白石 拓也	筑波大院・生命環境
P2-304	○	白川 勝信	高原の自然館
P2-194	○	白川 北斗	北大水院
T24-2 G1-03	○	白木 彩子	東京農大・生物産業
S08-4		白水 智	中央学院大学
P3-015	○	城川 祐香	東大・理
P1-046		城田 徹央	信大・農
P2-204	○	城本 啓子	沖縄県病害虫防技セ
P1-295		新藤 茜	東邦大・理
P2-347		新谷 彬	東海大・生物理工
P1-011		新谷 大貴	信州大学院農学
P3-123	○	末次 健司	京都大・院・人間・環境学
B1-05	○	末藤 雅樹	Univ. Regensburg, Germany
P2-323		須賀 丈	長野県環境保全研究所
P2-298		須賀 大夢	北大院・理
S11-2		須貝 杏子	首都大・牧野標本館
P3-151	○	菅澤 承子	東大・農・生物多様性
P3-158	○	菅原 鮎実	東大・農・生物多様性
P1-306		杉浦 晃介	酪農学園大・院
T21-1 T21-5 P3-018		杉浦 真治	森林総合研究所
P1-083	○	杉浦 大輔	東大・院・理
P3-190		杉浦 秀樹	京大野生動物研究センター
P3-168		杉浦 里奈	名城大院・農
P1-045		杉阪 次郎	京大　生態研
J1-05	○	杉田 久志	森林総研
B1-04		杉村 乾	森林総合研究所
	○	杉本 敦子	北大　地球環境

発表	翌	名前	所属
		杉本 太郎	北大・地球環境
J1-03	○	杉山 杏奈	University of Georgia
		杉若 圭一	道総研さけ内水試
	○	鈴木 英治	鹿児島大学理工学
P2-322		鈴木 克哉	兵庫県大/森林動物研セ
P3-008		鈴木 乾也	首都大・理工・生命
P1-191	○	鈴木 圭	岩大 連合農学
G2-04	○	鈴木 健大	東大総文広域
P1-179	○	鈴木 智之	自然環境研究センター
D1-02	○	鈴木 静男	環技研
P1-027	○	鈴木 準一郎	首都大・理工・生命
P3-032		鈴木 節子	森林総合研究所
P1-015		鈴木 智博	富大・理
		鈴木 智也	信州大・院・工学系
	○	鈴木 信彦	佐賀大・農
P1-237	○	鈴木 規慈	三重大院生資
	○	鈴木 創	小笠原自然文化研究所
P3-137		鈴木 牧	東大演習林
P1-044	○	鈴木 まほろ	岩手県立博物館
P3-170	○	鈴木 真理子	京大・野生動物
P1-060	○	鈴木 美季	筑波大・生命環境科学
P1-041		鈴木 彌生子	食品総合研究所
P1-162		鈴木 悠介	森林環境資源学
D2-11		鈴木 亮	筑波大・菅平セ
P3-301	○	鈴木 清樹	総合研究大学院大学
T05-1 T05-5 P3-202	○	鈴木 紀之	京大院・昆虫生態
D2-06	○	須島充昭	東大総合文化
P2-106	○	須藤 泰典	山形大学農学部
P1-248		須藤 竜介	東大・大海研
P1-193	○	須藤 正彬	京大・農・生態情報
P2-200		澄川 元晴	信州大学農学部
P1-084	○	隅田 明洋	北大低温研
P3-192		住友 宏幸	山形大学理工学
S11-3	○	陶山 佳久	東北大・農
P2-128		諏訪錬平	森林総合研究所
C2-02	○	清野 達之	筑波大・生命環境
P2-107	○	清野 陽介	山形大学農学部
G1-04	○	関 香菜子	兵庫県立大・院
P1-081	○	関 剛	森林総研・北海道
P1-213		關 義和	農工大・院・連合農学
P2-130	○	関川 清広	玉川大・農
P1-197		関崎 悠一郎	東大院・農
S06-5		関島 恒夫	新潟大学・院・自然研
P1-161	○	関根 有哉	早稲田大・院・先進理工
T09-2	○	世古 智一	近中四農研

発表	翌	名前	所属
T18-2	○	瀬戸 繭美	奈良女・理・情報
P2-089	○	瀬戸 良久	たけいち醫學研究所
P1-160		千賀 有希子	立正大・地球
P1-150		五月女 皓海	早稲田大・院・先進理工
S05-2	○	相馬 雅代	北大・理
P2-206		曽我 昌史	東京農工大学
P1-251	○	曽我部 篤	広島大・院・生物圏
P2-319		十亀 彩	北里大院・獣畜
P3-274		蘇日 古	横浜国立大学
P2-157		孫堯丸	高麗大学
P2-239		高井 孝太郎	北大・環境科学
P3-107		高岡 貞夫	専修大・文
P3-241	○	高木 俊	東大・農
T05-4 P1-040	○	高倉 耕一	大阪市環科研
F1-07	○	高嶋 あやか	龍谷大・理工・環境ソリューション
P3-308		高須 夫悟	奈良女子大学理学部
		高田 雅之	道総研環境科学研究センター
C1-02	○	高田 まゆら	帯広畜産大学
P1-164	○	高田 モモ	広島大　総合科学
G1-07	○	高田 宜武	水研セ日本海区水研
P2-193		高津 邦夫	北海道大・農・生物資源
P3-074		高樋 明希	筑波大・院
P1-110	○	高梨 聡	森林総研
P2-167	○	高野 雄太	秋田県大　院
P3-242	○	高野瀬 洋一郎	新潟大学
P3-044	○	高橋 明子	首都大
P3-023		高橋 一秋	長野大・環境ツーリズム
H1-09	○	高橋 一男	岡山大学 RCIS
P3-HS15		高橋 佳歩	晃華学園
J1-02		高橋 耕一	信州大学・理学部
J2-03	○	高橋 さやか	京大農
P2-288	○	高橋 大輔	京大・生態研センター
P1-307	○	高橋 雅雄	立教大・理・動物生態
P1-010	○	高橋 もなみ	新潟大・農
P3-244	○	高橋 佑太朗	江戸川大学
H1-11	○	高橋 佑磨	筑波大・生命環境
E1-03	○	高橋 大輔	長野大学環境ツーリズム学部
P3-214	○	高橋宏司	京都大学
P1-256		高橋鉄美	京大院理
C1-05	○	高畠 千尋	信州大学総合工学系
P1-243		高原 輝彦	総合地球環境学研究所
S08-2	○	高原 光	京都府立大学生命環境
S11-4		高宮 正之	熊本大・院・自然科学
P1-174	○	高村 健二	国立環境研
S07-3		高村 典子	国立環境研究所
P2-267	○	高柳 真世	東北大・院・生命科学

発表	懇	名　前	所　属
P3-086		滝 久智	森林総研
P3-207	○	滝 若菜	筑波大・院・生命環境
E1-12		瀧井 暁子	信州大・院・総合工学系
P1-206		滝口 晃	東京農工大・院・
T20-5	○	瀧本 岳	東邦大学・理学部
P2-156		武内 章記	国環研
P3-196	○	竹内 剛	京大・生態研センター
B1-08		竹内 亨	(財) 電力中央研究所
P2-123	○	竹内 史郎	北大環境科学
P1-149		竹内 史子	北海道大・院・環境科学院
P1-171		竹内 やよい	総研大 先導科学
E1-11	○	竹内 勇一	名大・理・脳機能構築学
P3-222	○	竹下 文雄	北海道大学水産科学院
G1-08	○	武島 弘彦	東大・大気海洋研
P2-081	○	武田 智	東大・農
P3-035	○	竹田 千尋	東京農工大・院
P1-272		武田 広子	東邦大・理
P1-097		武田 文彦	東北大・院・工学
P3-173	○	武智 玲奈	首都大・理工・生命
	○	竹中 明夫	国立環境研究所
H2-07	○	多胡 潤哉	龍谷大学理工学
P2-199		田島 文忠	シャープゲンゴロウモドキ保全研
P3-289	○	田島 裕介	筑波大・院・生命環境
		田副 雄士	京大　院　生命科学
		多田 満	国立環境研
P3-208	○	多田 泰紘	北大院・理
T12-2 P2-293	○	立木 佑弥	九大・シス生・数理
G1-09	○	立川 賢一	流域総合研究会
P2-344		立澤 史郎	北大・文・地域
		立田 晴記	琉球大・農
P1-106		立石 麻紀子	九州大学演習林
P1-304	○	立脇 隆文	麻布大・院・獣医
		田中 啓太	理研 BSI
H2-05	○	田中 健太	筑波大・菅平セ
P3-225		田中 幸一	農環研
		田中 弘毅	佐賀大学農学
T17-3	○	田中 晋吾	北大・CENSUS
P1-075		田中 格	山梨県森林総研
P2-324		田中 哲夫	兵庫県立大学
P2-002	○	田中 洋	京大院・地球環境学堂
I2-03	○	田中 宏卓	琉球大学農学部
H1-01		田中 洋之	京都大学霊長類研究所
P3-263		田中 幹展	東邦大学
P2-028	○	田中 悠希	鳥取大・院・農
F1-06	○	田中 嘉成	国立環境研究所
	○	田中 浩	森林総合研究所

発表	懇	名　前	所　属
P3-290	○	田辺 晶史	筑波大・院・生命環境科学
P1-262		田部 慧	北大・理
P3-293		田辺 力	熊本大教育
T07-2	○	田邊 優貴子	極地研
P3-167		谷 聡一郎	九大院・生防研
P1-181	○	谷垣 岳人	龍谷大学法学部
		谷川 真弓子	北海道大学
	○	谷本 麻衣	鳥大・農
P1-093	○	種子田 春彦	東京大・理・生物科学
P1-114	○	田畑 あずさ	北大・低温研
P3-122		田畑 諒一	京大院・理・動物生態
C1-06		田渕 研	東北農研
P1-323	○	玉田 克巳	道総研
P2-188	○	田村 英之	岐阜大・昆虫生態学研究室
P1-133		田村 明	森林総合研究所
P3-309	○	田村 光平	東京大学理学系
T22-1	○	陀安 一郎	京大・生態研センター
P1-279	○	丹野 夕輝	静岡大学農学部生態学研
P2-053		程　云湘	鳥取
I1-12	○	千谷久子	東大院・新領域
T14-4		千葉 聡	東北大・生命科学
P2-105	○	千葉 翔	山形大・院・農学
P2-248	○	千葉 晋	東京農大　生物産業
	○	千葉 知世	京都大・院・地球環境学舎
C1-13		千葉 幸弘	森林総研
P2-224	○	中馬 美咲	東京大・院・農学生命科学
P3-089		張 可	横浜国立大・院・環境情報
P3-093	○	築山省吾	滋賀県立大学　環境科学
D1-05	○	槻木 玲美	愛媛大　SRFC
P2-001	○	辻 かおる	京大院・理・動物生態
P3-205	○	辻 知香	岐阜大・院・連合獣医学
	○	辻井 達一	北海道環境財団
P3-194		辻野 昌広	岡山大・RCIS
S08-5		辻野 亮	地球研
P3-231		辻本 惠	総研大・極域
		津田 智	岐阜大流域研セ
P2-242		津田 大輝	東大・森林動物
I2-05	○	津田 みどり	九大院・農
P2-321	○	土金 慧子	東大・農
I2-02		土田 浩治	岐阜大学応用生物科学部
P3-253		土屋 一彬	東大院・農
P2-238	○	土屋 結	筑波大・生命環境
P2-284	○	土屋 雄三	京都大学理学
D1-09	○	都築 一秀	名城大学
I1-04	○	堤 道生	近中四農研セ
P1-199		廿楽 法	横浜国大・院・環境情報

発表	翌	名前	所属
		都野 展子	金沢大学理工研究域
P2-014	○	角田智詞	首都大院・理工
H2-02	○	椿 宜高	生態研センター
P3-116		椿 玲未	京大　人環
P3-198	○	坪井 美由紀	広島大・院・生物圏
F1-01	○	坪田 敏男	北大・獣医
P3-172	○	坪山 佳織	総研大・葉山
P2-037		津山 幾太郎	森林総研
P3-133		露崎 史朗	北大・院地球環境
P1-224	○	鶴井 香織	弘前大・男女共同参画
T22-3		鄭 峻介	北海道大・院・環境科学院
T11-3	○	手塚 あゆみ	東北大・院・生命科学
P1-215		寺島 大紀	新潟大・自然
		寺田 考紀	沖縄県衛生環境研究所
P2-259	○	寺田 千里	北大・環境科学院
P3-103		寺田 文子	道総研　林業試験場
P1-302	○	寺本 悠子	筑波大・院・生命環境
P1-264		照井 慧	東大院・農
P2-300		照井 滋晴	環境把握推進ネットワーク - PEG
F2-11		土居 秀幸	University Oldenburg
S13-3	○	東樹宏和	京大・次世代
P3-064		遠山 千景	名大院生命農
P2-024		富樫 朱美	北大　院　理
J1-13		富樫辰也	千葉大海洋バイオシステム
S03-6	○	時田 恵一郎	阪大サイバー
P1-070		徳田 奈菜子	信州大学　生物
P2-158		徳地 直子	京大フィールド研
P1-270		徳永 元	明治大学農学部
P2-236		戸崎 良美	酪農学園大・院
T16-4	○	戸田 光彦	自然環境研究センター
P1-018		十塚 正治	兵庫県立尼崎小田高等学校
P3-297	○	土畑 重人	琉球大学農学部
P1-096		飛田 博順	森林総研
P3-HS17		都丸 美保	群馬県立尾瀬高等学校
P2-255	○	富田 直樹	名城大学農学部
P1-317	○	富田啓介	名古屋大・環境
E1-09	○	富永 光	筑波大・院・生命環境科学
P1-124	○	冨松 元	国環研・生物
T14-1 P1-017	○	富松 裕	東北大・生命科学
D1-11	○	友常 満利	早稲田大・院・先進理工
		豊野 基	(財) 東京市町村自治調査会
P1-026	○	鳥丸 猛	弘前大・農生
	○	内藤 華子	石狩市役所
S06-3		内藤 和明	兵庫県立大・自然研
P2-027		直江 将司	京大生態研
S15-2	○	中野 伸一	京大生態研

発表	翌	名前	所属
T16-5 T08-2 T08-4	○	中井 克樹	滋賀県立琵琶湖博物館
P2-226		永井 牧子	日本大学
P1-019		中井 亜理沙	三重大院・生物資源
P2-305		長池 卓男	山梨県森林研
P1-278	○	中尾 遼平	近大院農
	○	仲岡 雅裕	北大・北方圏フィールド科学セ
P2-285	○	中川 さやか	東大・院・総合文化・広域
P3-039	○	中川 潤	滋賀県大
J1-11	○	中川 弥智子	名大・生命農
H2-09		中河 嘉明	筑波大院
P3-307		中桐斉之	兵庫県立大・環境人間
T06-3 C1-12	○	中越 信和	広島大・院・国際協力
T01-2	○	長坂 晶子	道総研林業試験場
		長坂 有	北海道林試
S04-2		長澤 和也	広島大生物圏
F2-08	○	仲澤 剛史	京大・生態研センター
P1-099	○	中路 達郎	北海道大学
P3-182		中下 留美子	森林総研
P3-165		中島 亜美	東京農工大学・連大
T15-1		中嶌 一憲	兵庫県立大学
P1-120		長嶋 寿江	東北大・院・生命科学
P2-159		中島 美由紀	道さけます内水試
P1-069	○	中瀬 悠太	京大院・人環
P1-091		中田 望	首都大院・理工・生命
P1-220	○	中田 兼介	東京経済大学
P3-065		長田 賢志	筑波大学院
H1-06	○	長太 伸章	京都大・理
S06-4	○	永田 尚志	新潟大・超域
P1-178		永田 優子	神戸大学発達科学部
A2-07		中塚 彩人	北大　環境科学院
P3-252	○	中坪 あゆみ	北里大・院
	○	中坪 孝之	広島大・院・生物圏
P1-198	○	中西 康介	滋賀県大・環境科学
T03-4 J2-01	○	永野 聡一郎	東北大・院・生命科学
I1-11		中野 大助	電力中央研究所
P2-264	○	永野 真理子	東大・総合文化
P2-013	○	長野 祐介	信州大・理・生物
P3-004	○	中野 陽介	広島大・院・総合科学
P3-011	○	中野 陽介	新潟大学・院・自然科学
		長野 義春	越前市エコビレッジセンタ
S02-1	○	永松 大	鳥取大・地域
G2-05	○	中丸 麻由子	東工大・社理工
P3-191	○	中道 康文	九州大学理学研究院
P2-091		永光 輝義	森林総合研究所森林遺伝
P2-012		中村 あずさ	岐阜大学　応用生物科学

発表	翌	名前	所属
P3-054		中村 和輝	東京農業大学
P3-215	○	中村 早寿	富山大院・理工
P1-064		中村 祥子	北海道大学環境科学院
P1-313		中村 大輔	岐阜大・連農
P1-032		中村 隆俊	東農大・生物産業
C2-06	○	中村 琢磨	横浜国大院・環境情報
P3-048		中村 隼人	筑波大学
		中村 太士	北海道大学
S03-2	○	中村 誠宏	北海道大学
P3-068		中村 元香	東大　理
		中村 幸人	東京農大・地域環境・森林
P1-208		中村光一朗	育林保護学研究室
	○	中村 こずえ	鳥取大・農
A2-04	○	永山 滋也	独）土木研究所
P2-041		中山 智絵	茨城大・院・理工学
P2-192		中山 直紀	宇都宮大学農学
P1-050	○	中山 晴夏	新潟大・院
P3-HS18		永山 陽子	群馬県立尾瀬高等学校
T09-1		中山 慧	岡山大院・環境
P1-049	○	中山 新一朗	東大・院・総文
P3-266		南雲 未智	北大・環境科学
P2-088		名波 哲	大阪市立大学
		鍋嶋 絵里	東京農工大学
P2-187		鍋屋耕平	筑波大・院・生命共存
P2-221		南波 興之	北大　低温研
P2-252		新妻 靖章	名城大学農学部
P1-022	○	新山 馨	森林総合研究所　東北支所
P1-283		西 順平	長野大環境ツーリズム
P3-236		西尾 孝佳	宇都宮大・雑草セ
S06-1	○	西川 潮	新潟大・超域
T14-5		西川 雄太	東大・生物多様性科学
P2-110	○	西川 洋子	道総研･環境科学研究センター
P1-318		西沢 徹	国立環境研・生物
P3-080		西澤 誠	三重大学生物資源学部
P2-289		西嶋 翔太	東大・農・生物多様性
P3-070		西田 圭佑	京都工芸繊維大学
S16-1	○	西田 貴明	三菱UFJリサーチ&コンサルティング
T05-7 I1-07	○	西田 隆義	滋賀県立大・環境生態
P1-090		西谷 里美	日本医大・生物
P1-167		仁科 一哉	農環研
		仁科 健二	道総研地質研究所
P3-248		西原 昇吾	東大・農学生命科学
A2-02	○	西廣 淳	東京大学農学生命科学
P3-144	○	西村 愛子	中央農研
P3-115	○	西村 龍彦	滋県大・環
J1-04	○	西村 尚之	群馬大・社会情報

発表	翌	名前	所属
	○	西村欣也	北大・水産
H2-08	○	西本 孝	岡山県自然保護センター
P1-063	○	日下石 碧	神戸大・院・人間発達環境学
T09-3	○	新田 梢	九州大・理
P3-156		入戸野太朗	九州大・院・システム生命
F2-04	○	丹羽 慈	自然環境研究センター
P1-341		丹羽 真一	（株）さっぽろ自然調査館
P2-170	○	庭野 裕	東邦大院・理・生物
G1-12		丹羽洋智	中央水産研究所
F2-10	○	沼田 真也	首都大　都市環境
		根岸淳二郎	北大　院　地球環境
P2-261		根本 頼子	東北大・院
P3-102		野上 達也	石川県白山自然保護センター
P1-008		野草 俊哉	京都大学農学森林科学
P2-126	○	野口 英之	森林総合研究所
P1-117		野口（舟山）幸子	東大・院・理・生物科学
G2-02	○	野下 浩司	九大院・システム生命
		野田 隆志	農業生物資源研究所
S03-1	○	野田 隆史	北大・地球環境
P1-103	○	野田 響	筑波大・生命環境
P3-175	○	野林 真麻	九大　システム生命科
T15-2		野原 克仁	東北大学
P1-321	○	野原 精一	国立環境研究所
T08-3 J1-09	○	野間 直彦	滋賀県立大
P3-159	○	野間野 史明	北大・環境科学
P3-046		野村 拓真	京大・農・森林生態
P2-078	○	野本 和宏	北大院環境科学
P2-338		野呂 恵子	明大・農
P3-020	○	半谷 吾郎	京都大学霊長類研究所
I2-13	○	河 鎮龍	信州大山岳科学総合研究所
P3-127	○	萩原 佑亮	京大院・農
P3-003	○	萩原 陽介	首都大・理工・生命
P2-151		橋本 みのり	横浜国大　環境情報
P3-090	○	橋本 啓史	名城大・農
P2-179		橋本 友里恵	宇都宮大院
S16-3 T10-2	○	橋本 佳延	兵庫県博
P3-201	○	長谷 和子	東大院・総合文化
		長谷川 理	エコ・ネットワーク
P3-184	○	長谷川 功	水研センターさけますセンター
P3-300	○	長谷川 成明	北大・低温研
P1-214	○	長谷川 尚志	京大生態研
P2-152		長谷川 夏樹	水研セ・北水研
P2-271	○	長谷川 克	筑波大・生命環境
P2-202		長谷川 元洋	森林総研・木曽
P1-141		長谷川 由布子	北海道大・院
	○	長谷川 一総	鳥取大・農

発表	懇	名前	所属
P1-326	○	畑 憲治	首都大院・理工・生命
		羽田 厚	岩手県農業研究センター
P2-045		畠瀬 頼子	(財) 自然環境研究センター
P1-351		畑田 彩	京都外国語大学
P1-311		畑中佑紀	京大・院・農
P3-085	○	羽田野 真由美	筑波大学生物資源学類
A2-09		蜂谷 菜保子	北海道大学　環境科学院
F1-10		服部 昭尚	滋賀大・教育・理数情報
P1-260	○	服部 充	信大・理・生
	○	花岡創	林木育種センター
P1-308	○	馬場 俊介	東京大・院・農学生命科学
P2-235		馬場 孝	滋賀県立大・環境科学
E1-02	○	馬場 成実	九大院・生防研
P1-173	○	馬場 友希	農環研
P2-307		浜崎 健児	農環研
S15-1	○	浜崎 恒二	東大大気海洋研
		浜中 智美	東邦大学
P3-109	○	早坂 大亮	(独)国立環境研究所
C1-09		林 珠乃	龍谷大・里山学研究センター
	○	早矢仕 有子	札幌大学法学部
P3-268		林 雄太	東京農工大・院・植生管理
B2-13	○	林 豊	清水建設 (株)
P2-263	○	林 亮太	千葉大・自然科学
P2-087		林 竜馬	京都府大院・生命環境
P3-009	○	早船 琢磨	北大・院・環境科学
P3-HS10		原 悠歌	ノートルダム清心学園 清心女子高
T22-5	○	原口 岳	京大生態研
P3-007	○	原澤 翔太	京都大・農
P1-033		原田 剛	大阪市立大・院・理学生物地球
P3-211	○	原田 彩知子	北海道大・院・水産科学院
T09-5 P1-227	○	原野 智広	九大院・理・生態科学
T02-2 P2-038		原 正利	千葉中央博
P1-078		原山 尚徳	森林総研
P3-079		春田 岳彦	三重大学生物資源学部
P3-314	○	伴 修平	滋賀県立大学
B2-09	○	伴 武彦	東京農工大・院・連合農
		韓 慶民	森林総研
	○	半場 祐子	京都工芸繊維大
P3-029	○	日浦 勉	北大苫小牧研究林
T06-2 P3-101	○	比嘉 基紀	森林総研・植物生態
P1-353	○	東 敬義	三重県立図書館
P2-295	○	東 広之	京大・人環
G2-01	○	東浦 康友	東京薬大・生命科学
P1-294	○	東出 大志	新潟大院・自然科学
P1-337		東山 優	岩手大学
P2-225		日隈 慶子	大学
P1-127		彦坂 幸毅	東北大・院・生命科学
S16-2 T23-2	○	日鷹 一雅	愛媛大学農学部
F2-01	○	兵藤 不二夫	岡山大・異分野コア
P3-258		平井 茉美	東邦大学
P1-066	○	平岩 将良	東邦大・理
P3-310	○	平尾 章	筑波大・菅平セ
T19-2		平尾 聡秀	東大・秩父演習林
P3-313		平岡 宏一	森林総合研究所
P2-184	○	柊 雅実	東邦大・院・理学
P3-069		平嶋 善宣	筑波大学
P1-036		平田 晶子	森林総研
P2-146		平田 聡之	北大・北方セ
P2-209		平田 令子	宮大・農
P1-023	○	平舘 俊太郎	農環研
		平田 弘成	農林水産省
F1-05	○	平野 真聡	信州大学　理学部
		平野 高司	北大院農
	○	平山 大輔	三重大・教育
S05-1	○	平山 寛之	九大・理・生態
P1-322	○	広木 幹也	国立環境研
		弘重 穣	東京農工大学農学部
P1-062	○	廣田 峻	九州大・生物
		廣田 充	筑波大・生命環境
		廣部 宗	岡山大・院・環境
T04-2	○	深澤 圭太	自然環境研究センター
P1-185		深澤 遊	東北大院・農・生物共生
P1-280		深田 ちひろ	神戸大・院
P3-295	○	深野 祐也	九大　理
P1-007		深町篤子	東京農工大学農学府
S01-1	○	深谷 肇一	北大環境科学院
G2-08	○	福井 眞	京大・生態研センター
B2-01		福井 大	森林総研北海道
	○	福井 学	北大　低温研
P1-122	○	福島 慶太郎	京大フィールド研
P1-232	○	福島 路生	国立環境研
D1-03	○	福田 栄二	広島大・院・生物圏
		福原 るみ	北海道大学環境科学院
P3-030		福本 浩士	三重県林業研究所
S12-4		福森 香代子	テキサス大
H2-10		福山 朝子	埼玉大学院理工
P1-053		冨里 祐介	東北大理
P3-129	○	藤井 暁子	岡山大学・自然科学
P1-207	○	藤井 佐織	京都大・院・農学
P1-327		藤木 大介	兵庫県立大・自然研
D2-05	○	藤澤 貴弘	大阪府大院・生環・昆虫

発表	懇	名 前	所 属
	○	藤田 志歩	山口大・農
B1-09		藤田 昇	地球研
S07-5		冨士田 裕子	北大フィールド科学センター
P3-037	○	藤田 真梨子	神戸大昆虫機能学研究室
P2-026		藤津 亜季子	東京農工大・院
		藤沼 潤一	北大・環境科学院
P1-147		藤林 恵	東北大・院
P1-290		藤巻 亮	東邦大学
P3-024	○	藤山 直之	北海道教育大学旭川校
T03-2		布施 直之	京大・理・GCOE
P2-112		船田 涼子	自然化科学
	○	船津 勇一	大分県教育センター
P3-062	○	舟橋 史晃	京都大学農学
P1-299	○	布野隆之	新潟大・院・自然科学
P3-152	○	古市 生	九大・理・生態
P3-298		古川 桂子	信州大・理・生物
T02-3 T18-3	○	古川 拓哉	横浜国大・環境情報
P3-250		プレブスレン ツェデンダンバ	酪農学園大・院・酪農学
P3-028		別宮（坂田）有紀子	都留文科大学
	○	別所 和博	シス生
	○	別府 愛	名城大学
C2-11		鮑 娜仁高娃	横浜国立大学
E2-06	○	北條賢	琉球大学農学部
P1-194	○	保坂 哲朗	広島大
P3-216	○	星 真大	茨城大学・院・理工
P3-025	○	星崎 和彦	秋田県立大・生物資源
P2-083		星野 彰太	東北大生命科学・植物生態
C1-01		星野 仏方	酪農学園大学・環境
P2-346		星屋 明孝	岐阜大・応
T21-4 P2-134	○	細 将貴	東北大・生命科学
P2-166		細川 慎太郎	近畿大・院
P1-144	○	細川 奈々枝	信大農
P2-030		細川真也	港空研
P1-319		細木 大輔	(独) 農業環境技術研究所
P3-287		細田 一史	大阪大・情
P3-HS04		朴田 瑞季	北海道富良野高等学校
D2-02		保原 達	酪農大
P1-028		保要 有里	北大・環境科学院
		堀 正和	水産総合研究センター
P2-335	○	堀江 玲子	宇都宮大・農
G1-01	○	本郷 峻	京都大・理
P3-269		本田 美里	京都大学農学部森林科学科
P2-011		本田 薫	岐阜大・教育
T04-1		本田剛	山梨県総合農業技術センター
J2-04	○	本坊 美穂子	石川県立大学　植物生態学

発表	懇	名 前	所 属
T13-5	○	本間浩昭	毎日新聞・根室
P3-012		本間 祐希	北教大・札幌・生物
		真板 英一	(独) 国立環境研究所
P3-277		前川 恵美子	神戸大・人間発達環境学
	○	前川 清人	富山大院・理工
	○	前川 諒	北大・院・環境科学
		前迫 ゆり	大阪産大・院・人間環境
P3-013		真栄城 亮	横浜国立大学　環境情報
P3-278	○	前角 達彦	東大院・農
P3-060	○	前田 久美子	東邦大学　理学部
P1-287		前田 沙織	信州大・院・農学緑地生態
J2-12	○	蒔田 明史	秋田県大・生物資源
P1-135		牧田 直樹	京都大・院・農学
S13-2 T11-2	○	牧野 能士	東北大院 生命科学
	○	牧野 渡	東北大・生命科学
P1-172	○	真坂 一彦	道総研　林業試験場
P3-043	○	正木 隆	森林総合研究所
F1-02		正富 宏之	NPO・タン保研
B1-12		正富 欣之	北大院・農
P2-174		益子 美由希	筑波大院・生命共存
P2-143		真嶋 光一郎	京都大学農学
P3-010	○	間島 翔	首都大・理工・生命
		増沢 武弘	静岡大理学部生物科学
P1-058		増田 光	富山大理工学教育部
P2-092		増田 理子	名古屋工業大学・しくみ
P1-151	○	増田 莉菜	早稲田大学・人間科
P1-229		増間 拓也	長岡技術科学大学
P3-081		町野 諭	東北大・院・生命科学
A2-11		町村 尚	大阪大・工
S05-3	○	松島 俊也	北大・院理・生物科学
P3-147	○	松井 淳	奈教大・生物
P1-246		松井 彰子	京都大学
P3-001		松井 萌恵	首都大学東京・理工
P1-188	○	松浦 克美	首都大・生命
E2-10	○	松浦 健二	岡山大・院・環境学
P3-087	○	松浦俊也	森林総合研究所
P1-180		松尾 歩	東北大・院・農学
		松尾 奈緒子	三重大生物資源
P1-143	○	松岡 かおり	東京農工大・連合農
D2-03		松岡 俊将	京大　生態研
P3-045		松岡 宏明	筑波大　生命環境
P1-024	○	松木 悠	東大ア生セ
P3-195	○	松木 吏弓	電中研・生物
B1-11		松木 佐和子	岩手大学農学部
P3-126	○	松倉 君予	東邦大院・理
B2-04	○	松崎 慎一郎	国立環境研究所

発表	懇	名 前	所 属
P1-267		松下 遼太	信州大・農
P1-203		松島 綾子	富大院・理工
P2-349	○	松島 野枝	東北大・生命科学
S02-4 T24-4	○	松島 肇	北海道大・院・農学研究院
E1-07	○	松田 亜希子	東大・農・生物多様性
A2-08	○	松田 裕之	横浜国立大学
P3-246		松橋 彩衣子	東北大・院・生命科学
P3-291		松林 圭	北大・地球環境
P3-249		松原 奈央	酪農学園大・院・ 酪農学
		松久 聖子	岐阜県立森林文化アカデミー
P3-HS12		松村 茉莉子	富山県立砺波高等学校
P2-196		松本 幸二	新潟大院自然研
P1-292	○	松本 さおり	新潟大学農学部
	○	松本忠夫	放送大学
P2-315	○	松山 周平	大阪市大・理
T01-1	○	間野 勉	道総研 環境科学研究センター
P2-217	○	真野 浩行	環境研
		間宮 渉	北方フィールド科学センター
P2-155		馬谷原 武之	日本大・院・生物資源科学
P2-212		丸山 敦	龍谷大・理工
S04-6	○	三浦 収	京都大学地球環境学堂
C1-03		三浦 佳林	横浜国大・院・環境情報
H1-12	○	三浦 徹	北大・院環境
P3-110		三浦 季子	横浜国大院・環境情報
P3-099		三上 光一	農環研・生物多様性
G2-06	○	三木 健	台湾大海洋研
C2-03		右田 千春	森林総研
P3-254		美齊津 裕太	長野大学環境ツーリズム
A1-10	○	三島 慎一郎	(独)農業環境技術研究所
	○	三島 大	鳥取大学 農学部
P3-057	○	水崎大二郎	千葉大・院・園芸学
P1-057		水澤 玲子	京大(農)
P2-096	○	水谷 瑞希	福井県自然保護センター
T07-3 P3-284	○	水野 晃子	総合研究大・院
P3-197	○	水野 聖子	岡山大・院・自然科学
P2-244	○	道前 洋史	北里大学薬学部
P1-312		道本 久美子	神戸大・人間発達環境
P2-277	○	三井裕樹	京大・院・人環
T15-4		三橋 弘宗	兵庫県立大自然研
P2-095	○	満行 知花	九州大学理学府
P3-019		皆川 礼子	東京農業大学
S06-6		南 眞二	新潟大学
P2-154	○	南 浩史	遠洋水研
P3-HS03		南川 勇大	北海道富良野高等学校
P3-058	○	南野 亮子	東大院理・日光植物園
P3-178		南 佳典	玉川大・農

発表	懇	名 前	所 属
H1-03	○	源 利文	地球研
T23-3	○	嶺田 拓也	農研機構・農工研
P2-008		箕浦 哲明	名古屋大学農学部
P1-196	○	簔島 萌子	帯畜大
		三村 泉美	琉球大学理工学
P3-141	○	宮内 大策	横浜市立大学
		宮内 泰介	北海道大学
P2-265	○	宮川 一志	北海道大学 院・環境科学
P1-067		宮崎 寧子	筑波大院・生命共存
S14-1	○	宮崎 祐子	北大・環境科学
F1-08		宮崎 佑介	東大院・農
P3-311	○	宮崎 智史	北大・獣・寄生虫
P3-294	○	宮澤 清太	阪大・院・生命機能
J2-07		宮沢 良行	九大東ア環研機構
P3-160		宮澤絵里	首都大・理工・生命
P1-100	○	宮下 彩奈	東大・院・理・日光植物園
P1-238		宮下 太輔	弘前大・院
P3-235	○	宮下 直	東大・農・生物多様性
S10-2	○	宮竹 貴久	岡山大
D1-07	○	宮地 俊作	生物生物資源科学部
		宮西 あずさ	奈良女子大学理学部
		深山 貴文	森林総合研究所 関西支所
		宮本 麻子	森林総研
B2-10	○	三輪 隆	(株)竹中工務店
P2-341	○	向井 貴彦	岐阜大学地域科学部
P2-213	○	向井 康夫	京大・地環
G1-06		向 草世香	JST さきがけ・長大水産・琉大
P2-007	○	村井 歩	北海道教育大学旭川校
P1-088	○	村岡 裕由	岐阜大・流域圏セ
P2-118	○	村尾未奈	東京農業大・農学林学
T16-1 T08-1	○	村上 興正	京都精華大学
P1-154	○	村上 和隆	筑波大学
P1-315	○	村上 貴弘	北教大・環境科学
T19-3		村上 正志	千葉大学理学研
P2-054		村上 雄秀	IGES 国際生態学センター
P3-051		村上 由貴	岡大院環境
P3-071		村田 直樹	鳥取大学連合農学
P2-080	○	村田 麻理恵	鳥取大・院・地域
P2-272		村西 周平	名古屋大・院・生命農
		村松 康一	北海道大学 農学部
P3-312	○	村山 美穂	京大野生動物研究センター
T02-4		目黒 伸一	国際生態学センター
T12-4	○	舞木 昭彦	九大理
		持田 誠	帯広百年記念館
P3-148		持田 幸良	横浜国立大学教育人間科学部
B1-13	○	望月 翔太	新潟大学・院・自然科学

発表	翌	名前	所属
P2-077	○	米森 舞乃	酪農学園大
B2-05	○	森 敬介	国立水俣病総合研究センター
		森 さやか	東大・農 / 日本野鳥の会
P1-118		森 千佳	奈良女大・理
S03-4	○	森 照貴	自然共生研究センター
E1-08	○	森 貴久	帝京科学大学
P2-282	○	森井 悠太	東北大院・生命
	○	森 生枝	岡山県自然保護センター
P2-067	○	森口 紗千子	国立環境研究所
S12-2	○	森 茂太	森林総合研究所
F1-03		森田 健太郎	水産総合研究センター
P3-260		森田 沙綾香	農環研
P3-299		森田 由香里	大阪府立大院
P3-016		森戸 寛	岐阜大院・応用生物
P1-021	○	森長 真一	東大・総合文化
P1-031		森広 信子	なし
T01-5		森本 淳子	北大院農
I1-02	○	森本 信生	中央農研
	○	森本元	立教大・理
P3-272		森谷 佳晃	北大院農
P3-047		森山 生樹	名大院生命農
P3-224	○	諸岡 史哉	茨城大・理
H1-07		八尾 泉	北大・農・昆虫体系
P3-095		矢ヶ崎 朋樹	IGES- 国際生態学セ
S12-3	○	八木 光晴	九大・院・農／長大・水
P1-153		八木岡 敦	茨城大学
P1-186		矢久保 允也	信州大学理学部生物
P1-329		八坂 通泰	道総研林業試験場
P1-082		矢崎 健一	森林総合研究所
P3-303		八島 健太	総合研究大学院大学
P3-HS16		谷島 由季乃	群馬県立尾瀬高等学校
P2-222		矢島 良紀	土木研究所
P2-147		八代 裕一郎	岐阜大・流域セ
P2-057		安田 泰輔	山梨県環境科学研究所
	○	安田 千晶	北海道大学　水産科学院
		安富 亮平	さけます・内水面水産試験場
P2-102	○	安元 暁子	京都大学・生態研センター
S07-1	○	谷内 茂雄	京大生態研
P1-296		谷地 俊二	横浜国大院環境情報
P3-282		柳 貴洋	長野大学環境ツーリズム学部
P2-094		柳沢 直	岐阜県立森林文化アカデミー
P3-111		柳原 祐一	酪農学園大・院
		矢野 優佳	琉球大・院・理工学
P1-183		藪田 泰基	信州大学・理・生物
P1-276	○	藪原 佑樹	北大院・農
		矢部 和夫	札幌市立大学デザイン
P3-HS02		山内 美代	北海道富良野高等学校
P2-169	○	山内 悠司	東京大・院・総合文化
P2-312	○	山浦 悠一	北大・農
P3-022	○	山尾 僚	鹿児島連大
P3-HS07		山川 芳樹	北海道旭川農業高等学校
J2-10	○	山岸 洋貴	弘前大・白神
P3-179		山北 剛久	森林総合研究所
P1-003		山口 紘史	東北大学理学部生物学
P3-261	○	山口 翔	静岡大学農学部生態学
P1-109	○	山口 大輔	信大農
T03-1		山口 貴大	基礎生物学研究所
P3-HS01		山口 博志	岐阜県立岐山高等学校
P2-269		山口 正樹	京大生態学研究センター
P3-186		山口 恭弘	中央農研
P3-002		山口 由真	岡山大・院
P3-112		山口 和香子	東北大・院・生命科学
P2-004	○	山口芽衣	筑波大学　生資
P2-018		山崎 絵理	京大生態研
P3-221	○	山崎 和久	岐阜大院・昆虫生態
P3-183	○	山崎 裕治	富山大・院理工
P2-025		山崎 良啓	京大院・農
P2-331	○	山崎 亙	広島大・院
P2-290	○	山崎 崇広	農工大・農
P1-252		山崎 理正	京大院・農
		山路　恵子	筑波大院・生命環境
T22-6		山下 洋平	北海道大学
	○	山下 聡	京都大学　地球環境学堂
P3-247		山下 直子	森林総研関西
P1-332		山瀬 敬太郎	兵庫農技総セ
	○	山田 俊弘	広島大・院・総合科学
P3-238	○	山田 勝雅	千葉県水産総合研究センター
P2-082	○	山田 啓介	横浜国大・院・環境情報
P3-306	○	山田 翔一	北大・環境科学院
P3-189		山田 晋也	静岡県農林技術研究所
P1-268	○	山田 敏也	北大・環境科学院
T16-2		山田 文雄	森林総研
P3-HS11		山田 裕貴	愛媛大学付属高等学校
P2-273		山田 歩	東邦大学
P2-069	○	山中 聡	北海道大学農学院
F1-09		山中 信彦	東大院・農・森林動物
P2-251	○	山中 裕樹	龍谷大学理工学部
P1-042		山根 理紗子	首都大・理工・生命
T07-4 T11-1	○	山道 真人	総研大・生命共生体進化学
E2-11	○	山村　則男	総合地球環境学研究所
P2-132		山本 昭範	農業環境技術研究所
P2-240	○	山本 和司	広島大・院・生物圏

発表	翌	名前	所属
P3-131		山本 京祐	東大院・農生科
S16-4		山本 清隆	(財) 東京市町村自治調査会
P2-124	○	山本 浩大	奈良教育大学・生物
H2-03		山本 哲史	京都大　院　理
S15-4		山本 啓之	海洋研究開発機構
P1-087	○	山本 福壽	鳥取大学農学部
	○	山本 麻希	長岡技科大・生物
P1-310		山本 康仁	東京農工大学　大学院
P1-257	○	山本 結花	岡大院・環境・昆虫生態
P3-021		八代田 千鶴	森林総研
P1-123		楊 霊麗	岡山大・院・環境学
		遊佐 陽一	奈良女子大
P3-161		油田 照秋	北海道大学環境科学院
P2-318		湯谷 賢太郎	木更津高専環境都市
P2-339		柚原 剛	東邦大・院・理
S08-1 S08-6	○	湯本 貴和	総合地球環境学研究所
S02-2		由良 浩	千葉県生物多様性セ / 中央博
P1-132	○	横井 力	長野県環保研 / 信大・院・山岳
B1-03	○	横川 昌史	京都大院・農
P1-068	○	横田 静香	九大・理・生態科学
		横田 啓	岩手県農業研究センター
T15-3 I1-01	○	横溝 裕行	国環研
P3-083		横山 将大	富大院・理工
P2-327	○	横山 真弓	兵庫
P3-318	○	横山 良太	北大 FSC
A1-11	○	吉岡 明良	東大院・農学生命
P3-042	○	吉川 徹朗	京都大・院・農学
P2-256		吉川 朋子	玉川大・農
S02-5		吉崎 真司	東京都市大学環境情報学部
P3-217		吉澤 樹理	岐阜大・院・昆虫生態学
P1-328		吉田 勝彦	国立環境研・生物
I1-06	○	吉田 圭一郎	横浜国大・教育人間
S07-4	○	吉田 丈人	東大・総合文化
P1-344		吉田 俊也	北海道大学北方生物圏 FSC
	○	吉田 正人	筑波大学
		吉田 洋	山梨環境研
P1-187	○	吉竹 晋平	早稲田大・院・先進理工
P3-091	○	吉田 剛司	酪農学園大学
T20-2		吉原 佑	東北大学農学
P2-186		義久 侑平	酪農学園大・院
P2-142		吉藤 奈津子	京大・農
P2-198		吉村 真由美	森林総合研究所　関西支所
P3-218	○	吉村 美穂	富山大院・理工
F2-09		吉村 謙一	神戸大　自然科学
J1-08		吉本 敦子	金沢大・院・自然科学生命

発表	翌	名前	所属
T07-1 T12-1	○	吉山 浩平	東京大学
P3-209		淀井 智也	北大院・環境科学
P1-140	○	米川 修平	森林生態系管理学研
P1-158		米田 聡美	京大院・農
		萬屋 宏	(独) 野菜茶業研究所
P2-047		李 晟齊	横浜国立大・院・環境情報
P1-006	○	李 強	横浜国立大学環境情報
P2-350		李 敏	筑波大学
P1-316		林木 悠佳里	兵庫県立大学環境人間学部
D1-10		和穎 朗太	農業環境技術研究所
T06-1 C2-10		若松 伸彦	東京農大・地域環境
	○	鷲谷 いづみ	東京大学農学生命科学
P1-228		和田 哲	北大・水産
P1-037		和田 直也	富山大極東地研
P1-201		和田 葉子	奈良女子大・理・生物科学科
P1-137		和田 佳子	大阪市大・理
P2-245		和田 恵次	奈良女子大学
P1-204	○	和田慎一郎	東北大・院・生命科学
T10-4 P1-340		渡辺 修	㈱さっぽろ自然調査館
T23-4 P2-042		渡邉 修	信州大学農学部
P2-020		渡邉 謙二	横浜国立大学環境情報学府
P2-079	○	渡辺 健太郎	北海道大学厚岸臨海実験所
P1-051		渡部 俊太郎	滋賀県大環境科学
P2-182		渡辺 昌造	兵庫県立大院・環境人間
P1-101		渡辺 信	琉球大学
P2-162		渡辺 真也	早稲田大・院・先進理工
P3-219	○	渡邊 大	富山大院・理工
P2-071		渡辺 太一	信州大・農・森林科学科
P1-245	○	渡辺 なつ樹	東京農工大学　農学府
P2-218		渡辺 展之	㈱さっぽろ自然調査館
P2-062		渡邉 晴子	信州大・農
P3-142		渡邉 仁志	岐阜県森林研
P1-309		渡辺 裕也	名大院生命農
P2-068	○	渡辺 麻気	広島大・院・国際協力
P1-107		渡辺 誠	北大院農
P1-047		渡邉 愛美	東京農大・院・林学
	○	渡辺 守	筑波大学生物科学系
G1-10		渡辺 通人	河口湖フィールドセンター
P1-269		渡辺 洋一	名大・院・生命農
P3-034	○	渡辺 陽子	北大 FSC
P2-223		渡邊 良祐	信州大学農学部
P3-256	○	渡邉絵里子	横浜国立大・環境情報
D1-08	○	綿貫 豊	北大水産
S11-6	○	渡部 靖之	(株) 情報科学テクノシステム
T20-4		王 喆	東大・院・農・保全生態

発表	慇	名前	所属
P1-113		AILIJIANG MAIMAITI	鳥取大・院
P1-072		Almaz BORJIGIDAI	Minzu University of China
A1-03		Andreas Johannes Langner	Kyoto University
S09-4	○	Anten Niels	Utrecht University
E2-05	○	Bourguignon, Thomas	Hokkaido University
P2-084		Brando Cabigas Razon	Hiroshima Univ.
P1-345		Byun, Jae-Gyun	Korea University
P1-190		Chang, Yoon-Seok	Postech
P3-150		Chaturaphatranon Kanang	Tokyo Institute of Technology
S14-4		Crone, Elizabeth	Harvard Forest
P1-339		Cui Guishan	Korea University
P3-055		Deshar Rashila	University of the Ryukyus
P3-104		Efsa Caesariantika	IDEC-Hiroshima University
B2-07		FIRDAUS, RACHMAD	IDEC - Hiroshima University
P2-065		Hon, Jason	Kyoto University
P2-086		Ima Yudin Rayaningtyas	IDEC Hiroshima University
P1-061		Jahir Raihan	岐阜大学連合農学
S03-3	○	Jason E. Tanner	SARDI
P2-085		JOHAERUDIN	IDEC Hiroshima University
P3-105		Jonh Piter Garoga Lubis	IDEC - Hiroshima University
B2-08	○	Karlina Indraswari	Kanazawa University
C1-08		Kaswanto	Hiroshima Univ.
P2-153		Kim, Choonsig	Gyeongnam Nat. Univ. of Sci & Tech
S14-3	○	Koenig, Walter	Cornell University
A2-10	○	Lee Joung Hun	九州大学・理
P1-346		Lee, Sangchul	Korea Univ.
P1-146		Liang Maochang	Hokkaido University
C1-10		Luis Alberto Vega Isuhuaylas	横浜国立大・院・環境情報
S04-1	○	Mark Torchin	スミソニアン熱帯研究所
P3-257		Mitra Priyanka	Yokohama National Univ.
J2-06		Muller, Onno	Hokkaido University
P3-017		Nachinshonhor G.U.	総合地球環境学研究所
T22-4		Popova, Alexandra	Hokkaido University, GSES
J1-01		Rosleine, Dian	Student
P3-056		Sharma Sahadev	Univ. Of the Ryukyus
J2-09	○	Shefferson, Richard	University of Georgia
H1-05	○	Sievwright, Holly	University of Tokyo
S09-3	○	Sterck Frank	Wageningen University
P1-148		Sundari Siti	北大院農
P1-052		Sunmonu Azizat Idowu	Hokkaido Univ
P1-338		Yoo, Seongjin	Korea Univ.
P3-125		Zhang jian	Tottori University

(2010 年 12 月 10 日登録分まで)

本大会は、下記の企業・団体の皆様から、広告・展示協賛のご協力をいただきました。
ここにお名前を掲載し、御礼を申し上げます（敬称略、五十音順）。

広　告

株式会社　昭和堂
株式会社　地人書館
株式会社　文一総合出版
共立出版株式会社
久保川イーハトーブ自然再生研究所
パシコ貿易株式会社
メイワフォーシス株式会社
有限会社　さくま書店
有限会社　麻里府商事
Wiley-Blackwell

展　示

一般社団法人　京都大学学術出版会
エコ・ネットワーク
株式会社　海游舎
株式会社　日本ヴォーグ社
株式会社　文一総合出版
共立出版株式会社
旭光通商株式会社
財団法人　東京大学出版会
シュプリンガー・ジャパン株式会社
東海大学出版会
特定非営利活動法人　生態工房
ナモト貿易株式会社
日本環境計測株式会社
北海道大学出版会
有限会社　さくま書店
Wiley-Blackwell

第 58 回日本生態学会全国大会 プログラムの変更と訂正

2011 年 1 月 11 日作成
日本生態学会大会企画委員会

本表に掲載された訂正は大会の公式記録として残ります。掲載されるのは，次の 3 つの場合のみです。
1. 講演タイトルの訂正（途中で切れているなど、講演内容が分からないほどの大きな誤りがあるものに限る）
2. 著者の追加や削除
3. 著者の氏名の誤りの訂正

タイトルの誤字・脱字、字句の修正、著者の所属の抜け・誤りなどの訂正は、掲載いたしておりません。

シンポジウム

企画者の追加・訂正

S-13　適応進化を制限する機構：気候変動下での生物多様性研究への示唆
（誤） 企画者: 東北大学生命科学
（正） 企画者: 河田雅圭（東北大学生命科学）

著者の追加・訂正

S12-4　高次階層システムとしての生態系メタボリズムを駆動するメカニズムは何？
サイズスケーリング vs ストイキオメトリー
（誤） *福森香代子（テキサス大），酒井陽一郎，西松聖乃，陀安一郎，奥田昇（京大・生態研）
（正） *福森香代子（テキサス大），酒井陽一郎，西松聖乃，陀安一郎（京大・生態研），近藤倫生（龍谷大・理工），奥田昇（京大・生態研）

一般講演

演題の訂正

P1-070
（誤） ツリフネソウ
（正） ツリフネソウ-キツリフネ間における繁殖を巡る相互干渉　～受粉から結実まで～

著者の追加・訂正

A2-09　知床国立公園における交通シミュレーション
（誤） 北海道大学　環境科学院
（正） *蜂谷菜保子(北大・環境科学院)，愛甲哲也(北大・農学研究院)，庄子康(北大・農学研究院)，西成活裕(東大・先端科学研究センター)，佐竹暁子(北大・創成科学)

A2-11　生態系から見る人間活動－「生態系サービス利用」の提案
（誤） *町村尚（大阪大・工），松井孝典（大阪大・工），R.N.SHAW（大阪大・工），加藤悟（大阪大・工），早田至（大阪大・工）
（正） *町村尚（大阪大・工），松井孝典（大阪大・工），R.N.SHAW（大阪大・工），加藤悟（大阪大・工），早田格（大阪大・工）

I1-10　利水施設網に侵入した特定外来生物カワヒバリガイの生息状況
（誤） 伊藤健二 (農環研・生物多様性)
（正） 伊藤健二* (農環研・生物多様性)，渡部宏幸 (水資源機構・東総管理所)

P1-120　風洞実験によるオオオナモミの風耐性における力学的性質の解析
（誤） *長嶋寿江，彦坂幸毅（東北大・院・生命科学）
（正） *長嶋寿江（東北大・院・生命科学），太田福雄，伊賀由佳（東北大・流体科学研究所），彦坂幸毅（東北大・院・生命科学）

P1-200　都市近郊林の地表性甲虫類に林分レベルの要因が及ぼす影響
（誤） 菅野希（東京農工大・農）
（正） *菅野希,曽我昌史,小池伸介（東京農工大・農）

P1-226　ニホンザルにおける採食グループサイズと採食成功の関係
（誤） *風張喜子(京大・野生研)，揚妻直樹(北大・フィールド科学センター)
（正） *風張喜子(京大・野生研)，辻大和(京大・霊長研)，揚妻直樹(北大・フィールド科学センター)

P1-305　有性生殖をする絶滅危惧植物アオグキイヌワラビの遺伝構造―複数生育地にまたがる遺伝的固定―
（誤） *伊津野彩子（京大・農),高宮正之（熊大・自然科学),兼子信吾（京大院・農),井鷺裕司（京大院・農）
（生） *伊津野彩子（京大・農),高宮正之（熊大院・自然科学),兼子伸吾（京大院・農),井鷺裕司（京大院・農）

P1-317　里山の中の湿原群落―愛知県矢並湿地の植生と周辺の里地・里山の利用の変遷
（誤） *名古屋大・環境
（正） *富田啓介（名古屋大・環境）

P2-026　低木液果への果実食者の訪問
（誤） *藤津亜季子（東京農工大・院）
（正） *藤津亜季子（東京農工大・院），正木隆（森林総研），小池伸介（東京農工大）

P2-229　鎌倉市神戸川におけるコモチカワツボと在来カワニナの安定同位体比による食性比較
（誤） *櫻井　龍太,馬谷原　武之,河野　英一（日大・院・生物環境）對馬　考治（日大・生物環境工）
（正） *櫻井　龍太,馬谷原　武之,河野　英一（日大・院・生物環境）對馬　考治（日大・生物資源）

P3-105　Land use change detecting by remote sensing and GIS in Bodri watershed, Central Java
（誤） Lubis, J.P.L,
（正） *Lubis, J.P.G, Kensuke KAWAMURA, Nobukazu NAKAGOSHI

P3-135　放置竹林の伐採方法が樹木の当年生実生の発生消長に及ぼす影響
（誤） 小谷二郎、石川県林試、小谷二郎
（正） *小谷二郎，江崎功二郎，八神徳彦（石川県林試）

P3-220　ヤマトシロアリ創設メスの母巣の違いがニンフ生産に与える影響
（誤） *滋田友恒，北出理（茨城大・理）
（正） *滋田友恒，諸岡史哉，北出理（茨城大・理）

P3-272　風倒木処理がエゾシカの採食選択に与える影響
（誤） *森谷佳晃，森本淳子，中村太士（北大院農）
（正） *森谷佳晃，森本未星，森本淳子，中村太士（北大院農）

P3-HS05　オオクワガタの幼虫発育と温度との関係
（誤） 阿部敏明（東北学院中学校・高等学校）
（正） 阿部敏明，大井紀和，遠藤達朗，石原鴻，大越快，菊池太邦磨，丹野眞成，吉田興平，小島紀幸（東北学院中学校・高等学校）

P3-HS09　地球温暖化防止における森林の役割（さまざまな森林による二酸化炭素吸収量の推定）
（誤） 石田紗樹,光畑美希,松本愛,小原らな,高木成美,脇坂芽依,渡辺真奈,池上裕莉香,大橋慶子（ノートルダム清心学園 清心女子高等学校）
（正） 石田紗樹,光畑美希,松本愛,小原らな,高木成美,脇坂芽依,渡辺真奈,池上裕莉香,大橋慶子,秋山繁治（ノートルダム清心学園 清心女子高等学校）

P3-HS10　コンクリート化された水田地域のクサガメとミシシッピアカミミガメの行動
（誤） 原悠歌,井上智香子（ノートルダム清心学園　清心女子高等学校）
（正） 原悠歌,井上智香子,秋山繁治（ノートルダム清心学園　清心女子高等学校）

P3-HS12　DNA によるシロサケの近縁関係の調査
（誤） 松村茉莉子,島田侑果（富山県立砺波高等学校）
（正） 松村茉莉子,島田侑果,安達悠,石黒綾子,浦風由梨香（富山県立砺波高等学校）

P3-HS20　オジギソウの生育における密度効果について
（誤）大西美緒,半田早記（北海道恵庭北高等学校）
（正）大西美緒,半田早紀（北海道恵庭北高等学校）

第 59 回日本生態学会・
第 5 回 EAFES(東アジア生態学会連合)大会
(2012 年 3 月大津)のご案内

2012 年の第 59 回日本生態学会大会は、滋賀県大津市の龍谷大学瀬田キャンパスを会場にして開催されることになりました。近畿での開催は 2005 年第 52 回大阪大会以来となりますが、滋賀県での大会の開催は初めてです。またこの大会は、第 5 回 EAFES(East Asian Federation of Ecological Societies, 東アジア生態学会連合)大会との合同大会となります。EAFES はほぼ 2年ごとに開催されており、日本では 2006 年に第 2 回大会が新潟で日本生態学会大会との合同で開催され、前回の第 4 回大会は韓国 Sangju で開催されています。この大会でも、多くのみなさまに参集いただき、良き情報交換の場となることを願っています。

大会会場は琵琶湖に近く、京都から JR で 20 分、JR 瀬田駅からバスで 10 分のところにあります。そこは、京都大学生態学研究センターや各大学、高校、美術館、図書館が並ぶびわこ文化ゾーンの一角です。瀬田キャンパスに隣接して龍谷大学が保有する林地もあります。早春の里湖、里山、里地を楽しんでいただければと願っています。ただ、みなさまが集われる懇親会は、会場の都合から京都での会となる予定です。

大会実行委員会一同、大会企画委員会と力を合わせて、充実した盛大な大会になるよう準備にあたっています。どうか皆様、ふるってご参加下さい。

大会実行委員長　　　遊磨正秀

大会日程： 2012 年 3 月 17 日（土）～21 日（水）
会　　場： 龍谷大学 瀬田キャンパス
〒520-2194 滋賀県大津市瀬田大江町横谷 1-5
大会ページ： http://www.esj.ne.jp/meeting/59/
ＥＡＦＥＳ： http://www.e-eafes.org/index.html
問い合わせ： 上記ページの問い合わせフォームからお願いします。

日本生態学会　入会案内

会費は前納制で、学会の会計年度は 1 月～12 月です。新規入会希望の方は入会申し込みの後、本会費＋地区会費を次の口座にお振込み下さい。
郵便振替口座番号　01070-6-19256　口座名：日本生態学会

会員の区分と本会費

A 会員●	日本生態学会誌・Ecological Research の２誌配布	一般 11000 円	学生 8000 円
B 会員●	A 会員の権利に保全誌を加えた３誌配布	一般 13000 円	学生 10000 円
C 会員●	保全誌のみの配布、大会での一般講演発表不可	一般 5000 円	学生 2500 円

地区会費
北海道地区 200 円／東北地区 800 円／関東地区 600 円／中部地区 0 円／近畿地区 400 円／中国・四国地区 400 円／九州地区 700 円

詳細については事務局までお問合せ下さい。
日本生態学会事務局
〒603-8148 京都市北区小山西花池町 1-8
TEL&FAX: 075-384-0250　http://www.esj.ne.jp/

日本生態学会　大会企画委員会　（○は部会長）

委員長：大手信人（東京大）
副委員長：榎木勉（九州大）
大会運営部会：○鈴木まほろ（岩手県博）／難波利幸（大阪府大）／竹中明夫（国立環境研）／市岡孝朗（京都大）／嶋田正和（東京大）／牧陽之助（岩手大）／畑田彩（京都外大）／長谷川成明（北海道大）／川北篤（京都大）／湯本貴和（地球研／EAFES）
（広報）：大手信人（東京大）／椿宜高（京都大）／可知直毅（首都大東京）／齊藤隆（北海道大）
発表編成部会：○久保拓弥（北海道大）／大園享司（京都大）／鏡味麻衣子（東邦大）／池田浩明（農環研）／柴田銃江（森林総研）／松政正俊（岩手医大）／廣部宗（岡山大）／大澤剛士（農環研）／亀田佳代子（琵琶湖博）
シンポジウム部会：○隅田明洋（北海道大）／半谷吾郎（京都大）／榎木勉（九州大）／富松裕（東北大）／古賀庸憲（和歌山大）／松浦健二（岡山大）／黒田啓行（遠洋水産研）／島野光司（信州大）／谷内茂雄（京都大）／吉田圭一郎（横浜国立大）／半場祐子（京都工繊大）／森田健太郎（水産総合研）／保原達（酪農学園大）／瀧本岳（東邦大）
ポスター部会：○関　剛（森林総研）／中野大助（電力中央研）／津田みどり（九州大）／関川清広（玉川大）／及川真平（東京農業大）／松木佐和子（岩手大）／近藤倫生（龍谷大）／谷友和（上越教育大）／岸田治（北海道大）
（高校生ポスター担当）：嶋田正和（東京大）／山村靖夫（茨城大）／広瀬祐司（茨木高校）／中井咲織（立命館宇治）／久保田康裕（琉球大）／浅見崇比呂（信州大）

日本生態学会　第58回大会実行委員会

大会会長：原登志彦（北大・低温研）
大会実行委員長：齊藤隆（北大・FSC）
プログラム（シンポジウム・口頭発表など）：隅田明洋（北大・低温研）／久保拓弥（北大・地球環境）
受付：日浦勉・中村誠宏・岸田治（北大・FSC）
ポスター会場：野田隆史・露崎史朗（北大・地球環境）／山浦悠一（北大・農学）／長谷川成明（北大・低温研）
高校生ポスター：大原雅（北大・地球環境）
会計：福井学（北大・低温研）
公開講演会（講演本編集など）：仲岡雅裕（北大・FSC）
懇親会：宇野裕之（道総研・環境科学研究センター）
アルバイト：佐竹暁子（北大・創成研）
託児室：西川洋子（道総研・環境科学研究センター）
会場：小野清美・大舘智氏（北大・低温研）／西村欣也（北大・水）／池田透（北大・文）／平田聡之（北大・FSC）／藤山直之（北海道教育大・旭川）／高田まゆら（帯広畜産大）／宮木雅美（酪農学園大）／早矢仕有子（札幌大）／明石信廣・今博計・寺澤和彦・長坂有・八坂通泰（道総研・林業試験場）／稲富佳洋・上野真由美・長雄一・玉田克巳・間野勉（道総研・環境科学研究センター）／石橋靖幸・尾崎研一・北村系子（森林総研・北海道）

大会会長・実行委員長補佐：若土もえ／谷川真弓子

表紙デザイン：（株）文一総合出版
写真提供：伊藤元裕／倉沢庚大／高橋晃周／綿貫豊

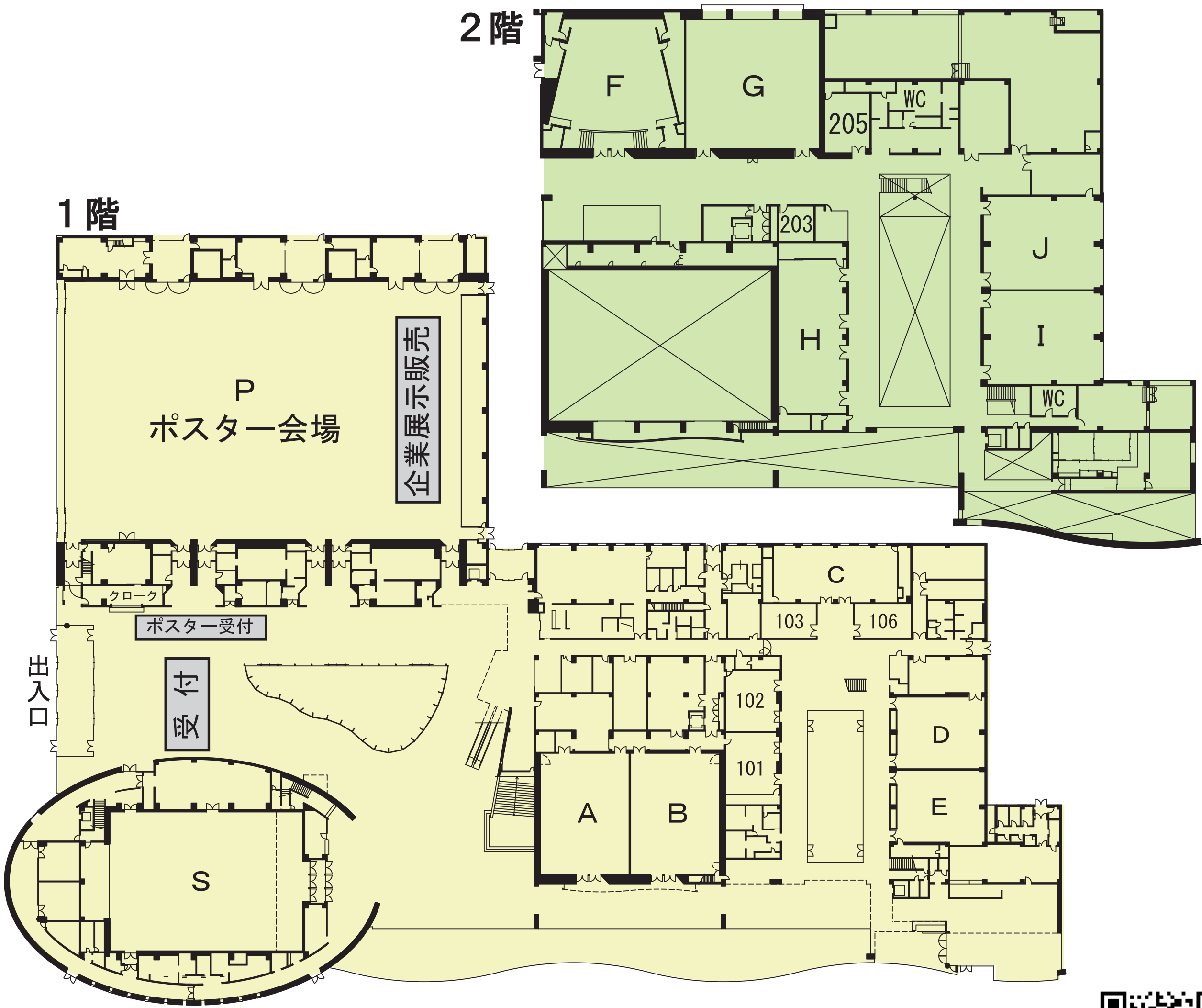
第58回日本生態学会大会プログラム

2011年1月29日発行

編集・発行●日本生態学会大会企画委員会
〒603-8148 京都市北区小山西花池町1-8　日本生態学会内
TEL&FAX: 075-384-0250
http://www.esj.ne.jp/

印刷・製本●（株）土倉事務所
〒603-8148 京都市北区小山西花池町1-8
TEL: 075-451-4844

札幌コンベンションセンター　会場案内図



大会本部連絡先（会期中）
〒003-0006 札幌市白石区東札幌 6 条 1 丁目 1-1
札幌コンベンションセンター
TEL: 011-837-5010

大会の講演要旨は携帯電話でも閲覧できます
http://www.esj.ne.jp/meeting/i-abst/index.html

日本生態学会第 58 回大会実行委員会

〒060-0811 札幌市北区北 11 条西 10 丁目
北海道大学北方生物圏フィールド科学センター内
TEL: 011-706-2590 ; FAX: 011-706-3450
大会ページ : http://www.esj.ne.jp/meeting/58/
お問い合わせはサイト内のリンクからお願いします